
真選組Strikers 鬼の子守歌

烈火竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真選組 Strikers 鬼の子守歌

【Nコード】

N1776I

【作者名】

烈火竜

【あらすじ】

赤夜叉先生の許可を頂いております。

ステージ00 プロローグって、よく使われるよね（前書き）

はじめまして、烈火竜です。このたび、白夜叉鎮魂歌の続編を書かせてもらいました。作文用紙でシナリオを何度書いておりますので、失敗しないように書きます。

ステージ00 プロローグって、よく使われるよね

坂田銀時とクリスの死闘後の三度目の夏。今、新たな侍が召喚され、悪に立ち向かう。

ミッドチルダ都市の地下下水道に扉が開いていた。

扉の中は、沢山の機械が置かれていた。一人の男が苛立っていた。

男

「クソッ、どこにいったんじゃ」と机を叩く。

男

「管理局に見つかる前にマリアーージュ達が見つければ良いが・・・」

男は椅子に座り込む。そして、手を伸ばしながら、

男

「必ず、ワシの偉大さを……。このキュラスが世界を手に入れる」と拳を握る。

キュラスと名乗る男は決意するのだった。

キュラス

「待っておれよ、イクスよ。ギャアツハツハツハツ・・・」と高笑いをする。

こうして、物語は始まった。

次回へ続く。

ステージ00 プロローグって、よく使われるよね(後書き)

いかがでしょうか？。感想をお待ちしてます。できるだけ、要望に
答えられるようにします。

ステージ01 印象の受け方は人それぞれだから。(前書き)

さっ、始まります。スタートは港湾警備隊からです。どうぞ。銀魂からは、意外に、あの人の登場です。

ステージ01 印象の受け方は人それぞれだから。

ミッドチルダ港湾警備隊の本部前には小学生の子供達が社会見学の為にやって来た。

皆、指導員の指示に従い、移動する。

本部内の待合室では、窓からその様子を見る女性管理局員二人。一人は、ティアナ・ランスター。

彼女は過去に機動六課フォワードチームリーダーを務め、現在は本局執務官。

もう一人は、ティアナの臨時補佐官を務めるルネッサ・マグナス。

ルネッサ

「子供達の社会科見学でしょうか？」

ティアナ

「そうみたいね。三年生くらいかしら。」

すると、港湾警備隊の防災指令ヴォルツ・ストーンが入室する。

ヴォルツ

「うん？。何だ、ナカジマはまだか」

ティアナ

「先ほど、少し遅れると連絡を頂きました」

ヴォルツ

「たつく、あいつは…。あつ、失礼。港湾警備隊のヴォルツ・ストーンだ」

ティアナ

「はじめまして、ティアナ・ランスター執務官です。こちらは私の副官の」

ルネツサ

「ルネツサ・マグナス執務官補です」と挨拶をする。

ヴォルツ

「執務官殿の事は伺ってるよ。若いのにご活躍だそつで。」

ティアナ

「いえ、まだまだ若輩です」

すると、捜査官ギンガ・ナカジマが慌てて入ってくる。

ギンガ

「すみません、遅くなりました」

ヴォルツ

「おう、おせーぞ、ナカジマ姉」

ギンガ

「すみません、ランスター執務官、お久しぶりです」

ティアナ

「お久しぶりです、ナカジマ捜査官」

ヴォルツ

「で、悪いが、捜査会議に同席出来ないが、警邏隊員の動員に関しては、こつちのナカジマに権限を持たせてある。事件捜査は二人で話して、いいようにしてくれ」

ティアナ

「はい、ありがとうございます」

ヴォルツ

「情報と経過、何かあったときの報告を忘れずは有り難いがな」

ティアナ

「はい、それは間違いなく・・・」

ギンガ

「今朝の報告、指令のディスクに」

ヴォルツ

「おう、後で見えておく。迅速な解決を祈ってる。期待してるよ」

ティアナ

「はい、おまかせください」

ヴォルツ

「ナカジマ姉も、しつかりな」

ギンガ

「はい」

ヴォルツは退室する。

ギンガ

「ティアナ、久しぶり」

ティアナ

「はい、お久しぶりですギンガさん」

明るく切り替えるティアナとギンガ。

ギンガ

「執務官の制服の着こなし、板に付いたんじゃない？」

ティアナ

「いえ、まだ駆け出しです」

ギンガ

「ティアナがこんなに立派になって、私嬉しいわ。沖田さんも喜ぶわ」

ティアナは赤くなる。

ティアナ

「あつ、紹介しますね。私の副官を務めます」

ルネッサ

「ルネッサ・マグナス執務官補です」

ティアナとギンガは昔話や捜査の話をする、外の子供達が騒ぐ。

三人は窓から見る。

ギンガの妹、スバル・ナカジマが子供達 に自慢のダッシュを見せる。

指導員

「じゃあスゴイダッシュを見せてくれた隊員さんにお話を聞いてみよう。はい、所属とお名前は？」

スバル

「はい！港湾警備隊防災課特別救助隊セカンドチーム所属スバル・ナカジマ防災士長です」

指導員

「所属が長いねえー」

スバル

「あははは。あ、じゃあ・・・スバルです。スバル隊員と覚えて下さい」

子供達

「はい」

スバル

「このローラーがマツハキヤリバー。私の相棒ね」

マツハキヤリバーは相棒する。

子供達は思わず拍手する。

指導員

「じゃあ、スバル隊員。特別救助隊は何をしたらいいのか教えて貰おう

うかな」

スバル

「はい……」

と分かりやすく子供達に説明する。

すると、空に穴が、次元の穴が開き始める。

子供 A

「あつ、あれ何?!」と指を指す。

皆は気づき、振り向く。

窓から見ていたティアナとギンガとルネッサも驚く。

ティアナ

「なっ、何あれ!?!」

ルネッサ

「次元の穴ですね」

ギンガ

「あつ、穴から何かが……」

次元の穴から、雷が落ちる。

子供達

「きゃー」

指導員

「みんな、落ち着いて」

スバル

「大丈夫。指導員の言うこと聞いて」

怖がる子供達を落ち着かせる。

そして、次元の穴が消える。

ティアナ

「き、消えた・・・」

ティアナとギンガとルネッサは少し唖然する。

するとギンガは気づき、

ギンガ

「あっ、あれは…!?!」

と指を指す。

ティアナとルネッサも見る。

そして、そばにいるスバル達も見ると

雷が作った穴から、座り込む人影現れる。

スバル

「ひ、人!?!」

皆は唖然する。その人影は、

?

「ふーっ、びっくりした」

と立ち上がる。

それは、銀魂の登場人物である長谷川泰三だった。

今の彼は全裸だった。

もう一度言う。今の彼は全裸。つまり、下着すら履いていない。ただし、サングラスは掛けている。

そのシーンは ター ネー ーの登場と同じだった。

スバルは赤くなる。

指導員は啞然。子供達は別の意味で恐怖する。

窓から見ていたティアナとギンガはスバルのように赤くなる。

しかし、ルネツサはだけは、
ルネツサ

「なかなかのものですね」
と呟くのだった。

次回に続く。

ステージ01 印象の受け方は人それぞれだから。(後書き)

まずは銀魂らしくしました。銀魂と言えば、裸ですよ。(多分)
次回、少女達はどうか対処するでしょうね？。

ステージ02 習慣は、いつの間にか染み付いている。(前書き)

全裸の長谷川にどう対応するか、悩む少女達。始まります。

ステージ02 習慣は、いつの間にか染み付いている。

突然現れた、全裸の長谷川泰三（サングラス着用）にスバル達は啞然。

本部から見ていたティアナ達（ルネッサを除いて）も啞然する。

長谷川

「アレ。何で俺、裸なの！？。どおりで寒いと思ったよ」とすぐに股間を隠す。

そして、目の前のスバル達に気づく。

アレ、嘘！？。これって最悪じゃん。女の子の前で。しかも、小学生達もいるよ。

長谷川

「あつ、あのう……。どこから話せばいいか、わからないけど。まずは冷静に……」

スバル達に近づくと、

スバル

「（赤面しながら）リボルバーナックル」

長谷川

「えーっ、ちよつと待って……」

と言う前に、長谷川はぶっ飛ばされる。

そして、落下して気絶する。しっかりと股間を見せながら。

スバルはまだ激しく動揺する。

指導員

「・・・あつ、スバル隊員が見事に変質者をやっつけました。拍手を」

とすぐに空気を変える。

子供達

「ワーツ」

子供達は興奮して拍手をする

その様子を見ていたティアナ達。

ギンガ

「す、すぐに逮捕しに行きます」

ギンガはすぐさま出て行く。

ティアナ

「そ、それにしても・・・。あの人、どこかで見たような・・・」

赤くなりながらも、考える。

ルネッサ

「これだけはハッキリしてます。」

ティアナ

「変質者って、ことでしょう」

ルネッサ

「いえ、立派な物をお持ちですと言いたかったんですけど」
ティアナ

「ちよつと!?!、そーゆう問題じゃないでしょう。ってか、それ問題発言だから。」
と激しく突っ込む。

ティアナのツツコミは相変わらずだった。

数時間後。長谷川は港湾本部の取り調べ室に連れて行かれた。
警備員の服を着てもらってる。

ギンガが取り調べを担当する。
ティアナとルネツサもいた。

ギンガ

「それでは、長谷川さん。いくつか質問をしいいのですか？」

長谷川

「はい」

ギンガ

「何の目的でここにきたんですか?。しかも、裸で・・・」
と少し赤くなる。

長谷川

「いや、自分でもわかりません。突然、ピッカーって、雷に当たったんです。雲がないのに・・・」

ギンガ

「そうですね。それはどこですか」

長谷川

「えっと、万事屋の前で・・・」

ギンガとティアナは万事屋の名前で驚く。

ティアナ

「万事屋！？。あのう、もしかして、坂田銀時さんの知り合いですか！？」

長谷川

「えっ、銀さんを知ってるの」

ティアナ

「思い出した。あなた、銀さんとフェイトさんの結婚式にいたサングラスの人」

長谷川

「あっ、俺も思い出した。銀さんの結婚式にいた可愛い子ちゃん」
ギンガ

「ああ、いたわね。多分・・・」

ティアナ

「覚えてないですか？」

長谷川

「無理もねーよ。そんなに挨拶とか、してなかったしよ」

三人は談笑する。

そこへ、ルネッサが、

ルネッサ

「あのう、知り合いですか？」
と尋ねる。

ティアナ

「あっ、そんなに知り合いじゃないけど。この人、銀さんの知り合い」

ルネッサ

「銀さん！？。あの坂田銀時さんですか！？」
ギンガ
「うん」

長谷川が銀時の知り合いだと分かり、釈放された。その後、長谷川はこの世界にくる前のことを語り出す。

長谷川は銀さんとフェイトに遅れた結婚祝いを届けに万事屋を訪ねるが、留守だった。しかし、鍵が掛かってなかった。長谷川は勝手に入り、冷蔵庫から食べ物をあさって食べた後、結婚祝いをテーブルに置いて、出て行く。スナック『お登勢』の前を通ろうとした。その時、雷が突然、長谷川の上に落ちる。

これが経緯だった。

ティアナ達はそれを聞いて、考える。ちなみにスバルもいた。あらかたの事情をギンガから聞いた。

スバルは口を開く。

スバル

「それで、冷蔵庫から何を食べたんですか？」

ティアナ

「いや、どうでもいいわよ」

長谷川

「肉じゃがとマグロの刺身」

ティアナ

「長谷川も答えなくて良いですよ」

ギンガ

「結婚祝いは何ですか？」

ティアナ

「ギンガさんも・・・」

長谷川

「俺が新しく勤めてる保険会社の夫婦の安心保証の保険の資料」

ティアナ

「それが結婚祝い！？。ってか、本当は商売しに来ただけでしょう」
ルネッサ

「坂田銀時の大事な部分は、あなたのように立派ですか？」

ティアナ

「カンケーねーだろう。ってか、問題発言するな」

長谷川

「本人はジョイスティックだって」

ルネッサ

「ジョイスティック…。つまり…」

「と言い掛けると、

ティアナ

「これ以上言うと、わかってるわね・・・」
とクロスミラーージュを構える。

長谷川とルネッサは、すみませんと頭を下げる。

スバル

「何か、脱線したね」

ティアナ

「（スバルの両頬をつねながら）きっかけはあんだでしょう」
スバル

「痛い、痛いよ〜。ごめんなさい、ティアナ」
と泣く。

ギンガはそんな様子を見て、苦笑する。

マリアージュの報告書を読み終えたヴォルツもその様子を見ていた。最初の辺りから。

コレが銀魂ギャグか。下ネタなら、俺だって負けねーぞ。

ティアナ

(ヴォルツ司令も止めてください)
と念話でツツコミを入れる。

ヴォルツは驚く。

長谷川

「それにしても、ティアナちゃん。前より大人ぽくなったね。3
カ月ぶりなのに」
と言つと、

ティアナ

「へっ？」

長谷川はじつくりとティアナを見る。

長谷川

「この世界の人間って、成長が早いのか……。3カ月会わない間、
こんなに成長……。」
ティアナ

「待ってください。三ヶ月って、何言ってるんですか？。あなたと
会うのは三年振りですよ」

長谷川

「へっ？」

スバル

「そうですよ。銀さんとフェイトさんの結婚から、三年ですよ」

長谷川

「何言ってるの。君達に会つのは三ヶ月振りだよ。本当だよ」

周りは戸惑う。

これは、どーいうことだろう。その言葉の意味は一体……。

次回へ続く。

ステージ02 習慣は、いつの間にか染み付いている。(後書き)

今回は、エリオとキャラロとゾーマが登場。ラブラブなキャラロとゾーマ。そして、失恋したエリオは・・・。

ステージ03 何度見ても、慣れないことだってある(前書き)

今回は、キャロとゾーマのカップルと失恋後のエリオ登場です。では、始まります。

ステージ03 何度見ても、慣れないことだっている

ここは、管理局が管理する辺境世界。

ここには、辺境自然保護隊が観測と保護を行っている。

しかし、そんな保護隊がいるにも関わらず、密猟者が後を絶たない。

今、密猟者の一人が必死で逃亡していた。

密猟者 A

「じよ、冗談じゃね。こつちとら、せつかくハンティングを楽しんでいたのに……。何で、こんな所にまで管理局が……」

キヤロ

「止まりなさい。この地区での狩猟行為は、自然保護法で禁止されています」

飛竜フリードで密猟者を追いかけるキヤロ。

密猟者 A

「飛竜で監視なんて、原始時代かよ!？」

キヤロ

「武装を解除して、投降しなさい。繰り返します。この地区での狩猟行為は禁止されています」

密猟者 A

「冗談じゃね!」

銃をキヤロに構える。

密猟者 A

「飛竜の嬢ちゃん。落っこちて貰うぜ」

キャラをロックオンする。

すると、何かが来る。

密猟者 A

「何！？、こつちにも……」

エリオ

「うおー」

愛機のストライダーで密猟者の撃った銃弾をはじく。

密猟者 A

「銃弾を槍で！？。このガキも魔導師！？」

エリオ

「自然保護違反に、人に向かっての銃撃。現行犯で逮捕します。抵抗をしなければ、弁護の機会があります。同意するならば、武装の解除を」

キャラ

「本部、こちらパトロールチームキャラ・ル・ルシエ」

ミラ

「はいはい。こちら本部、ミラ・バレット」キャラ

「たった今、エリオ君が密猟グループの一人を逮捕しました。これから、本部に護送します」

ミラ

「了解。護送車に入れるまでが、護送だからね。気を抜かないで」
キャラ

「はい、ミラさん。エリオ君、戻ろう」

エリオ

「了解、キャラ」

二人は、密猟者を護送する。

一方、別の場所では…。

密猟者数名が、必死で逃亡していた。

その密猟者数名を追いかけるものは森を破壊していく。

密猟者 B

「た、助けてくれー！」

密猟者 C

「殺されるー！」

密猟者 D

「何だありゃ!?!」

密猟者達を追いかけるのは、キャロの恋人になったゾーマだった。

ゾーマは森を破壊しながら、密猟者達を追いかける。

ゾーマ

「待って、自然保護隊だ。止まらないと、半殺し、じゃなかった。全殺しだー！」

密猟者 B

「おい、自然保護隊が自然破壊してるぞ!?!」

密猟者 C

「それでも自然保護隊!?!。つーか、あれは隊員じゃなくて化け物だろ!?!」

密猟者 D

「それに、逮捕でしょう!?!。殺すじゃなくて!?!」

ゾーマ

「うるせー！。嫌だったら、止まりやがれー！」

口から、魔弾を放つ。

密猟者達

「イヤー!？」

魔弾は逃亡する密猟者達逃げよう当たると思いきや、密猟者達の方の道を破壊する。見事なくぼみが出来た。

密猟者達は腰を抜き、止まる。

ゾーマは追いつき、

ゾーマ

「自然保護違反及び、自然破壊の現行犯で逮捕する」

密猟者B

「イヤ、自然を破壊したのはあんたでしょう！」

ゾーマ

「（指を鳴らし）何か、言ったか？」

密猟者達

「いえ、何も言ってません」

ゾーマ

「よし、自然破壊はこいつらの仕業にして、任務完了だ」

ひ、酷い…。あ、漏れちゃた。

罪を擦り付けられた拳げ句、失禁してしまった哀れな密猟者達。

自然保護隊本部

事務室では、ミラが笑顔ながら、額に血管を浮かしていた。

ゾーマは汗を垂らしながら、正座する。

キャロとエリオはその様子を見守る。

ミラ

「ゾーマ。密猟者逮捕で、あんなに破壊された大木が沢山あるの？」

ゾーマ

「だから、それは密猟者達の仕業なんだよ」「ミラ

「どうやって、何で破壊したの？」

ゾーマは考える。

ゾーマ

「あっ、あいつら、んこ漏らしてたら」

ミラ

「はい？」

キャロは赤くなり、エリオは唾然する。

ミラ

「何で、そこでんこが出てくるの？。確かに彼ら失禁してたけど」

ゾーマ

「奴らは、密猟をする前に便所を済ませてなかった。その上、密猟の緊張で、んこに行きたくなっただ。けど、森の中するのは

恥ずかしいから、便所を探したんだ。早く行きたいあまり邪魔な木を銃型のデバイスで倒しまくった。けど、運悪く俺に見つかった。必死で逃げようとしたが、とうとう間に合わず漏らしてしまった。そのことが、諦めるきっかけだっただな。コレが真実だ」

周りの者は啞然する。

ミラ

「あら、そうだったの。彼らは気の毒ね…」

ゾーマ

「ああ、残念な結果だった」

ミラ

「エエツ。本当に信じられないわね。そんな作り話」

ゾーマ

「ああ、そうだな…。って、あつ！」

ミラ

「フーン、やっぱり作り話なんだ。…本当、てめーは何やってんだよ！」

とゾーマの首を絞める。

ゾーマ

「グエ…!!」

キャロとエリオはミラの変貌に驚く。

怒ったミラは、志村妙のようだった。

ミラ

「自然保護隊が自然破壊して、どうするだよ！。密猟者を捕まえるだけが仕事じゃねーんだよ！。おめーが、自然破壊する度に、管理

局から苦情がきてるだよ！。他にも、破壊後の処理や経費が大変なんだよ！。わかってんのか、あーん？」

ゾーマ

「す、過ぎたこと言っても、仕方がないぞ……」

ミラ

「てめーが言っなー！」

キャラ

「ミラさん」

エリオ

「落ち着いて下さい」

二人は怒れるミラを体を張って押さえる。

数時間後。

ミラ

「ハア、ハア、ハア……。本当にもう……」

ゾーマは反省の色を表さず、鼻をほじる。

キャラ

「ゾーマ君」

ゾーマ

「キャラ、キャラりん」

とほじるのを止める。

どうやら二人の呼び方が変わったらしい。

キャラ

「張り切るの分かるけど、自分を見失わないでね。周りをちゃんと見てね。木を大切にしてい」

ゾーマ

「…キャロりん。すまん」

二人は抱き合う。

他の人から見れば、魔神が少女を締め付けるようだった。

ミラ「…何度見ても、信じられない光景ね」

キャロとゾーマの抱擁を見ていたエリオは、ポケットから美少女フィギュア（キュア イン）を取り出し、
エリオ「大丈夫だよ、僕には君がいるからね」
とスリスリする。

ミラ

「…エリオ、気の毒に…」
と哀れみの視線を向ける。

失恋したエリオは、美少女フィギュアに愛を向けるようになっていた。

ゾーマ

「キャロりん」

キャロ

「ゾーマ君」

エリオ

「ブツ」

ミラはラブラブな雰囲気にイラつき、
ミラ

「てめーら、いい加減にしやがれー！」

ミラの怒鳴り声が、外にまで響いた。

その頃、ミッドチルダの湾岸警備隊本部では、ティアナ達と長谷川の話が続いていた。

ティアナ

「本当に三カ月何ですか？」

長谷川

「本当だよ。銀さんの結婚式が終わって、三カ月たったんだ」

長谷川の言葉にティアナ達は戸惑う。

スバル

「どーゆことだろう」

ギンガ

「こつち（ここの世界）は、三年の月日がたったのに」
ルネッサ

「三カ月と三年はだいぶ違います。お互いの感覚違いとは考えられません」

考え込んだティアナが、
ティアナ

「分かった」

皆はティアナに振り向く。

ティアナは長谷川に近づく。

ティアナ

「長谷川さん。あなたは、長谷川さんは長谷川さんでも、違う長谷川さんです」

長谷川

「へっ？」

スバル

「ティア、どーゆこと？」

ティアナ

「次元移動は、飛ばされる場所だけじゃなく、時間も異なるわ」
ギンガ

「あっ、なる程。それなら、納得できる」

ルネッサも理解する。

しかし、スバルと長谷川には理解できなかった。

長谷川

「次元移動？」

スバル

「時間が異なる？」

ティアナは呆れて、ティアナ

「つまり、この長谷川さんは三年前の銀さんの世界からやってきた」
の

ルネッサ

「正確には、二年三カ月前です」

ギンガ

「長谷川さん。ここはその二年三カ月後で、しかもあなたの世界じゃないです」

長谷川

「えっと、つまり……。俺の知らない世界ってこと」
ティアナ

「そうです」

長谷川

「そんな〜…」

長谷川は落ち込んでしまう。

スバル

「でもティア。そんなことがあるの？」
ティアナ

「ほら、私達が銀さんに初めて会った時。銀さん、フェイトさんやなのはさんが成長してるって、驚いてたじゃない」

スバル

「ああ、そういえば…」

ティアナ

「あの時の銀さんは十年後のなのはさん達、つまり私達の世界にやっってきたのよ」

スバル

「そうか…」

長谷川

「あのう、銀さんがやってきたってことは、この世界と俺の世界は行き帰りできるの。俺、帰れるの?」

ギンガ

「行き帰りはできますが…」

ティアナ

「そのあなたの世界は二年三カ月後です。もしかしたら、未来のあなたに会って、面倒なことになるので、おすすめてできません」

ルネッサ

「やはり、正確な時間で元の世界に帰すべきですね」

スバル

「ってことは…」

ギンガ

「長谷川さんが雷に打たれた直後か、数分後が妥当ね」

長谷川

「だったら、早いとこ…」ティアナ

「それが、その移動するための装置はかなり繊細何です。下手に時間を操ると壊れるって、原作者の源外さんが言っていました」

スバル

「それじゃ…」

長谷川

「俺は元の世界に帰れないってことなの」

ティアナは何も言えなかった。

長谷川

「俺、どうすりゃいいんだよ……」
と落ち込む。

長谷川は一体どうなる……。

次回に続く

ステージ03 何度見ても、慣れないことだってある(後書き)

今回は、登場しないハズのあの人達が登場。 コレは本編ではなく、オマケみたいなお話です。

ステージ3・5 一回きりは寂しいので、また登場させよう。(前書き)

赤夜叉先生へ。赤夜叉先生も出ますが、少し酷く扱います。気分を悪くしたら、ごめんなさい。

ステージ3・5 一回きりは寂しいので、また登場させよう。

ここは銀魂世界。時期は冬。

万事屋銀ちゃん

結婚した銀時とフェイトに養女ヴィヴィオが楽しくコタツに入りながら会話している。

神楽はみかんを食べたり、新八はお茶を飲んでいた。

新八は気づく。

新八

「アレ？。今回の物語、僕らは出ないんじゃない？」

銀時

「そうだよ。そうだけど、出たかったから、出てるんだよ」

フェイト

「いいの、銀時。勝手にそんな事をして・・・」

なのは

「いいんだよ、フェイトちゃん」

といつの間にかコタツに入る。

と言っか、登場する。

しばらく沈黙して、

新八

「な、なのはちゃん!？」

なのは

「にゃははっ。びっくりした？」

銀時

「たりめーだろ。急に登場すりゃ、誰だって驚くよ」
なのは

「ごめんごめん。久しぶりだから」

新八はまた気づく。

新八

「アレ？。この物語の季節って…」
フェイト

「原作のサウンドステージと同じ、夏のはずだけど…」

新八

「何で、冬なの？」

神楽

「いいじゃん。こたつは暖かいし、みかんも美味しいアル」
ヴィヴィオ

「本当だね」

神楽とヴィヴィオは美味しくみかんを食べる。

しばらくして新八は、

新八

「（コタツを叩いて）よくねーよ。絶対おかしいって
と怒鳴る。」

するとなのはは、

なのは

「（笑顔でこたつを叩いて）おかしくないわよ」と威圧感を漂わせる。

新八とフェイトとヴィヴィオは怯えるが、銀時と神楽は怯えるどころか、うんうんと頷く。

新八

「なのはちゃん、どうしたの？」

なのは

「今回は私達が仕切るからよ」

新八

「し、仕切るって…」

銀時

「だって、銀魂とリリカルなのはのクロスオーバーなのに、主人公の俺達が出ないのが、許せないだよ」

なのは

「そうだよ。せっかく、『リリカル銀魂』の続編が出たのに、私達主人公が出ないなんて、酷いよ」

新八

「あ、あのう…。銀魂ともかく、リリカルなのはは仕方ないですよフェイト」

「そうだよ、なのは。正確には『StrikerSサウンドステーション』のクロスオーバーなの。無印からA/Sで登場したキャラクターは一切登場しないのよ。名前は出るけど…」

銀時

「カンケーねーよ。出たいんだよ、俺達は」

なのは

「そうだよ。前の赤夜叉先生が書いた『魔法少女と銀髪の侍』と『白夜叉鎮魂歌』は私の出番少なかったのよ！」

新八

「ア、確かに…。特に『魔法少女と銀髪の侍』の最終回は酷かったからね」

神楽

「あの時は、前向きな台詞を言ったけど、心の底から『ふざけるな
ーよ!?!』って、叫びたかったアル」

銀時

「オマケに、烈火竜さんの質問を掲載されてなかったよ。返信で、
『次の話に出します』って…。烈火竜さん怒ってたよ」

新八

「まあまあ。その事は赤夜叉先生は反省してますよ」

神楽

「なのはだけじゃないネ。私だってそうアル。特に『白夜叉鎮魂歌』
での登場が、二十七からなんて、酷いアル」

なのは

「新八さんだって、そうでしょう?。ただでさえ、冴えないダメガ
ネなのに」

新八

「な、なのはちゃんまで、僕の事をダメガネだなんて!?!、酷い…」
と泣いてしまう。

銀時

「もっと許せねーのは今回の物語は、あのチンピラ警察の名前がタ
イトルに使われることと、あんなマダオが最初に出るなんぞ…。認
めねえ。認めるぐらいなら、打ち切りしてやる!」

ヴィヴィオ

「銀時パパ、怖いよ…」

神楽

「その通りアル。あのゴリラやマヨラーにクソガキ(沖田の事)が
いるチンピラ警察が出るなんて、屈辱アル!。ぶち壊した方が良い
ネ」

フェイト

「か、神楽、言い過ぎだよ…」

なのは

「まるでダメなおっさん。略して、マダオ。私より、そんなマダオ

を出演させるなんて……。烈火竜さん、少し頭を冷やしてあげようか」

フェイト

「な、なのは、落ち着いて!?!」

興奮状態に入る居間の中、ヴィヴィオは泣きそうになる。

泣き止んだ新八は慌てて、

新八

「まあまあみんな、落ち着いて。そんな愚痴を言い合つたために集まつたじゃないでしょ?」

フェイト

「そうだよ。目的があるんでしょ?」

新八とフェイトのなだめで、銀時達は落ち着く。

銀時

「その通りだ。皆に集まってもらつたのは、お便りコーナーを作るためだ」

新八

「お便りコーナー?」なのは

「私達、この物語で戦えない。だから、みんなの応援を聞いたり、疑問に答えてあげるのよ」

フェイト

「それって、いいかも!」

銀時

「このコーナーで出番の少なかった人達をゲストに呼んで、登場させる」

新八

「なるほど」

シヤマル

「本当ですか!?!」

新八

「シヤマルさん!?!」

ヴィータ

「今度こそ、活躍できるのか!?!」

新八

「ヴィータちゃん!?!」

はやて

「これは何が何でも、登場しなきゃ」

新八

「はやてちゃんまで!?!」

いつの間にか登場する三人。

銀時

「おつ、フィギュア化するほど人気があるにもかかわらず、出番が少なかつた奴ばかりだ」

はやて

「銀ちゃん、それ言わんといて……」

ヴィータ

「あたしらだって、辛いんだよ」

シヤマル

「私の恋の話が出なかつたわ……」

はやて

「シヤマル。私達、やる?」

銀時

「それは仕方ねーだろう。シヤマルはシグナムより地味な上に胸や尻が貧そうだし。ヴィータはガキだから。読者の大半は巨乳が好きだから……」

シヤマルとヴィータは殺意を込めて、発動させたデバイスを構える。

銀時

「すみません。言い過ぎました」

なのは

「私だって、巨乳なんだけど……」

銀時

「そうなんだよな……。なのはも巨乳なのにな……。不思議だな……」

神楽

「私も乳があれば、出番が増えてたか？」

銀時

「てめーは、内面の方を何とかしろ」

神楽

「それ、どーゆ意味アル？」

神楽をスルーして、

銀時

「とにかく、おまえらはゲストとして、登場させる」

シヤマル

「えーっ、パーソナルが良いですよ」

ヴィータ

「そうだよ」

銀時

「うるせーな。出れるだけ、ありがたいと思え」

なのは

「そうだよ」

新八

「アレ？。なのはちゃんはパーソナルとして出るの？」

なのは

「（威圧感ある笑顔で）いけない？」

新八

「いえ、ありません。むしろ、賛成です」

ヴィヴィオ

「ヴィヴィオも出たい」

銀時

「しかし、このコーナーができるのは、読者の感想の一言があればの話だ」

フェイト

「読者の皆さん。感想の一言に応援。または質問を下さい」
なのは

「質問があれば、書いて下さい。私達が答えます」銀時

「それでは、さようなら」

新八

「アレ？。僕は出れるかな…」

続く

ステージ3・5 一回きりは寂しいので、また登場させよう。(後書き)

如何でしたか、赤夜叉先生。せっかく許可を下さったのに、本当にごめんなさい。

他の読者の皆さん。質問や応援を待っております。

ステージ04 人気漫画はシリアスとギャグのバランスは大事だ。(前書き)

遂に、真選組登場！。さらにあの親父も登場します。
江戸の町で何が起きてる事件は！？。始まります。

ステージ04 人気漫画はシリアスとギャグのバランスは大事だ。

ここは、長谷川がミッドチルダ世界に飛ばされた直後の銀魂世界。

正確に言えば、ティアナが言っていた二年七カ月前。

そして、物語は真選組屯所から始まる。

真選組屯所の会議室

局長の近藤 勲。

副長の土方 十四郎。

一番隊組長の沖田 総悟。

そして、他の組長達が座っていた。

監察役の山崎 退が入って来る。

土方

「今日の議題は、ここ最近起きてる雷についてだ。山崎」

山崎は手に持っていた書類を読む。

山崎

「ここ数週間、江戸の町周辺で雷が発生してます。しかし、その雷は不自然です。雷雲がありません。しかも、必ず人に当たります」

沖田

「雷による死亡届けは出てないはずですが…」

山崎

「それが、出てないじゃなくて、出せないです」

組長達は驚く。

原田

「出せないって、どーゆー…」
と十番隊組長 原田は問う。

山崎

「残るハズの死体が無いからです」

組長達はさらに驚く。

土方

「目撃者の話によると、雷に当たった奴は消えた。跡形もなくな」

近藤

「いくら雷だからって、人間を蒸発させるほど威力はない。俺だつて、それぐらいは解る」

土方

「それに、落ちた跡は焦げ一つなかった」

沖田

「それ、本当に雷ですかい？」

土方

「イヤ、どう考えたって雷じゃないな」

原田

「あのう、当たった奴らは…」

土方

「死んだのか、消えてしまったのか、まだ解らん…」 山崎

「その当たった奴らのほとんどが攘夷志士や腕に自信ある奴、そして天人です」

組長達はまた驚く。

近藤

「どうやら、攘夷志士のテロでも、天人の悪事でもないようだな」

沖田

「じゃあ、何者の仕業でしょう?」

近藤と土方はしばらく黙り込む。

そして、土方は口を開く。

土方

「それは後で考える。今やるべき事を話す」

組長達は息を呑む。

土方

「流石の真選組も、突然落ちる雷を相手に戦うことはできない」

近藤

「考えた末、狙われる奴をマークして、雷の正体を突き止める事にする」

組長達は驚き戸惑う。

そりゃあそつだ。狙われる攘夷志士や天人は数え切れない程多い上に、広い江戸のどこに落ちるか検討できない。

原田

「あのう、我々全員使っても全然足りませんよ」

土方

「わかっている。これはおそらく、真選組も手に負える問題じゃない」

近藤

「しかし、松平のつつあんの命令なんだ。江戸の危機だぞって」

沖田

「それはそうかもしれないですがね…」

土方

「何もしなきゃ、またうるさく叩かれる。やるしかねえ…。解散だ」

江戸のターミナル

そこには数え切れない程の天人がやって来る。

その中に、フードとゴーグルをかぶり、マントをなびかせ、傘を持った男がいた。

男は懐から一枚の写真を取り出し、睨む。

男

「必ず、ぶつ殺す」と強く握る。

江戸の町

真選組隊士達は天人や攘夷志士などをマークしていた。土方は沖田といつしよに天人をマークしていた。

土方

「なかなか雷の出る気配がないな」

沖田

「普通の中でも、雷が落ちるのは一瞬ですぜ」

土方

「わかっている。本当に正体を確かめられるか、正直自信ない……」

沖田は考え込む。

土方

「どうした？」

沖田

「消えた奴ら、もしかしたら、俺や旦那のように、ティアナ達の世界に行ってしまったですかね」

土方はその言葉で気づく。

まさか……。イヤ、その可能性は否定できねー。あの雷の正体は魔導師の仕業！？。それなら考えられる。

沖田

「どうかしやした？」

土方

「……総悟。万事屋に行ってくる」

沖田

「旦那に会いにですかい？」

土方

「女房フエイトの方にだ。お前の言う通りかどうか、相談しに行く」

土方は万事屋に行こうとする。

すると、空に稲妻が走る。

土方はそれに気づく、次の瞬間、雷が発生し、土方に当たる。

沖田

「土方さん!？」

驚く間もなく、土方は消えた。

周りの住人は驚き、戸惑う。

沖田は啞然する。

沖田「ひ、土方――」

沖田の叫びが響く。

ミッドチルダ世界

地下下水道にあるアジトラらしき部屋

？

「ふん、良いぞ。あの鬼の土方を捕まえた」

頭に二本の角に額に第三の瞳を持つ顎髭の老人が笑う。

この老人こそ、キュラスだ。

画面の大きなコンピューターで、土方が消えた江戸の町の様子を見ていた。

キュラス

「奴の落ちた場所は…」

コンピューターで検索する。

コンピューターの画面はマップ面に切り替わり、赤い点を示す。

キュラス

「ほーっ、ここか。マリアージュ三体で試すか」

そう言いながら、画面を元に戻し、江戸の町を再び映す。

今度は近藤と山崎が映っていた。

キュラス

「次は、真選組局長だ」と笑う。

江戸の町。

近藤と山崎が攘夷志士をマークしていた。

近藤

「そういえば、腕の立つ者もだったな」山崎
「はい。喧嘩に強い野郎、特にヤクザ者もです。さらに忍者までも
が…」

近藤

「共通は実力のある奴か…」

すると、また空に稲妻が走り出す。

しかし、二人は気づかない。

山崎

「うん、局長…」

近藤

「どうした？」

山崎は指を指す。

その先には、ターミナルにいた男がいた。

近藤と山崎は見覚えがあった。

近藤

「あれは星海坊主殿!？」

星海坊主。それは万事屋の神楽のお父さん。職業は危険なエイリア
ンを退治する掃除屋。

近藤

「星海坊主殿」

星海坊主は近藤に気づく。

星海坊主

「アアツ、君は…」

とゴーグルを外し、素顔見せる。

近藤

「お久しぶりです。また、エイリアンがこの地球にいるんですか？」

星海坊主

「イヤ、今回はエイリアンより厄介なのを退治きた」

山崎

「エイリアンより厄介なの!？」

ミッドチルダ世界

キュラスアジト

キュラスは星海坊主の姿を見て、

キュラス

「ゲッ、う、星海坊主!?!。何故ここに…。厄介なのに来てしまった」

頭を抱える。

キュラス

「よし、あいつを先に…」

コンピューターを操作する。

江戸の町

空に走っていた稲妻が強くなり、雷が発生する。

星海坊主

「（雷に気づき）危ない！」
と近藤を突き飛ばす。

次の瞬間、雷は星海坊主に当たり、消えてしまう。

近藤と山崎は驚きのあまり、言葉を失う。
周りの住人達も驚き、戸惑う。

近藤

「う、星海坊主殿……」

山崎

「か、雷だ!？」

二人は戸惑うと、

再び空に稲妻が走り出し、雷が発生する。

雷は近藤と山崎に当たり、二人は消える。

住人達はまた驚く。

ミッドチルダ世界

キュラスアジト

江戸の町の様子を一部始終見ていたキュラスは、
キュラス

「よし、星海坊主はどこに行った？」

再びコンピューターの画面をマップ面に切り替え、検索する。
いくつかのマップを映し、赤く光る点を示すマップのを見つける。

キュラス

「ほーっ、かなり遠い場所じゃな。ここは砂漠地帯。よし、ミッド
チルダ都市を遠ざかった」
と安心する。

キュラスは再びいくつかのマップを映し出し、赤く光る点が二つ示
すのを見つける。

キュラス

「あの二人は、この場所だな。次は二倍でマリアージュ六体だな」

キュラスは立ち上がる。

キュラス「あの人間共が死体となれば、強力なマリアージュができ
る。じゃが、あの星海坊主が万が一でも邪魔すれば……」
と考え込む。

キュラス

「仕方ない。マリアージュ改も投入させるか」

カプセルのような装置の前に立ち、スイッチを押す。

すると、カプセルが開き、中にはゴーグルのようなものをはめた長髪の女性がいた。

キュラス

「マリアージュ改01。お前はイクス搜索をするのだ」

マリアージュ改01と呼ばれた長髪の女性はゴーグルを光らせる。

キュラス

「他のマリアージュ改も目覚めさせるか…」

今、新たな危機が始まろうとした。

次回に続く。

ステージ04 人気漫画はシリアスとギャグのバランスは大事だ。(後書き)

キュラスの陰謀は!?!。消えた近藤、土方、山崎、星海坊主はどこに……!?!。

ちなみに、キュラスの声は納谷六朗です。『クレヨンしんちゃん』の園長先生で有名な声優さんです。

『クレヨンしんちゃん』と言えば、臼井先生の転落死はショックでした。臼井先生にご冥福を祈りましょう。

ステージ05 シリアスにエロスは欠かせない。(前書き)

ミッドチルダに迷い込んだ長谷川はどうする。また親父キャラ登場。

ステージ05 シリアスにエロスは欠かせない。

江戸の町。

真選組屯所

屯所は大混乱だった。

雷で消えてしまった近藤、土方、山崎、そして星海坊主のことで大騒ぎしていた。

局長が…。副長が…。山崎まで…。

隊士達の不安が募る。

そして沖田は隊士達がいる部屋の隣部屋の奥で落ち込んでいた。土方だけではなく、募ってた近藤までもがいなくなったことが相当応えていた。

原田

「お前ら、いい加減しろ！。落ち込んでいたって、なんの解決にもならんぞ」

原田の激励するが、隊士達はまだ落ち込む。

原田自身も落ち込んでいた。

それ以上は言葉をかけられなかった。

すると、警察庁長官

松平片栗虎が入って来る。

原田

「と、とっつあん……」

松平

「…総悟は？」

原田

「隣部屋の奥に……」

松平は隣部屋に入り、沖田のそばに近づく。

沖田は気づく。

松平

「…すまん。こんな事になったのは、俺のせいだ」

沖田

「（松平を見て）とっつあん……」

松平

「今回の怪奇現象事件はお前らの専門外なのに、解決しろなんて無茶させてすまん」

沖田

「もっ…良いですよ」

松平

「良くない。こーゆうのは、専門家みたいな奴に任せろべきだったんだ。だが、そーゆう奴ではなく、お前らに任せようと考えた、俺の判断ミスだ。警察庁長官失格だよ」

沖田

「俺達に任せたのは、俺達を信用してるからでしょ。近藤さんなら絶対言いませんぜ」

松平

「総悟…」沖田

「江戸の危機ですから、俺達、真選組が出るのもあたり前ですけど、すると、」

原田

「沖田隊長の言つとおりです」

原田の方を振り向く沖田と松平、そして隊士達。

原田

「真選組は江戸の治安を守るのが仕事だ。悪党を捕まえるだけが仕事じゃない！」

原田の言葉で隊士達は、

そうだ。その通りだ。

とつつあん、落ち込むな。

など歓声を挙げる。

松平

「お前ら……」

松平は心を打たれる。

沖田

「それに、有りがち判断は正しかった思いやすぜ」

松平

「何!?!」

沖田

「土方さん、フェイトって言う万事屋の奥さんに相談するはずだったです。それは、手掛かりを掴んだか推測を考えたかで、相談しよう……」松平

「フェイトって、あの結婚式のべっぴんさんか。しかし、何で相談

なんか…」

沖田

「ああ見えて、凄い人なんですよ」

松平は首を傾げる。

ミッドチルダ世界

ミッドチルダ湾内警備隊本部前

ティアナとスバルは長谷川の今後について話し合う。

ティアナ

「長谷川さん、どうしようか…」

スバル

「うーん、そうだ！。私んちのマンションに泊めてあげようよ。テ

ィアといっしょに」

長谷川

「えーっ、お、女の子のマンションに！？。しかも、二人…」

長谷川は妄想する。

何故か、スバルとティアナの朝シャツ姿に笑顔。

長谷川は鼻の下を伸ばす。

ティアナはそんな長谷川を見て、

ティアナ

「スバル駄目よ。この人、銀さんの知り合いなだけに、いやらしいわよ。それに女の部屋に、男を入れるなんて…」
スバル

「えーっ。でも、長谷川さんは悪い人じゃなさそうだよ…」

長谷川は我に返って、

長谷川

「あつ、ティアナちゃんの言うとおりだよ。こんなおじさんを泊めるなんて…」

スバル

「長谷川さん…。じゃあ、どうするの？」

長谷川

「うーん、飯や寝床があれば、警沢はいらないよ」

ティアナとスバルは考える。

すると、デバイスに着信が入る。

ティアナ

「はい」

ルネツサ

「ランスター執務官」

ティアナ

「あつ、ルネ…。何？」

ルネツサ

「今後の捜査は…」

ティアナ

「ねえ、ルネ。長谷川さんのこと、どうしようか…」
ルネツサ

「長谷川さんですか？」

ティアナ

「このまま、湾内警備隊本部に預けてもらった方が…」
ルネッサ

「…あのう、ランスター執務官」

ティアナ

「うん？」

ルネッサ

「長谷川さんを私に預けても、良いですか？」

ティアナ

「えっ、何で？」

ルネッサ

「色々調査をする際、もしかしたら、長谷川さんを元に戻す手掛かりが見つかるかもしれません」

ティアナ

「そうね…。わかった、長谷川さんに聞いてあげる」

ルネッサ

「ありがとうございます」

数時間後、

ミッドチルダドライブイン

長谷川はルネッサの車に乗る。

長谷川

「いやー、悪いね。事件捜査なのに、俺の世話なんて…」
ルネッサ

「いえ、構いません。これは、私の勤ですが、長谷川さんがこの世

界に来たのは、偶然ではないかもしれませんが。坂田銀時やその仲間の方々はこのミッドチルダを救って頂いたので…」

長谷川

「えっ、銀さんはそんなすごいことを…」

ルネッサ

「聞いてないのですか？」

長谷川

「銀さん、そーゆう事を話さないから…」

ルネッサ

「よろしければ、坂田銀時のお話を…」

長谷川

「俺の知ってる範囲で良ければ」

長谷川は銀時やその仲間達の事と活躍を話す。

ルネッサもこの世界で起きたことや銀時達の活躍を話す。

長谷川

「信じられねーが、銀さんならやりかねないな…」

ルネッサ

「私事です。あの英雄が、元の世界ではそんなグーダラな人なんて

…」

長谷川

「確かにグーダラだけど、不思議な野郎なんだよな…。何かを惹きつける魅力があるんだよ」

ルネッサ

「長谷川さんも魅力ありますよ。特に渋さが」

長谷川

「えっ」

長谷川は驚く。何故なら、そんな事を言われたのは初めてだから。

長谷川

「じよ、冗談はよせよ……」

ルネッサ

「冗談ではありません。顔立ちに風格……。それに……。下はとても立派でした」
と赤くなる。

長谷川

「み、見てたの、マグナスさん!？」

ルネッサ

「はい」

長谷川

「へ、平気なの……。その、裸……」

ルネッサ

「はい、検死官だったので、男の方の裸は見慣れています。むしろ、興味あります」

長谷川

「そ、そうなんだ……」

ルネッサ

「あっ、こつという話はよしましょう。問題発言ですし……」

長谷川

「そうだね」

陸士108部隊本部内

データベース室前

長谷川はルネッサといっしょに行動していた。

ルネッサはデータベース室に入り、データを検索する。その間、長谷川はルネッサを待つ。

長谷川

「フーツ、見つかるかな……。元の世界で元いた時間に」
長谷川は別の事を考える。

長谷川

「ルネッサ・マグナス……。俺のことを渋いなんて……」
とルネッサのことを思いながら、赤くなる。

長谷川

「いけねえ、いけねえ……。まだ年頃の18歳の女の子だぞ。それに、俺にはハツがいるんだぞ」と自分に言い聞かせる。

すると、

ゲンヤ

「あん。誰だ、お前？」

ここの部隊隊長でスバル、ギンガの父、ゲンヤ・ナカジマが長谷川に近づく。

長谷川

「えっ。あつ、俺は怪しい者じゃないよ……」

ゲンヤ

「その面のどこが怪しい者じゃないだ。その面は、未だに就職していない、金も女に逃げられ、サングラスだけがトレードマークの面

「じゃねーか」

長谷川

「どうして知ってるの!?。つか、面を見ただけで、素性がわかるか!？」

すると、ルネッサがデータベース室から出てくる。

ルネッサ

「長谷川さん、どうかしました？」

ゲンヤ

「うん、あんたは…」

ルネッサ

「（敬礼しながら）失礼しました。ティアナ・ランスター執務官の補佐をしています、ルネッサ・マグナス執務官補です」

ゲンヤ

「ああ、ティアナの…。俺は、此処の部隊隊長のゲンヤ・ナカジマだ。んで、あんたは…」

ルネッサ

「この人は、坂田銀時さんの世界から来た、長谷川泰三さんです」

ゲンヤ

「えっ、あの天然パーマの世界から…」

長谷川

「長谷川泰三です。何故か、来ちゃいました」

するとギンガがやって来る。

ギンガ

「すみません。あっ、マグナス執務官補に、長谷川さん？」

長谷川

「ど、どうも…」

ゲンヤ

「よう、ギンガ」

ギンガ

「部隊長、この二人は…」

ゲンヤ

「もう聞いたよ。ルネッサ・マグナス執務官補に、まるでダメそうなおっさん。略して『マダオ』の長谷川泰三さんだろ」

長谷川

「なんで『マダオ』を知ってるの！？。つーか、あんたもおっさんだろう！」

ギンガを笑いをこらえる。

ギンガ

「は、長谷川さんはどうして？」

長谷川

「もしかしたら、帰れる手掛かりがあるかもしれないと思って、ルネッサさんといっしょに…」

ゲンヤ

「ふーん、大変だな」

ギンガ

「そういえば、部隊長。もうすぐ会議時間ですが」

ゲンヤ

「会議室に向かう途中だったんだよ。会議が終わったら、そのまま直帰だ。即ホームに行くってくる」

ギンガ

「はい、お疲れ様です」

ゲンヤ

「あ、執務官補殿に、長谷川さん。大変だろうが、頑張りな
ルネッサ」

「はい、ありがとうございます」

ゲンヤは会議室に向かう。

ルネッサ

「優しい方なんですね」

ギンガ

「部隊の部隊長？。結構怖いって言う人もいるんだけどね」

ルネッサ

「ナカジマ三佐とナカジマ捜査官は…」

ギンガ

「親子よ。家族は父一人に姉妹が六人」

ルネッサ

「大家族ですね」

ギンガ

「ランスター執務官も家の妹、警備隊にいたスバルね」

ルネッサ

「はい」

ギンガ

「スバルとは子供頃からの友達で、よく家にも遊び来てたから、私や父にとって、半分家族みたいなものなの」

ルネッサ

「そうですね…」

ルネッサは機動六課のデータをもらい、長谷川といっしょに車に戻ろうとする。

ギンガも同行する。

ギンガ

「あつ、それから。ギンガって呼んでくれないかな？。ナカジマだと、父さんとスバル、紛らわしいから」

ルネッサ

「わかりました、ギンガ捜査官」

ギンガ

「うん」

長谷川

「カッコいいな」

ルネッサ

「よろしければ、私のこともルネッサと。長谷川さんも。マグナスは平凡過ぎる名字ですので…」

ギンガ

「部隊にも3人ぐらいいたわね。でも、良い名字だと思うわよ」

ルネッサ

「どうも」

ギンガ

「ルネッサって言う名前の響きは、オルセーあたりの感じだけど…」

長谷川

「オルセー？」

ルネッサ

「南部の内戦地区です。よくある戦災孤児で、九歳まで戦場に立ってました」

長谷川は驚く。

ルネッサ

「そのあと戦災支援に拾われ、ミッドチルダ教育受ける機会がありました…」

長谷川はルネッサを見て、こう思った。

九歳で戦場に…。そうには見えねえ。つか、この世界でも戦争があるのかよ。

ミッドチルダドライブイン

今度はホテルに向かうため、再びルネッサの車に乗車する長谷川。

長谷川はルネッサを見つめる。

ルネッサ

「何か？」

長谷川

「あつ、いや…。君は俺より苦労してるだناと思って…」

ルネッサ

「長谷川さんよりですか？」

長谷川

「俺、幕府つて組織の入国管理局局長つて、偉い職務についていたけど…。不祥事でクビなつて以来は色んな職に就いても、すぐにクビになつちまう。おかげで、女房に逃げられるわ、住む家もなくすわで…」

ルネッサ

「私よりも、あなたの方が苦労してますね…」

長谷川

「そうかな…。でも九歳で戦場に立った君が苦労してるよ。俺の世界でも、攘夷戦争つて戦争があつたから…」

ルネッサ

「そうですか…」

ベルウイードホテル前

長谷川は泊まるホテルを見上げる。
自分のいた世界のホテルよりすごかったからだ。

長谷川

「すげえ。ここに泊まるのかよ……」

呟く長谷川は背中に何かを感じるのに気付く。

長谷川は振り向くと、

ルネッサが抱きついていた。

長谷川

「ル、ルネッサさん!？」

ルネッサ

「…すみません。もう少しだけ……」

長谷川は激しく動揺する。

な、何、この状況!?!。良いのか!?!。ってか、どうしたのこの子
?。真面目なキャラでしょう!?!。

ルネッサは目を閉じ、落ち着いた表情だった。

そ、その表情……。

まるで、愛しの人に甘えてる表情だよ。

そして、ルネッサが離れる。

ルネッサ

「すみません。余りにも似ていたんです。死んだ父に…」

しかし、動揺する長谷川は聞こえてなかった。

もしかして、俺に恋してるのか!？。と勘違いする。

ベルウイードホテル内 宿泊する部屋

長谷川とルネッサは互いのベッドの上で座り、向かい合っていた。

先程の事があって、会話が続かないでいた。

長谷川／ルネッサ

「あのう…」

台詞が重なる。

長谷川「あ、そっちから、どうぞ…」

ルネッサ「…先程は失礼しました」

長谷川

「あ、気にしていないよ」

ルネッサ

「あのう…。次は、長谷川さんが」

長谷川

「えっと…。呼び捨てしていいかな…。ルネちゃんって」

ルネッサは驚くが、
ルネッサ

「…構いませんよ」

長谷川

「そっか、それなら呼びやすいや」

すると、ルネッサが立ち上がる。

長谷川

「どうしたの？」

ルネッサ

「シャワーを浴びます。ずっと仕事ばかりでしたから」

長谷川

「えっ、シャワー!？」

ルネッサ

「どうかしました？」

長谷川

「な、何でもないよ」

長谷川は座りながら、動揺していた。
浴室からシャワーの音がする。

おい、ヤバい、ヤバいよ、コレ!?!。マズいよ。俺にはハツがい
るじゃね〜か。それ以前に、この物語が打ち切られる…。

ああつ、シャワーの音が聞こえる…。

あのシャワーでルネちゃんが体を…。

止める止める。これらはマズい事だぞ。

長谷川は激しく理性を保とうとする。

シャワーの音がやみ、浴室の戸が開く。

湯上がりのルネッサはバスタオルを羽織りながら、長谷川の前に立つ。

長谷川は見とれる。

ルネッサ

「（恥ずかしながら）空きました。次、どうぞ……」

この時、長谷川の理性が吹っ飛ぶ。

浴室

長谷川は激しく頭を洗いながら、

打ち切りなんか知るか！。

あの誘いを断る方がヤバいだろうが！。

大丈夫だ。どうせ、小説だ。文章だけしか無いんだ。

なんも問題は無い。今は、男として、大人として、期待に応えなければ。

男、長谷川泰三、行くぜ。

と意を決して長谷川は戸を開く。

部屋

長谷川「あれ…」

誰もいなかった。

代わりにベッドの上に一通の紙があった。

長谷川は拾う。

紙にはこう書かれてた。

『長谷川さんへ 急な連絡がありました。容疑者の目撃がありましたので、行きます。ルームサービスはご自由に。おやすみなさい。ルネッサより』

長谷川はベッドに倒れ込む。

長谷川「そっだよな…。あるわけないか」

長谷川は安心したようで残念な気持ちになる。

ホテルの外

こうして、夜がふけるのだった。

続く。

ステージ05 シリアスにエロスは欠かせない。(後書き)

長谷川とルネッサにフラグが。長谷川さん、浮気はいけませんよ。
次回、飛ばされた土方、近藤、山崎、星海坊主のお話です。一人ずつをメインにします。

ステージ06 いつ会えるかわからない。わからないから面白い。(前書き)

更新遅れて申し訳ありません。

『真選組Strikers 鬼の子守歌』 始まります。

ステージ06 いつ会えるかわからない。わからないから面白い。

辺境世界

雲一つない空。森の中心部に雷が落ちる。

森の中心部の中

雷の落ちた跡に、倒れた人があった。

真選組副長 土方十四郎だった。

土方

「う、うん…」

目を覚ました土方はゆっくり起き上がり、周りを見渡す。

土方

「ここはどこだ…!?!?」

土方は思い出す。

そうだ、俺はフェイトに会うために万事屋に行こうとした時、雷に当たった!。

土方は自分の身を確かめる。

痺れが残っているが、何ともない。やっぱりタダの雷じゃないな。場所が変わっている。という事は、転送する雷か…。

すると、正面から何かが来ることを察した土方は警戒態勢を取る。

だんだん近づき、話し声が聞こえる。

? 1

「もうすぐだね」

? 2

「火はないようだ」

土方は刀を抜いて、

土方

「何者だ？」

と怒鳴るようにたずねる。

話し声の主二人は驚く。

? 1

「だ、誰ですか!？」

土方

「そつちが先だ。何者だ？」

? 2

「自然保護隊の者です。アナタは？」

土方

「真選組副長 土方十四郎だ」

? 1

「えっ、土方さん!？」

話し声の主二人は驚き、姿を現す。

エリオとキャラロだった。

土方

「お、お前ら!?!」

すぐに刀をしまう。

エリオ

「土方さん!?!」

キャラロ

「どうしてこんな所に!?!」

土方

「いや、聞きたいのはこっちの方だ…!」

自然保護隊本部

土方はエリオとキャラロに保護される形で、自然保護隊本部にやってくる。

エリオとキャラロの上官のミラ・バーレットは挨拶に来る。

ミラ

「どうも、自然保護隊のミラ・バーレットです」

土方

「真選組副長 土方十四郎だ」

ミラ

「あなたの事は、管理局すべてが知ってます。あの地上本部を破壊したクリスと戦った坂田銀時さんのお仲間。会えるだなんて、光栄です」

と握手を求めろ。

土方をそれに応じ、握手する。

エリオ

「土方さん。どうして、この辺境世界に？」

土方

「それがわからねー」

キャロ

「わからない？」

土方

「最近江戸で起きている謎の雷事件の捜査中に、雷に打たれた」

エリオ

「雷!？」

土方

「その雷に当たった奴は跡形も無く消えちまう」

キャロ

「跡形も無く消える!？」

土方

「どうやら、死ぬ訳じゃなさそうだ。実際に打たれた俺はこの辺境世界とやらに飛ばされた」

エリオとキャロとミラは驚く。

土方は煙草を取り出し、

土方

「どうやら、雷はこの世界の魔導師が絡んでいるに間違いないと火を付け吸い出す。」

エリオ

「つまりミッドチルダの犯罪者ですか？」

土方

「おそらくな……」

キヤロ

「他にも当たった人達は……」

土方

「攘夷志士や天人など色々な奴だが、共通点は実力のある者だ」

キヤロ

「いえ、どうなつたですか？」

土方

「いや、飛ばされるのは確かだが、そこまでは……」

エリオとキヤロと土方は考え込む。

そんな状況を見たミラは、

ミラ

「まあまあ、考えるのは後に」

キヤロ

「そうですね。土方さん何か食べませんか？」

土方

「そうだな。昼飯まだだったから、お言葉に甘えて」

エリオ

「お昼の残り物で良かったら」

土方

「構わないぜ。あつ、出来ればマヨネーズを。あるだけ全部」

ミラ

「マヨネーズ？」

キャラは手作りの特製のシチュー。

エリオは特製の蒸しパン。

ミラは普通のマヨネーズをあるだけ全部持って来る。

土方「いただくぜ」

土方はマヨネーズの蓋を開け、シチューと蒸しパンにタツプリかける。皿からはみ出るくらいに。料理が見えなくなるまで。

エリオとキャラとミラはその様子を見て吐き気を露わにした。

ミラ

「あとう、味を確かめていないのにマヨネーズを……。しかも、そんなにかけるのは作った人に失礼なんですけど」

キャラ

「いいですよ、ミラさん」

エリオ

「あの人、マヨラー何です……」

ミラ

「マヨラー？」

エリオとキャラは前に土方の食事を見たことがあった。

クリスと決戦の前日。土方はマヨネーズをタツプリかけて、食べていた。その時も他のリリカル組（ナンバーズも含め）といっしょに吐き気を露わにした。

エリオ

「あの人、コーヒーにもマヨネーズを入れるんです」

ミラ

「コ、コーヒーにも!?!」

キャラ

「銀さんの宇治銀時丼もあまり食べれそうにないけど…」

エリオ

「あの子のマヨネーズも…」

土方は気にせず食べる。

数分後。

土方

「ご馳走さん。マヨネーズ、ありがとうございます」

土方はミラにマヨネーズを返す。

ミラ

「い、いえ…」

土方はエリオとキャラのところに行き、二人をじっくり見る。

土方

「お前ら、よく見たらかなり背が伸びたな。万事屋の結婚式が終わって、3カ月ぐらいしか経ってないのにな」

エリオとキャラは驚く。

エリオ

「何言ってるんですか、土方さん」

キャラ

「銀さんとフェイトさんの結婚式は3年前ですよ」

土方

「何!？」

エリオ

「3カ月でこんなに身長は伸びませんよ」

土方

「だよな…」

土方は考える。

しばらくして、気づく。

土方

「なるほど」

エリオ

「どうしたんですか?」

土方

「どうやら俺は、あいつらの結婚式後の未来に来ちまったようだ」

エリオとキャラとミラは話が見えなかった。

土方はそれに気づく。

土方

「わかりやすく言えば、青い猫型ロボットがドジでバカな少年のワガママの為に、タイムマシンで少年の未来の結婚式に行く。しかし、うっかり結婚式の前日に来ちゃった。という話と同じだ」エリオと

キャラとミラは土方の話は理解できていなかった。

土方はもっとわかりやすい説明を考える。

土方

「つまりタイムマシンで行きたい時代に行こうとしたら、間違っ
てその時代の数年後に着いちゃった。ならわかるか？」

エリオとキャラとミラは納得する。

土方

「しかし、今回は来たくって来たわけじゃない。雷の話戻そう。あ
の雷は異次元世界の移動だけじゃなく、時間も特定に設定されてる」

エリオ

「時間もですか…」

キャラ

「何の目的で江戸の世界の人達を…」

土方

「わからん。わかったのは、魔導師絡みということだけだ」

重い空気が漂う。

ミラ

「まあまあ。そーゆうのはゆっくり考えて。土方さん、もう遅いで
すから、今日は泊まって下さい」

土方

「いや、でも…」

エリオ

「そうですね」

キャラ

「帰ろうにも、方法が無いですし」

土方は考え、

土方

「そうだな。お言葉に甘えるか」

エリオとキャラロは喜ぶ。

自然保護隊本部内廊下

土方はエリオの案内で本部内を見て回る。

土方

「そーいや、あのロリコン魔人は？」

エリオ

「ああつ、ゾーマは…」

辺境世界の森

ゾーマ「うんしょ」

ゾーマは自分が破壊した大木などをリヤカー（ゾーマサイズ）に積んでいく。

ゾーマ「ハァー。まだまだあるな」

まだ運んでいない大木などを見て、ため息をつく。

ゾーマは破壊した大木などを直接処理場に運ぶ仕事をしていた。処理場と森の距離はかなり離れている。本来ならトラックで運ぶべきだが、ゾーマのおかげでその予算がない。

これはゾーマ本人の責任なので、回収のほか運搬も自力でやるしかなかった。

ゾーマ本人は最初は嫌がったが、

ミラ

「（裏声）てめーに断る権利はねえだろ。そのバカ力を活用すれば、問題ねえだろ。逆らうと、てめーの下のタマネえーと思え」

流石のゾーマも逆らえなかった。

ゾーマは泣きながら、

ゾーマ「キャロりん、帰ったら一緒にチヨメチヨメしような」と叫ぶ。

自然保護隊本部

キャロりんことキャロは…。

キャロ自室

キャロ「ゾーマ君、待つてるから…」

キャロはローションの瓶を見つめながら、赤くなる。

本部内廊下。

土方

「おいおい、まだ続いているのか…。あっ！」

土方はエリオの失恋を思い出す。

肩を落とすエリオ。

土方

「わ、悪かった。嫌な事を思い出させて…」

エリオ

「いいですよ。僕にはこの子達がいます」

ポケットからフッシユプ キュアのヒロインの人形を取り出す。

その時、土方のもう一つの人格、トッシーが目覚める。

トッシー
土方

「そ、それはフッシユリキュア!?!。君も持っているの!?!」

エリオ

「土方さん、興味あるんですか」

トッシー
土方

「アニメ好き？」

エリオ

「はい」

トッシー
土方

「美少女好き？」

エリオ

「はい」

トッシー

「観賞用、保存用、触り用は？」

エリオ

「あります」

トッシー
土方とエリオは見つめ合い、手を握る。

この瞬間、二人はオタク同志になった。

その様子を見ていたミラは、

ああっ、この自然保護隊はどうなるの……。と絶望する。

自然保護隊本部の外

深い森の中から本部を見る怪しい三つの人影。

？「土方、抹殺」

と呟くのだった。

次回に続く。

ステージ06 いつ会えるかわからない。わからないから面白い。(後書き)

如何でしたか？。

もしも、質問やキャラクターの応援メッセージが多かったら、オマケステージを作ります。

ステージ07 武器も道具も正しく使いましょう。(前書き)

今回は自分なりに戦闘表現を文章にしました。満足できれば、嬉しいです。

ステージ07 武器も道具も正しく使いましょう。

深夜

自然保護隊本部外側

3人の影が近づく。

? 1

「土方は中か？」

? 2

「奴は全力で抹殺だ」

? 3

「キュラス様の命だ」

? 1は目から光線で本部をスキャンする。

(? 1の視線)

熱探知で何人が確認する。

特に熱が上昇する二つの人間を探知する。

? 1

「とても高い反応二つ、発見」

? 2

「土方か？」

? 3

「行くか」

? 1は腕をキャノン砲に変化させ、壁を破壊する。

3人は示した方向に向かって走る。

隊員

「な、なんだ!？」

隊員達は慌てる。

3人は目標の土方がと思われる部屋の前に着く。

? 1はキャノン砲でドアを破壊する。

ドアの向こうにいたのは…。

(テーマソング)

〜

キュア ーチ

「行くわよ」

キュ ベリー

「ええっ」

キュアパ ン

「絶対に」

キュアパツ ヨン

「負けない」

土方

「やっぱりいいね」

エリオ

「はい」

土方とエリオはテレビで『フッッシュュプリ ユア』を観て、興奮していた。

二つの上昇する熱の正体はテレビアニメの鑑賞で興奮するオタク二人だった。

3人は啞然する。

土方とエリオは後ろの3人に気づく。

土方

「き、君達は…」

3人は警戒する。

土方

「なんて注がれる衣装なんだ！」

エリオ

「とても似合ってます！」

3人は首を傾げる。

土方

「エリオ君、カメラ！」

エリオ

「はい」

? 1

「貴様ら、状況をよく見る!!」

3人は腕をキャノン砲に変えて、土方とエリオに向ける。

土方とエリオは驚く。

? 1

(さあー、どう出る?)

土方

「すみませんでした」

と土下座をする。

3人は啞然する。

土方

「エリオ君、ヒロイン達を避難させて!!」

エリオ

「はい!!」

エリオはヒロイン（人形）達を持って、急いで逃げる。

土方

「すみません！。勘弁して下さい！。お、お金ならここにあります」
財布を差し出す。

? 1

「我らが欲しいのは、貴様の命だ」

? 2

「その前に、お前は土方なのか？」

土方

「その通りでござるよ」

? 3

「ござるよ？」

土方

「正真正銘の土方十四郎でござるよ」と警察手帳を見せる。

3人は警察手帳を見る。

確かに、本人の顔写真と名前に土方十四郎と書かれてあった。

? 1

「どつする？」

? 2

「言われた通りにやるか」

? 3

「やるっ」

3人は腕を刃に変える。

3人

「死ね!!」

3つの刃は土方に向かう。

次の瞬間、

ガキーンと金属音が響く。

土方は刀で刃を払いのける。

3人は驚く。

土方

「引っ込んでろ、トッシー」

土方の目が変わる。

トッシーの人格から、元の人格に変わった。

3人は土方の変わりように驚愕する。

ヒロイン（人形）を避難させたエリオも

エリオ

「土方さん!？」

とやっと正気に戻る。

土方

「エリオ気をつける。こいつら、普通じゃねー」
? 1

「あなたに言われたくありません!」

ミラや隊員達が武装を装備してやって来る。

ミラ

「そこまでです。おとなしく投降しなさい……！」

?2は腕をマシンガンに変化させ、ミラ達に発砲する。

ミラ達はすぐに逃げる。

土方

「オイ、お前等の目的は俺だろ！」

上段に構え、斬りかかる。

?1は腕の刃で受け止める。

3?は腕のキャノン砲で後ろの壁を破壊する。

土方らは驚く。

?1、3は破壊した壁の穴から逃走する。

その直後、残った?2は腕を触手に変え、

ミラ

「キヤー」

ミラを捕まえ、逃走する。

エリオ

「ミラさん!?!」

土方

「ちっ!?!」

土方は後を追う。

エリオ「土方さん!？」

エリオの静止を聞かず、行ってしまつ。

森の中

ミラ

「ちょっと、離しなさいよ!」

ミラは暴れるが、触手はほどけない。

?1

「そろそろ来るか…」

3人は立ち止まる。

そして、土方が追いつく。

土方

「ミラさん、無事か？」

ミラ

「ええっ…」

土方は3人を睨みつける。

土方

「テメーら、何もんだ？」

? 1

「……マリアージュ」

ミラ

「マリアージュ!？」

土方

「知ってるのか？」

ミラ

「ミッドチルダで指名手配されている殺人鬼よ。まさか、3人いるなんて……」

土方

「ミッドチルダでも、そんな事件が起きてるのか？」

マリアージュ 1

「我らの目的はあなたの抹殺です」

土方

「何故だ？」

マリアージュ 2

「知る必要ありません」

マリアージュ 達は腕をキャノン砲に変える。

マリアージュ 3

「何故なら、あなたはここで死んでもらいます」

土方は刀を抜き、構えを取る。

すると、

マリアージュ 2 はミラを盾にするように、土方の目の前に出される。

土方

「ずいぶん卑怯じゃねーか」

マリアージュ2

「我らは目的遂行のためなら、手段を選びません」

両者は睨み合う。

ミラ

「ひ、土方さん……」

マリアージュ1

「刀を捨てて下さい」

土方は構えを解く。

マリアージュ2

「早く捨てなさい」

土方

「わかった、よ！」

刀を思い切り投げ飛ばす。

投げた刀は一直線にマリアージュ2の額に刺さる。

他のマリアージュ達は驚く。

マリアージュ2が倒れる瞬間、触手がほどけ、ミラは落ちる。

ミラ

「きゃー！」

土方は高速に動き、マリアーージュ達の間に着き、落ちそうなミラを受け止める。刀を片腕で引き抜き、マリアーージュ達から離れる。

土方

「大丈夫か？」

ミラ

「は、はい……」

マリアーージュ達は両腕をキャノン砲に変え、土方に向ける。

土方

「早く逃げる！」

ミラ

「はい！」

ミラはすぐにそばに離れる。

マリアーージュ達はキャノン砲を発射する。

土方は放たれたキャノン砲の弾の間に避けながら高速にマリアーージュ達に向かって疾走する。

マリアーージュ3

「早い!?!」

そして、土方はマリアーージュ達の間に着き、マリアーージュ3の脇腹辺りを一刀両断する!。

マリアーージュ1は驚愕する。

土方は後ろに回り、すぐさまマリアージュ1を一突きを繰り出す。マリアージュ1は両腕を盾に変えて、一突きを防ぐ。

盾から刃に変え、土方に斬りかかる。

土方も刀で反撃。

刃と刀は激しく斬り合う。

ミラは土方とマリアージュの戦いを見て、

ミラ

「凄い！」

と驚愕する。

マリアージュは片腕の刃をチェーンソーに変える。

マリアージュ1

「これで終わりです」

上段に構え、土方に斬りかかる。

ミラ

「土方さん！」

土方

「足がお留守だぜ」

マリアージュ1

「何!？」

土方は足払いでマリアージュの足を払う。

マリアージュ1はバランスを崩し、倒れる。

土方はすぐさま跳び、チェーンソンの腕に着地する。
これでチェーンソンの腕を止める。

土方「抑えれば、斬れねーだろ」

とマリアージュ1のもう片方の腕を突き刺す。

土方

「さあー、勝負はついた。俺の抹殺を命じたのは誰だ？」

するとマリアージュは黒い液体になる！！。

土方は驚き、刀を引き抜く。

さらに他に倒したマリアージュの死体も黒い液体に変わる。

土方は危機を察知し、すぐさま離れようとする。

次の瞬間、黒い液体は爆発する。

土方

「グワーツ!？」

と爆風で吹き飛ばされる。

ミラ

「土方さん!」

急いで土方に駆け寄る。

ミラ

「土方さん大丈夫ですか？」

土方

「アアツ、何とかな…」

土方は爆発跡を見つめる。

ミラは爆風により、燃え移る森に気づく。

ミラ

「いけない！！、森が…」土方

「早く消さねーと、山火事になる」

焦るが、消火する物がない。

その時、

キャラ「ミラさん、土方さん！」

土方とミラは上を見る。

フリードに乗るキャラとエリオが駆けつける。

ミラ

「キャラ、エリオ！」

キャラ

「すぐに消火します！」

土方

「できるのか！？」

キャラ

「はい！」

キヤロは懐からローションの瓶を取り出す。

エリオ

「キヤロ、アレをやるの!？」

ミラもキヤロの行動に気づく。

ミラ

「まさか!」

土方

「どうした？」

キヤロは瓶の蓋を取り、

キヤロ

「ローションシャワー」

ローションの蓋からローションが飛び出てくる。その量は瓶に入っていた量よりも多かった。

それは魔力で量が増幅されている。そして、ローションは雨のように降る。

ローションは広がっていく火事を消していく。

その場に居た土方とミラはローションに濡れる。

土方

「オイ、コレは…!？」

ミラ

「…ローションです」

土方

「ローション!?!」

ミラ

「…キャラは最近、ローションを気に入り、ゾーマと一緒に使っているんです」

土方

「いつも持ち歩いてるのか!?!。つか、いいのかよ!?!。未成年者にローション持たせて!?!」

ミラ

「プライベートな事なので…」

森の火事は鎮火された。

土方達は爆発跡を見る。

エリオとキャラはマリアージュの話聞いて、

エリオ

「あのマリアージュが複数いたなんて…」

ミラ

「アレは人間じゃない!」

キャラ

「どうして土方さんを…?」

土方

「わからねー。だが、これだけはわかった。……俺がこの世界に来たのは、偶然じゃない!」

土方は確信する。

エリオ達もそう考える。

こうして、夜が明けて、朝が来る。

コレが土方やエリオ達の波乱の始まりだった。

続く。

ステージ07 武器も道具も正しく使いましょう。(後書き)

いかがでしたか？。感想と戦闘表現に対する指摘お願いします。

ステージ7・5 最初はこんな感じであって、言う人が多いよね。(前書き)

質問が2つぐらい来ましたので、オマケステージをします。

ステージ7・5 最初はこんな感じでって、言う人が多いよね。

万事屋『銀ちゃん』

銀時

「こんにちわ」

なのは

「約束通り、オマケコーナーをします」

フェイト

「本当にやるんだ」

いつもの万事屋の中ではなく、すっかりお便りコーナー風に改装されていた。

銀時

「やっと、出番が来たぜ！」

なのは

「これでバンバン活躍するわよ！」

フェイト

「オマケコーナーでバンバン活躍できないと思うけど…」

銀時はケータイを見る。

銀時

「じゃあ、早速。ペンネーム・半熟果実さんからの質問。『いきな

り質問ですが、今回の小説でナンバーズや猿飛あやめなどの銀魂キ
ャラもですか?』」

なのは

「いい質問ですね」

フェイト

「はい、ナンバーズは勿論。銀魂キャラも出ますよ。そして、今回
のこのコーナーに銀魂キャラをゲストに迎えています」

銀時

「まじかよ!?!」

なのは

「誰?」

フェイト

「この方です。どうぞ」

ハタ皇子

「くるしゅうない、面をあげい」

次の瞬間、銀時はハタ皇子の頭の触覚を千切る。

ハタ皇子

「ぎゃああああ!?!」

千切れた跡から出血が飛び出る。

フェイト

「銀時、何やってるの!?!」

銀時

「んで、このバカ皇子がゲスト何だよ!?!。どうせなら、結野アナ

にしろよ」

なのは

「銀さん駄目だよ！。このコーナーをこんな体脂肪の塊の人の血で染めるなんて…」

ハタ皇子

「オイ、お前も酷い事言ってるぞ！」

フェイト

「本当にすみません」

フェイトはハンカチでハタ皇子の頭を抑えて止血する。

この時、フェイトの胸がハタ皇子の顔をムニツと埋める。

ハタ皇子

(オオッ！！、なんとゆう感触じゃ…)

すると、また触覚が千切る音がする。

じい

「すみません。私も止血を…」

いつの間にかいたじいが自らの触覚を千切り、止血を求める。

じい

「出来れば、なのはさんに…」

銀時

「オメー、何やってるんだよ！？」

とじいを飛び蹴りする。

銀時

「テメー、何ニヤニヤしてるだよ。離れるー!!」

フェイトとハタ皇子を引き離そうとする。

銀時

「フェイトの胸は俺専用のダイブなんだよ!!」

ハタ皇子

「何を言ってるおる!?!。元はと言えば、貴様が余の触覚を干切るからだぞ!」

銀時

「うるせー、とっと離れる!」

銀時は必死でハタ皇子を引き離そうとする。

フェイト

「銀時止めて!」

復活したじいはなのはに迫る。

なのは

「あ、あのう…」

じい

「止血とその豊富な胸で、私の日頃の心の傷を癒やしてください」

胸を触ろうとする。

ブチツとなのはの何かが切れる。

なのは

「……息の根も止めてあげようか？」

レイジングハート（エクセリオンモード）をじいに向けて構える。

じい

「へっ？」

なのは

「スターライトブレイカー！」

じい「ぎゃああああ！？」

じいは万事屋の外の方までぶっ飛んだ。

なのはは一息つく。

銀時、フェイト、ハタ皇子は恐怖する。

銀時

「さあー、次の質問を読もう」

フェイト

「そっだね」

ハタ皇子

「今度はなのは殿に読んでもらいましょう」

なのは

「うん、ありがとう」

レイジングハートをデバイス状態に戻し、画面を表示する。

なのは

「黒也さんからの質問です。『エリオは、プリキュアを見ていまし

たけど他にどう言うアニメを見ているんですか?』」

フェイト

「エリオがあんなに変わるなんて…」

銀時

「無理もねーよ。キャラがああのゾーマと恋人になっちまったからな

…」

ハタ皇子

「よく知らんが、大変じゃのう」

銀時

「質問の答えは、そりゃ、プリキュアだけじゃないよ。オタクがプリキュアだけで満足するわけないでしょう。ほかの美少女アニメだつて見てるよ」

ハタ皇子

「そうじゃな。余だて、たくさんの動物が大好きだからの」

なのは

「でも、はまり過ぎるのも、問題じゃ…」

銀時

「いいか、男つてのは本能的に女が好きなんだよ。アニメの美少女でも本能的にアレられるから」

フェイト

「アレって?」

銀時はフェイトに耳打ちをする。

フェイトは赤くなる。

なのは

「フェイトちゃん、どうしたの?」

フェイト

「な、何でもないよ…」

八夕皇子

「それじゃ、次は余の動物の話を…」

銀時

「はい、今回はここまで」

八夕皇子

「終わらせるな！」

フェイト

「皆さんのまたの質問をお待ちしてます」

銀時

「またはキャラクターの応援も待ってます」

八夕皇子

「応援の心掛けは『ラブ&ピース』じゃ」

銀時

「たまには良いこと言っじゃねーか」

なのは

「それじゃ」

フェイト

「次回にテイクオフ」

なのはのスターライトブレイカーにより黒こげになったたじいが、
じい

「ぱ、パフパフを…」

と言いながら、気絶する。

またオマケステージで。

ステージ7・5 最初はこんな感じでって、言う人が多いよね。(後書き)

如何でしたか？。質問とキャラクター応援をお待ちしています。

ステージ08 シスターだって、気を遣うのは難しい。(前書き)

今回はチョイ悪オヤジとシスターの組み合わせです。

ステージ08 シスターだって、気を遣うのは難しい。

グエン砂漠

蝉が鳴き、とても暑い日差しの下で砂漠を歩く一行。

その一行は巡礼中の聖王教会信者の一行。

そんな一行を先導して歩くのは、

修道騎士のシャツハ・ヌエラ。

そして、見習い修道騎士兼シスターのセイン。

かつてはナンバーズNo.6だった。

セイン

「ハアー、ハアー、ハアー、暑い…」

シャツハ

「午後に向けて、もっと暑くなりますよ」

セイン

「マジですかー、シスターシャツハ？」

シャツハ

「砂漠つの蝉も元気に鳴いていますし。巡礼信者の方々に『高齢者もいます。皆さんお元気でしょう』」

セイン

「フーッ、それでもこの日差しと砂漠歩き、都会っ子にはキツー」
ざんす

シャツハ

「フーッ、すぐに慣れます。代々何です、あなたはさっきから後ろチラチラと覗いたりして」

セイン

「いやー、ハツハツハツ、まあちよつと……。っーかですね。この文明科学の時代に何が悲しくて砂漠を歩いて、聖地巡礼ツアーをするのさ。ヘリとか飛行機を飛ばすとかさ……」

シヤツハ

「信者の皆さんの巡礼紀行。その先導と護衛もシスターの仕事でしょうが。それに巡礼は自分の足で歩いてこそ……」

セイン

「知ってます、わかってます。言ってみただけです」

シヤツハ

「ましてや私達はシスターであると同時に修道騎士ですから」

セイン

「あたしはまだ見習いですけど」

シヤツハ

「信者の皆さんの邪魔をせず、かと言って目を離さず無事に巡礼先送り届けるこそ」

セイン

「アアツ、シスターシヤツハ。ちよいストップ」

シヤツハ

「はい？」

セイン

「ちよつと荷物降ろすよ」

セインは荷物を降ろし、後ろに走り出す。

シヤツハ

「ちよつと、シスターセイン？」

セインは一行の真ん中あたりに止まる。

セイン

「ちよつと奥のご婦人、具合悪そうだけど」

ご婦人

「いいえ、大丈夫で…」

突然倒れ出す。

他の信者達は慌てる。

セイン

「アアツ、やっぱり…。少し休む？。それとも、あたしが背負う？」

ご婦人

「いや、平気だよ…」

信者A

「おばあちゃん、無理したらいかんよ」

信者B

「なんだんだ」

シヤツハが駆けつける。

シヤツハ

「次の休憩はもうすぐです。シスターセイン、背負って行ってあげなさい」

セイン

「あいよ」

シヤツハ

「あなたの荷物は私が…」

セイン

「アアツ、平気。胸の所で抱えるから。ほれ、婆ちゃん、背中に」

セインはご婦人を背負う。

ご婦人

「アアツ、すまないね」

セイン

「気にするなよ。元気に聖地に着かなきゃ」

ご婦人

「ありがとうね」

シャツハ

「他にご加減が悪い方はお早めに」

シャツハ

（あなたが見ていたのはこの方？）

シャツハは念話でセインに話しかける。

セイン

（アアツ。あたしの目、一般人よりズーム効くんで。一応みんなの観察を…）

セインも念話で話す。

シャツハ

（そうならそうと言いなさい。余計に叱りました）

セイン

（こーゆうの説明するの面倒臭いだもん）

シャツハ

（…私も至らないところがありました。もう少し気をつけましょう。

ありがとうシスターセイン)

セインは照れる。

セイン「巡礼ツアーの皆さん、休憩地は街中だから。ゆっくり休めるから。水も氷も食べ物もたくさん売ってあるから」

巡礼信者の皆さんは元気がつく。

セイン

「行きましょう、シスターシャツハ」
シャツハ

「はい、参りましょう」

休憩地の街の広場

巡礼信者の一行はゆっくりと休む。

倒れたご婦人はセインに何度も頭を下げてお礼を言う。

シャツハは巡礼信者 に飲み水を配る。

すると、セインは空を見上げる。

空に穴が開く。

『次元の穴』だった。

セイン

「シスター シャツハ！」

シャツハや信者達も気づく。

次元の穴から雷が落ちる。

信者達は落ちた雷に怯える。

セイン

「あたし、見てくる」

セインは雷の落ちた所に走り出す。

シャツハ

「待ちなさい、シスターセイン！」

静止するがセインには聞かなかった。

雷の落ちた場所

雷の作った穴に人が倒れていた。

掃除屋、星海坊主だった。

星海坊主

「うっん…」

星海坊主は目が覚める。

星海坊主

「ここは…どこだ？」

少し起き上がり、辺りを見渡す。
江戸の町ではないことに気づく。

星海坊主

「確か彼（近藤）を庇って、雷に…」

すると。

セイインが到着する。

セイインは星海坊主に気づく。

セイイン

「あのお、大丈夫？」

星海坊主はセイインに気づく。

セイインはすぐに星海坊主に駆け寄る。

セイイン

「雷に当たった？。ケガ無い？」

次の瞬間、星海坊主はセイインの胸ぐらを掴む。

セインは驚く。

星海坊主

「てめー、今なんて言った？」

セイン

「えっ、ケガ無いって…」

星海坊主は帽子を脱ぐ。

星海坊主

「俺の頭のどこが毛が無いだ？」
と頭を見せる。

桂がずれて、ハゲが見える。

ハゲを見たセインは驚き感づく。
この人、頭をハゲ気にしているだと。

セイン

「あっ、じゃなかった。えーっと、大丈夫ですか」

星海坊主は手を離す。

星海坊主

「大丈夫だ…」

休憩地の街の広場

シャツハと信者達はまだ戻らないセインを心配する。

シャツハ

「シスターセイン、大丈夫でしょうか…」

信者A

「おおっ、戻って来た」

信者の指す方を見るシャツハ。

セインが広場に戻って来る。

シャツハ

「シスターセイン、どこに行つて…」

セインの後ろに付いて来る星海坊主に気づく。

特に星海坊主の頭のずれた桂に。

シャツハはセインに駆け寄る。

シャツハ

「シスターセイン。この方は？」

セイン

「雷の落ちた場所に居た人。名前は星海坊主だつて」
シャツハ

「星海坊主？」

すると、セインはシャツハに耳打ちする。

セイン

「この人、頭のこと気にしてるから、頭の事を触れないで…」

シャツハ

「わかりました…」

シャツハは星海坊主に近づく。

シャツハ

「あとう、私は聖王教会のシスターのシャツハ・ヌエラです」

星海坊主

「宇宙で掃除屋をやってる星海坊主だ」

シャツハ

「宇宙で？。それは凄いですね…。その掃除屋さんがどうしてこちらに？」

星海坊主

「…それが分からない。雷に当たって、此処に倒れていたんだ」

シャツハ

「まあ、雷に！？。お怪我はありませんか？」

星海坊主

「毛がありません？」

シャツハ慌てる。

シャツハ

「じゃなかった。き、傷を負ってませんか？」

星海坊主

「大丈夫だ。此処は江戸の町じゃないのか？」

シャツハとセインは『江戸の町』と言う言葉に反応する。

セイン

「星海坊主さん、江戸の町を知ってるの!？」

星海坊主

「アアツ、俺はそこで雷に当たったんだ」

セイン

「ねー、坂田銀時って知ってる?」

星海坊主

「お前、アイツを知ってるのか!？」

その後、別の場所でセインは星海坊主と話す。

シャツハは巡礼信者達の相手をする。

セインは星海坊主に銀時がこの世界を救った経緯を話した。

星海坊主も自分は神楽の父親であることを話す。

セイン

「へえー、星海坊主さんは神楽のお父さんなんだ。そういえば、その傘神楽のと同じだ」

星海坊主

「それにしても、あいつはただ者じゃないと思ったが、まさか化物相手にこの世界を救うとはな……」

セイン

「それにしても、どうして雷に当たったら、この世界に来ちゃったんだろっ……」

星海坊主

「あの雷、ただの雷じゃないな」

二人は考え込む。

するとセインは沈黙を破る。

セイン

「よし、聖王教会に連絡しよう」

星海坊主

「聖王教会？」

セイン

「聖王教会に今の事情を話して、ティアナって言う執務官に連絡を取って貰おう。そうすれば、江戸の町に帰れるじゃないかな」

星海坊主

「よくわからねーが、そうした方がいいな」

セインと星海坊主はシャツハと巡礼信者達の所に戻る。

セインは自分の提案をシャツハに相談する。
シャツハ

「それは良い考えですね。江戸の町はランスター執務官の方が詳しいです。星海坊主さん、それで宜しいですね」

星海坊主

「アアツ。よろしく頼む。」

星海坊主は頭を下げる。

と同時に桂を落としてしまう。

シャツハとセインは焦る。

星海坊主は桂に気づく。

信者B

「ああっ、眩しい」

星海坊主の頭の事を言う。

星海坊主は『眩しい』と言う言葉に反応する。

セインとシャツハは慌てて、

セイン

「そうだね、太陽は眩しいよね」

シャツハ

「ああっ、暑い……」

となんとかその場を誤魔化する。

星海坊主は桂を拾い、セツトし直す。

数分後。

星海坊主は桂をセツトし直した。

…はずなのに、前よりずれていた。

シャツハとセインは啞然する。

シャツハ

（前よりずれている！。あれはワザとですか？）

セイン

(おかしい。絶対有り得ないって…)

星海坊主本人は気づいていない。

信者の一人は星海坊主に歩み寄る。

信者C

「あなた、少ししやがみなさい」

星海坊主は言われた通りにしやがむ。

信者Cは星海坊主の桂に触れる。

シャツハ

(ああっ、いけない!)

セイン

(自ら地雷を踏んだ!)

二人のシスターは焦る。

信者Cは桂を正しくセツトする。

信者C

「次からは、鏡を見てやりなさい」と言い残し、立ち去る。

星海坊主は頭を下げる。今度は落ちなかった。

シャツハとセインはあの信者Cを一瞬『神』だと思ってしまう。

その後、星海坊主は聖王教会の関係者に迎えられ、ミッドチルダの聖王教会に行く。

セインとシャツハは星海坊主の心配をするつつも、巡礼ツアーの先導と護衛をするのだった。

次回に続く。

ステージ08 シスターだって、気を遣うのは難しい。(後書き)

次回は、『ゴリラ』と『裸』が出てきます。ある意味楽しみにしてください。

ステージ09 アニメ化する際、キャラクターの設定が原作とは違う時もある。

お待たせしました。遂に近藤さんのアレが出ます。
ついでに星海坊主さんアレも出ます。

ステージ09 アニメ化する際、キャラクターの設定が原作とは違う時もある。

キュラスアジト

キュラスはコンピューターを見て、満足する。

コンピューターに映されたのは、

土方とマリアージュ3体の戦いの様子だった。(ステージ07参照)

キュラス

「素晴らしい。噂以上の実力だ」

やかんがコトコト茹で上がっていく。

キュラス

「あとは真選組の局長とオマケか…」

コンピューターを動かす。

画面に映されたのは、

近藤と山崎の身体データとマリアージュ6体の身体データ。

二人のデータとマリアーヂュ6体のデータを比較する。

キュラスは考える。

キュラス

「いくら局長でも、マリアーヂュ6体は無理があるな。オマケを入れても、勝てないいな」

キュラスはコンピューターの電源を切る。

キュラス

「まあ、死体でも役に立つから良い。もしかしたら、マリアーヂュ改ができるかもしれん。フツ、ギャアツハツハツハツ……」

と同時にやかんが沸騰する。

キュラスはカップめんにやかんのお湯を注ぐ。

キュラス

「そろそろカップめんの買い出しに行かんと」

やかんを置き、カップめんに重石を置く。

キュラス

「ハアー、戦闘用マリアーヂュ以外も作ろうかのう」とため息をつく。

海上保護施設内庭

4人の少女が勉強をしていた。

彼女達は元ナンバーズで、今はゲンヤ・ナガジマの養女になっていた。

銀髪で眼帯を付けた少女はチンク。

栗色の髪をリボンで束ねる少女はディエチ。

紅い髪で明るく振る舞う少女はウエンディ。

同じく紅い髪だが、顔つきがスバルにそっくりな少女はノーヴェ。

そして、その4人に勉強を教えているのは、科学主任のマリエル・アテンザ。

勉強の時間がちょうど終わる。

マリエル

「はい、今日はここまで」

ウエンディ

「終わったっす」

ディエチ

「うん」

ノーヴェ

「これからどうする？」

チンク

「うーん…」

などと相談する4人を見て、微笑ましく笑うマリエル。

すると、空に歪みが現れる。

チンクはいち早く気づく。

ノーヴェ

「どうしたの？」

チンク

「空を見る！」

他の3人とマリエルも空を見る。

空に次元の穴が現れる。

マリエル

「あれって、次元の穴！？」

デイエチ

「次元の穴？」

次元の穴から雷が現れ、庭の真ん中に落ちる。

ワーツと目を閉じて、驚く。

空にある次元の穴が消える。

マリエル達は目を開くと、

二人の男が倒れていた。

ウエンディ

「ひ、人が倒れてるっすよ」

ディエチ

「助けなきゃ」

ウエンディ、ディエチ、ノーヴェ、チンクは駆け寄る。

すると、4人は突然赤くなる。

倒れていたのは、

真選組局長

近藤

勲と監察役

山崎

退だった。

ただし、近藤だけは全裸だった。
刀を持っていたが。

ちなみに、山崎はちゃんと制服も愛用ミントソラケットを身につけている。

マリエル

「どうしたの？」

マリエルも駆け寄り、近藤の全裸を見て赤くなる。

5人の女は、

どうしよう、こーゆう時…。

デイエチは思い切って、

デイエチ

「だ、大丈夫ですか」

と山崎の方を助ける。

チンク

「そ、そうだ。助けなきゃ」

チンク、ウエンディ、マリエルは近藤の方を介抱する。

そして、ノーヴェはどうすればいいのか、戸惑う。

近藤の全裸を見たせいで、混乱していた。

チンクは近藤の顔を覗く。

チンク

「コイツは！」

ウエンディ

「あっ、ゴリラっす」

マリエル

「ゴリラ？」

チンク

「違うだろ。彼は近藤勲殿。真選組局長だ」

マリエル

「えーっ、この人があの真選組局長！？」

ウエンディ

「このゴリラ顔、間違いないっす」

マリエル

「この人が…」

マリエルはじっくりと近藤を見る。

股間の辺りで、目をそらす。

しかし、ゆっくりと股間に目を向ける。

チンクとウエンディも近藤の股間に目を向ける。

3人は赤くなりながらも、近藤の股間をじっくりと見る。

チンク

「コレが…」

ウエンディ

「男の証っすか…」

マリエル

「コレは…。コレはゴリラよー！」

チンク／ウエンディ

「えっ？」
と首を傾げる。

マリエル

「これはゴリラのおんんよ。触っても、問題ないわ」
チンクとウエンディは顔を見合わせ、

チンク/ウエンディ

「その通りだ(っす)」

3人はゴリラ(近藤)のおんんに触れる。

チンク

「柔らかい」

ウエンディ

「これ、長いっす」

マリエル

「見事だわ」

チンク

「少し、匂うな…」

ウエンディ

「引っ張ったら伸びるっす」

マリエル

「あっ、おっきくなっただわ」

山崎に膝枕をするディエチ。

3人の様子を見ていたノーヴェは赤くなる。

すると、

山崎

「う、うーん…」

山崎が目覚め始める。

ディエチ

「あつ、気がつきましたか？」

山崎は目を開け、ディエチと目が合う

次の瞬間、

ディエチノ山崎

「あつ…」

二人は赤くなる。

ディエチと山崎は互いに一目惚れする。

ノーヴェは二人の間に甘い雰囲気を感じて察する。

あつちはいやらしい雰囲気。

こっちは甘い雰囲気。

両方の雰囲気に慣れずにノーヴェはイラつく。

ノーヴェ

「お前ら、いい加減にしゃがれー」

と怒鳴るのだった。

聖王教会本部

ここは、聖王教会。

カリム・グラシアが治めている。

そこへ、星海坊主がやって来る。

シスターシャツハの計らいでやって来る。

すると、一人の執事が星海坊主の元に来る。

その執事は、オットー。

元ナンバーズである。ちなみに女性である。

オットー

「お待ちしてました。あなたが星海坊主さんですね」
星海坊主

「聖王教会の人？」

オットー

「はい、オットーと申します。騎士カリムがお待ちです」

オットーは星海坊主を案内する。

カリムの部屋

デスクには聖王教会騎士カリム・グラシアが座り。
その横には、元ナンバーズでシスターのディードもいる。

星海坊主はソファアに座る。

オットーは星海坊主の後ろに立つ。

カリム

「初めまして。騎士カリム・グラシアと申します」

ディード

「シスターディードと申します」

星海坊主

「星海坊主です。シスターセインからお話は聞いています。娘の神
樂がお世話になりました」

と頭を下げると、カツラが落ちる。

辺りの雰囲気が変わってしまう。

オットー

(どろしよづ、ディード…)

ディード

(こーゆう人は刺激しちや駄目よ。特に頭のことを)
と念話で話す。

すると、

カリム

「星海坊主さん、カツラを付けなくてもいいですよ」

オットー、デイド、そして星海坊主は驚く。

デイド

「騎士カリム！？。何を…」

星海坊主は動揺する。

カリム

「星海坊主さん。恥ずかしいから、意地を守りたいから付けている
のですね？。」

星海坊主は頷く。

カリム

「しかし、そのために神経を使いすぎますと、ますます頭によくあ
りませんよ」

星海坊主は気づく。

カリム

「ここは聖王教会は、聖王が見守っています。ここに居る間ぐらい、
頭のことを気になさらずに気楽にしてください。あなた自身や頭の
ために…」
と微笑む。

その時、星海坊主はカリムのことを本当の女神に見えた。

落ちたカツラを懐にしまう。

星海坊主

「ありがとうございます。お言葉通り、ここに居る間だけ、頭のことを忘れます」

いつの間にか、涙を流す。

カリム

「そうですね。あつ、ランスター執務官の件はあとから。今は長旅の疲れを癒して下さい」

星海坊主

「わかりました」

カリム

「オットー、お部屋に案内してあげて。その後、星海坊主さんにお茶とお菓子を」

オットー

「かしこまりました。では、星海坊主さん」

星海坊主

「うん」

オットーは星海坊主を部屋に案内する。

デイド

「素晴らしかったです。騎士カリム」

カリムはリラックスする。

デイド

「優しいお言葉で相手を諭せるとは凄いです」

カリム

「だって、あんな頭なのに、気を遣うのはもったいないもん」

デイド

「えっ……」

カリム

「こっちは聖王教会と管理局の仕事でも気を遣っているのに、一人為にまた気を遣うのはもったいないわ」

デイド

「は、はあ……」

カリム

「本来なら、色々とサービスして、金を巻き上げたいところだけど。あの銀時さんの知り合いだから、勘弁するわ」とお茶を飲む。

デイドはカリムの腹黒い部分を恐れる。

ここで忘れてはならない。

このカリム・グラシアはあの腹黒い八神はやての姉代わりだと言うこと。

聖王教会内の廊下

オットーに案内される星海坊主は、

星海坊主

「あの人、良い人だったな」と
と呟くのだった。

次回に続く。

ステージ09 アニメ化する際、キャラクターの設定が原作とは違う時もある。

カリムファンとはやてファンの皆さん、イメージを壊す内容を書いてしまって、ごめんなさい。

しかし、これは悪魔でこの物語での話です。原作に影響ありません。どうかご了承下さい。

ステージ10 家族の対面に水をさすな。(前書き)

遂にステージ10までいけました。

さて、近藤と山崎はどんな戦い方をするのだろうか…。

読んで下さい。

ステージ10 家族の対面に水をさすな。

夜

海上保護施設内ロビー

仕事をオフしたゲンヤ・ナガジマがお土産を持って、4姉妹を待っていた。

ウエンディ

「ワイ、パパリン」

ウエンディはゲンヤに抱き付く。

ゲンヤ

「おっと、コラ、ウエンディ……」

あとの3人のチンク、ディエチ、ノーヴェが来る。

チンク

「すまないな、父上。ウエンディがはしゃいでしまって」

ゲンヤ

「おおっ、チンク」

ウエンディ

「お土産、なんすか？」

ゲンヤ

「食いもんだよ。つーか、パパリンは辞めるよ。恥ずかしい」

ウエンディ

「エエーッ」

デイエチ

「お父さん」

ゲンヤ

「おおっ、デイエチ。すまんがこれを持ってくれ。ウエンディが重い」

デイエチ

「はい」

ゲンヤの持ってきたお土産を持つ。

デイエチ

「うわーっ、ケーキだ」

チンク

「ありがとう父上。スイーツは大好きだ」

山崎

「自分もです」

山崎はいつの間にか4姉妹の中にいた。

ゲンヤ

「そうか……。って、誰だお前？」

と山崎に気づく。

山崎

「アッ、どうも。真選組の監察役の山崎退です」と頭を下げる。

ゲンヤ

「真選組？。確か…」

チンク

「クリスとの戦いでいっしょに戦ってくれたあの真選組だ。この者は初めての者だが」

ゲンヤ

「いや、知っている。その真選組の奴が何でここにいるだ？」

すると、

マリエル

「ナガジマ三佐」

とあとからやって来る。

ゲンヤ

「マリエル技術官。コイツは…」

マリエル

「すみません、言うの忘れていました。その人、江戸の世界の人で、あと一人居るんで…」

ゲンヤ

「もう一人？」

ウエンディ

「ゴリちんっす」

ゲンヤ

「ゴリちん？」

ゴリちんとは、近藤 勲のことである。

命名したのは、ウエンディ。

命名の理由は、『ゴリラ』と『おん んにちなんでらしい』。

山崎

「うちの局長のことなんです」

ゲンヤ

「ゴリ……。ああっ、あのゴリラ顔の近藤勲さんか？」

マリエル

「はい。今、男子用のお風呂に入ってます」

ゲンヤ

「何で、また真選組の近藤さんと監察役とやらがここに居るんだ？」

山崎

「えっと……。話せば、長いことながら……」

その時、ロビーの壁が爆発する。

マリエル

「キヤー!?!」

ゲンヤ

「何だ!?!」

全員驚き、混乱する。

煙がやみ、破壊された壁から、マリアージュ6体が現れる。

ノーヴェ

「な、何だてめーらは!?!」

マリアージュ6体はノーヴェを無視して、山崎に目を向ける。

マリアージュ1

「例のオマケ発見」

山崎

「オマケ？」

マリアージュ2

「近藤勲はどこだ？」

ノーヴェ

「オイ、無視すんな！」

マリアージュ3

「他の奴らはどうする？」

マリアージュ4

「邪魔者、目撃者も抹殺及び持ち帰る。キュラス様の新たな命だ」

チンク

「キュラス？」

マリアージュ達は片腕をマシンガンに変化させる。

山崎達は驚く。

マリアージュ達は山崎達に向ける。

マリアージュ1

「死ね」

その時、マリアージュ達の目の前に消火器が飛んで来る。
消火器は開き、煙を吐き出す。

マリアージュ達

「グワー！？」

マリアージュ達は怯む。

次の瞬間、

タオル一枚でお尻ら辺を隠し、刀を持った近藤が煙に紛れ、

近藤

「どりゃあー！」

とマリアージュ1を横から斬り倒す。

他のマリアージュ達は驚く。

近藤はさらにマリアージュ2を脇腹を斬り倒す。

マリアージュ3

「くっ！」

とマシンガンの腕でガードしようとする。

近藤

「ハアッ！」

とマシンガンごとマリアージュ3を真っ二つに斬り倒す。

他のマリアージュ達はさらに驚く。

チンク達も驚く。

近藤

「爆発があつて来てみれば、随分物騒な嬢さん達だな…。よく見れば、人間じゃなさそうだし、殺気が満ちているぜ」
と刀を構える。

マリアージユ達も両腕を武器に変化させる。

ウエンディ

「ゴ、ゴリちん…」

チンク

「昼間とは、まったく別人だ…」

数時間前

海上保護施設内の庭

マリエル、チンク、ウエンディは全裸の近藤のおんんをゴリラのおんんと称して、弄くりまくっていた。

ノーヴェは手で隠す。と思いきや、指の間を開き、しっかりと見る。そして、ディエチと山崎は

山崎

「き、君は？」

ディエチ

「デ、ディエチです」

山崎

「ぼ、僕は山崎退です」

ディエチ

「山崎退さんですか…」

山崎

「デイエチさんですか…」

二人の間に甘い雰囲気を漂わせる。

すると、

近藤

「う、うーん…」

と近藤が目覚める。

マリエル

「アッ、いけない!」

ウエンディ

「ゴリラが目覚めるっす!」

チンク

「いや、近藤殿だ」

近藤は起き上がり、自分が裸であり、しかも女性達に見られてるとに気づく。

近藤

「イヤーーーーーッ」

大慌てで股間を隠す。

マリエル、チンク、ウエンディは驚く。

近藤

「ここ、どこ!?。てゆーか、何で俺裸なの!?!」

近藤はチンクとウエンディに気づく。

近藤

「あれ、君らは確か…。ウエンディちゃんとチ
「ちゃん？」
チンク

「チンクだ！。それに、今のお主に言われたくない！」

近藤

「アツ、そうだ！。服はどこ？。服プリーズ」
とセクシーポーズで服を求める。

ノーヴェ

「気持ち悪いわー！」

近藤

「ハウツ」

ノーヴェは近藤に跳び蹴りを喰らわせる。

近藤はぶっ飛び、気絶する。

その際、股間をまた見せてしまう。

ノーヴェ

「い、いやっ！」

と目を手で隠す。

その時のノーヴェは女の子ぽかった。

そんな騒ぎの中でも、山崎とディエチは甘い雰囲気をも崩さなかった。

現在

海上保護施設内ロビー

チンクは昼間の近藤と今の近藤を比べる。
どう見てもやはり全然違うと感じる。

近藤とマリアージュ達は睨み合う。

山崎はミントンラケットを構える。

ゲンヤ

「何で、ミントンラケットを構えるだよ」

マリアージュの一人が片腕をマシンガンに変化させ、山崎に向ける。

マリアージュ4

「貴様から始末しよう」

山崎

「させるか」

マリアージュ4はマシンガンを発砲する。

山崎は素早くよける。

ディエチ

「山崎さん！」

山崎

「とりゃあー！」

球をマリアージュ4に向けて打つ。

マリアージュ4は球を片手で受け止める。

マリアージュ4

「これが何だという……」

次の瞬間、球が光り出す。

マリアージュ達

「うわーっ」

光により、目をくらます。

山崎が打った球は目くらまし用の特殊な球だった。

山崎

「今です、局長！」

近藤

「おう！」

近藤は素早く残りのマリアージュ達を斬り倒していく。

マリアージュ達6体は倒される。

すると、マリアージュ達の死体が黒い液体に変化する。

近藤

「な、何だ!？」

全員は驚く。

デイエチは両目の機能で黒い液体を解析し、変化に気づく。

デイエチ

「近藤さん、離れて下さい！。早く！」

近藤は慌てながら、すぐに黒い液体のそばから離れる。

次の瞬間、黒い液体が爆発する。

近藤

「うわーっ！」

近藤は爆風で吹っ飛ぶ。

その時、タオルが取れる。

山崎

「局長！？」

山崎は近藤に駆け寄る。

近藤

「だ、大丈夫だ……」

山崎

「いや、大丈夫じゃないですよ。下の方が」

近藤

「えっ？」

近藤はまたも全裸をさらけ出していた。

そばにいた女性陣は赤くなり、
女性陣

「イヤーーーーッ、変態」
と思わず、近藤を攻撃してしまう。

近藤

「ああああああ……」

哀れな近藤の叫びが外まで響く。

その後、管理局の局員が駆けつけ、現場検証が始まった。

ゲンヤは近藤と山崎に長谷川泰三の話とティアナが扱っているマリ
アージュ事件とをする。

近藤と山崎も江戸で起きている雷事件とここに来た経緯を話す。

二人は雷に打たれた長谷川が雷事件と関わりがあると確信し会うこ
と決意するのだった。

同じ頃、ミッドチルダ都市でも、マリアージュ事件が起きていた。

次回に続く。

ステージ10 家族の対面に水をさすな。(後書き)

いかがでしたか。今回の戦闘表現もぜひ評価して下さい。

質問、キャラクターの応援もお待ちしています。

ステージ11 人物の存在によって、物語の進む方向が変わる。(前書き)

今回、スバルが久しぶりに登場します。

さらにあの人物も初登場します。

どうぞ、読んでください。

ステージ11 人物の存在によって、物語の進む方向が変わる。

長谷川がやって来る前の日

ミッドチルダ都市の中央公園の噴水広場

噴水広場にたくさんの親子やカップルがいた。皆、とても楽しそうだった。

しかし、噴水の縁に座っている人物を除いて…。

その人物は小さい子供で、夏にもかかわらずフードを被っていた。

周りは不審に思うが、あまり関わろしない。

フードの子供はとても暑かった。

そりゃあそうだ。夏にフードを被れば、暑いに決まっている。

すると、フードの子供と同じフードを着て、片手に麦わら帽子。もう片手に槍を持った大男が噴水広場に現れる。

周りは驚く。しかし、大男は気にせず、フードの子供のところまで歩く。

フードの大男はフードの子供のフード取る。

その子供は、金髪の長く、おとなしそうな少女だった。

？

「ゼスト…」

大男はゼストと呼ばれた。

ゼスト

「暑いか？、イクス」

少女はイクスと呼ばれる。

イクス

「平気です…」

すると、ゼストは持っていた麦わら帽子をイクスに被せる。

ゼスト

「流石にフードはきつい。せめて、帽子ぐらいは被せよう」

イクスは戸惑うが、

イクス

「ありがとう。ゼスト」

と笑顔でお礼を言う。

ゼストも少し笑う。

ゼストはイクスの隣に座る。

イクスは浮かない顔をする。

ゼスト

「どうした？」

イクス

「テレビでマリアージュ事件のことを観ました」

ゼストも浮かない顔になる。

イクス

「マリアージュ達は…。キュラスは私のことを探していますね…」

ゼスト

「ああ、しつこい男だ…」

イクス

「このまま逃げ続ければ、罪の無い人々がまた…」

ゼストは黙り込む。

イクス

「私のせいです。私が逃げなければ、私が生きているから…。私が死ぬ…」

すると、ゼストはイクスの口を塞ぐ。

ゼスト

「（厳しい表情で）…俺の前で、それを言うな。約束だろ…」

イクス

「ごめんなさい…」

ゼスト

「お前がキュラスの手に渡れば、それこそ犠牲者が増える。わかる

な？」

イクスは頷く。

ゼスト

「俺が必ず、キュラスの陰謀を止める。それも約束だろ？」
イクス

「ごめんなさい……」

ゼストとイクスは移動する。

イクス

「アギトは？」

ゼスト

「食料確保に行った」

イクス

「あまり、ムチャをしなればいいけど……」

ゼスト

「ヤバくなったら必ず逃げると、一応念押しはしたが……」
と苦笑する。

イクス

「逃げる以外に方法は無いのでしょうか……」

ゼスト

「今は、それしか無い……。辛いが、耐えてくれ」

ゼストはイクスの手を強く握る。

二人は人混みに紛れながら、どこかに行ってしまうのだった。

その数日後。

ミッドチルダ都市 中心部

活気が溢れ、たくさんの人混みが溢れていた。

そこにエリオとキャロ、そして土方もいた。

土方はある目的でミッドチルダにやってくる。

エリオとキャロは道案内兼身辺警護のために、同行していた。

土方

「前に来たときはあんまり見てなかったが、改めて見ると、でかいな……」

キャロ

「はい、ミッドは相変わらず人が多いです」

エリオ

「スバルさんとアルトさんが迎えに来てはまずなんですが……」

すると、車のクラクションがなる。

スバル

「エリオ、キャロ、土方さん」

アルト

「こっち、こっちー！」

スバルとアルトだった。

キャラとエリオと土方は気づく。

キャラ

「こんにちわ〜」

エリオ

「お久しぶりです!」

スバル

「お久しぶり…って、ええ!?!」

アルト

「ちょ!何!?!。二人ともかなり背伸びた?」

スバルとアルトは、エリオとキャラの身長がかなり伸びていたことに驚く。

そばにいる土方のことを忘れてしまっただけ。

キャラ

「あは、私は普通だと思っですが、エリオ君がかなり…」

エリオ

「えつと…。ちょっとだけ…」

スバル

「いやいやいや、あたしも映像や写真で見ただけ。実際並ぶと、ほ、ほら」

アルト

「スバルと半分違わないね」

土方

「おほん」

スバルとアルトは土方に気づく。

スバル

「あつ、土方さん。お久しぶりです」

アルト

「土方さん、変わらないね……」

土方

「そりゃ、そうだ。俺は3年前の土方だからな」

スバルノアルト

「えっ？」

スバルとアルトは首を傾げる。

土方

「その話は後でゆっくり……。俺はティアナ・ランスターに会いたいが……」

スバル

「すみません。ティアは夜まで仕事なんです。今日もあたしの部屋に泊まる予定なんで。話はそれからでも……」

土方

「そつか……」

煙草を取り出し、吸い始める。

アルト

「土方さんもいつしよにどうですか？」

土方

「俺は遊びに来たわけじゃあ……」

エリオ

「土方…、じゃなくて、トツシー。限定美少女アニメDVDを買いましょう」

エリオの言葉で、土方の人格からトツシーに変わる。

トツシー
土方

「うんうん、いっしょに買いに行こう、エリオ君！」

エリオ

「新しい美少女フィギュアも買いましょう」

トツシー
土方

「もちろんだよ」

トツシー
土方とエリオはすっかりと意気投合する。

スバルとアルトはその様子を見て、啞然する。

スバル

「あれ、本当に土方さん…?」

アルト

「前と全然違うですけど…!」

キャラ

「えつと…。あれ、二重人格なんですよ」

スバルノアルト

「二重人格?」

キャラは土方から二重人格のトツシー誕生の話を聞いていた。

オタクの魂を宿した妖刀・村麻紗の影響により、オタク人格・トツシーが誕生する。以後、トツシーのオタクによりヘタレのレットルが貼られるようになったと。

スバルとアルトは最初は信じられなかったが、あの坂田銀時の世界の住人だから、有り得ないことはないので、信じる。しかし、今の土方トツシーに幻滅する。

アルトはなんとか、話題を変えようと考える。

アルト

「そ、そういえば。ゾーマは…?」
キャラ

「あつ、ゾーマ君は…」

ミッドチルダ都市にくる数時間前

辺境世界の自然保護隊本部

自然保護隊の隊員達はマリアージュ3体が襲撃されたあと処理が行われていた。

土方はミッドチルダに行く準備を進めていた。
ティアナがマリアージュ事件を扱っているのを知り、江戸で起きて

いる雷事件、こちらにやって来た経緯、戦ったマリアージュ3体のことを話すつもりだった。

これが土方の目的だった。

ミラはエリオとキャラロに休日をかねた土方の同行（道案内兼身辺警護）を命じる。

二人は喜んで引き受ける。

そしてゾーマは…。

ゾーマ

「何で、俺が留守番だよ？」

ゾーマはミラに抗議する。

ゾーマはキャラロと行きたがっていた。

ミラ

「あなたには、襲撃された本部の修復をお願いします」

ゾーマ

「さっき破壊された（自分の破壊した）森の処理を終わらせたばかりだぜ。帰ってみると、本部が襲撃されていて驚いてるのに。何でいきなり俺が修復作業をしなきゃならないだ？」

ミラ

「だって、人手不足なんですもの」

ゾーマ

「キャラロりんはともかく、なんで小僧もいっしょなんだよ？。それ

に何でニコチン野郎も。っていつか、なんでこの世界にいるんだ？」
土方

「誰がニコチンだ、コラ！」

ミラ

「エリオもよく働いているからよ。あの二人には前々から休みを与
えるつもりだったの」

ゾーマ

「俺だって、働いてるぞ！」

ミラ

「確かにあなたは働いたけど、利益どころか損害を生み出している
じゃない。そんなあなたに休みを与えられると思うの？」

ゾーマ

「嫌だ、嫌だ。それでもキャロリンと行きたい」

子供のように駄々をこねる。

ミラは笑顔で指を鳴らす。

ミラ

「駄々をこねないの。可愛くないから」

ゾーマは泣きそうになる。

キャロ

「ミラさん」

キャロはゾーマとミラの所に駆け寄る。

ミラ

「キャラ？」

キャラ

「ミラさん。あのう、ゾーマ君が修復作業を終わらせたら、休みをあげてください」

ゾーマ

「キャラりん…」

キャラ

「確かに失敗は多いですけど、一生懸命なんです。だから、お願いします」

と頭を下げる。

ミラは考える。

ミラ

「わかりました。少し厳し過ぎたわ。ゾーマ、作業が終わったら、すぐにオフよ」
とウインク。

ゾーマ

「あ、ありがとうございます」
と頭を下げる。

キャラ

「良かったね、ゾーマ君」

ゾーマ

「キャラりん」

ゾーマはキャラを抱きかかえて回りまぐる。

土方はそんな様子を見て、複雑な気持ちになる。

エリオは現実逃避するように美少女フィギュアを取り出し、ほっぺですりすりするのだった。

現在

スバル・アルトは土方と同じ気持ちになる。

キャラ

「そして、別れ際にキス…」

スバル／アルト

「言わなくてもいい、言わなくてもいい！」
と止める。

二人はキャラとゾーマのキスを想像しなくなかったからだ。

アルトは気を取り直そうとする。

アルト

「そ、それじゃ、どこから行くの？」

土方／エリオ

「美少女フィギュアの買い出しに行くの？」

アルト

「行くか！」

スバルとキャラは苦笑する。

そんなスバル達の様子をある小さな影が見ていた。

？

「ケツ、いいご身分なこと」

そのまま、どこかに飛び立ち去る。

次回へ続く。

ステージ11 人物の存在によって、物語の進む方向が変わる。(後書き)

如何でしたか？。感想をお待ちしています。

感想は、応援だけではなく、アドバイスにもなります。それが元で作者も良い話を作れます。

是非感想を下さい。

次回はどう書こうか迷います。

ステージ12 自分の好みを押し付けない。(前書き)

物語は少しずつ進むが、好みはかなり進むものかもしれない。
今回はそんなお話です。

あと、書き方を変えてみました。

ステージ12 自分の好みを押し付けない。

ミッドチルダ都市 道路

ティアナは車で捜査活動を行う。

運転しながら、ルネッサと通信する。

ルネッサ

「昨日深夜の服飾店強盗、やはりマリアージュで間違いありませんね」

ティアナ

「うん、此処に来て、何で服なんか欲しかったのかしら？」

ルネッサ

「変装目的かと思われませんが。どこかに潜入でもするつもりでしょうか？」

ティアナ

「かもね。こっちの方は、襲われそうな人と場所のリストを追加したわ。警告と巡回の指示らしい。お願いね」

ルネッサ

「はい」

ティアナ

「古代ベルカ系遺跡研究機関に、遺跡関連の骨董品ブローカー。めぼしいところだけでも、結構な数だけど」

ルネッサ

「警邏職員に回って貰います。危険度の高そうなところは自分やギンガ捜査官を」

ティアナ

「うん、お願い」

ルネッサ

「それでは、また夜に合流を」

ティアナ

「うん、お願いね」

通信を切る。

すると、雨が降り出す。

ティアナ

「また雨が…」

ルネッサの現在の場所

ルネッサは雨を見て、

ルネッサ「急がないといけないな」

と呟く。

とある男の部屋

男が謎の人物と通信していた。

男

「だから、さっき局員が来たんだ。俺は例の連続殺人鬼に狙われて
いるだってよ！」

？

「落ち着け。まだそうと決まった訳ではない」

男

「いや、違うね。こっちも命がかかっているからな、調べたんだよ」

？

「どーゆう意味だ？」

男

「あの事件で殺された連中。全員あなたに仕事を依頼を受けた奴じやねえか」

？

「……」

男

「凶星かよ!?!。おい、そうなのか!?!」

？

「古代ベルカ産式の裏で扱える研究者やブローカーはそう多くはない。単なる偶然の一致だ」

男

「そうかもしれねえけどよ……」

？

「私の依頼についても、引き続き継続してもらいたい。各地の同士も動いている。今更降りたいじゃ、すまないだよ」

男

「断る!。悪いが、俺はしばらく隠れるぜ。殺し屋風情じゃあ、どう頑張っても来れない場所にな」

？

「そっか……」

男

「犯人がと捕まって、ソイツとあんたが無関係とわかったら、頼まれごとを再開してやるよ。昔、あなたには世話になったからな。トレディアさんよ」

謎の人物はトレディアと呼ばれる。

トレディア

「また連絡する」

通信を切る。

男は悩む。

男

「そうだ！、あのじいさんに頼んでみよう。ドクターキュラスに」

男は通信を繋げる。

とあるレストラン

キュラスが変装して、食事をしていた。

するとキュラスの小型通信機に通信が入る。

キュラスは回線を開く

男

「ドクターキュラス」

キュラス

「これはこれはお久しぶりですね」

男

「実は、あんたに相談したいことが…」

キュラス

「わかっています。例の殺人鬼のことですね？」

男

「知っているのか！？。話が早い。俺は急いで隠れたいんだ！」

キュラス

「わかっています。実は良い情報があります。ベルウィードホテルに管理局の執務官が保護した時空放流者が保護されているんです」

男

「時空放流者？」

キュラス

「どうやらその時空放流者は管理局にゆかりのある者で、手厚く保護されています。その者の泊まっている部屋なら、安全だと思いますよ」

男

「なるほど、ソイツの隣なら安全だ！。恩に着るぜ」

キュラス

「いいいえ…。あなたや他の研究者やブローカーさん達にはお世話になりましたから」

通信を切る。

キュラスは笑う。

キュラス

「フツ、バカな奴らめ。その殺人鬼こそが、ワシが改良したマリアージュだと知らずに。バカと言えば、あやつもだな」

食事を再開する。

すると、来店者が現れる。

スバル

「ここだよ」

キャロ

「うわー、綺麗ですね」

アルト

「ここが行きつけ？」

エリオ

「どんな料理が出ます？」

スバル

「見てのお楽しみ」

キュラスは気づく。

キュラス

「あれは…。スバル・ナガジマ！。エリオ・モンディアルにキャロ・ル・ルシエ！。あの機動六課のフォワードチームではないか！？」

すると、土方も来る。

キュラス

「土方十四郎まで！？」

女性店員がスバル達のところに駆け寄る。

女性店員

「あら、スバルさん。いらっしやいませ」
スバル

「今日はいっぱいですけど、大丈夫ですか？」

女性店員

「えーっと…」

店内を見渡す。

女性店員

「今日はお客さんが多いわね…」

すると、キュラスの座って居るところが空いていることに気づく。

女性店員はキュラスのところに行く。

女性店員

「すみません。5人ほど相席よろしいでしょうか？」

キュラスは焦る。

キュラス

（まずいの…。断ったほうが良いか…。いや、そうじゃあ！）

ポケットから瓶を取り出す。

キュラス

（スキを見て、この毒薬を奴らの料理に入れて抹殺しよう。奴らの死体なら、マリアージュ改4体分できるな。あの平凡な小娘は除い

て)

キュラスはそう考える。

ちなみに、平凡な小娘はアルトのこと。

キュラス

「構いませんよ」

女性店員

「ありがとうございます」

女性店員はスバル達のところに駆け寄る。

スバル達は座れることを喜ぶ。

スバル達はキュラスと相席になる。

アルト、エリオ、キャラは向かいの席に座り、スバルと土方は…。

スバル

「すみません」

キュラスの右側に座り、

土方

「迷惑かける」

キュラスの左側に座る。

キュラス

「いえいえ、食事は皆で食べるのが一番美味しいですから」

スバル

「良いこと言いますね。お礼に私の特別メニューを奢ります」

キュラス

「あ、ああどうも…」

スバル

「すみません。『スバルギャラシクー』をお願いします」

女性店員

「はい」

キュラス

（『スバルギャラシクー』？。そんなもんメニューには無いはずだが…）

しばらくして。

女性店員

「お待たせしました。『スバルギャラシクー』です」

女性店員が持って来たのは…。

各種のアイスクリームが山盛り積まれた丼だった。

喜ぶスバル以外は驚愕する。

キュラス

（な、なんじゃあこれは！？。アイスクリームが沢山井に入ってる！？）

キュラスは箸で山盛りアイスクリームの下を見る。

ご飯だった。溶けたクリームがかかったた。

キュラス

（ご飯！？。アイスクリームとご飯と組み合わせるなんて、どーゆー神経してるんだ…）

すると、土方が、

土方

「ちよつと待て、何だそりゃ！？」

スバル

「アイスクリームをたっぷり乗せた『スバルギャラシクー』です。

銀さんの『宇治銀時丼』をヒントに作られました」

土方

「あの野郎のクソマズイのをヒントにか？。小豆より酷いな…」

土方の言葉でスバルはムツとなる。

スバル

「ちよつと、聞き捨てなりませんね」

土方

「事実を言ったまでだ。それより、美味しい物を教えてやるよ。店員さん」

女性店員が来る。

女性店員

「はい、何でしょうか？」

土方

「井いっぱいの飯に、マヨネーズを…」

女性店員

「は、はぁー…」

女性店員は井いっぱいのご飯とマヨネーズを持って来る。

女性店員

「これでよろしいでしょうか…」

土方

「ありがとうな。これで良い」

土方はご飯にマヨネーズをたっぷりかける。

全員驚愕する。

土方

「できたぜ。『土方スペシャル』だ」

土方スペシャルを見た者は、口を酸っぱくする。

キュラス

（うげえ！？。な、なんじゃあれは！？。マヨネーズをあんなにかけて…）

スバル

「どこかスペシャルですか？。ただマヨネーズをかけただけじゃな

「いですか」

土方

「うるせえーな。お前のは、いろんなアイスクリームを乗せただけだろ」

スバル

「いろんなだからこそいいんです。アイスクリームとご飯が合わせられる食感。いろんな味を味わえる。だからギャラシクーなんですよ」

土方

「こっちはマヨネーズとご飯の相性抜群だ。二つの味が一緒になる。だからスペシャルなんだ」

スバルと土方は火花を散らす。

周りは気まずい雰囲気になる。

キュラス

(どつちも最悪じゃ…)

スバルと土方はキュラスに視線を向ける。

スバル

「いろんな味を楽しめる方が楽しいですよね、おじさん」

キュラス

「へっ？」

土方

「合わせた方が美味しいよね、おじさん」

キュラス

「あのう…」

スバルと土方は井を持って、箸で一口摘んでキュラスに突きつける。

スバル／土方

「さあ、味見を！」

スバルと土方の箸がキュラスの口に入る。

キュラス

「ぎゃあああああ…」

しばらくして、

アルト

「本当にすみませんでした！。お詫びにあなたのお代は代わりに払います！」

アルト、エリオ、キャラはキュラスに必死に頭を下げる。

キュラスは二つの未知なる味により、気分を悪くする。

ちなみにスバルと土方の頭にたんこぶを作って、気を失う。

アルトに叩かれたらしい。

キュラス

「そ、そうですか…。お言葉に甘つ、おえ…」
口元を押さえる。

キュラスはさっさと店に出る。

女性店員

「あ、ありがとうございます！」

エリオとキャロは、『スバルギャラシクー』と『土方スペシャル』を唾然として見るのだった。

ベルウィードホテルのとある宿泊部屋

ベッドの上で、まるでダメなおじさん、略して『マダオ』の長谷川泰三が眠っていた。

このホテルが長谷川の泊まっているホテルであり、時空放流者は長谷川のことだった。

続く。

ステージ12 自分の好みを押し付けない。(後書き)

いかがでしたか？。

感想かメッセージに『スバルギャラシクー』と『土方スペシャル』
についての意見が聞きたいです。

ステージ12・5 話はズレてしまうことが多いよね。(前書き)

久しぶりの質問コーナーですので、かなり短いです。

ステージ12・5 話はズレてしまっていることが多いよね。

万事屋『銀ちゃん』内

銀時

「さあー、今回も始まるぜ」

なのは

「質問、応援コーナー」

新八

「ワーツ」

ドンドン パフパフー

なのは

「今回のゲストの方はビッククです」

銀時

「えっ、有名人か？」

すると、ギギッ、バキバキと音がする。

新八

「な、何！。地震！？」

銀時は異変に気づく。

銀時

「て、天井が！？」

新八となのはは天井を見上げる。

なんと天井が剥がれていき、空が見える。
そして、

スペースウーマン

「どうも…」

なのは

「ゲストのスペースウーマンさんです」

新八

「ビッククって、そーゆう意味かい!？」

銀時

「オイ、コラッ!。人ん家の屋根を壊すな!」

スペースウーマン

「心配するな。帰るときに戻す」

新八

「バキバキって、はがしたでしょう!。直せるの!？」

なのは

「それでは気にせず、質問を読みましよう」

銀時

「気にしろよ!。人ん家だと思っで!」

なのは

「赤夜又さんからの質問です。『白夜又鎮魂歌』に出ていた銀時のクローンの黒夜又は出ないのですか?」

スペースウーマン

「こんな男のクローンがいるのか?」

銀時

「んだと、テメエー…」

新八

「まあーまあー。それより、質問の答え…」

銀時

「それよりだと!?!。婚期を逃した女に言われたんだぞ」
スペーススウーマン
「婚期は言うな!」

銀時とスペーススウーマンは睨み合う。

新八

「二人とも、落ち着いて!。なのはちゃんも止めて…」
なのは

「そうだよね…。銀さんより、私の可愛いクローンの方が絶対人気
出ると思うのに…」

新八

「な、なのはちゃん…。状況をよく見て…」

すると銀時は割り込む。

銀時

「お前のクローンだと!?!。冗談じゃあねーよ。テメエーのクロー
ンがいたら、世界が恐怖に染まるわ」

なのははキレる。

なのは

「それ、どーゆう意味!?!」

銀時

「そのままの意味だよ」

今度はなのはと銀時が睨み合う。

新八

「あ、あのう……。質問は……、作者さんに聞きましょう！。作者さん、黒夜叉さん出ますか」

作者

「それは見てからの楽しみです」

新八

「なるほど」

作者

「それよりも、キャラクターの応援どころか、質問が全然こないのが、心細いです……」

新八

「アアツ、確かに……。感想は来ているんですね」

作者

「質問が無いほど、面白く無いでしょうか……」

新八

「そんなことはありませんよ。『3年StrikerS組銀八先生』は物凄く人気じゃないですか！」

銀時

「この物語はギャグとシリアスと感動があつて……」

なのは

「『3年StrikerS組銀八先生』は私とギャグと青春があるからねえ……」

銀時

「何、自分を入れてるんだよ！。人気があるのは銀八先生のおかげなんだよ！」

なのは

「いいえ、私です！」

銀時

「銀八先生！」

なのは

「私！」

またも睨み合う。

スペースウーマン

「オイ、私を忘れるな！」

銀時／なのは

「黙ってるおばさん！」

スペースウーマンはこの一言でキレる。

スペースウーマン

「貴様ら！、表出る！」

銀時

「良いぜ！」

なのは

「返り討ちなの」

3人は外に出て行く。

新八は唾然する。

新八

「え、えーっと……。読者の皆さん。この物語に関する質問があれば。応援したいキャラクターがいましたら、是非感想に書くの。一言一言書いて下さいね」

江戸の街から、爆発音が響く。

新八

「今回は此処までにします。また会いましょう……」

続く。

ステージ12・5 話はズレてしまうことが多いよね。(後書き)

如何でした？。新八君の言う通り、質問やキャラクターの応援があれば、是非書いて下さい。質問コーナーでお答えします。

ステージ13 事件は会議室で起きているんじゃない。現場で起きているんだ。

今回は長く書けたと思います。

ステージ13 事件は会議室で起きているんじゃない。現場で起きているんだ。

ここはベルウィードホテル 会員制ルーム。

キュラスの情報（罫）を信じた男は、時空放流者（長谷川）が泊まっている部屋に宿泊する。

長谷川の隣の部屋

男は怯えていた。

連続殺人犯マリアージュが来るという不安でいっぱいだった。

男

「だ、大丈夫だ。時空管理局の執務官が保護している奴の隣に泊まっているんだ。下手に近づけるわけねえ……」

男は自分を安心させる。

と同時に時空放流者がどんな奴かも気になる。

男はコップを壁に付けて、耳をすませる。

すると、長谷川の声が聞こえてくる。

長谷川

「ハアーツ、ルネちゃんまだ帰って来ないな……」

長谷川の部屋

長谷川は冷蔵庫を開けて、ビールを取り出す。

ベッドに座り、ビールを飲んで、ため息をつく。

長谷川

「…俺、元の世界に帰れるかな…。帰れなかったら、ここでアルバイトしながら暮らそうかな…。でもな…」

長谷川はこの世界でのアルバイトができるかどうか不安だった。

江戸世界の住人のことを思い浮かべる。
最後にルネッサが出てくる。

長谷川

「ルネちゃんともしかしたら…」

長谷川はルネッサの新妻にした物語を思い浮かべる。

長谷川の夢

長谷川

「帰ったぞ」

ルネッサ

「お帰りなさい」

ルネッサ、新妻姿で登場。

長谷川

「今日も忙しかったぜ…」

ルネッサ

「お風呂にします？。食事にします？。」

長谷川

「食事にして、風呂に入る」

ルネッサ

「わかりました」

ルネッサはすぐに食事の用意をする。

長谷川

「夜は…。相手をしてくれるか？」

ルネッサは赤くなる。

ルネッサ

「はい、わかりました。優しくお願いします」

現実

長谷川

「（枕をルネッサと違って）アアッ、ルネちゃん。優しくって、こっ？。俺、どう手加減しよう…」

長谷川はすっかり妄想で暴走する。

男の部屋

男は妄想する長谷川の一人会話を聞いて、啞然する。

男

「大丈夫か、コイツ…？」

すると、爆発音がする。

廊下

男／長谷川

「なんだ！？」と同時に飛び出す。

すると、男は長谷川を見て、

男

「あつ、トレディア！？」

長谷川

「へっ？」

男は長谷川に掴みかかる。

男

「テメエー、こんなところに居やがったな！。殺人鬼のことを詳し

く……」

長谷川

「だ、誰だよ、あんた！？。トレディアって俺？。俺は長谷川だよ
！。長谷川泰三！」

男

「何！？」

男は長谷川をじっくり見る。

男

「本当だ。よく見れば、老けてない……」

長谷川

「あたり前だよ。コレでも俺はまだ30代だぜ」

男

「わ、わりい。知り合いに似ていたから……」

すると、また爆発音が響く。

長谷川と男は驚く。

長谷川

「な、何が起きてるんだよ！？」

レストラン

スバルとエリオはいっぱい食べる。

スバル

「うーん、これ美味しいね」

エリオ

「はい」

スバル

「せっかくだから、もう一皿いっちゃんおうか？」

エリオ

「はい、いきましよう。すみません、コレ大盛おかわりお願いします
す」

アルト

「イヤー、相変わらずビックリするほどよく食べるね……」
キャロ

「いっぱい食べるから、大きくなるですかね……」

アルト

「キャロは真似しない方がいいと思うけどね……」
土方

「そうだぞ。ただ喰えばいいってもんじゃない」

土方は料理にマヨネーズをたっぷりかける。

キャロとアルトはそれを見て、唾然する。

土方

「すみません、マヨネーズ足りないですけど」
アルトノキャロ

「充分にかかっています！」

すると、アナウンスが流れる。

アナウンス

「お客様にお知らせ致します。南部海岸内ベルウィードホテル上層階にて大規模な火災が発生しております。本ビル内への炎上の危険はありませんが、海岸内のご利用予定の方はご注意ください」

スバル達は驚く。

エリオ

「近くで火事!？」

キャロ

「海岸内のホテルって、黒くっておっきな」

アルト

「高級ホテルだよ。しかも上層階って、会員製じゃなかった？」

スバル

「防災設備は五つ星のはず…。なんでそんなところで?。マツハキヤリバー!」

マツハキヤリバーは状況を表示する。

スバル

「防災はもう出勤してるけど…。火災レベル…4!」

アルト

「大火災じゃん!？」

エリオ

「スバルさん!」

キャロ

「手伝いにいきましょう!」

スバル

「二人とも、ごめんお願い!」

エリオノキャロ

「はい！」

土方

「俺も行くぞう」

スバル

「土方さん！？」

土方

「ガキだけに行かせる訳には行かぬー」

スバル

「ありがとうございます」

アルト

「108も非番出勤かかるかもだから、ごめんあたしも一旦戻るね」

スバル

「うん！」

アルト

「お会計済ませておくから、魔導師チームは先に行きな！」

エリオ

「すみません」

スバル

「ごめん、アルト」

キャラ

「行つて来ます！」

スバル、エリオ、キャラ、土方はレストランを出る。

アルト

「無事片づいたら、また合流しよう」

エリオノキャラ

「はい」

ベルウィードホテル外側

防災隊が既に出動している。

必死で救助活動や消火活動をしていた。

ルネッサは駆けつけるが、炎上するホテルを見て、激しく動揺する。

ルネッサ

「は、長谷川さん!？」

ルネッサはホテルに向かって走ろうとする。

防災隊員

「君、危ないよ!？」

ルネッサ

「長谷川さん、長谷川さんって人は……」

防災隊員

「ちょ、ちよつと待て。今調べる!」

防災隊員はリストを見る。

防災隊員

「長谷川って人は……、今のところいない……」

ルネッサはショックだった。

ルネッサ

「長谷川さんー!」

防災隊員

「だから駄目だつて!?!」

すると、ルネツサの通信機から通信が入る。

ティアナ

「ルネ、火災状況を…」

ルネツサ

「ランスター執務官!。は、長谷川さんが…。長谷川さんが…」

ティアナ

「わかつている。長谷川さんはそのホテルの上層階に泊まっているんでしよう!」

ルネツサ

「まだ、まだ脱出していません!」

ティアナは驚く。

ルネツサ

「早く、早く長谷川さんを救出に!」

ティアナ

「ルネ、落ち着いて状況を報告して」

ルネツサ

「早くしないと、長谷川さんが!」

ティアナ

「いいから、落ち着いて…」

ルネツサ

「落ち着いてなんか…」

ティアナ

「(大声で)こんな時だからこそ、落ち着かなきゃいけないの!」

ルネツサ、そばにいた防災隊員も怯える。

ティアナ

「自分を見失っちゃ駄目。見失えば、ますます状況が悪化させ、大切なものを失うのよ」

ルネツサは黙って聞く。

ティアナ

「お願い、ルネ。長谷川さんの無事を信じて、あなたのやるべきことをやって…」

ルネツサは涙を拭く。

ルネツサ

「すみません、取り乱しました…」

ティアナ

「ルネ、状況を」

ルネツサ

「はい！」

スバル

「遅れてすみません！。スバル・ナガジマ防災士長来ました！」

スバル達が駆けつける。

ルネツサ

「あなたは！」

スバル

「あっ、ティアナの副官の…」

ルネツサ

「ルネツサ・マグナスです」

ティアナ

「スバル！、そこにいるの？」

スバル

「ティアア！」

ティアナ

「スバル、ちょうど良かった！。実は長谷川さんがまだ脱出していないのよ！」

スバル

「長谷川さんが！？」

ティアナ

「スバル、頼める？」

スバル

「もちろん！」

ルネツサはスバルの肩を掴み、

ルネツサ

「スバル防災士長！。どうか、どうか長谷川さんを！」

スバル

「だ、大丈夫です！。必ず助けます！」

ティアナ

「ルネ、スバルにも状況を」

ルネツサ

「はい」

3人のやり取りを見る、土方とエリオとキャロ。

土方

「ティアナ・ランスターへの話はあとからにするか…」

ベルウィードホテル上層階

長谷川と男は迫って来るマリアージュに怯える。

長谷川

「な、何だ、お前!？」

マリアージュ

「長谷川泰三と古代遺跡の盗掘屋ベルガディア」

男はベルガディアと呼ばれた。

ベルガディア

「ひっ!？」

マリアージュ

「あなたはイクスの居場所を知っている」

ベルガディア

「知らねえ!。盗掘やってたのは事実だが、イクスなんて物は知らねえ!」

長谷川

「盗掘!？。んな悪いことをしていたのかよ!？」

マリアージュは長谷川とベルガディアを睨む。

マリアージュ

「なら、ゼストはどこです?」

ベルガディア

「知らねえよ！」

マリアージュ

「知らないなら、死ね！」

ベルガディアはそばにあったナイフを自分の首に突きつける。

ベルガディア

「ウワツ！？」

長谷川

「な、何やってるんだよ！？」

ベルガディア

「か、体が勝手に！？」

長谷川

「何言つてやがる！？。とにかく止める！」

長谷川はベルガディアを止めようとするが、

マリアージュ

「邪魔をするな」

マリアージュは長谷川を殴り飛ばす。

長谷川

「ぐわっ！」

飛ばされた長谷川は壁に激突する。

その際、サングラスが外れる。

マリアージュは長谷川の方を見て、
マリアージュ

「貴様は、私が直接殺す」

片手を刃に変える。

長谷川は恐怖する。

長谷川

(こ、殺す!?!。逃げなきゃ…。でも、体が動かねえ…)

マリアージュが迫る。

マリアージュ

「死ね」

刃を振り上げる。

長谷川

(やられる!)

長谷川は死ぬ。

と思いきや…。

マリアージュは長谷川のサングラスを粉々に壊していた。

長谷川本人は啞然する。

マリアージュ

「長谷川泰三、抹殺完了」

長谷川

「あ、あのう…」

マリアージュは退却する。

残った長谷川は複雑だった。

本体はここにいるのに、サングラス破壊で抹殺完了…。
自分の存在って、サングラスだけなの…。

すると、スバルと土方が到着する。

スバル

「長谷川さん！」

土方

「助けに…」

二人はベルガディアに気付く。

ベルガディア

「助けてくれー！」

スバル

「救護隊です！。あなたを助けにきました！。今、バリアを張ります。マツハキヤリバー！」

マツハキヤリバーはバリアを発動させる。

ベルガディア

「い、嫌だ。助けて…。死にたくね」

土方

「な、何や…」

ベルガディアはナイフを突き刺し、絶命する。

スバルと土方は啞然する。

スバル

「な、なんで自殺を…」

土方

「どうなってやがる…。そつだ、長谷川さんを！」

土方は倒れた長谷川を担ぐ。

長谷川

「あ、あんたは!?!」

土方

「話は後だ。スバル」

スバルはまだ啞然する。

土方

「聞こえてるのか!」

スバルは土方の怒鳴りで正気に戻る。

スバル

「ご、ごめんなさい！」

土方

「…コイツだけでも、連れていくぞ」

スバル

「…はい」

ベルウィードホテル 屋上

マリアージュは立っていた。

マリアージュ

「イクスはいなかった…。抹殺指令を完了しただけでも…」

すると、マリアージュが捕縛される。

マリアージュ

「これは、捕縛魔法？」

ティアナ

「無駄よ。そのロックは力じゃほどけない」

捕縛魔法を放ったのはティアナだった。

マリアージュ

「どうやら、そのようです」

ティアナ

「（クロスミラージュを構え）マリアージュ、連続放火殺人容疑であなたを逮捕する。動けないと思うけど、抵抗するなら撃ちます」

マリアージュ

「なるほど、コレでは私に脱出手段はありませんね…」

ティアナ

「賢明な判断よ。おとなしくすれば、あなたに弁明の機会が…」

マリアージュ

「ですが、マリアージュは余剰の辱めを受けることはありません」

マリアージュの腕が破裂する。

ティアナ

「腕が破裂！？。出血！？。違う、体が液化化…！？」

マリアージュ

「ゼストとイクスの行方は得られませんでした。しかし、長谷川泰三とベルガディアの抹殺完了。私がここで朽ちても、量機達が捜し当てます」

ティアナ

（この色、この匂い…。まさか！？）

マリアージュ

「マリアージュは多軍の兵。死したる蹠踉、大地を焦がす炎となる」

ティアナ

「燃烧液！？」

マリアージュは爆発する。

ルネッサが駆けつける。

ルネッサ

「ランスター執務官！」

ティアナのところに駆け寄る。

ティアナ

「危なかったけど、何とか生き延びたわ…」

ルネツサ

「ご無事で…。今肩を…」

ティアナ

「…大丈夫。ルネ、聞いてくれる？」

ルネツサ

「はい」

ティアナ

「マリアージュなんだけど…。捕まえたと思ったら、自爆しました。死体は黒い液体になって燃えてます。って言ったら、信じる？」

ルネツサ

「…ランスター執務官の言うことでしたら、信じます。ですが、これで連続殺人は止まるのですよね？」

ティアナ

「多分、止まらないわ。もっと大きな事件になる」

ルネツサ

「えっ!？」

ティアナ

「マリアージュは自分を兵隊だって。それに量機いると…」

ルネツサ

「量機…。仲間か、あるいは…」

ティアナ

「マリアージュは他にもいる!。ルネ、急いで調査班を呼んで。マリアージュの残骸を回収。技術局に回す」

ルネツサ

「はい」

ティアナ

「それから、ゼストとイクス、聞いたことある？」

ルネツサ

「いいえ」

ティアナ

「データベースへの詳解。必要とあれば本局のデータと無限書庫も」

ルネツサ

「了解しました」

ルネツサは急いで行くこうとする。

ティアナ

「ルネ」

ルネツサは立ち止まる。

ルネツサ

「はい」

ティアナ

「…長谷川さんの事だけ…」

ルネツサ

「長谷川さんは無事です。スバル・ナガジマ防災士長と民間の方が救ってくれました」

ティアナ

「えっ!？」

ベルウィードホテルの外

ティアナ

「サングラスの破壊で抹殺されたことになって、助かった!？」

ティアナは治療中の長谷川の話聞いて、驚愕する。

長谷川

「自分でも驚いてるよ。俺の存在って、サングラスだけなんだな
って、痛感してるから……」

ティアナ

「確かに痛感したくなりますね……」

長谷川

「別にいいよ。命助かったんだから……」

ティアナ

「目が笑ってませんよ……」

すると、土方がティアナに話し掛ける。

土方

「ティアナ・ランスター」

ティアナ

「土方さん。民間の方は土方さんだったんですね」

土方

「そつだ。それよりも、話したいことが山ほどあるが、良いか？」

ティアナ

「はい」

土方は自分がやって来た経緯をティアナに話すのだった。

そして、ルネッサは長谷川の無事な姿を見て安心し、雨を見つめ、
ルネッサ

(…父さん)

と心の中で呟くのだった。

次回に続く。

ステージ13 事件は会議室で起きているんじゃない。現場で起きているんだ。

次回は、スバルが激闘します。

ステージ14 激しく闘うと書いて、激闘と言う。(前書き)

遂にキュラスの奥の手のアレが登場！。

そして、ティアナに続いてスバルがピンチに！？。

ステージ14 激しく闘うと書いて、激闘と言う。

ミッドチルダ都市 路上

スバルはゆっくり歩いて帰宅途中。

エリオとキヤロは先に帰宅して、

土方はティアナとマリアージュについての話をするため、現場に残る。

長谷川はルネッサに付き添ってもらいながら、病院に運ばれる。

スバル

「はあー。あー、11時回っちゃた。エリオ達もう寝ちゃったかな……。メールしとこ。マツハキヤリバー、テキスト」

マツハキヤリバーはテキストを表示する。

スバル

「えーっと、こっちは現場終了。今から帰ります。初日からドタバタでゴメンね。スバル」

マツハキヤリバーはメールを送る。

スバル

「あんがと、相棒」

スバルは自殺した男、ベルガディアの事を思い出す。

スバル

「助けられなかったね…」

マツハキヤリバーは励ます。

すると、スバルの横に車が止まる。

スバルは気付く。

車を運転していたのは、

ヴォルツ

「おおっ、ナガジマ」

ヴォルツだった。

スバル

「あれ、ヴォルツ指令？。こんな時間にお出かけですか？」

ヴォルツ

「お出かけから帰るところだよ。乗ってきな」

スバル

「ああ、でも…」

ヴォルツ

「ほーれ、さっさと乗れ」

スバル

「うふ、はい」

スバルは車に乗る。

ヴォルツの車の中

しばらくして、ヴォルツが話しかける。

ヴォルツ

「現場の話はだいたい聞いた。被害者、お前の前で自殺したって…」

スバル

「はい、助けてあげられませんでした…」

ヴォルツ
「場所が火災現場とはいえ、今回は殺人事件だからな。お前が落ち込む事でもねえーよ。まあ、それであっさり切り替えが効くほど器用じゃねえだろがな…」

スバル

「…やっぱり、目の前で人の命が消えるのは、…きついです」

ヴォルツ

「そりゃ、きつしさ。いつまで経っても慣れねえし。慣れても良いもんねえ」

スバル

「はい」

ヴォルツ

「お前の姉貴からな、今回の事件で数日間、お前を借りられねえか？。って話が出た」

スバル

「ああっ、はい」

ヴォルツ

「執務官殿の意見じゃなく。ナガジマ姉の独断らしいがな。今回み

たいな事態を防ぐため、ついでに今回みたいな事件になった際、迅速な活動や指揮ができる奴を。だそうだ」

スバル

「指揮は苦手ですが、私はフロントアタッカーですから…」

ヴォルツ

「それしか出来ない突撃バカじゃ、俺みたいになるのがオチだ。良いことねえぞ」

スバル

「指令は私達の誇りですよ。8年前の空港火災の救助活動、伝説なんですから…」

ヴォルツ

「あん時無茶をやったおかげで、現場からリタイヤだ。なっちゃね」

スバル

「でも、指令に助けられたおかげで生きている人達がいることですし…」

ヴォルツ

「助けられなかった奴もいるさ。今でも夢に見る」

スバル

「はい」

しばらく暗くなる。

ヴォルツ

「ああつ、何でこんな話になっっているんだ？。馬鹿二人の反省会なんざ、気持ち悪いだけだぞ」

スバル

「ああつ、えつと、その…」

ヴォルツ

「まあ、アレだ。お前が向こうの鉄火版になった時の貸し出した。姉貴や親友の力になってやれ。ってほう、また死にそうな奴がいたら、今度、きっちり助けてやれ」

スバル
「了解」

すると、

？

「離せー！」

スバルとヴォルツは気付く。

車を止め、スバルは出る。

スバル

「今の叫び…」

空き地

ビルとビルの間にある空き地内。

一人の女性が手のひらサイズの小さな少女を握っていた。

その少女は赤い髪で生意気そうな少女だった。

そして、掴む女性は薄い紫色のロングヘアでマリアージュと似たようなゴーグルを被っていた。

服は全身黒いインナースーツと灰色のジャケットだった。

両腕には、リボルバーナックルに酷似していたデバイスをはめてい

た。

「見つけましたよ、アギト」
?

少女はアギトと呼ばれる。

アギト

「離しやがれ、畜生ー！」

?

「単刀直入に聞きます。ゼスト…。いや、イクスはどこにいるのです？」

アギト

「誰が言うかよ！」

突然、アギトは燃え出す。

しかし、女性は離さない。

アギトは驚く。

?

「私は、今までのマリアージュとは違います。私はマリアージュ改01です」

アギト

「マリアージュ改！？。キュラスの爺、完成させやがったな…」
マリアージュ改01

「ゆっくり聞きましょう。殺さない程度に痛めつけながら」

マリアージュ改01は握った手に力を入れる。

アギト

「ぐわー」

すると、

スバル

「うおー！」

マリアージュ改01

「!?!」

マリアージュ改01は激突するスバル（バリアジャケット着用）に吹き飛ばされる。

その時、アギトを離す。

スバルは瞬時にアギトを受け止める。

スバル

「大丈夫!?!」

アギト

「う、うーん…」

スバル

「良かった、無事で…」

スバルはアギトを見て、

スバル

（この子、リイン曹長と同じ融合デバイス…）

と気付く。

ヴォルツ

「ナガジマ！」

ヴォルツが駆けつける。

スバル

「あつ、指令」

ヴォルツ

「ソイツは…」

スバル

「少し、ケガしています」

ヴォルツ

「大丈夫か？」

アギト

「う、うん。なんとか」

すると、マリアージュ改01が起き上がる。

スバルとヴォルツは驚く。

マリアージュ改01

「その融合デバイスを渡して下さい」

スバルはヴォルツにアギトを手渡す。

そして、マリアージュ改01の方を向き、

スバル

「お断りよ」

とハッキリと断る。

マリアーヂュ改01は手に耳を当てる。

マリアーヂュ改01

「キュラス様、こちらはマリアーヂュ改01です」

どうやら通信をしているらしい。

スバル

「キュラス？。マリアーヂュ！？」

ヴォルツ

「馬鹿な、自爆したはずだぞ！？」

キュラスのアジト

キュラス

「おえー……」

キュラスはトイレで嘔吐する。

原因はスバルの『スバルギャラクシー』と土方の『土方スペシャル』を食べたからだ。

キュラスのコンピューターから、マリアージュ改01の通信が入る。

キュラスは急いで、コンピューターのところに座り、通信回線を開く。

キュラス

「マリアージュ改01か、どうした？」

マリアージュ改01

「アギトを捕らえたと思ったら、思わぬ邪魔が入りました。元機動六課のスバル・ナガジマです。如何いたしましたしょう？」

キュラス

「何、スバル・ナガジマだと!?。うぷっ」

また吐き気に襲われる。

マリアージュ改01

「どうかなさいましたか？」

キュラス

「始末しろ…」

マリアージュ改01

「しかし、アギトの捕獲を優先させるべきかと…」

キュラス

「あとじゃ!。それよりも、スバル・ナガジマを始末しろ!。うぷっ!?!?」

キュラスはトイレに向かう。

空き地

マリアージュ改01は通信を切る。

マリアージュ改01

「スバル・ナガジマ」

スバル

「どうして、あたしの名前を!？」

マリアージュ改01

「知る必要はない。なぜなら、あなたは抹殺されるのですから」

マリアージュ改01は構えを取る。

スバルも構えを取る。

ヴォルツ

「ナガジマ、執務官殿の報告じゃ、マリアージュは人間じゃない!」

スバル

「はい」

すると、アギトが起き上がる。

アギト

「…あいつは、ただのマリアージュじゃない…」

スバル

「えっ?」

アギト

「キュラスの爺が改良した、…戦闘用のマリアージュだ」
スバル

「戦闘用？」

ヴォルツ

「キュラスって、何だ？」

すると、マリアージュ改01が向かってくる。

スバルは瞬時に体勢を変える。

マリアージュ改01の拳を両腕で防ぐ。

スバル

「ヴォルツ指令、ここを離れて！」

ヴォルツ

「ナガジマ！？」

スバル

「早く！」

ヴォルツ

「わかった！」

ヴォルツはアギトを連れて離れる。

マリアージュ改01

「よそ見はいけませんよ」

スバル

「!?!」

マリアージュ改01の回し蹴りがスバルの顔に炸裂。

しかし、その前にスバルは片腕で受け止め、ダメージを最小にする。

スバル

「はあっ！」

隙を付いて、マリアージュ改01の腹部に拳を叩き込む。

と思いきや、マリアージュ改01は片手で受け止める。

二人は瞬時に離れる。

スバル

「てやー！」

スバルとマリアージュ改01は激しく攻防する。

スバルは避けては殴るがマリアージュ改01は避け、マリアージュ改01は蹴りを放つもスバルに受け止められ、スバルも蹴りでやり返すも、マリアージュ改01の拳で受け止められると激しかった。

しかし、スバルは押される。

互角に思われたが、マリアージュ改01の方がスバルより上だった。

スバルはマリアージュ改01の拳を受け流しながら、自分の拳を受け流されながらそう気付く。

スバル

「確かに戦闘用かも！」

マリアージュ改01はスバルから離れ、ビルの影の辺りに立ち止まる。

そして、マリアージュ改01の左腕のリボルバーナックルから、カートリッジが装填される。

スバル

「あれって、リボルバーナックル！？。まさか……」

マリアージュ改01

「これで一気に決着をつける」

スバルは魔法陣を展開させる。

スバル

「ウイングロード」

スバルは長いウイングロードを展開させる。

その場を離れるために、マツハキャリバーでウイングロードを疾走する。

スバル

「なんとか、逃げき……」

マリアージュ改01は魔法陣を展開させる。

マリアージュ改01

「シャドーワープ」

マリアージュ改01は地面に沈む。

スバル

「えっ!？」

スバルは驚く。

すると、スバルの横にあるビルの壁からマリアージュ改01が飛び出てくる。

スバルは気づき、瞬時に避ける。

マリアージュ改01はそのままビルに激突。と思いきや、ビルの壁に沈む。

スバル

「な、何!？。壁に沈んじゃった…」

啞然するスバルの真下からマリアージュ改01が飛び出し、ウイングロードを破壊される。

スバルは落ちる。

しかし、何とか着地する。

マリアージュ改01はそのまま拳を振りかざし、スバルに向かってくる。

スバルは跳んで避ける。

マリアージュ改01はまた地面に沈む。

スバル

「シャドーワープ…。もしかして…」

スバルは気付く。

スバル

「言葉の通りなら…」

壁の向こうから、マリアージュ改01が飛び出す。

スバルは避ける。

マリアージュ改01は急ブレーキで止まり、スバルを見る。

スバル

「シャドーワープって、影のあるところに移動する魔法？。よく見たら、壁や地面に沈んでるじゃなく、影に沈んでいる」

マリアージュ改01

「その通りです。観察力が良いのですね」

マリアージュ改01は装填したりボルバーナックルを構える。

マリアージュ改01

「惑わしは不要。すぐに仕留める」

マリアージュ改01はスバルに向かって行く。

スバルも右腕のリボルバーナックルにカートリッジを装填し、構える。

スバル

(こうなったら)

スバルもマリアージュ改01に向かって行く。

スバル

「デイバインバスター」

マリアージュ改01

「ジエノサイドアタック」

二人の拳はぶつかり合う。

ヴォルツが駆けつける。

ヴォルツ

「ナガジマー！」

この瞬間、爆発が起きる。

ヴォルツ

「ウワッ！」

爆発の勢いで吹き飛んでしまい、壁にぶつかり気絶する。

ヴォルツは目を覚ます。

ヴォルツ

「ナ、ナガジマ！」

ヴォルツは倒れたスバルに駆け寄り、スバルを起こす。

スバルは額から血を流し、右腕の損傷が酷かった。

リボルバーナックルはボロボロだった。

ヴォルツ

「ナガジマ、しっかりしろ！」スバル

「う、うーん…」

ヴォルツ

「気がついたか…」

ヴォルツは安心する。

スバル

「う、腕が…」

ヴォルツ

「待ってる、すぐに救急車を…」

すると、

マリアージュ改01

「まだ生きているのか…」

マリアージュ改01はボロボロだった。
特に左腕が。

ヴォルツは驚く。

マリアージュ改01は右腕で、突然自分の左腕をもぎ取る。

ヴォルツはさらに驚く。

マリアージュ改01

「キュラス様に新しい腕を頼むか…」

マリアージュ改01はスバルとヴォルツに近づく。

ヴォルツ

「く、来るな！」

スバルを抱きかかえ、逃走しようとする。

マリアージュ改01

「逃がしません」

右腕のリボルバーナックルにカートリッジを装填する。

マリアージュ改01

「死ね」

マリアージュ改01は猛スピードでヴォルツを追いかける。

ヴォルツ

「やられる！」

ヴォルツは覚悟する。

次の瞬間、マリアージュ改01の必殺技が炸裂する。

しかし、ヴォルツは無事だった。

それは、

マリアージュ改01

「貴様は……」

マリアージュ改01の拳を受け止めたのは、ゼストだった。

ゼストは槍でマリアージュ改01の必殺技を打ち消した。

マリアージュ改01

「ゼスト……」

マリアージュ改01は引き下がる。

ゼスト

「貴様、ただのマリアージュではないな……」

マリアージュ改01

「あなたがいるということは、イクスも……」

ゼスト

「ここにはいない。いたとしても、お前に渡さぬ」

ゼストとマリアージュ改01は対峙する。

マリアージュ改01は通信をする。

マリアージュ改01

「キュラス様、ゼストを発見しました」

キュラスアジト

キュラス

「遂に見つけたか！？。よし、すぐに捕らえ…」

マリアージュ改01

「ですが、激しく損傷しました。まともに戦えません」

キュラス

「なんじゃと！？、この馬鹿者が！」

マリアージュ改01

「申し訳ありません」

キュラスは考える。

キュラス

「仕方がない、退去じゃ。その前にモニターも開け」

マリアージュ改01

「はい」

空き地

マリアージュ改01はキュラスアジトのモニターを表示させる。

キュラス

「ゼストよ、久しぶりじゃな」

ゼストは表情を険しくする。

ゼスト

「キュラス…」

キュラスはスバルとヴォルツを見る。

ヴォルツ

「あいつがキュラス…」

キュラス

「ゼストよ。コレがマリアージュ改01だ」

ゼスト

「なんだと!？」

キュラス

「まだ他にも完成させとるぞ。その小娘、スバル・ナガジマなんか
一捻りじゃ」

ゼストはナガジマに反応して、スバルを見る。

ゼスト

「ナガジマ!?!。まさか…」

キュラス

「あと何人、犠牲になるかのう…」

ゼスト

「貴様…」

キュラス

「今日のところは引いてやろう。せいぜい逃げ回っている。その分、イクスが苦しむがのう。ギャッハッハッハッハッ」

モニターが消え、マリアーージュ改01は跳んで退去する。

ゼストは怒りをこみ上げる。

ヴォルツは何が起きたかわからなかった。

すると、

アギト

「旦那」

アギトがフラフラとゼストのところまで飛んで来る。

ヴォルツ

「お前、勝手に車から出る…」

ゼスト

「アギト!?!」

ゼストはアギトを手に乗せる。

ゼスト

「無事か?」

アギト

「何とか…。あいつらが助けてくれたんだ」

アギトはスバルとヴォルツを指す。

ゼストは二人に近づく。

ゼスト

「連れを助けてくれて…」ヴォルツ

「すまんが、こいつをすぐに病院に」

ゼスト

「そうか、すまん。俺がすぐに連れて行く」

ヴォルツからスバルを抱きかかえ、すぐ飛び出す。

アギトはスバルの胸の辺りに抱きつく。

ヴォルツ

「お、おい!？」

ヴォルツは置いてきぼりにされる。

ミッドチルダ都市の路上

ゼストは全速力で病院まで走り出す。

アギトはスバルを心配する。

するとゼストはスバルの傷を見て、機械部分があることに気付く。

ゼスト

(コイツは、戦闘機人！。やはり、コイツはクイントの…)

急ぎながらも、スバルの事を考える。

こうして、マリアージュ事件は思わぬ展開に進むのだった。

次回に続く。

ステージ14 激しく闘うと書いて、激闘と言う。(後書き)

スバル負傷により、この物語は原作とは違う方向に進む。
果たしてスバルはどうなる!??。

ステージ15 真面目な話に口を挟まない。(前書き)

スバルが激闘してる間ティアナ達は…。

ステージ15 真面目な話に口を挟まない。

前回の話

スバルがマリアージュ改01との激闘の末、重傷を負う。
スバルはゼストに病院まで運んでもらう。

一方の元機動六課のメンバーは……。

スバルの自宅

キャラは調理の真っ最中。

キャラ

「うん、お鍋はもう大丈夫かな……」

鍋の火を消す。

エリオは顔出して、

エリオ

「キャラ。スバルさん、もうすぐ戻るって」

キャラ

「そう……。こっちはもう準備はOKだから、エリオ君もゆっくりしてて」

エリオ

「うん、ありがとう」

エリオはソファーに座る。

キャラは書き物をする。

エリオ

「キャラは執筆の続き？」

キャラ

「今書いてるのは、ただの日記」

エリオ

「ああっ、いつもつけてるもんね」

キャラ

「うん。スバルさんの事とか、ティアさんの事とか色々…」

エリオ

「そう…」

キャラ

「救助隊のお仕事って、今までは漠然と人命救助なんて凄いなと思っただけだったけど…」

エリオ

「うん」

キャラ

「命の現場で働くって事は、それだけ人の死に触れる機会もも多いってことなんだよね…」

エリオ

「そうなるよね…」

キャラ

「スバルさん優しいから。…きっと凄く大変何だろうなって」

エリオ

「うん…」

するとエリオのデバイスから連絡が入る。

エリオ

「スバルさんかな…」

エリオはデバイスを開く。

トッシー
土方

「エリオ君！、録画の準備は出来てる！？」

モニターから土方もといトッシーが現れる。

エリオ

「土方さん！？。じゃなくて、トッシー！？。どうしてデバイスか

ら…
トッシー

土方

「ティアナちゃんのデバイスから連絡してるだよ。それより、美少女アニメの録画…」

突然、トッシーは殴られる。

ティアナ

「緊急の連絡はそれかい！（怒）」

殴ったのはティアナだった。

どうやらトッシーは緊急と言って、ティアナのデバイスを借りたらしい。

エリオとキャラ口は啞然する。

せつかくの真面目なムードが台無しになった。

とある地上部隊の施設

トツシーは気絶する。

ティアナ

「まったく…。トツシーの事はエリオから聞いてはいたけど…。こんな時にも美少女アニメかい…」

すると、ルネツサが現れる。

ルネツサ

「ランスター執務官…!?!」

気絶するトツシーに驚く。

ルネツサ

「あのう、土方さんが…」

ティアナ

「あつ、気にしなくていいから」

ルネツサ

「はあ………」

ティアナ

「それより、長谷川さんは？」

ルネツサ

「病院でぐっすり眠っています」

ティアナ

「そう、良かったわ。ルネはこれから……」

ルネツサ

「勿論同行します。ランスター執務官に」

ティアナ

「えっ。でも長谷川さんは……」

ルネツサ

「サングラス破壊で、暗殺されたことになっています。狙われることは無いでしょう」

ティアナ

「そうね。納得できないけど……」

ルネツサ

「それに、許せません。長谷川さんの暗殺を指示した犯人が……」

ルネツサは強く握り拳を作る。

ティアナ

「…わかったわ」

すると、土方が起きる。

ルネツサ

「土方さん、大丈夫ですか？」

土方

「ああ、問題無い……」

元の人格に戻る。

土方

「俺も参加するわ。無関係じゃねーからな」

ティアナ

「感謝します。これから食堂に行きませんか？。ルネも」

ルネッサ

「はい」

土方

「いいだろう」

3人は食堂に向かう。

土方

「あつ、それから」

ティアナ

「はい？」

突然、土方はティアナの頭を叩く。

ルネッサは驚く。

土方

「トツシーを追い出してくれてありがとうな」

ティアナ

「お礼を言いたいんですか？。怒ってるんですか？」

土方

「両方だ」

食堂

遅い時間にもかかわらず食堂内は盛況だった。

3人は席を着いて、食事を待つ。

ティアナ

「ねえー、ルネ」

ルネツサ

「はい」

ティアナ

「食事待ち中のちょっとした話、くらいで聞いてくれない？」

ルネツサ

「はい」

ティアナ

「気が早いと思うかもなんだけど……。この事件が終わった後もしばらくあたしと組んでやっていくって選択肢とかないかな？」

ルネツサ

「そのう……。光荣です。……光荣なんですが……」

ティアナ

「駄目？」

ルネツサ

「正直のところ、いつまで局員を続けるかもわかりません。故郷に帰るかもしれないし……」

ティアナ

「故郷つて、オルセアの内戦地帯でしょう？。大事な人とかいるの？」

ルネッサ

「人はいません。ただ、故郷ですから…」

ティアナ

「……あたしはミッド生まれだけど、10歳くらいからずっと根無し草をしてたから、故郷つて感覚あまり無いけど……。やっぱり故郷は大切？」

ルネッサ

「……平和な都会に暮らされている方には想像が付きずらいかもしれませんが……。自分の故郷は、信じられないほど貧しくって、一般人の手に入る食料や日用品はろくにないのに……。兵器と弾薬だけは山ほどあります」

ティアナと土方は驚くが黙って聞く。

ルネッサ

「補給問題に、地域や民族の差別。侵略。戦乱の理由に占めた土地です」

ティアナ

「うん…」

ルネッサ

「ただ、物心ついた時から銃と一緒に寝起きして。大人と戦いながら、自分はずっとここで生きていくんだと思ってました。9歳の時に重傷を負って、NGOに救出されるまでは……。助けて頂いたんだという思いはあります。ただそれでも、今こうして平和な世界に過ごしているのは……。まるで夢の中の出来事だと。まだ実感してません」

ティアナ

「この世界は平和なのかな…。火災が起きて、人が殺されて…。ほんの3年前には大規模なテロもあった」
ルネツサ

「J・S事件とクリス・ロードの事件ですね。ですが、それでも」
ティアナ

「うん…」

ルネツサ

「それでもやはり…。自分からすれば、夢のように平和な世界に感じます。食料と友愛がそこら中に溢れて、絶望など見あたりません。ランスター執務官の交流関係の様子など、正直自分は羨ましく思ったりします」

ティアナ

「そう言われちゃうと、ぐうの音も出ない。戦地に比べたら、あたし達は恵まれてるから…」

ルネツサ

「あつ…。し、失礼しました。場をわきまえない発言でした」

ティアナ

「あつ。いいの、ごめん。変なこと聞いた私が悪い」

ルネツサ

「すみません…」

ティアナ

「あまり、深く考えないで。ただ、あたしがルネと一緒にやれたらいいなつて、思ったただだから…」

ルネツサ

「ありがとうございます。身に余る光栄です」

黙っていた土方は口を開く。

土方

「俺の世界でも、攘夷派のテロ活動や悪質な天人によって、混乱に乗じている。その前は戦争だ」

ティアナ驚く。

ルネッサ

「それは長谷川さんから聞きました」

土方

「そんな世界でも、なんとか生きている奴もいれば、守りたいと思っ
ている奴もいる。あの天然パーマーもその一人だ」

ティアナ

「銀さんの事ですね…」

土方

「俺の所属してる真選組はいろんな奴がいる。馬鹿正直な局長。不
真面目な隊長。バトミンをやっている地味な奴。そんな俺らでも治
安を守りたいと思っている。お前達、執務官も同じ気持ちだろう？」

ティアナ

「はい！」

ルネッサは土方のことを、立派な人だなと思う。

土方

「もう止めよう。不幸な生い立ちは語り合うものでも、張り合うも
のでもない。……言うだけでも辛いだだけだ」

ティアナ

「そうですね…」

ルネッサは土方のことを優しい人だなと思う。

食堂の人

「Bランチ3つできましたよ」

ティアナ

「できたみたいよ」

ルネッサ

「行きましょう」

土方

「すみません。マヨネーズも下さい。ボトルごと」

食堂の人

「は、はい？」

ティアナは嫌な予感を感じる。

ルネッサは首を傾げる。

土方は自分の食事にマヨネーズをたっぷりかける。

ティアナとルネッサは口の中を酸っぱくする。

ティアナ

「…土方さん、相変わらずですね」

ルネッサ

「相変わらず!?!。いつもかけているんですか!?!」

土方

「いけないか？」

土方は食する。

ルネッサは土方のことをおかしな味覚の持ち主だと確信する。

また土方のせいで、真面目なシーンが台無しになった。

すると、一人の局員が入り、ティアナに駆け寄る。

局員

「ランスター執務官！」

ティアナ

「どうしたの？」

局員はティアナに耳打ちをする。

ティアナは驚く。

土方

「どうした？」

ティアナ

「マリアージュが海上保護施設に襲撃されたって……」

土方とルネッサは驚く。

ルネッサ

「例の量機ですか？」

ティアナ

「ええ。6体現れたそうよ」

土方

「6体!？」

ティアナ

「詳しいことは歩きながら……」

すると、ティアナのデバイスから通信が入る。

ティアナ

「はい」

ヴォルツ

「俺だ！」

ティアナ

「ヴォルツ司令！。どうしたんですか？」

ヴォルツ

「落ち着いて、よく聞いてくれ……。マリアージュが現れた」

ティアナ

「本当ですか!？」

土方

「いったい何体いるんだよ？」

ヴォルツ

「ただのマリアージュじゃない。戦闘用のマリアージュらしい」

3人は首を傾げる。

ティアナ

「戦闘用？」

ヴォルツ

「ナガジマ妹と戦ったんだ。それで……。ナガジマ妹は重傷を負った」

3人は言葉を失う。

次回に続く。

ステージ15 真面目な話に口を挟まない。(後書き)

スバルの重傷を知ったティアナ達は…。次回をお楽しみに。
感想や質問お待ちしております。

ステージ16 心配だから駆けつけるんだ。(前書き)

スバルの入院を知ったティアナ達。
果たしてスバルは!？。

ステージ16 心配だから駆けつけるんだ。

【聖王病院】

ティアナ、土方、ルネッサが駆けつける。

応急室の前にヴォルツが立つ。

ティアナ

「ヴォルツ司令！」

ヴォルツ

「ランスター執務官……」

走ったので、3人は息切れかかる。

ティアナ

「スバルは!?!」

ヴォルツ

「今、治療中だ。あとから、管理局の技術者も来る」

すると、

マリエル

「お待たせしました」

マリエルとゲンヤ・ナガジマが駆けつける。

マリエルは手術用の服装だった。

マリエル

「すぐにかかります！」

ゲンヤ

「頼む！」

マリエルは応急室に入る。

ヴォルツはゲンヤの前に立つ。

ヴォルツ

「ナガジマ三佐……。すみません！」
と頭を下げる。

ヴォルツ

「俺がついでながら、娘さんを……」
ティアナ

「ヴォルツ司令……」

3人は見守る。

ゲンヤ

「いや、これは君の責任じゃない」

ゲンヤはヴォルツを励ます。

ヴォルツ

「ナガジマ三佐……」

ゲンヤは土方に気付く。

ゲンヤ

「あんたは、真選組の……」

土方

「お久しぶりです」

ゲンヤ

「あんたも此処ミッドチルダに来たのか……」

土方

「あんたも、つて？」

ゲンヤ

「局長の近藤君と監察役の山崎つて奴も此処に来ているんだ」

土方

「なっ!？」

ティアナ

「近藤さんも!？」

ゲンヤは近藤と山崎がやって来たところから、海上保護施設襲撃までを話す。

土方も辺境世界にやって来たところから辺境自然保護隊本部の襲撃までを話す。

ティアナは考える。

すると、応急室のランプが消え、扉が開く。

皆は気付く。

マリエルが出てくる。

ティアナ

「スバルは!?!」

マリエル

「大丈夫。重傷だったけど、命に別状はないわ」

皆は一安心する。

【待合室】

ティアナはソファアに座り込み、
土方は煙草を吸っていると、

近藤

「トシー!」

山崎

「副長!」

土方は立ち上がる。

近藤と山崎が駆けつける。

土方

「近藤さん、山崎」

3人は再会を喜ぶ。

ティアナはそれを見て、微笑む。

近藤はティアナに気付く。

近藤

「嬢ちゃん、久しぶりだな」

ティアナ

「近藤さん、お久しぶりです」

近藤

「とんだ再会になっちまったな……」

ティアナ

「スバルは大丈夫です。命に別状はありません」

近藤

「そうか……」

ティアナは山崎に気付く。

ティアナ

「こちらは？」

近藤

「ああ、こいつは真選組監察役の山崎だ」

山崎

「山崎退です。よろしく」

ティアナ

「ティアナ・ランスターです」

近藤は雷事件とマリアージュ襲撃をティアナに話す。

ティアナもマリアージュのことを話す。

そして、この世界は3年後の世界だということも含めて…。

近藤は頭が混乱する。

近藤

「えっと、俺達はこの世界では3年前の俺達で…。目の前の嬢ちゃんとは3年後の嬢ちゃん？」

山崎

「自分は始めてなので、よくわかりません……」

土方

「エリオとキャロを見れば、わかるかな……」

近藤

「えっ、二人も来てるの？」

【スバルの病室】

スバルはベッドで眠る。

エリオとキャロは看病する。

二人はティアナの通信で駆けつけていたのだ。

近藤と山崎が入ってくる。

近藤

「エリオ君、キャラちゃん」

エリオノキャラ

「近藤さん!？」

近藤

「久しぶりだな……」

近藤はスバルを見て、驚く。

近藤

「スバルの嬢ちゃん……」

エリオとキャラは山崎に気付く。

山崎

「僕は真選組監察役の山崎退です。よろしく」

エリオ

「エリオ・モンディアルです」

キャラ

「キャラ・ル・ルシエです」

お互い握手する。

山崎もスバルを見る。

山崎

「君達のごとは沖田さんから聞いているよ。万事屋の旦那の結婚式
の時は留守番を命じられて、会えなかった。いつか会いたいと思
っていた。けど、こんな形で会っちゃうなんて……」

エリオとキャラは暗くなる。

近藤

「…マリアージュに襲撃されたって聞いた。俺はそのマリアージュ
と戦った」

エリオ

「えっ、近藤さんも!？」

キャラ

「土方さんも戦いました」

近藤

「俺の場合は不意をついて倒したがな……」

山崎

「数は6体でした」

エリオ

「土方さんは3体でした…」近藤

「俺から見れば、スバルの嬢ちゃんなら簡単に倒せると思っただ
が……」

近藤はエリオとキャラをじっくり見る。

近藤

「どうやら、トシの言ってた通りだな。君達は本当に3年後の君達
なんだな」

エリオ

「近藤さんは全然変わってませんね」

キャラ

「つて、3年前の人だから当たり前か……」

すると、近藤はエリオに耳打ちをする。

近藤

「3年後の俺、妙さんと結婚している？」

エリオ

「えっ!?!。えっーと……。すみません、知らないです」

キャロ

「あの結婚式のあと、私達はずっと仕事に明け暮れていましたので

……」

近藤

「そうか……」

山崎

「局長、こんな時に……」

近藤

「あつ、すまん!。確かに不謹慎だった……」

エリオ

「あつ、いえ、気にしてません!」

キャロ

「スバル、大丈夫ですし!」

しばらくすると、ティアナと土方が入ってくる。

ティアナ

「近藤さん、マリアージュ達はアナタと山崎さんの抹殺の指令を受けたんですね?」

近藤

「ああつ」

土方

「俺を襲ったマリアージュ達も俺の抹殺指令だった」

山崎

「キュラス様の命って、言っていました」

土方

「何もんだ？」

ティアナ

「ヴォルツ司令の証言では、頭に角を生やし、額に目があった老人だと……」

山崎

「それって、天人じゃないか!？」

エリオノキャロ

「天人？」

土方

「宇宙から来た奴らだ」

エリオ

「それって、宇宙人のこと？」

キャロ

「銀さんの世界では、天人って呼ばれてるだ」

ティアナ

「イクスにキュラスに、ゼスト……」

近藤

「ゼスト？」

ティアナ

「スバルを病院に運んでくれた人なんだけど……」

土方

「スバルを渡した後、どっかに行きやがった」

ティアナ

「スバルはアギトっていうリン曹長みたいに小さい女の子を助け

るために戦ったのよ。そのアギトもゼストと一緒に……」

近藤

「リインって、あの小さい嬢ちゃんか」

ティアナは頷く。

土方

「主犯はおそらくキュラスだな。イクスとゼストは……」

ティアナ

「それは無限書庫と管理局に問い合わせています」

山崎

「無限書庫？」

ティアナ

「その名の通り、無限に本があります。知りたい情報はそこで入手してるんです」

山崎

「無限に本を……」

近藤

「すげえ……」

土方

「収穫がかなり入ったな」

ティアナ

「はい」

すると、スバルが目を覚ます。

スバル

「此処は……」

皆は気付く。

ティアナ

「スバル！」

エリオノキャロ

「スバルさん！」

土方

「気がついたか」

スバルは周りを見渡す。

そして、近藤と山崎に気付く。

しかし、まだ意識の戻りきっていないスバルは近藤のことを見て、スバル

「あつ、ゴリラだ」

と勘違いする。

近藤

「えっ!?!」

ショックのあまりに目をギョッとする。

周りは笑いをこらえる。

近藤

「いや、ゴリラじゃなくて、俺だよ。近藤勲」
スバル

「えっ、近藤さん!?!。痛ッ…」

エリオ

「スバルさん！」

キャロ

「無理しちゃ駄目ですよ」

スバルを寝かせる。

ティアナ

「スバル、あんたまた無茶をしてもう……」

スバル

「ティア、ごめん……」

ティアナ

「けど、無事で良かった」

スバル

「うん……」

ティアナはスバルに今までの進展を話す。

スバル

「そうか……。あっ、私のデバイスは!？」

ティアナは浮かない顔になる。

ティアナ

「『マツハキヤリバー』は修理終わったけど、『リボルバーナックル』はかなり酷い損傷なの。修理と部品の調達がかなりかかるわ」

「そんな……」

スバルは落ち込む。

土方

「……お前もしばらく休んどけ。ヴォルツ司令もそう言っていた」
スバル

「でも、事件捜査が……」

土方

「今のお前に何ができる？。かえって足手まといだ」

スバルは落ち込む。

近藤

「トシ、そんな言い方するなよ」

山崎

「そうですね」

ティアナ

「いいえ、土方さんの言う通りだわ。今のスバルに捜査の協力をさせる訳にはいかない」

エリオ

「ティアさん！」

スバル

「いいよ。私は休んどく」

キャロ

「スバルさん……」

ティアナと土方は部屋に出ようとする。

ティアナ

「近藤さん。スバルの代わりに協力してくれませんか？」

近藤

「ああつ、かまわないが…」

山崎

「自分も協力します」

4人は出て行く。

エリオ

「スバルさん……」

スバル

「わかってる。ティアや土方さんはあたしのことを思っていているだよ」

キャラ

「スバルさん……」

スバルの表情はどこか寂しそだった。

エリオとキャラはスバルを心配するのだった。

【キュラスアジト】

マリアージュ改01は修理を受ける。

特に左腕が酷かった。

キュラスは苛つきながら、キーボードを動かす。

キュラス

「クソッ、あと一歩のところじゃったのに……」

マリアージュ改01の修理を一時中断させる。

別のコンピューターを動かす。

すると、二つの大型のカプセルが開く。

マリアージュらしき女性が一人ずつ入っていた。

キュラス

「マリアージュ改02、03。お前達にも働いて貰うぞ」

キュラスは不敵に笑いのだった。

続く。

ステージ16 心配だから駆けつけるんだ。(後書き)

キュラスは新たなマリアーージュ改を目覚めさせる!。

ティアナ達はどうなる!？。

入院したスバルはどうする。

ステージ17 捜査の基本は足〓情報収集だ!。(前書き)

遂に明かされるキュラスの素性!。

そして、あの親父も再登場!。

ステージ17 捜査の基本は足「情報収集だ!」

スバルは負傷のため、捜査協力を断念することとなった。

【地上本部の会議室】

この会議室にいるのは執務官ティアナ・ランスター。補佐のルネッサ・マグナス、捜査官ギンガ・ナカジマ。被害者であり協力者のゲンヤ・ナカジマ、ヴォルツ・スターン。そして、真選組の面々がいた。

ティアナ

「それでは、会議を始めます。まず、マリアージュ事件についてです。ルネ」

ルネッサはデバイスでモニターを表示させる。

モニターからマリアージュ事件の被害者の顔写真が現れる。

ルネッサ

「殺害されたのは、古代ベルカ系研究機関に遺跡関連の骨董品ブローカーの人物です。今回ベルウィードホテルで殺されたベルガディア氏は盗掘屋でした。一緒に居た長谷川さんも聞いておりました」

ゲンヤ

「それで長谷川さんは無事か？」

ルネッサ

「はい、負傷はしたものの、無事でした。長谷川さんも暗殺される

はずでしたが、サングラス破壊で暗殺されたことになりました」
ゲンヤ

「なんだそりゃ!?!」

ティアナ

「それは恐らく銀魂世界の人間特有の一つかと…」

ゲンヤは納得した。

銀魂世界の人間なら有り得ないことはないのでは…。

ティアナ

「話を戻します。私は屋上でマリアージュを捕らえましたが、黒い液体になって自爆しました」

土方

「俺の時と同じだな」

土方は立ち上がる。

土方

「俺は辺境世界の自然保護隊本部で保護され、その夜にマリアージュの3体に襲撃された。俺は3体と戦い、生き残った。その後マリアージュ達は、ランスター執務官時と同じように黒い液体になり、自爆した」

土方は座る。

ティアナ

「その報告はあとから聞きました。遅れた理由はあとで検討します」

すると、近藤と山崎は立ち上がる。

山崎

「局長と自分も雷に打たれ、この世界の海上保護施設に来ました。その夜、マリアージユの6体が現れました。そいつらの目的は自分と局長の暗殺でした。6体のマリアージユも倒された後、黒い液体になり、爆発しました」

近藤

「関係があるどうかわからないが、真選組が調べている江戸の雷事件を話していいか？。俺もトシも山崎もその雷に打たれ、この世界にやってきた。そして、あのマリアージユに襲われたんだ」
ティアナ

「わかりました。関係性を認めます。話してください」

山崎

「では、早速。江戸の町に雲のない奇怪現象の雷が発生していました。その雷は必ず人や天人に当たっています。その雷が当たった後、死体どころか焦げ跡すらありません」

近藤

「つまり、江戸で起きたのは雷ではなく、異世界に転送する光線だったと思われる」

全員は驚く。

ギンガ

「それで、今まで打たれた人達は…」

土方

「恐らく、俺や近藤さんと同じようにマリアージユに襲われて……」

山崎

「やられたと……」

土方は頷く。

全員は暗くなる。

ゲンヤ

「マリアージュの狙いは何なんだ？。古代ベルカ系研究機関の関係者なのか、江戸世界の人間なのか？」

ヴォルツ

「いや、マリアージュ達は実行犯。主犯がいる」

ティアナ

「主犯は確か…、キュラス」

星海

「キュラスだと!？」

全員は突然の大声に驚く。

大声の主は、星海坊主だった。

近藤

「星海坊主殿!？」

ティアナ

「誰ですか？」

土方

「宇宙でエイリアンを退治しまくっている星海坊主殿だ」

山崎

「この人も雷に打たれたんです」

星海坊主はティアナに近づく。

星海

「どうも、星海坊主です。君がティアナ・ランスター執務官ですね」
ティアナ

「あつ、はい」

星海

「娘がお世話になったそうで…」

ティアナ

「えっ、娘って…?」

星海

「坂田銀時の万事屋に勤めている神楽は、私の娘です」

ティアナ

「えっ、アナタは神楽さんのお父さん!?!」

土方

「あんたがああのチャイナの親父!?!」

近藤

「そうだったの!?!」

ギンガ

「えっ、お知り合いなのに、知らなかったですか!?!」

山崎

「聞いていませんよ…」

ゲンヤ

「あのう、星海坊主さん。なんだか複雑な事情がありそうだが、それはあとにして、キュラスの話をしてくれないかい?」

星海

「あつ、すまない…」

星海坊主は懐から、一枚の写真を取り出す。

星海

「こいつがキュラスだ」

写真に映されていたのは、頭に二本の角に額に瞳がある男、キュラスだった。

ヴォルツ

「あっ、こいつだ！。間違いない」

星海

「そうか、遂に見つけたぞ」

写真を握り締める。

ティアナ

「キュラスって、何者何ですか!？」

星海坊主は語り始める。

「ここからは星海坊主が語り手になります」

奴の名は、キュラス。

奴の科学力は絶大なものだった。電子工学から遺伝子工学まで幅広く名を知られた皆が羨むほどの天才科学者の天人だ。

キュラス自身も自分の科学力に誇りを持っていた。そして、金や地位などのすべてを手に入れたいという欲望も……。

奴はその目的の為なら手段を選ばない。

自分の器を認めさせる為ならなんだってやる。

例え、違法なエイリアン改造や兵器開発でもな。

奴はその違法エイリアンや兵器を海賊や軍事国家に売り出すために何の罪のない星一つを滅ぼした。

俺はその滅ぼされた星の生き残りに奴の討伐を頼まれ、奴を追い続けた。

しかし奴はいろんな手で逃亡を繰り返した。

そして、俺は奴が地球に逃げ込んだと言う情報を手に入れた。

―元に戻ります―

星海

「奴を探す途中で真選組に出会い、雷に打たれた。気がつけば、この世界の砂漠の街にいたんだ」

星海坊主の話聞いた者達の心境は、

キュラスの非道さに怒りを感じるもの。

信じられないもの。

そして、恐ろしく感じるもの。

などとそれぞれだった。

山崎

「それじゃあ、雷事件の黒幕はキュラスって奴の仕業ですか!？」
ティアナ

「そして、マリアージュ事件の黒幕も……」

星海

「キュラスに違いない……」

ヴォルツ

「あのお、お取り込み中すみません。写真をもう一度見せてくれませんか？」

星海

「ああ、構わんよ」

写真をヴォルツに渡す。

ヴォルツはじっくりと見る。

ヴォルツ

「……変だ」

星海

「何がだ？」

ヴォルツ

「俺が見たキュラスは、髭の生やした爺さんだった。アギトって言う手のひらサイズの嬢ちゃんも爺って言っていた。だが、この写真のキュラスはやけに若いな……」

星海

「それはつい最近撮られた写真だぞ。古くない」
ヴォルツ

「うーん、あの時見たキュラスと写真のキュラス……。同じのようで同じじゃないような……」

山崎

「いったいどっちなんですか？」

ヴォルツは考える。

ティアナ

「写真のキュラスのことはまた後で。それより、先のことを……」

ヴォルツ

「そうだな……」

ティアナ

「ヴォルツ司令の証言では、スバルと戦ったマリアージュは戦闘用と呼ばれていました。それもキュラスの仕業ですか？」

星海

「わからん。だがエイリアン改造ができる奴ならあり得ないことはない」

土方

「イクスとゼストことはまだわからないのか？」

ゲンヤ

「ゼスト!?!」

ギンガ

「お父さん、どうしたの？」

ゲンヤは考え込む。

ゲンヤ

「まさか、あのゼストなのか……。いや、彼は……」

ティアナ

「ナカジマ三佐、ゼストをご存知ですか？」

ゲンヤ

「……ゼスト・グランガイツ。彼は死んだ女房の部隊の隊長だった男だ」

全員は驚く。

ゲンヤ

「彼は戦闘機人の事件調査で、殉職した。女房や部隊の隊員達と一緒に……」

全員は複雑な表情になる。

ゲンヤ

「彼は死んだ筈だ。死んだ人間が現れるなんて……」

すると、ルネッサのデバイスが鳴る。

ルネッサはデバイスを見る。

ルネッサ

「ランスター執務官、管理局からの連絡です。ゼストに関するデータが見つかりました」

ティアナ

「すぐに表示して」

ルネッサ

「はい」

ルネッサのデバイスからゼストのデータが表示される。

ヴォルツはゼストの顔写真を見て驚く。

ヴォルツ

「コイツだ、間違いない！」

ゲンヤ

「そんなバカな……」

近藤

「死んだ筈の男が何故……。まさか、幽霊!？」

ガタツ。

突然、土方が机の下に隠れる。

そんな土方の行動に全員は驚く。

ティアナ

「土方さん、何をやってるんですか？」

土方

「……避難訓練だ」

ルネッサ

「何故急に避難訓練を……」

山崎はこっそりティアナのそばに行き、耳打ちする。

山崎

「実は土方さん、幽霊が苦手なんですよ」

ティアナ

「へえー、そうなんだ」

土方は耳打ちする山崎に気づく。

土方

「山崎、何を話してやがるだ！」

山崎

「わゝ、すいません！」

土方は山崎を捕まえ、殴りつける。

全員はその様子を見て、苦笑する。

【マリンガーデン】

ここは海の上に建築されたレジャーランド『マリンガーデン』。海中散歩の気分を楽しめる海中トンネルは深海付近まで伸び、地上は海と湾岸部を一望する景観を眺められる遊園地とイベントホールが並ぶ大型施設。

今は閉園してるので、とても静かだった。

そんなところに一人の男、ゼスト・グランガイツとアギトがやって来る。

二人は人気のない倉庫に入り込む。

【倉庫内】

ゼストは倉庫の明かりをつける。

ゼスト

「イクス、アギトが見つかったぞ」

すると、箱の影からイクスが出てくる。

イクス

「アギト！」

アギト

「イクス」

アギトはイクスの胸に飛び込む。

アギト

「ごめんよ、心配かけて…」

イクス

「無事で良かった…。どうして遅かったの？」

アギトは言葉を詰まらせる。

ゼスト

「食べ物探しに夢中になっていたんだ。ましなものをお前に食べさせたかったらしい」

イクス

「そう…。ごめんね、アギト」

アギト

「う、うん…」

アギトは作り笑いをする。

アギトはゼストを見て、念話をする。

アギト

（ゼストの旦那…）

ゼスト

（襲われたことは言うな。戦闘用マリアーージュのことも、そしてあの娘のこともだ）

アギト

（で、でも…）

ゼスト

（イクスを悲しませる）

アギト

（わかった。でも、あいつが…）

ゼスト

（心配するな、様子を見る。あの娘はお前の恩人であり、俺の部下の娘だからな）

アギト

（エエツ!?!）

イクス

「どうしたの?」

アギト

「何でもない!」

イクスは首を傾げる。

こうして、夜がふけるのだった。

次回に続く。

ステージ17 捜査の基本は足「情報収集だ！」
(後書き)

ゼストは死んだ筈の男だった。

そんなゼストが何故イクスとアギトと一緒に……？。

ステージ18 人は成長していくうちに変わっていく。(前書き)

長らくお待たせしてすみません。

今回はあのちびっ子二人が登場します。

シリアスとギャグのお話をどうぞ！

ステージ18 人は成長していくうちに変わっていく。

ティアナ達の捜査会議から翌日後、ティアナ達は星海坊主を加えて、イクスとゼスト。

そして、主犯のキュラスの捜査を開始した。

【聖王病院内】

すっかり回復した長谷川（サングラス無し）はスバルの緊急入院を知り、見舞いのためにスバルの部屋に行こうとする。

エリオとキャラも果物の詰め合わせを持って、見舞いやつて来る。

エリオ

「長谷川さん、すっかり良くなりましたね」

長谷川

「ぶっ飛ばされただけだからな」

キャラ

「それでも油断しないでくださいよ」

長谷川

「はいはい。俺よりも、スバルちゃんが重傷って聞いたけど…。大丈夫なのか？」

エリオ

「はい、安静にすれば大丈夫だそうです」

キャラ

「スバル自身、頑丈だって言っていました」

【スバルの病室】

長谷川

「お邪魔します」

エリオ

「長谷川さん、お見舞いに…」

3人は驚いた。

なんと、ベッドがもぬけのからだった。

キャロ

「あれ、いない!？」

長谷川

「どこに行つたんだ？」

エリオは考える。

エリオ

「……まさか!。抜け出して、マリアージュ事件の調査を…」

長谷川

「えっ、何で？」

エリオ

「スバルさん、捜査に参加できないこと残念がりましたから…」

キャロ

「でも、スバルさんは承知していたじゃない!」

エリオ

「急に気持ちが変わったかもしれないよ。スバルさん、一度決めたことは必ずやり遂げる人だから。それにティアさんの事となると…」
キャロ

「あ、あり得ないことはないかも…」

長谷川

「そんな！？。だって、重傷なんだろ。いくらなんでも…」

エリオとキャロの不安は高なる。

エリオ

「探しましょう！」

キャロ

「うん！」

【聖王病院内】

エリオとキャロと長谷川はスバルを必死に探す。

行きそうな所を当たったり、看護婦や患者に尋ねたりした。

【聖王病院屋上】

エリオは屋上までやって来る。

エリオ

「最後は此処か……」

エリオは探し始めようとすると、

？

「シャ ニングファイ ガー！」
と声がする。

エリオは声に気づき、探してみる。

？

「シャ ニングファイ ガー！」

声は入り口の裏側から聞こえる。

エリオは裏側に行き、こっそりと覗いてみる。

スバル

「シャ ニングファイ ガー！」

スバルは掛け声とともにポーズを取る。

かなり本気で。

スバルはガン ムシリーズの一つの『機動 闘伝Gガダム』の必
殺技の練習をしていた。

スバル

「うん、なんか違うな…。手の動きかな？」

スバルは気を取り直し、もう一度やる。

スバル

「シャ ニングファイ……」

スバルはこっそり覗いていたエリオに気づく。

エリオは「何やってるの」と言う視線をスバルに送る。

【聖王病院内】

階段を下りる二人。

下りながらもスバルは手を当てて泣いていた。

見られたのが相当ショックだったらしい。

エリオは気ますぐなる。

スバル

「こっそりやれば…。隠れていれば…。見られてなければ大丈夫か
と思ったんだ。せつかく休めれるから、つい……」

エリオ

「み、見なかったことにします……」

スバル

「ごめん……」

すると、キャラと長谷川がやって来る。

キャラ

「あつ、スバルさん」

長谷川

「探したぜ。どこに行つて…」

二人は泣いているスバルに驚く。

キャラ

「スバルさん、どうしたんですか？」

長谷川

「何かあつたの？」
とエリオに尋ねる。

エリオ

「えーつと…」

キャラはハッと気づき、長谷川の服を引っ張る。

キャラ

「聞かない方がいいですよ。きっと辛いんですよ、今回のことが」

長谷川

「あつ、なるほど」

エリオは勘違いだと言おうと思ったが、本当のことは言わない方が
良いと思い、そーゆう事にする。

【スバルの病室】

スバルはベッドの上からぼんやりと見る。

キャロはりんごの皮を切り始める。

エリオと長谷川はスバルと話そうとするが、話題が思いつかない。

スバル

「エリオ、キャロ」

呼ばれた二人は驚く。

スバル

「…無理には言わない。…私の代わりに、ティアや土方さん達を手伝ってあげて」

エリオ

「えっ！」

キャロ

「私とエリオ君がですか？」

エリオとキャロと長谷川は驚く。

スバル

「動けない私を看病するより、捜査の手伝いすればティア達は助かると思うよ」

エリオ

「そんな…」

長谷川

「スバルちゃん、そんなこと言うなよ」
スバル

「本当なら、私が手伝ってあげたいけど…。土方さんの言う通りこの体じゃあ、かえって足を引張る。その方が申し訳ないよ。だから、こうやって頭を下げた頼むことぐらいしないと…」

スバルは頭を下げる。

長谷川

「スバルちゃん…」

しばらく沈黙が続く。

長谷川

「よし、この俺がスバルちゃんの看病をしてやるよ」
スバル

「長谷川さん！」

長谷川

「スバルちゃんのその頭を下げる気持ちわかるよ。俺の女房も、こんな俺のために頭を下げているから…。情けない夫だよ」
キャロ

「長谷川さん…」

エリオ

「…わかりました。僕、ティアさんの手伝いに行きます」
キャロ

「私も行きます」

スバル

「エリオ、キャロ…。ありがとう…」

スバルは深く頭を下げる。

エリオ

「長谷川さん、お願いします」

長谷川

「おう、行ってこい」

こうして、エリオとキャラロはティアナ達の捜査に参加することにした。

長谷川もスバルの看病することにした。

【無限書庫】

此处は管理局が誇る、次元世界最大のアナログデータベース。

管理局管理局が認識しうる世界のあらゆる書物がストックされる。

『無限』の名の通り、書物は日々増え続ける。

そんな無限書庫に聖王教会のオットーがいた。

オットーはティアナの依頼でトレディアとイクス調べものをしていった。

無限書庫司書を取得したヴィヴィオ（この世界）も一緒に調べる。

オットー

「トレディアのこと見つかった。聖王陛下の方ははかどっているかな」

オットーは聖王陛下こと、ヴィヴィオを探す。

すると、声が聞こえる。

？

「かゝゝはゝめゝ波アアアアアア！！」

オットーは気づき、声のする方に行く。

ヴィヴィオ

「かゝゝはゝめゝ波アアアアアア！！」

ヴィヴィオは人気マンガン『ドゴンボール』の必殺技の練習をしていた。

それもかなり本気で。

ヴィヴィオ

「何か、違うな…。もう一度、かゝめゝはゝめ…」

ヴィヴィオは見ていたオットーに気付く。

オットーは「何をやっているの？」と言う視線を送る。

ヴィヴィオは顔に手を当てて、泣いた。

見られたことが相当ショックだったらしい。

ヴィヴィオ

「ごめん。休む間だけ、銀時パパに教えて貰ったことを練習を……。こっそりやれば、ばれないと思っただけ……」

オットー

「…見なかったことにします」

ヴィヴィオ

「ありがとう、オットー……」

オットー

「何かわかりましたか？」

ヴィヴィオ

「いくつか本命ばい本や項目はあったけど、意味づけができなくて

……」

オットー

「どこですか？」

ヴィヴィオ

「先史ベルカ聖王時代の少し前」

オットー

「そうですね……」

ヴィヴィオ

「コレはルールー（ルーテシア）に聞いてみる」

オットー

「わかりました」

【辺境世界マウ克蘭】

此処はルーテシア親子が暮らしている辺境世界。

【ルーテシア宅】

一本の呼び出し通信がかかる。

ルーテシアの召喚獣ガリユーが出る。

ヴィヴィオ

「あ、ガリユー。ヴィヴィオです、ルールーいる？」

ガリユーは首を振る。

ヴィヴィオ

「ルールーに用があるんだけど、探してくれる？」

ガリユーは頷く。

【ルーテシア宅の周辺】

ガリユーはルーテシアを探す。

すると、歌声が聞こえる。

ガリユーは歌声のする方に行く。

だんだん近づき、ガリユーは歌声の主を見る。

歌っていたのは、ルーテシアだった。

ルーテシア

「……ハッ!？」

歌い終わったルーテシアは見ていたガリユーに気付く。

ガリユーは「何やってるの」と言う視線を送る。

【ルーテシア宅】

ヴィヴィオ

「あ、ルールー……。どうかしたの？」

ルーテシアは手を当てて、泣いていた。

見られたのが、相当ショックだったらしい。

ルーテシア

「…何でも無いよ」

ヴィヴィオ

「そう…」

ルーテシア

「それでどうしたの？」

ヴィヴィオ

「うん、今無限書庫で兵器関連の調べ物してるの」
ルーテシア

「うん…」

ヴィヴィオ

「いくつか本命ばい本や項目が見つかったんだけど…。どうにも意味づけが出来なくなってる…」

ルーテシア

「国はどこ？」

ヴィヴィオ

「先史ベルカ聖王時代の少し前」

ルーテシア

「興味湧いた。現物データを画像で送れる？」

ヴィヴィオ

「うん。オットー、お願い」

オットー

「はい」

ルーテシア

「あつ、オットー。久しぶり」

オットー

「お久しぶりです。ルーお嬢様」

画像が送られる。

ルーテシア

「あつ、来た。他にデータは？」

ヴィヴィオ

「マリアージュを見つけたって人がいるって記録はあったけど…。これはトレディアって人みたい…」

オットー

「そして、マリアージュを改造したのが、ドクターキュラス。坂田銀時の世界の人物らしいんです」

ルーテシア

「トレディア、ドクターキュラス…。どこかで聞いたような…」

ガリユーはいくつかの書物を持ってくる。

ルーテシア

「ありがとう、ガリユー」

ルーテシアは書物を読みながら翻訳する。

ルーテシア

「死者達によつて構成される多数の軍列。死した敵兵を喰らい、数を増やし、戦場を焼け野に変える、それがマリアージュ。イクスよつて構成された軍列は無限に増殖し続け、その進軍を止めるのは不可能…」

ヴィヴィオ

「と言うことは、増殖兵器」

オットー

「先史ベルカにそんな技術が…」

ガリユー

「まあ、アルハザードが現役で存在してた時代やさかいな」

ヴィヴィオとオットーはしばらく沈黙する。

ヴィヴィオ

「エッー、ガリユー!?!」

オットー

「喋れたんですか!?!」

ガリユー

「ヴィヴィオのーちゃん、坂田銀時はんに金丸ちゅー人を紹介さ

れてん。その人に日本語教わりました。そのおかげで喋れるようになりましたんや」

金丸とは、昔万事屋のツッコミ担当。サイコガンによる戦闘力の高さから暗黒街で『黒龍』と呼ばれるが、ツッコミとしてはイマイチ。

ヴィヴィオ

「じゃあ、何で最初喋らなかったの!？」

ガリユー

「喋らなかつたら、クールでカッコいいやん」

ルーテシア

「私も母さんも最初はびっくりだった」

ガリユー

「それより、続き続き」

ルーテシアとヴィヴィオとオットーは話を戻す。

ルーテシア

「この間、キャロがプレゼントしてくれた掘り出し物の希少本。あれに、イクスについての記述があったような…」

ガリユー

「なんばですと!」

オットー

「あれ、口調が変わってますよ!？」

ルーテシア

「ちよっと待っててね、探すから」

ルーテシアは本棚から探し出し、見つける。

ルーテシア

「冥府の王、冥王イクスヴェリア」

ガリユー

「冥王？」

ルーテシア

「先史時代の王様の名前。ヴィヴィオ、試しにこの名前で絞り込んでみて」

ヴィヴィオ

「えっ」と、絞り込み検索。冥王イクスヴェリア」

データが見つかる。

ヴィヴィオ

「先史224年生誕。古代ベルカガレア国の君主。戦乱と残虐を好んだ邪治暴虐の王」

オットー

「人の屍を利用し生み出す兵器を屈指、近隣諸国を侵略したとされる。古代ベルカ語で人形意味するマリアージュと言われた死体兵器とその製法は、聖王家の戦舟や揺りかご技術と同等のオーバーテクロノジーよるものと考えられる」

ガリユーは考え込む。

ルーテシア

「気が臭いね…」

ガリユー

「アッー、思い出したでえ!？」

ルーテシア

「どっしたの？」

ガリユー

「ワイら、トレディア・グラージェとドクターキュラス聞いたことあるやん！」

ルーテシア

「どこで？」

ガリユー

「あれや、変態ドクターのアジトや！」

ルーテシア

「そういえば…」

オットー

「ドクターのアジトですか？」

ルーテシア

「オットーやディード達が目覚める前」

ガリユー

「トレディアの方は相談事してたわ。ドクターキュラスは直接来ておった。頭に角を生やし、でこに目ん玉があったわ」

ヴィヴィオ

「オットー、今の話をすぐにティアナさんに」

オットー

「はい！」

ヴィヴィオ

「こっちは急いで、資料まとめちゃおう！」

ルーテシア

「翻訳手伝うよ」

ガリユー

「任せときゃ！」

ヴィヴィオ

「へへっ、二人共ありがとう！」

【浜辺の近く】

ティアナはオットーからの情報を聞き、行動を開始しようとするが、ティアナ

「よし。あれ？、近藤さんは…」

ティアナは近藤と行動していたが、近藤は居なかった。

【浜辺】

ティアナは居なくなった近藤を探す。

ティアナ

「どこに…」

ティアナは浜辺で近藤を見つけるが…。

近藤

「その舟をこいで行け…」

近藤はおしつこで文字を書きながら、ビジュアル系のアイドルの唄を熱唱する。

書いてる文字は『お妙さん』だった。

ティアナは顔を赤くしながら唾然する。

近藤

「うん！」

近藤は空の向こうの白い雲を見つめる。

近藤

「あの雲の向こうに……、お妙さんの笑顔があるはずだ」

すると、大きな波が来る。

近藤

「ハッ！、いかん！」

近藤は波から文字を守る。

しかし、文字は少しだけ波に消される。

ティアナ

「何やってるんですか！？」

近藤

「グホッ！？」

ティアナは思わず近藤に飛び蹴りを喰わす。

近藤

「ティアナちゃん、何するの！？」

ティアナ

「それはこっちが聞きたいですよ！。なんですか、あれ！？」

文字を指す。

近藤

「遠く離れたお妙さんに伝わるようにこの白い砂浜に想いを込めながら名前を……」

ティアナ

「おしっこでかい！？。歌いながらかい！？。つーかー、よくあんなに出せたな！？。てゆーか、そんなんでも伝えるなよ！？」

近藤

「どうせなら大きな文字で書きたかったの……」

離れたところでエリオとキャラロがいた。

近藤探しているティアナを見かけ、声をかけようとするが、おしっこしている近藤を見た時点で立ち止まる。そして、ティアナと近藤の漫才を見ていた。

エリオ

「なんか、タイミングが悪いみたい……」

キャラロ

「うん……」

二人はいつ声をかけるべきか悩むのだった。

続く。

ステージ18 人は成長していくうちに変わっていく。(後書き)

如何でした？。

読んだ時の感想か、この物語に関する質問をお待ちしています。

ステージ18・5 子供の夢は壊さないであげて(前書き)

クリスマスイブにちなんだ質問コーナー。

是非、楽しんで下さい。

ステージ18・5 子供の夢は壊さないであげて

【万事屋「銀ちゃん」】

銀時

「お待ちかね」

なのは

「質問コーナー」

全員

「いえ〜い！」

パフツパフツパフツ　　ドンドン

なんと、新八、神楽、ヴィヴィオ、フェイト、はやてもいた。

さらに万事屋内がクリスマス風になった。

そして、なのはとフェイトとはやてとヴィヴィオと神楽はミニスカートのサンタクロース衣装を着ていた。

ちなみに銀時と新八はトナカイの衣装を着ていた。

銀時

「おいおい、かなり大勢だな…」

フェイト

「だって、クリスマスだもん」

新八

「それに、なんともう話数が20を越えているんですよ」

神楽

「マジアルカ!？」

なのは

「作者本人も気づかなかつたみたい」

ヴィヴィオ

「それって、凄い？」

はやて

「もちろんや！」

ヴィヴィオ

「凄い凄い！」

神楽

「凄いアル！」

嬉しさのあまりはしゃぐ。

なのは

「それでは、ゲスト紹介です」

フェイト

「クリスマスと言えば、この人達です！」

サンタ

「メリークリスマス！」

ベン

「来てやったぜ」

サンタクロースとトナカイのベンだった。

万事屋一同以外、ベンを見て唾然する。

ヴィヴィオ

「怪人だ！」

ベン

「怪人じゃねえよ！、トナカイだ！」

はやて

「どこがや！、全然人やん！」

ベン

「よく見る！。この角に、赤い鼻と肌の色！。どう見てもトナカイだ！」

フェイト

「かえって不気味なんですけど…」

サント

「心配するな。このベンは会社を設立させるほど優秀なトナカイだ」
なのは

「それ、もはやトナカイじゃない…」

新八

「まあまあ、あまり気にしないで…。それよりコーナー始めましよう」

フェイト

「そ、そうだね！」

はやて

「私が読むね」

はやてはデバイスで読み上げる。

はやて

「黒神さんからの質問が2つあります。1・真選組以外のメンバーに出てくるキャラは誰ですか？。2・主人公は土方であってヒロインはスバルでしょうか？」

新八

「作者に聞いてみましょう」

作者

「1の答え。誰かは教えられませんが、出したいと思います」

新八

「思いますって、答えなっていないような…」

作者

「少なくとも、万事屋一回は出さないつもりです」

銀時

「んだつと、コラ…」

フェイト

「銀時、仕方ないよ…」

なのは

「そうだよ。この物語はStrikerSメンバーと真選組が主要人物なんだから…。憎たらしいけど（怒）」

新八

「って、なのはちゃん。今、怖いこと言っていない…」

なのは

「なんか言った？」

白い魔王オーラを放つ。

新八

「何も言ってますん！」

サンタ

「何、あの娘…」

ベン

「怖え…」

新八だけではなく、サンタとベンまで怖がる。

フエイト

「次の質問、次の質問！」

はやて

「せやせや、教えて！」

作者

「2の答え。その通りです。主人公は土方で、ヒロインはスバルです」

銀時

「おいおいマジかよ！？。あのマヨラーが主人公……。無理あんだろ、あんなオタクで瞳孔開き気味のニコちゃん野郎だぜ」

新八

「銀さん、ちょっと失礼ですよ！」

銀時

「知ってるか？。テレビの前で小便をして、チャック閉める時チコ挟んだことあるんだぜ。女の子のデートで、いやらしい映画を選んだぜ」

フエイト

「ええっ！？」

なのは

「本当なの！？」

はやて

「へえ」

3人は赤くなる。

新八

「最悪だよ！。この人、本当に最悪だよ！」

サンタ

「わしだってやるぞ。チャックでチコを挟むこと」
ベン

「俺も…」

新八

「ちよっと!?!。女性の前で下ネタは止める!」

神楽

「ヒロインはスバルか…」

ヴィヴィオ

「スバルさんなら悪くないね」

銀時

「アアツ、ヒロインらしく目立っているな…。マリアージュ改と激闘したり、Gガ ダムの必殺技をしたりして。俺個人としては、あの『スバルギヤラクシー』が良かったぜ」

新八

「アアツ、あのご飯の上にアイスクリームたくさん乗せた井でしたよね…」

はやて

「銀ちゃんの『宇治銀時井』といい勝負やな…」

なのは

「実際、土方さんの『土方スペシャル』と勝負したよね…」

銀時

「まあ、勝つのは『宇治銀時井』だな」

フェイト

「あれ、『スバルギヤラクシー』を褒めたんじゃ…」

銀時

「それはそれ。これはこれだ」

すると、はやては思いつく。

はやて

「せや、せつかくやから『宇治銀時井』、『土方スペシャル』、『スバルギヤラクシー』。どれがうまそうか投票しようか」

なのは

「ええっ!？」

銀時

「それいいな。これを機に『宇治銀時井』の素晴らしさを証明してやるぜ」

フェイト

「そうだね!」

『宇治銀時井』派は早くも燃える。

サンタ

「ベン、お前はどれが良い？」

ベン

「…『スバルギャラクシー』かな。上はアイスクリームだから」

サンタ

「わしもじゃな。豆やマヨネーズよりもアイスクリームじゃ」

新八は啞然する。

神楽

「これで終わリアルか？」

ヴィヴィオ

「早くも終わっちゃったね…」

フェイト

「うっん、まだまだよ。実はね、遂にキャラクターの応援が来たんだよ」

新八

「ええっ!？」

銀時

「マジかよ!？」

フェイト

「マジだよ。それじゃ、応援メッセージを表示するね」

フェイトはバルディッシュのデバイスでメッセージを表示させる。

赤夜叉

『なんか僕のせいでエリオすっかりかわっちゃって……。本当にごめん。って謝っちゃたよ。応援じゃなくて謝罪しちゃったよ。とにかく頑張れエリオ』

全員、このメッセージを読んで啞然する。

新八

「…応援と言うより、謝罪ですね」

神楽

「確かにエリオ、すっかり変わったアル」

フェイト

「私、とても複雑……」

なのは

「にやはは……」

はやて

「最初がコレやとな……」

サント

「そのエリオって奴はなんかあったのか？」

銀時

「大きな失恋だよ。10歳のガキにはキツイ失恋……」

サント

「なんじゃ、まだ若いのに失恋ぐらいでキツイなんて。よし、少

年が喜ぶおもちゃで元気付けよう」

フェイト

「おもちゃ？」

サンタ

「今流行りの鉄でできた『ベイ』じゃ」

サンタは白い袋を取り出し、袋から何かを探す。

新八

「『ベイ』って、まさか!？」

サンタ

「そうじゃ、『ベーゴマ』じゃ!」

サンタが取り出したのは、ベーゴマだった。

銀時

「アホか!？」

サンタ

「グフツ!？」

銀時はサンタを蹴り倒す。

銀時

「『ベ ブレード』じゃなくて、元祖のベーゴマかよ!?!。んなつで、今時のガキは喜ばねえよ!」

サンタ

「だって、あれは高いもん…。金そんなに無いもん…。
なのは

「あなた、それでもサンタクロース?…」

すると、神楽とヴィヴィオがサンタに近づき、

神楽ノヴィヴィオ

「プレゼント頂戴」

と要求する。

サンタ

「わかったわかった」

袋から探す。

ヴィヴィオ

「私ウサギ」

神楽

「今年は食べ物じゃないの」

サンタ

「はいよ」

サンタが2人にプレゼントを手渡す。

ヴィヴィオにはウサギの絵入りけん玉。

神楽には普通のけん玉だった。

神楽

「爺、舐めとんのか!?!」

サンタ

「ぐえ〜...」

神楽は怒りのあまり、サンタの首根を絞める。

なのは

「神楽ちゃん！」

フェイト

「落ちていて！」

2人は神楽をなだめる。

ヴィヴィオ

「これって何？」

ベン

「けん玉だ。こうやって遊ぶんだ」

ベンはヴィヴィオのけん玉を取り、遊び方を教える。

銀時

「オイ、袋の中全部けん玉やベーゴマじゃねーか!？」

銀時は袋の中身を全部出す。

確かにけん玉やベーゴマだった。

それを見たなのは、フェイト、はやてはキレる。

なのは

「けん玉とベーゴマ?」

フェイト

「こんなもので…」

はやて

「あたしらが喜ぶと思ってるの?」

何故かデバイスを取り出し、解除する。

新八

「えっ、3人ともプレゼント貰う気だったの？」

銀時

「もう貰える歳……」

3人は銀時と新八にデバイスを向ける。

3人

「文句ある？」

銀時／新八

「ありません！」

3人は再びサンタに向ける。

なのは

「少し、頭を冷やそうか？」

フェイト

「少し、話そうか？」

はやて

「少し、お仕置きしようか？」

サンタ

「ええっ！？。ちょっと待て……！。話せばわかる……」

神楽

「わけねえーだろ……！」

神楽はサンタを掴み、

サンタ

「あーれー！ー！ー！」

サンタを思い切り放り投げる。

そして、

3人

「まともなプレゼントを用意しやがれー！ー！」

放り投げられたサンタに向けて、必殺技を放つ。

ドカーー！ー！ー！

綺麗な花火とともに、『merryXmas』の文字が表示される。

新八

「えーっと…。今回のコーナーはここまで」

銀時

「次回のコーナーまで、質問とキャラクターの応援待ってるぜ！」
なのは

「それでは」

フェイト

「さようなら」

はやて

「メリークリスマスや〜」

神楽

「…今年も肉まんにすれば良かったアル」

神楽は残念がる。

ヴィヴィオ

「できた！」

ベン

「筋いいな」

ヴィヴィオはベンにけん玉を教わっていた。

ヴィヴィオ

「けん玉って、面白い」

ヴィヴィオはすっかりけん玉を気に入ったようでした。

終わり。

ステージ18・5 子供の夢は壊さないであげて（後書き）

さあ、初の投票内容は『宇治銀時井』、『土方スペシャル』、『スバルギヤラクシー』のどれがお気に入りかです。

感想の一言に記入して下さい。

締め切りは次の投稿までです。

ステージ19 娘を持つ父親は大抵は過保護なんだね。(前書き)

今、とんでもない騒動が始まるとする。

ステージ19 娘を持つ父親は大抵は過保護なんだね。

【駐車場】

土方とギンガと外出許可を得たチンクはトレディア・グラーゼのことを知っているスカリエツティに会うため、拘置所に向かおうとするが…。

ギンガのデバイスが鳴りだす。

ギンガ

「（デバイスを開いて）はい、こちらギンガ」

ゲンヤ

「俺だ！」

ギンガ

「父さん！」

チンク

「父上！」

ゲンヤ

「オオツ、チンクも一緒か！。よし、チンクも来い」

チンク

「私もか…」

ギンガ

「どうしたの!?!」

ゲンヤ

「…奴が動いた」

ギンガ

「奴…」

ゲンヤ

「お前たちの応援が必要だ！。すぐに来い！」

ゲンヤはデバイスを切る。

ギンガ

「キュラスかしら……」

チンク

「しかし、我々はドクターのところへ行かなければならない……」

土方

「……しゃーねえ、俺一人で言ってくるわ」

ギンガ

「エエツ！、でも土方さんは場所を知らないんじゃない……」

土方

「代わりの奴に道案内して貰うわ」

ギンガ

「でも……」

土方

「あの様子だと、ただ事じゃなさそうだぞ。早く行くべきだぞ」

チンク

「キュラスか、ゼストかもしれない……」

ギンガ

「……わかりました。行ってきます」

土方

「ああっ」

土方は別の局員と一緒に拘置所に行き、ギンガとチンクはゲンヤのところに行くのだった。

【マリンガーデン前】

沢山の家族連れやカップルが遊びに来ていた。

そんな中にデイエチがいた。

彼女の服装はとても可愛らしいフリフリレースの洋服といつもと違うリボンをつけていた。

デイエチは腕時計を見ていると…。

山崎

「お待たせ」

デイエチ

「あつ、山崎さん」

なんと、普段着姿の山崎がやって来る。

山崎

「ごめん、待った？」

デイエチ

「ううん、今来たところ」

山崎

「それじゃ、行こうか」

デイエチ

「はい」

2人はマリンガーデンに入る。

そんな2人の様子を見る影とライフルの銃身が茂みにあった。

【茂みの中】

ゲンヤ

「待ったじゃねえよ！、デイエチは？時間以上待ったんだぞ！。遅れた分、テメーの命で償って貰う。ギンガ、ちよつと土台に…」

ギンガ

「待たんかい！（激怒）」

茂みに隠れてライフルを構えるゲンヤを突っ込む娘ギンガ。

ちなみにゲンヤはサングラスを掛けていた。

ギンガ

「奴つて、山崎さんのこと！？。もしかして応援つて、娘のデートデイエチ邪魔するための応援！？」

ゲンヤ

「デートしてる場合じゃないだろ。捜査をしているんだぞ俺達は！。あんな地味な野郎なんか娘を渡せるか！」

チンク

「オイ、最後に本音も言ってるぞ…」

ゲンヤ

「たった1日で娘をものにしやがって…。俺は認めねえ」

ギンガ

「私も今のあなたを部隊の隊長と認めません…」

ゲンヤ

「いいかギンガ。部隊もな、マフィアと同じ組織なんだよ」

チンク

「部隊長がとんでもないこと言ったよ…」

ゲンヤ

「俺はただ、あの男抹殺したいだけだ」

ギンガ

「もつと駄目よ!」

星海坊主

「まあまあ嬢ちゃん、わかってやってくれや」

ゲンヤのとなりで星海坊主が武器の番傘を構える。

星海坊主

「父親つて男は、口よりも態度で示すことでしか伝えられないだ」

ギンガ

「星海坊主さん、あなたも何をしてるんですか…」

星海坊主

「誰が星海坊主だ。俺はアートネイチャー13だ」

ギンガ

「何ですか、アートネイチャー13つて!?!」

星海坊主

「このアートネイチャー13は同じ父親として、加勢しているんだ」

ギンガ

「止めて下さい。それこそ、やってる場合じゃありませんよ!」

チンクはウエンディの存在に気づく。

チンク

「オイ、ウエンディ。いるなら早く止め…」

ウエンディ

「誰がウエンディっすか。あたしはウエンディ13っす」

ライディングボードを構える。

ギンガ

「ウエンディまで何やってるの!。あとウエンディ13は『3年S trikerS組 銀八先生』に出てたわよ!」

クアットロ

「まあまあ落ち着いて、気が散りますわ」

クアットロはライフルを構える。

ギンガ

「なんでクアットロがいるの!?!。あなた留置所にいるはずでしょう!?!」

クアットロ

「クアットロじゃないわ。DS13よ」

ゲンヤ

「俺が呼んだんだ。コイツにあの男の抹殺を…」

ギンガ

「何呼んでいるんですか!?!。これじゃ、この物語の設定が狂うわ!」

ゲンヤ

「お父さん、設定とかよくわかんない」

チンク

「可愛くない…」

クアットロ

「ゲンヤさん、抹殺より痛め付けた方がいいわ」

星海坊主

「それなら俺に任せろ」

ウエンディ

「そんなことより、追いかけるっす」

ゲンヤ

「しまった！。行くぞ！」

3人

「オオツ！」

ゲンヤ達は武器を持ちながら、マリンガーデンに入る。

ギンガ

「ちよつと待ちなさい！」

チンク

「やれやれ……」

ギンガとチンクも行く。

【マリンガーデン内】

山崎とディエチは辺りをキョロキョロする。

妨害しにきた4人は2人の様子を見る。

特にゲンヤは苦々しく2人（特に山崎）を見る。

するとウエンディは後から来たギンガとチンクに気づく。

ウエンディ

「なんだ、二人も参加したいならそう言えばいいのに」
ギンガ

「違います!。あなた方のとんでもない行動を止めに来たんです!」
チンク

「馬鹿なことは止めて…!」

すると変装したクアットロが山崎の後ろに近づく。

そして、ナイフを取り出し、山崎の背中に突き出す。

山崎はそれに気づく。

クアットロ

「(小声で)このまま彼女とジェットコースターに乗りなさい」

山崎

「(小声で)えっ、何で…!」

クアットロ

「(小声で)言う通りしなさい!」

ナイフを見せつける。

山崎

「ヒッ!?!」

デイエチ

「どうしたの?」

山崎

「…デイエチちゃん、ジェットコースターに行こう…!」

デイエチ

「えっ、何で!?!」

山崎

「もしかしたら手掛かりがあるかもしれない!」

デイエチ

「わ、わかった…」

2人はジェットコースターに向かう。

クアットロは山崎の後ろについて行く。

残りの3人もついて行く。

そして、ギンガとチンクも…。

【ジェットコースター乗り場】

デイエチと山崎は先頭に乗る。クアットロは山崎の後ろに座る。

更にその後ろにゲンヤとウエンディが座る。

その後ろにチンクと星海坊主も座る。

そして、その後ろにギンガが座る。

ゲンヤ

「大丈夫なのか？」

ウエンディ

「大丈夫です。クアットロ姉はドクターを越えるです。彼女のいる奴ならがぜんやる気が増すです」

クアットロは山崎の首元にナイフを突きつけながら、

クアットロ

「（小声で）ウ　「漏らしなさい」と脅す。」

山崎

「えっ!？」

デイエチ

「どうしたの？」

山崎

「な、何でもないよ!」

デイエチは首を傾げる。

クアットロ

「（小声で）ジェットコースターの恐怖で脱糞しなさい」
山崎

「（小声で）できるわけないだろ!」

クアットロ

「（小声で）なら、代わりに血を出させましょつか?」

首元を少し切りつける。

山崎

「ヒッ!？」

するとジェットコースターが動き出す。

だんだん上がっていき、そのまま走り出す。

（ちなみにミッドチルダ製のジェットコースターはかなり速い）

クアットロ

「あっ……」

シートベルトを閉め忘れたクアットロは飛ばされる。

クアットロ

「嫌——！？」

クアットロはとっさにギンガの頭を掴む。

ギンガ

「痛い痛い痛い！？。離しなさい！」

クアットロ

「あたし駄目なのよ駄目なのよ！。ドSは打たれ弱いのです！」

こうしてジェットコースターは一周終えた。

ディエチ

「あゝ、怖かった」

すると落ち込む山崎に気づく。

ディエチ

「山崎さん……。少し座高が高くなっていない？」

山崎

「…………ディエチちゃん、ごめん」

ディエチ

「へっ？」

山崎

「…ウ コ、漏らしちゃった」

デイエチは驚愕する。

ゲンヤ

「ハツハツハツ、ざまあみる…」

ジェットコースターの恐怖でグッタリしたゲンヤはウェンディに肩を貸してもらいながら笑う。

ギンガもグッタリしたクアットロに肩を貸す。

ギンガ

（ごめんなさい、山崎さん…。アナタに何の怨みは無いのに…）

心の奥から謝罪する。

デイエチ

「…よかった」

山崎

「えっ!？」

デイエチ

「（赤くなりながら）実は、…私ものよ」

山崎

「エエッ!？」

山崎だけではなく、ギンガ達も驚愕する。

山崎

「マジ！？。凄い偶然！？」

デイエチ

「山崎さん、早く服を変えた方が…」

山崎

「そうだね…」

二人は内股で歩き出す。

ゲンヤ

「オオイ、前より仲良くなっちまったじゃねえか！？。嫌われるはずだろ！？」

ウエンデイ

「あたしに言われても…」

チンク

「追わなくても良いのか？」

ゲンヤ

「ハッ、そうだ。追うぞ！」

ギンガ

「まだやるの…」

ゲンヤ達は2人の後を追う。

すると、チンクは星海坊主がまだジェットコースターに座っているのに気づく。

チンク

「星海坊主殿、どうした？。早く行く…」

チンクは気づく。

チンク

「あれ、座高が少し高くなっている…」

そして、星海坊主は涙を流す。

星海坊主

「チンクちゃん、誰にも言わないで欲しいっす」

ジェットコースターの恐怖のあまりに脱糞したらしい。

チンク

「エエツ!？」

チンクの叫びが外まで響く。

【遊園地エリアの真ん中辺り】

山崎とディエチはいろんな所に入って行く。

ちなみに山崎はレジャーランドの服に着替えていた。

ゲンヤ

「なんてこった…。まさかディエチがあれで引かないなんて…。その上、ディエチまで…」

ゲンヤ達は2人の様子を見る。

特にゲンヤは溜め息をつきながら。

チンク

「父上、安心しろ。ディエチは漏らしていない。服を着替えてないだろ」

ゲンヤ

「いや、もしかしたらケツにウ　コ挟んでいるんじゃない」

チンク

「自分の娘が可愛くないのか？。あれは山崎殿を傷つけない為の嘘だ」

星海坊主

「ってことは何か？」

同じく脱糞した星海坊主もレジャーランドの服に着替えていた。ついでにキャラクターの帽子も着用。

星海坊主

「俺が脱糞した時はお前から引いたのに…。あの子は脱糞したぐらいじゃあ引き下がらないのか？」

ギンガ

「はい、ディエチ優しいですから…」

すると、山崎とディエチは観覧車に走り出す。

星海坊主

「うん、アイツら観覧車に走り出したぞ！」
ウエンディ

「もしかして、2人きりになって…」
クアットロ

「キスをするつもりね!」

ゲンヤ

「なんだと!?!。させるか!」

星海坊主

「食い止める!」

ゲンヤ、星海坊主、ウェンディ、クアットロは追いかける。

チンクはその様子を啞然と見る。

チンク

「どうする姉上?」

ギンガは何かを思い出していた。

チンク

「姉上?」

ギンガは昔の恋人のことを思い出す。

【回想】

ギンガには恋人がいた。

その恋人はとても大人びていた。

ギンガは内面的にも好意を抱いた。

そんなある日チンピラ達に絡まれ、恋人が襲われる。

恋人を助ける為、チンピラ達を容赦なくボコボコにした。

しかし、それがいけなかった。

恋人はそんなギンガを見て、怯えて彼女前から消える。

それ以来、ギンガは恋することを拒むのだった。

【現在】

ギンガは考える。

このままでは、ディエチは自分と同じようにゲンヤ達をボコボコにする。

そして、山崎と破局になる!。

ギンガは立ち上がる。

チンク

「姉上？」

【観覧車】

山崎とデイエチは向かい会つように座る。

山崎

「ごめんね、こんなことに付き合わせて…」

デイエチ

「ううん、そんなことないよ。捜査の手伝いも仕事のうちだから」

山崎

「ゼストらしき人物がこの遊園地に入ったって情報があったから…」

そうこの2人はゼストの搜索するためにカップルを装っていたのだ。

デイエチ

「それにしても、私を指名したのは何故？」

山崎

「えっ。それは…、君となら…。でも、似合わないよ。だって、ジエットコースターで脱糞しちゃったから…」

デイエチ

「気にしてない。大丈夫、漏らしちゃったぐらいで嫌いにならないから！」

山崎

「えっ!?!」

デイエチ

「あっ…」

2人は赤くなる。

山崎

「デイエチちゃん…」

デイエチ

「山崎さん…」

すると、ヘリコプターのモーター音が聞こえる。

山崎

「な、なんだ？」

デイエチ

「山崎さん、あれ！」

デイエチは外を指す。

山崎は振り向く。

なんと、地上部隊のヘリコプターが目の前に飛んでいた。

山崎

「な、何でヘリコプターが!？」

【ヘリコプター内】

ヘリを操縦しているのは…。

ヴァイス

「フッフッフ。遂に登場したぜ。この俺、ヴァイス・グランセニツク様のな」

ヴァイスは初登場で喜ぶ。

すると、星海坊主はヴァイスに番傘を突き付ける。

星海坊主

「うるせえ、黙って運転しろ」

ヴァイス

「は、はい…」

星海坊主だけではなく、ゲンヤ、ウエンディ、クアットロも居た。

ヴァイス

（クソ、初登場は親バカのデート妨害の手伝いかよ…。もっとま
しな役回りはなかったのかよ、作者…）

星海坊主

「ハッチを開け」

ヴァイス

「はい、ただいま！」

【観覧車の外】

へりのハッチが開くと、ゲンヤ、星海坊主、ウエンディ、クアット
ロがそれぞれの武器を構え、
4人

「お命頂戴つかまつる…！」
と山崎に狙いを定める。

山崎

「エエッ!？」

ダイエチ

「山崎さん、逃げ…」

すると、ゲンヤ達の目の前にウイングロードが現れる。

ゲンヤ

「こ、コレは!?!」

ウエンディ

「ウイングロード!?!」

ウイングロードを走り出す2つの人影があつた。

ギンガ

「人の恋路を邪魔するお馬鹿な人達」

チンク

「我々が許さん」

クアットロ

「な、何者!?!」

ギンガ

「お姉ちゃん13」

チンク

「姉上13」

4人

「エエツ!?!」

山崎とディエチは啞然する。

チンク

「コレでも、喰らえ!」

固有武装『ステイングー』をヘリのハッチ内に投げつける。

そして、『ランブルデトネイター』の効果でヘリは爆発して、落下していく。

4人

「あれー…！」

ヴァイス

「俺の出番はこれだけかよー…！」

悲鳴と叫びと共に撃沈した。

山崎とデイエチは撃沈したヘリを見て、啞然する。

そして、ギンガとチンクを見る。

チンク

「もう安心だ」

ギンガ

「お幸せに」

山崎

「えっと…。ありがとうございました…」

デイエチ

「何してるの、チンク姉さんにギンガ？」

ギンガ

「さらば…！」

ギンガとチンクはさっさと立ち去る。

山崎とデイエチはそんな2人を見送る。

山崎

「……変わったお姉ちゃん何だね」

デイエチ

「普段はあんなんじゃ無いんだけど……」

その後、この騒動が大変な騒ぎを招くとは、まだ誰も知らない。

【留置所】

一方、土方はスカリエツティの取り調べを行っていた。

スカリエツティの他にウーノとトーレとセツテも居た。

そして、そんな彼らの前にあるものがあつた。

土方

「ささっ、遠慮なさらずに召し上がって下さいな」

スカリエツティ

「いや、なんだねコレは？。マヨネーズに怨みがあるのかね？」

土方

「特製『カツ井土方スペシャル』だ」

カツ井にマヨネーズをたっぷりかけた『カツ井土方スペシャル』を

スカリエツティ達にご馳走して、トレディアとドクターキュラスのことを聞き出そうと考えた土方だが。

ウーノ

「コレをどうしろと…」

土方

「食べるに決まっているだろ」

トーレ

「これを喰えと言うのか!？」

スカリエツティ

「すまないが、こんな高カロリーなのはちょっと…」

土方

「んじゃ、トレディアとドクターキュラスのことを話せ」

トーレ

「貴様等に協力など…」

土方

「冷たいこと言うなよ。あのクリスの野郎と戦った仲じゃねえか」

ウーノ

「それでは交渉を…」

土方

「ほれ」

『カツ井土方スペシャル』を差し出す。

ウーノ

「いりません!」

すると、セツテは『カツ井土方スペシャル』に口を入れる。

トーレ

「ちょっと待てセツテ!？」

セツテは震える。

スカリエツテイ

「セツテ、なんてこと!？」

土方

「おい、なんだその言い方。敗北感感じ……」

セツテ

「…美味しい」

全員

「えっ……」

セツテ

「口の中がトレビアーン。こんな食べ物、食べたことはありません

！」

スカリエツテイ

「なっ……」

ウーノ

「嘘……」

トーレ

「そんな馬鹿な……」

土方

「そうか美味いか!」

土方はウーノを見て、

土方

「交渉成立だ」

と強引に成立させる。

ウーノ

「まだ何も言ってますん！」

土方とウーノは言い争うが、セツテのおかげで交渉成立した。

そして土方はトレディアとドクターキュラスの話聞き出すのだった。

次回に続く。

ステージ19 娘を持つ父親は大抵は過保護なんだね。(後書き)

なのは

「前回の投票の」

はやて

「結果発表!」

フェイト

「結果はコレです」

スバルギャラクシー
6票

宇治銀時井
5票

土方スペシャル
2票

はやて

「スバルギャラクシーの勝利です」
スバル

「やったー」

銀時

「ちえ、負けたぜ」

土方

「たったの2票!?!。おい、どうなってるだよこの投票!?!」
なのは

「それは秘密です」

土方

「納得できるか!?!」

フェイト

「それではまた!」

土方

「終わらせるな!」

スバル

「感想と質問をお待ちしています!」

ステージ20 アニメの中にアニメがあったことだってある。(前書き)

今年初の『真選組Strikers 鬼の子守歌』は、
読んで見てからの楽しみです。

ステージ20 アニメの中にアニメがあることだってある。

前回の話

デイエチが山崎とデートしていると勘違いしたゲンヤは殺し屋13軍団を率いて、山崎抹殺を図る。

しかし、ギンガとチンクがそれを食い止めるために13軍団を葬った。

だが、まだ誰も知らない。これが騒動の火種になることを…。

【マリンガーデン】

ヘリコプターが墜ちていく。

ヴァイス

「チクショー、こんな終わり方があるかー…」

ヘリコプターの落下地点は、倉庫だった。

【倉庫内】

倉庫内の隅に隠れていたイクスとアギト。

どうやら、ゼストは外出していた。

イクス

「ゼストはどこに言ったのかな……」

イクスには行き先を覚えていないらしい。

しかし、アギトは知っていた。

アギト

「あいつ（スバル）が旦那の部下の娘……。これは運命なのかな……」

ゼストはスバルの様子を見に行つたのだった。

イクスはアギトが何か隠しごとをしていることに気づく。

イクス

「アギト、ゼストから何か聞いていない？」

アギト

「えっ！。さ、さあ……」

イクス

「嘘、顔に書いてあるよ」

アギト

「そんなわけ……」

イクス

「アギト、教えて。ゼストには黙っているから」

アギトはスバルのことを話すべきか悩む。

しかし、イクスの真剣な眼差しに負ける。

イクスとアギトは倉庫から飛び出す。

【倉庫の外】

イクスとアギトは急いで逃げる。

その様子を見ていた人影がいた。

一般人に変装したマリアージュだった。

マリアージュ

「アギト、イクス発見……。キュラス様に連絡……」

(曲が流れる)

なのはマ〜ン〜

なのはマ〜ン〜

なの、なの、なのはマ〜ン〜

タイトルが表示される。

『魔王戦士リリカルなのはマンStrikers』

ビルの屋上でなのはと同じ髪型をしたマツチヨなでゴツイ顔つきなのに栗色の長髪（北斗の拳のケン　ロウみたい）の人、
『魔王戦士低町なのは』（性別：女性）は街を見下ろす。

ビルの隅で鎌を構えるマツチヨで金髪の美形、

（北斗の拳のト　）の人『警視庁の警視ファイト・テストロッサ』（性別：女性）。

悪の秘密結社の基地で、タヌキの怪人みたいな女性『黒き総帥九神はやて』（性別：女性）は部下に命令を下す。

その命令に従い、走り出す部下二人のブス女『ジャマル』、ブルドック『ザブウーラ』。

大盛カレーを十皿も平らげる青い髪のデブの少女『食欲人ツツパル・ナガジマ』。

投げキッスをするブ女の婦警『ツンデレガンマンのチィアナ・ランスター』。

飛竜『フリードリピ』を従え、わら人形と金鎚を持ちながら叫ぶ怖い少女『キャロ・ル・ルブオ』。

無駄にテンションを上げる『サイボーグ戦士エーリオーン・モンデリアル』。

極道の女みたいな人『リングイ・ハラオウン』が不敵に笑う。

そして、ちびっ子なりにマッチョでブサイクな少女の『逆ギレ・ビータ』となのはは拳と拳を激しくぶつけ合う。

なのはは全エネルギーを解放すると、大地は崩壊される。

そして、なのはの周りにフェイト達が現れ、ポーズを決める。

最後に、魔法少女のような美少女『炎の剣士シグミス』が現れる。

巨乳の谷間を強調と太もも露出された色っぽい衣装だった。

シグミス

「絶対に観るべし！」
刀を構える。

【聖王病院・スバルの病室】

スバル

「うーん、なのはマンいいね」

ノーヴェ

「だな」

長谷川

「……………」

スバルと見舞いにきたノーヴェは大満足だった。

しかし、長谷川には理解できなかった。ノーヴェが持ってきたアニメDVDをみんなで観ていたのだった。

長谷川

「これって、どうゆうアニメ?……………」

ノーヴェ

「知らねえのか?。人気アニメだぜ」

スバル

「魔王の力を宿した少女主人公なのはとその仲間達がバトルを通じて友情を深め、愛と正義を貫いて戦う感動アニメですよ」

長谷川

「少女!?。あのケン　ロウみたいな奴が少女なの!?。つか、どこに愛と正義があるの!?!」

スバル

「まあまあ、観ていればわかりますよ」

長谷川はDVDのブックレット読んでみた。

キャスト

なのは：田村 かり

ファイト：水 奈々

はやて：植田 奈

ツッパル：斎藤 和

チアナ：中 麻衣

エーリオン：井上麻里

シグミス：清 香里

ビータ：真田ア ミ

キャロ：高橋理 子

ジャマル：柚 涼香

ザプイーラ：一条 矢リングイ：久川

と書かれてあった。

長谷川

「オオーイ、ほとんど人気女性声優さんばかりじゃねえか!?!。全然ぴったりじゃねえよ」

スバル

「そうですか?」

長谷川は疑問を感じないスバルとノーヴェに啞然する。

すると、ルネッサ・マグナスが入ってくる。

ルネツサ

「失礼します。長谷川さん、ここに居たんですか…」

長谷川

「よう、ルネちゃん」

ルネツサはノーヴェを見て驚く。

スバルとノーヴェの顔がそっくりだからだ。

ルネツサ

「スバル防災士長、その方は…」

スバル

「妹です」

ノーヴェ

「不本意ながらな…」

ルネツサ

「双子の…」

スバル

「みたいですかね…」

長谷川

「俺も初め見たときは、スバルちゃんの抜け出すための簡単な変装と勘違いしたよ」

ルネツサ

「そっくりですね」

すると、長谷川は思い出す。

長谷川

「そつだ、そつくりと言えば…。あの殺された盗掘していた男、俺のことをトレディアって勘違いしていたぞ！」

ルネッサは驚く。

スバル

「トレディア？」

ノーヴェ

「トレディア…」

長谷川

「よっぽどそっくりなんだな、俺とトレディアって…」

すると、ノーヴェが思い出す。

ノーヴェ

「思い出した、ドクターのアジトで聞いたことあるぜ！」

スバル

「スカリエッティのアジトで!？」

長谷川

「スカリエッティ…。確か…」

ルネッサ

「三年前のテロリスト事件の主犯だった男です」

スバル

「ルネッサさん、トレディアって…」

ルネッサ

「重要参考人です」

スバル

「そうですね…。あのう、事件のことを聞いていいですか？」

ルネッサ、長谷川、ノーヴェは驚く。

ノーヴェ

「スバル、お前は参加できないだろう!」

スバル

「聞くだけだよ。心配なんだよ、ティア達が…」

長谷川

「スバルちゃん、本当に友達思いなんだな」

ルネッサ

「……わかりました。あなたも関係者ですから」

ルネッサは今までの捜査状況を話す。

スバル、ノーヴェ、長谷川は驚く。

特にスバルはキュラスの話を聞いて怒りを感じる。

長谷川

「まさか、俺の当たった雷がソイツの仕業だなんて…」

ノーヴェ

「ドクターより厄介かもな…」

ルネッサ

「それでは、私はこれで…」

ルネッサは病室を出る。

ルネッサ

「な、何ですかあなたは!？」

スバル達はルネッサの突然の大声に驚く。

ルネッサは後ずさりながら、病室に入る。

すると、フードを被った大男が入ってくる。

スバル達は驚く。

長谷川

「だ、誰!?!」

大男はフードを脱ぐ。

正体はゼストだった。

ルネッサ

「ゼスト・グランガイツ!?!」

長谷川

「エエツ!?!」

ノーヴェ

「コイツが!?!」

スバル

「ゼスト・グランガイツ!?!」

ゼストはスバルに顔を向ける。

ゼスト

「お前はクイントの娘なのか?」

スバル

「…母さんを知っているの?」

ゼスト

「クイントは、俺の部下だった」

スバル

「あなたが私を…」

ゼストは頷く。

ゼスト

「お前に話そう、昔あったことを…」

次回に続く。

ステージ20 アニメの中にアニメがあることだってある。(後書き)

短いながら、楽しめましたか？。

なのはマンとは魔法少女リリカルなのはをギンタマン風に見してみました。

ステージ21 真実とは時に傷つけるものとなる時がある。(前書き)

ゼストがスバルに告げるとは!？。

ステージ21 真実とは時に傷つけるものとなるときがある。

【高速道路】

土方は車でギンガとチンクのところに急いで戻ろうとする。

そこへギンガからの連絡通信が付き添い局員のデバイスに入る。

付き添い局員は土方に代わる。

土方

「ナカジマの姉貴か？。奴って、キュラスだったか？」

ギンガ

「いえ、それが……」

ギンガの話を聞いて土方は呆れていた。

ギンガからゲンヤの応援理由がディエチのデートの妨害だったからだ。

土方

「娘のデートの妨害？……。松平のつつあんか！」

ギンガ

「松平？……」

ギンガは首を傾げる。

松平とつあんとは、松平片栗虎のこと。

真選組の上司であり警察庁長官。

この警察庁長官は前にも娘の彼氏を抹殺しようとしたことがあったのだ。

土方は言おうと思ったが、面倒くさいので言わないようにする。

土方

「あんたも大変だな……」

ギンガ

「本当にすみません。父だけではなく妹までもが、山崎さんにとんでもないこと……」

土方

「気にするな。山崎は打たれ強い」

ギンガ

「いえ、別の意味で討たれそうになったんですけど……」

土方

「それより、あのマッドサイキスト野郎からトレディアとドクターキュラスのこと。そしてマリアージュの正体を聞き出せた」

ギンガ

「で、なんと？」

土方

「トレディアはオルセアの活動家らしい。そして……五年前に死んだらしい」

【聖王病院・スバルの病室】

スバル達は突然現れたゼストに驚く。

特にルネッサは激しく動揺していた。

ルネッサ

「ゼスト……」

ゼストはルネッサに気づき、驚く。

ゼスト

「お前は、トレディアの娘!？」

スバル達は驚く。

長谷川

「……あなた、今なんて!？」

ゼストは長谷川を見てさらに驚く。

ゼスト

「トレディア!?!。馬鹿なお前は奴に、ドクターキュラスに殺され
たはずじゃ……」

ノーヴェ

「殺された!？」

ルネッサは突然ゼストに掴み掛かる。

ルネッサ

「どーゆうこと!?!。父さんはあんたが殺したんでしょ!?!」

ゼスト

「俺が!?!。クソッ、ドクターキュラスめ……」

スバル

「ちょっと、母さんの話は!?!」

長谷川

「ルネちゃん、トレディアが父さんって……」
ルネッサ

「あんたが父さんを殺したって、ドクターキュラスが……」
ノーヴェ

「オイ、落ち着け!。話がややこしく……」

ドン、と戸の開く。

全員振り向く。

婦長

「くおらああああ、あんた達!」

開かれた戸から、江戸の病院の最強の婦長そっくりな聖王病院の最強の婦長が重装備を構えて現れた。

その姿は、ガン ム00のヴァーチェそのものだった。

婦長

「ここは病院だ!。静かにしやがれー!」

カタパルト照射の勢いでスバル達に向かっていく。

ゼスト

「ハッ……」

ルネッサ

「ヒッ……」

スバル

「フッ……」

ノーヴェ

「ヘッ……」

長谷川

「ホーーーーー……」

スバル達の叫びは外まで響いた。

数分後。

ポコポコにされたスバル達は正座をさせられる。

婦長はガミガミと説教する。

婦長

「次からは気をつけな！」

全員

「はい……」

婦長

「たくっ……」

婦長は出て行く。

スバル達はルネッサの方を見る。

スバル

「……ルネッサさん、どーゆーことなの？」

ルネッサ

「……………」

ルネッサは黙り込む。

ノーヴェ

「黙ってねえで……」

長谷川はノーヴェを静止する。

長谷川

「ルネちゃん、トレディアがお父さんって本当なの？」

ルネッサは頷く。

長谷川はゼストの方を見る。

長谷川

「あんたはルネちゃんのお父さんの仇なのか？」

ゼスト

「違う。それはドクターキュラスの嘘だ。奴こそがトレディアを殺した犯人だ」

ルネッサは手を強く握る。

ルネッサ

「……血が繋がってなかったでしたが、親子です。そして、それ以上……」

長谷川

「ルネちゃん」

ルネッサ

「あの土地で地の底のような戦場で……。同じ夢を見て戦った仲間でした」

スバル達は黙って聞く。

ルネッサ

「作り出された先に、平和な世界なんて……。信じたかった。けど、そんなのは空っぽだった。ただ人の数が多いだけ、人はどこでも戦っている。傷つけ、殺し合う。父もそうして絶望した。だから、父は世界に気づいて欲しかった」

スバル

「気づく？」

ルネッサ

「戦いの意味と、虚しさを……」

スバル達は黙り込む。

ゼスト

「……俺は元は時空管理局の魔導師だった。ある事件を……。戦闘機人事件を捜索していた」

スバル

「戦闘機人事件って!？」

ゼスト

「そうだ、お前の母親のクイントが殉職してしまった事件だ」

ノーヴェ

「……アレは、ドクターの仕業なんだろ」
ゼスト

「そうだ。同じく殉職した俺は、ドクターキュラスに身柄を渡された。俺を自分の手駒にする為にな」

スバル

「エエッ!？」

ノーヴェ

「あたしは眠っていたから知らねえ……」

ゼスト

「ドクターキュラス本人から聞いた。……奴はスカリエッティの生みの親の一人だ」

【高速道路】

土方

「それから、ドクターキュラスのことだ。奴は数十年前に異世界からやって来たらしい。その後時空管理局の最高評議会に保護され、時空管理局の裏の仕事任されたらしい」

ギンガ

「ですが、星海坊主の話では江戸に逃げ出したのは……」

土方

「時間の流れだよ。時空移動は場所だけじゃなく時間も変わる。江戸の世界に着いた時は若かったが、ミッドチルダ世界で数十年過ごした。これで奴が歳をとっていた理由が納得できた。そして、マリアージュとイクスは……」

【聖王病院・スバルの病室】

スバル達はゼストの話の話を聞こうとする。

ゼスト

「マリアージュとは死体を利用した兵器だ。しかし、作戦行動は昆虫並みでうまく使えなかった。しかし、それをドクターキュラスが改良した」

長谷川

「なんでドクターキュラスはそんなことを……」

ゼスト

「奴の目的はマリアージュを生み出すイクスだった。その為にトレディア・グラージェに近づいた」

ルネッサはゼストに掴みかかる。

ルネッサ

「そうだったのか！？。奴がオルセアを救いたって言ったのは……」

……

ゼスト

「嘘だ。手に入れたら、時空管理局に通報するつもりだった。俺が裏切るまではな……」

ノーヴェ

「な、なんで裏切ったんだ!？」

ゼスト

「……あの子を、イクスを見てな……」

長谷川

「イクスって……」

ゼスト

「ガレアの残虐卑劣な王とは聞いていた。しかし、まったくの逆だった。争いを嫌い、命を尊重する心優しき少女であった」
スバル

「そうなんだ……」

スバルはゼストの話聞いて、会ってみたいと思った。

ゼスト

「オレはトレディアに真実を明かし、活動を辞めさせようと言ったようにした。だが……」

【過去・トレディアのベースキャンプ】

ゼストは入り口に入ろうとした時。

トレディア

「ギャアアアア！」

ゼストは驚く。

ゼストは慌てて入る。

そこには血まみれのトレディアが倒れ、

血の付いたナイフを持ったキュラスが立っていた。

ゼスト

「ドクター、これは……」

キュラス

「ゼスト、イクスはどうした？」

ゼスト

「ドクター、なぜトレディア殿を!？」

キュラス

「決まっておるじゃろ、利用価値が無くなったから始末したのじゃ。世界の破壊というくだらんことを考えておったからな。それより、イクスの最後の力を……」

ゼストは怒り、キュラスを睨む。

キュラス

「どうした？」

ゼスト

「もう……、貴様に協力はしない」

ゼストは飛び出す。

キュラス

「フン、馬鹿者が」

キュラスはナイフを捨て、

キュラス

「大変だ、トレディア殿が!」
と大声を上げる。

【現在】

ゼスト

「俺はイクスを連れて逃げた。……コレが真実だ」

スバルとノーヴェエはキュラスに怒りを感じる。

ルネツサは愕然する。

長谷川はそんなルネツサの肩を持つ。

すると、ルネツサはデバイスを取り出し、通信回線を開く。

長谷川

「ルネちゃん！」

通信回線の画面が表示され、ドクターキュラスが現れる。

キュラス

「ど、どうし……、あつ、ゼスト!?!」

ゼスト

「ドクターキュラス」

長谷川

「てめーがドクターキュラスか!?!」

ノーヴェエ

「てめーの悪事、このおっさん（ゼスト）から聞かせて貰ったぜ！」

スバル

「あんただけは許さない！」

キュラスは事情を察知する。

キュラス

「そうか…。知ったようじゃな。だが、もう遅い」

ゼスト

「何？」

キュラス

「イクスは見つかった。マリンガーデンにな」

スバル達は驚く。

ゼスト

「馬鹿な！？、あいつらは倉庫に……」

キュラス

「わしのマリアージュが見つけたのじゃ。テレビを観ろ」

ノーヴェはテレビをつける。

テレビではマリンガーデンの火災ニュースが報道されていた。

スバル達は啞然する。

キュラス

「せいぜいマリアージュ達がイクスを手に入れるのを指をくわえて観てるのじゃな。ギャアツハツハツハツ」

キュラスは通信回線を切る。

スバル

「た、大変だ！？」

緊急事態発生！。

イクスはキュラスの手に渡るのが!？。

どうするスバル達!？

次回に続く。

ステージ21 真実とは時に傷つけるものとなる時がある。(後書き)

燃え盛るマリンガーデン!!。

はたして、イクスとアギトは!？。

そして、スバル達はどうする!？

ステージ22 『13』という数字の意味とは……。自分で調べてみよう。(前

遂にあの人が登場!。

ついでにあのキャラクターも……。

ステージ22 『13』という数字の意味とは……。自分で調べてみよう。

【聖王病院・スバルの病室】

スバル達はテレビを観て驚愕する。

マリンガーデンで大規模な火災が発生していた。

ニュースキャスター

「こちら、マリンガーデンで大規模な火災が発生しています。マリ
ンガーデンにきていた多数の客がまだ残っているそうです！。現在、
出動していた地上部隊が救助隊の連携をとって、救助活動していま
す」

ニュースキャスターが火災現場で詳しく状況を説明する。

火災現場から逃げる客もいた。

ゼスト

「いかん！、イクスとアギトがいる！」

長谷川

「なあー、キュラスはなんでイクスを手に入れようとするんだ！？」

ルネッサ

「キュラスは言ってました。奴にはマリアージュを生み出す力があ
ると……」

ゼスト

「キュラスがイクスから奪ったのは、コントロール機能だけだ。残
りの生産機能を奪う前に俺はイクスを連れ出したんだ」
スバル

「じゃあ、今活動しているマリアージュは……」
ゼスト

「戦場で死んだ軍人の死体で造られたやつだ。多いが限りがある」
ノーヴェ

「じゃあ、スバルをぶっ飛ばした戦闘用のマリアージュも、軍人の死体か？」
ゼスト

「いや、恐らく違うと思う。あの戦闘力は軍人の死体から創り出されたとは思えぬ……」
ルネッサ

「どーゆー意味だ!？」
ゼスト

「キュラスの研究の結果では、死体によって異なるマリアージュが誕生するらしい。強靱な死体なら強靱のマリアージュが誕生する」
ルネッサは気づく。

ルネッサは気づく。

ルネッサ

「そうか!、キュラスが江戸の世界の強い人間や天人を転送させたのは……」
スバル

「強靱なマリアージュを創り出すため!？」
長谷川

「それで、真選組の近藤さんや土方さんの死体を回収しようとしたのか……」
ノーヴェ

「えげつなー、あのハゲ爺……」
長谷川

「じ、じゃあ……、今まで転送された奴らは……」
ゼスト

「恐らく、マリアーヂュを創り出すために既に……」

スバル達は暗く落ち込む。

スバル

「ドクターキュラス……」

スバルは拳を握り、怒りをあらわにする。

ルネッサはふさぎ込み、拳を叩く。

ルネッサ

「私は……。私はそんな奴の言うことを信じたのか!？」

ルネッサは悔しがる。

長谷川

「ルネちゃん……」

ノーヴェ

「悔しがっている場合じゃねえだろ!。すぐにティアナに連絡しやがれ!」

ルネッサ

「はい!」

ルネッサはデバイスで通信回線を開く。

ティアナ

「ルネ、ちょうど良かった!。今マリンガーデンが……」

ルネッサ

「わかっています!。それはドクターキュラスがマリアーヂュ達を

使って、イクスを手に入れようとしているです！」

ティアナ

「えっ、どうしてそれを……」

ルネッサ

「……私はドクターキュラスの共犯者です」

ティアナは驚く。

スバル達は複雑な表情になる。

そして、ゼストはルネッサの後ろに立つ。

ティアナ

「あなたは!？」

ゼスト

「……執務官殿か?。君に話さなければならぬことがある」

ノーヴェはテレビに映っている衝撃映像に驚く。

ノーヴェ

「ス、スバル!?!、テレビ!?!」

スバル

「えっ……」

スバルもテレビを観る。

なんとテレビにゲンヤ・ウエンディ・クアットロ・星海坊主・ヴァイスが連行される姿が映っていた。

スバル達は言葉を失う。

【数時間前・マリナーガーデンの倉庫内】

ゲンヤ

「う、うーん……」

ゲンヤ達は目を覚ます。

ウエンディ

「あれ、此処は……」

星海坊主

「確か、野郎（山崎）を狙って……」

クアットロ

「思い出しましたわ！。お姉ちゃん13と姉上13が邪魔をして……」

……」

ゲンヤ

「な、なんで邪魔なんか……」

ヴァイス

「そりゃ、邪魔しますよ。馬鹿なあんたらを……」

星海坊主

「あんだとこら……」

ヴァイス

「ヒィー！」

星海坊主はヴァイスの首元を掴み、怒鳴る。

すると、外から物音が聞こえてくる。

ウエンディ

「なんつすかね？」

ウエンディは戸をそつと開けて見てみる。

ウエンディは驚く。

なんと外には地上部隊が沢山いた。

倉庫の周りには地上部隊が包囲していた。

隊員

「犯人達に告ぐ！。武器を捨てて、大人しく降伏しなさい！。繰り返し返す……」

どうやらゲンヤ達を凶悪犯とみなし、逮捕しようとしていたのだ。

ウエンディ

「パパリン、大変つす！。地上部隊の人達があたしらを逮捕するつて！？」

ゲンヤ

「何だと！？。俺を誰だと思ってやがる！。顔を見せ……」

ヴァイス

「よしてください！」

ヴァイスはゲンヤを止める。

ゲンヤ

「なんでだよ！。俺は部隊長だぞ！」

ヴァイス

「その部隊長がこの騒動の原因だって知れたら、責任問題っすよ」

ゲンヤ

「アッ……」

ヴァイス

「しかも理由が娘の彼氏抹殺なんて知れたら、娘だけじゃなく世間にまで嫌われますよ」

ゲンヤ

「くそっ！。世間を敵に回しても構わないが、ディエチに嫌われたくない……」

ヴァイス

「オイ、それでもあんたは地上部隊の部隊長か！？」

星海坊主

「隊長である前に、一人の父親だ！。ゲンヤさん、あんたは男だぜ！」

ゲンヤと星海坊主は互いに親指を立てる。

ヴァイス

「言ってる場合じゃねえだろ！」

ヴァイスは落ち込む。

ヴァイス

「畜生……。初登場が親父どもを乗せながらヘリの操縦で、次は逮捕されるのかよ……。なんでこんな役ばっか！？。銀魂の新八以上に酷いって！」

クアットロ

「どうしますの?」

ヴァイスは悩む。

ふっと倉庫の荷物に気づく。

壊れた荷物の中からキャラクターなどの衣装が出ていた。

ヴァイスはこれを見て思いつく。

ヴァイス

「これだ!」

【倉庫の外】

地上部隊は警戒態勢で倉庫の周りを包囲していた。

すると、倉庫の扉が開く。

隊員1

「来るぞ!」

隊員達は息を呑む。

扉から出てきたのは……。

ヴァイス

「怯えることはない！」

隊員達

「えっ……」

隊員達は啞然する。

その理由は……。

ヴァイス

「我々は争うつもりは無い」

ヴァイスはガン ム00のミスターブシドーの衣装を着ていた。

星海坊主

「コレには訳があるのだ」

星海坊主はキャラクターの着ぐるみを着ていた。

クアットロ

「抵抗はしないから、武器を下ろして」

クアットロはSMの女王様姿をしていた。

そして、ゲンヤとウエンディも変装して出てきた。

ゲンヤは昭和時代で活躍していたロン毛歌手に。

ウエンディも同じく、昭和時代にいたアフロヘアの女性の姿に変装していた。

隊員達は不審に思う。

隊員1

「なんだ、あれ……」

隊員2

「怯えると言うより、笑える……」

隊員3

「武器を下ろせって、あんだだって武器を持っているじゃん」

鞭を持ったクアットロのことを突っ込む。

隊員1

「あ、あんた達は一体……」

ヴァイス

「私はミスターブシドー13!」星海坊主

「俺はアートネイチャー13」

クアットロ

「ドS13ですわ」

何故かポーズを取る。

隊員1

「ミスターブシドー13……」

隊員2

「アートネイチャー13……」

隊員3

「ドS13……」

隊員達はますます不審に思う。

隊員1

「それで……、残りの二人は？」

ゲンヤとウエンディのことを尋ねる。

ゲンヤ

「ゲンヤ13」

ウエンディ

「ウエンディ13つす」

武器を構えてポーズを取る。

隊員1

「えっ、ゲンヤって……」

隊員2

「我が地上部隊の隊長？」

ヴァイスは焦る。

ヴァイス

（この馬鹿親子……！、何名前を暴露してるんだよ……？。変装で正体隠して、うまくとんずらする計画が台無しじゃねえかよ……）

どうやらこの変装はごまかすためだったが、ゲンヤとウエンディのせいで台無しになってしまった。思ったが……。

隊員3

「そんなわけ無いだろ。人違いだつて、13つて言ってるから……」

隊員1

「そ、そうだよな!。13つて言ってるし……」

隊員2

「間違いなく13つて、付け加えていたし……」

どうやらバレなかった。

ヴァイス

(あれ、バレてない!?!。13を付け加えたおかげなの!?)

ヴァイスは納得できないが一安心する。

隊員1

「それより、これはどういうことか説明してもらおうか!?!」

星海坊主

「わかった。今から説明するから、武器を下ろしてくれ」

隊員達は抵抗する意志は無いと判断し、武器を下ろす。

一安心した星海坊主は歩き出す。

しかし…。

星海坊主

「アッ……」

星海坊主はつまづいて、被り物を落とす。

隊員達は驚愕した。

星海坊主の素顔より、光る頭に。

隊員1

「…………ハゲだ」

隊員2

「アートネイチャーなのに、ハゲだ」

隊員3

「あの頭でアートネイチャーって言われて意味が無い」

星海坊主はキレる。

星海坊主

「テメーら、言いやがったな！」

隊員達

「ウワーーーーーッ！」

星海坊主は隊員達に殴りかかる。

隊員4

「抵抗したぞ！、取り押さえろ！」

隊員達は星海坊主を取り押さえようするが…………。

星海坊主

「テメーもハゲって言うな！」

隊員5

「違う！、激しいって言ったただけだ」

星海坊主

「また言いやがったな！」

隊員5

「グオツー……」

星海坊主と隊員達は争う。

ヴァイス

「ああっ……。ややこしくなった……」

ゲンヤ

「テメーら、アトネイチャー13に何しやがる！」

ウエンディ

「今助けるっす！」

ゲンヤとウエンディは星海坊主を助けるために隊員達に立ち向かう。

ヴァイス

「オオーイ！、余計なことするな!？」

隊員6

「あいつらも取り押さえろ！」

残りの隊員達はヴァイスとクアットロを取り押さえようとする。

クアットロ

「させません！」

クアットロは鞭で抵抗する。

ヴァイス

「グワツー、待ってくれ……」

ヴァイスはあっさり取り押さえられる。

その後、星海坊主とゲンヤとウエンディも取り押さえられる。

これが捕まった経路だった。

【現在・スバルの病室】

あとからルネッサとゼストと長谷川もテレビを観て啞然する。

ルネッサ

「あれは……」

ゼスト

「ゲンヤ隊長!？」

長谷川

「なんで捕まっているの隊長!？」

スバルとノーヴェはただ啞然するしかなかった。

すると、ゼストは話題を変えるようにスバルに話しかける。

ゼスト

「スバル。アギトを助けてくれてありがとう」

スバル

「アギトって、あの小さな女の子こと?。無事なの!？」

ゼスト

「ああつ、俺が魔法で治療した」

スバル

「そうか……。良かった」

ゼスト

「だが、そのために君は負傷してしまった」

ゼストは懐から緑色の宝石を取り出す。

ゼスト

「これは戦闘機人用瞬間治療の石だ。使えばすぐに治療できる」

スバル

「本当!?!」

ゼスト

「そして、これはデバイスを壊してしまった詫びだ」

ゼストが懐から出したのは……。

小さな日本刀の形をしたネックレスだった。

スバル

「これは……」

ゼスト

「ガレア王の秘宝『冥王の刀』だ」

スバル

「冥王の刀……」

スバルはじっと見るのだった。

【マリンガーデンの入り口前】

ヴァイス

「待ってくれ、コレには訳が……」

隊員1

「わかったわかった。あとでゆっくりと……」

ゲンヤ達を護送車に乗せようとした時。

？

「待ちやがれ！」

隊員達は突然の大声に驚く。

？

「そいつらを解放しな」

隊員達は声のする方を向く。

そこにはサングラスをかけたギンガとチンク。そして、土方がいた。

隊員1

「だ、誰だ!？」

ゲンヤ達も驚く。

ギンガ

「お姉ちゃん13」

チンク

「姉上13」

土方

「そして、マヨラ13だ!」

隊員達は別の意味で驚愕する。

隊員達

(また変なのが現れた……)

土方はマヨネーズ型のバズーカを構え、

土方

「発射!」

と引き金を引く。

バズーカから大量のマヨネーズが発射される。

隊員達

「ウワァッ!」

隊員達は大量のマヨネーズを浴びる。

クアットロ

「イヤァッ!?!」

ウエンディ

「あたしらもかかったっす!」

ゲンヤ達も浴びてしまう。

するとギンガとチンクは素早く動き、ゲンヤ達を回収して、この場

を退散する。

土方も退散する。

土方

「まったく、世話がやける……」

サングラスを外しながら、溜め息をつく。

土方はギンガからゲンヤ達が連行されてしまったことを聞き、この救出作戦を立てたのだ。

その後、土方やゲンヤ達は急いで変装を解き、救助活動をするのだった。

次回に続く。

ステージ22 『13』という数字の意味とは……。自分で調べてみよう。(後

ゼストが渡したデバイス『冥王の刀』とはいつたい……。

イクスとアギトの運命は!?!。

どうする土方!。

ステージ23 就職活動も生きること**も戦いだ。**（前書き）

今回は自分なりに銀魂のネタを入れて、アレンジしてみました。

テーマは『就職』と『戦い』と、そして『命』です。

ステージ23 就職活動も生きることと戦いだ。

【マリンガーデン地下通路】

イクスは必死に走り、アギトは飛ぶ。

13軍団（ゲンヤ達のこと）をドクターキュラスの手先と勘違いして、逃げていたのだ。

アギト

「まさか、キュラスの爺がこんなに勘が良いなんて……」
イクス

「また…、また罪の無い人達が、私のせいで……」
アギト

「イクス……」

アギトは落ち込むイクスを見て、自身も悲しくなる。

【聖王病院・スバルの病室】

スバル達はゼストの手渡したデバイス『冥王の刀』を見る。

ゼスト

「それは冥王が作り出した真剣・決闘用デバイスだ」
スバル

「えっ、使われたから『冥王の刀』って言われてるんじゃないの？」
ゼスト

「イクスの話では、扱った者がいない。その刀は自らの意志を持っている。『我を扱えたければ、力を見せる』と言い、手にした者に試練を与えたが、誰一人乗り越えられなかったらしい……」

ノーヴェ

「何だよ、使えねえじゃん……」

長谷川

「こんなもんをどうして持っているんだよ」

ゼスト

「イクスと共にあった。しかし、イクス本人は記憶が曖昧だったの
でどうして持っていたのかわからないらしい。記憶が戻るかもしれない
と思う、持ってきた」

長谷川

「それにしても剣じゃなくて、刀なんて……。冥王は江戸の世界を
知っているのかな……」

ルネッサ

「冥王は時空を移動する『舟』を持っていたらしいです。恐らく冥
王はたまたま江戸の世界に来て、刀に魅了されたと思います」

ゼストは何かを思い出す。

ゼスト

「そういえばキュラスはあとは『舟』がどうとか言っていたな……」
ルネッサ

「……ランスター執務官にそのことを伝えます」

ルネッサはデバイスを開く。

ゼスト

「俺はすぐにマリンガーデンに行く！」

ノーヴェ

「あたしも！。父さんやウエンディが心配だからな」

ゼストとノーヴェは飛び出す。

スバルと長谷川とルネッサが残る。

長谷川

「ルネちゃんは……行けないよね
ルネッサ

「……私は犯罪者です。逃亡するかもしれないので、しっかり見張
って下さい」

スバルは気まづくなる。

しかし、長谷川はルネッサに接しようとする。

長谷川

「人々に戦いの無意味さを気づかせるために親父さんは……」
ルネッサ

「マリアージュとイクスを利用しようと思いました」

長谷川

「でもそのやり方は気づかせるじゃなくて、傷付けているだけじゃないか！。その行為に気づくべきだよ親父さん！」

スバル

「長谷川さん……」

ルネッサ

「その通りです」

長谷川は考えながら頭をかく。

長谷川

「確かに戦争は良くない、無くしたい気持ちは分からなくはないけど。……うまく言えないけど、その前になんで戦争になっちゃうだろう。どうしたら止められるかを考えたことある？」

ルネッサは気づく。

長谷川

「俺も戦争しているよ。就職活動って言う戦争を……。無職だと生きていけない。だから仕事にありつけようと必死で頑張っている。職は限られているから、弱肉強食なんだよな……。でも俺は職に付いても失敗ばかりでまた職を探しているんだ」

ルネッサは黙って聞いている。

スバル

「……私も戦争を、戦っているんだよ」

ルネッサは驚く。

スバル

「私は危険な災害現場で人々を、命を助ける仕事をしています。失敗すれば死にますし、助けられなかったら負けなんです！」

ルネッサは理解しようとするが、わからなかった。

スバル

「犯罪者を捕まえる執務官の仕事をしているティアも……。動物達を助けて守るエリオとキャロも戦っているよ」

長谷川

「人間はしたくなくつても、いろんな戦争を、戦いをしているんだよ。これは避けられない」

スバル

「それでもやらなきゃいけないだ」

長谷川

「戦争は無くすことは出来ないけど、止めることは出来る。ルネちゃんも親父さんも戦争を止める為に戦うべきだったんじゃないかな？」

ルネツサは気づかされ、涙を流す。

長谷川とスバルは驚く。

長谷川

「ルネちゃん、ゴメン。言い過ぎた!？」

ルネツサ

「いいえ、あなたの言う通りです。無くすより止める為に戦えば良かったです。平和を唱え続けている父を誰もわかってくれないこんな世界なんか無くなればいいと思った自分が……」

長谷川はルネツサの肩に手を置く。

長谷川

「それはわかるよ。辛いよな、頑張っているのにわかって貰えないことは……」

ルネツサは思わず、長谷川の胸に抱きつき泣き出す。

長谷川は静かにルネツサの頭を撫でる。

スバルはルネッサを見て、切なくなる。

そして、聖王病院の婦長も様子を見ていた。

婦長

「……………今回だけだよ」

婦長は黙って立ち去る。

【マリンガーデン前】

一台の車がやってくる。

降りてきたのは、ティアナと近藤とエリオとキャラロだった。

エリオ

「僕達、先に行きます」

近藤

「おう、むちやはするなよ！」

キャラロ

「行つてきます！」

エリオとキャラロは素早くバリアジャケットに装着し、現場に急ぐ。

近藤

「俺らも急ぐぞティアナ殿！」

しかしティアナは浮かない顔をしていた。

近藤

「……ティアナ殿、大丈夫か？」

ティアナ

「あつ、すみません！。大丈夫です」

近藤

「……あの補佐官殿を気にしているのか？」

ティアナ

「……それより急ぎましょう」

ティアナは走り出す。

近藤はティアナを心配そうに見た後、ティアナのあとを追う。

【マリンガーデン内】

ディエチとチンクとウェンディは防災活動する。

山崎も手伝う。

すると、ヴォルツから通信が入る。

ヴォルツ

「よう、ナカジマ4姉妹……。じゃねえ、『N2R』だったか。臨時の協力感謝する」

ディエチ

「ヴォルツ司令、こちら栗毛。二人欠けていますがすぐに合流しま

す」

ウエンディ

「赤毛一号が来たら、赤毛コンビが突入します」

ヴォルツ

「助かる。だが、多少の訓練があるとはいえ、まだまだ素人に違くない。むちやするなよ」

山崎

「大丈夫です。僕がいます」

ヴォルツ

「えっと……。川崎さんだけっ？。いたんだ」

山崎

「山崎です！」

ヴォルツ

「監察役だと素人だ。むちやはするなよ、浜崎さん」

山崎

「だから山崎です！。覚える気ないでしょう！」

山崎が突っ込む間にヴォルツは通信を切る。

山崎

「まったく……」

デイエチ

「山崎さん、元気出して」

山崎

「そういえば、『N2R』って？」

デイエチ

「チンク姉が付けたユニット名。由来は私達の暮らす施設ブロックと部屋の番号（N Block-02-Room）なんだ。ノーヴェの希望で内緒にしてるの。言わないでね」

山崎

「うん、わかった」

デイエチ

「格好良いユニット名でしょう？」

山崎

「うん。でも……、君の今の姿も格好良いよ」

デイエチ

「えっ……」

デイエチと山崎の間に甘い雰囲気漂う。

ウエンディ

「もしも、お二人さん！。場をわきまえるっすよ」

デイエチ／山崎

「あっ……」

ウエンディ

「はい、これを運んで」

ウエンディは山崎に消火剤を持たせる。

山崎

「お、重い……」

デイエチ

「山崎さん！」

山崎

「だ、大丈夫だよ……」

山崎は無理して笑う。

デイエチ

「ありがとう」

また二人の間に甘い雰囲気漂う。

ウエンディ

「……逆効果だったす」

ウエンディは呆れる。

あとからチンクとノーヴェが来る。

【マリンガーデン地下通路】

借りたデバイスを見ながら土方は走る。

土方

「ここにまだ逃げ遅れた奴が……」

アギト

「やめろ！」

土方はアギトの大声に驚く。

土方は急いで駆けつける。

土方が見たものは、マリアージュ数体がイクスとアギトを取り囲むところだった。

マリアージュ1

「イクス、見つけました」

アギト

「来るな！」

マリアージュ2

「ドクターキュラス様が待っています」

イクス

「…！行きません」

マリアージュ3

「あなたに選択権はありません」

土方

「おいおい、そりゃねえだろ？」

イクスとアギト、

そしてマリアージュ達は土方の方に振り向く。

土方

「お前らそのイクスの家来なんだろ？。主の言つこと聞かねえのかよ？」

するとマリアージュ達は腕を武器に変える。

土方

「けっ、問答無用かよ」

土方は刀を抜く。

イクス

「に、逃げて下さい！」

土方

「逃げてもやる気満々だぜ、こいつら」

マリアージュ2は素早く動き出す。

土方も動き出す。

マリアージュ1は剣の腕で斬りかかる。

土方はその前にマリアージュ1の腹部を思い切り斬る。

土方の背後からマリアージュ2が襲いかかる。

マリアージュ2

「死ね」

土方

「お前がな」

土方の一振りはまだ続いていた。

回し斬りだった。

マリアージュ2も腹部が斬られるが浅い。

マリアージュ2

「くぅ……」

するとマリアージュ3が腕のキャノン砲を構えていた。

マリアージュ3

「喰らえ」

キャノン砲を発射する。

イクス

「危ない！」

キャノン砲の弾が土方に向かう。

土方は素早く刀をマリアージュ2に深く刺す。

マリアージュ2

「ぐあー！」

そしてそのまま刺したマリアージュを盾にして、キャノン砲の弾を防ぐ。

ドカーーン！

マリアージュ3

「なあっ！？」

マリアージュ2は粉々になり、土方が立つ。

そして土方は素早く動き、マリアージュ3に向かう。

マリアージュ3

「くっ……」

マリアージュ3はキャノン砲を構えるが、土方は消える。

マリアージュ3は驚く。

土方

「おせーよ」

マリアージュ3

「ハッ!？」

土方はマリアージュ3の足元にいた。

土方はマリアージュ3の頭を刀で突き刺す。

マリアージュ3は倒れる。

土方はマリアージュ3を倒れたマリアージュ1、2のところに投げつける。

そしてマリアージュ達は爆発する。

土方は煙草で一服する。

イクスとアギトは唾然する。

土方はイクスとアギトに近づく。

土方

「お前がイクスか？」

イクス

「……あなたは？」

土方

「真選組副長土方十四郎だ。お前のことはだいたい聞いている。一緒に来て貰おう」

イクスは立ち去ろうとする。

土方

「どこに行く？」

イクス

「逃げるです。あの子供が来ないところへ……」

土方

「……逃げてどうする？」

イクス

「私はいてはいけない存在です」

アギト

「……イクス」

イクス

「私やマリアージュ、聖王やゆりかごは戦いを止めるための兵器として作られました。求められたのは戦を自ら勝利に導く力」

土方は黙って聞く。

イクス

「だけど、生み出されるのは死と混沌と……新しい戦いだけ」

アギト

「イクス……」

イクス

「私、イクスヴェリアの失敗。融合騎達の失敗。聖王の失敗。みんな失敗作です。今の時代に生きてはいけません。だから私も消えなければならぬのに……。私は死ねないから……」

イクスは恐る恐る目を開ける。

刀はイクスの頭に寸前で止まる。

土方

「けっ、口だけかよ…」

土方は刀をしまう。

イクスは唾然する。

土方

「抵抗したということは死にたくねえ証拠だ。死にたくねえのに死ぬなんてほざくな！」

イクスは怯える。

アギトはイクスによる。

土方

「……こんな話がある」

イクスとアギトは首を傾げる。

土方

「ある両親を亡くした姉弟がいた。その姉は病持ちだった。しかし、そんなことを気にせず、弟を育て、姉思いな男になった。弟は今度は自分が姉を幸せにしようと頑張った。しかし、姉は病で倒れた。

姉のそばで弟は詫びた、出来の悪い弟ですまないと。しかし姉は笑顔だった。理由は充分幸せだったからだ」

イクス

「……充分幸せ？、何ですか」

土方

「……そいつが、弟がいたからだ」

イクスとアギトは驚く。

土方

「……その姉は弟のために生きた。自分の命を弟ために使ったんだ」

イクス

「……弟ために」

土方

「生まれた命も短い命も粗末にするな。自分のために使うのが嫌なら、誰かのために使えばいい。そして、自分のことを思ってくれる奴のことを考える」

イクスはゼストのことを思い、泣くアギトを抱き締める。

イクス

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

アギト

「イクス……」

二人は泣き出す。

土方

「泣けるじゃあねえか」

土方は煙草を吸う。

土方はイクスを抱えて走り出す。

イクス

「あ、あのう……」

土方

「ああん？」

イクス

「（赤くなりながら）と、十四郎様と呼んで良いですか？」

土方

「はあー？」

土方は頭をかく。

土方

「……好きにしろ」

イクス

「はい！」

アギトは二人を見て笑う。

土方とイクスとアギトは脱出を急ぐのだった。

次回に続く

ステージ23 就職活動も生きることと戦いだ。(後書き)

長谷川と土方のキャラクターのことを考えながら、書いてみました。

ご感想をお待ちしています。

ステージ24 再登場するキャラって、だいたいパワーアップしてることが多い
逃げる土方達に危機が迫る!？。

ステージ24 再登場するキャラって、だいたいパワーアップしてることが多い

【マリンガーデン地下通路】

イクスを背負いながら土方は走り、アギトは飛ぶ。

アギト

「なあ、おっさん」

土方

「誰がおっさんだ」

アギト

「あんた、この世界の人間じゃないな」

土方

「ああ、そうだ。江戸って世界からやって来てしまった」

イクス

「江戸？、どこかで聞いたような……」

土方

「ここにやってきたのは、ドクターキュラスの仕業だ」

キュラスの声

「その通りじゃ」

三人は驚く。

目の前にドクターキュラスが画像に現れる。

キュラス

「小娘、遂に見つけたぞ！」

イクス

「ドクターキュラス……」

キュラス

「愚かなゼストに騙されよって……。さあー戻って来い」
イクス

「嫌です！。私を利用するつもりでしょう？」

キュラス

「当たり前だ！。貴様は道具じゃ」

土方は怒る。

キュラス

「お前はマリアージユを生み出すために作られた存在。つまり道具以外何者でもない！」

アギト

「ふざけんな、この糞爺！」

キュラス

「貴様が黙れ、この出来損ない融合騎」

アギト

「てめー……」

アギトは燃え上がる次の瞬間！。

グサツ

アギト

「えっ……」

アギトの体に刀の先が突き刺さる。

土方とイクスは驚く。

アギトを刺した刀は、キュラスの画像の後ろからだった。

イクス

「アギト！」

刀は抜かれ、アギトは落ちるが、土方が受け止める。

そして刀の主が姿を現す。

オレンジ色のバイザーを付け、黒こけ色の服を着た男だった。

土方はイクスを降ろして、アギトを手渡す。

イクス

「アギト、アギトしっかり！」

イクスは必死に呼ぶ。

アギトは苦しむ。

土方

「……………てめーは」

キュラス

「紹介しよう。マリアージュ改02じゃ」

土方

「……………マリアージュは女の姿のはずだろ」

キュラス

「マリアージュ変化の際に性別機能を変化を消した。男性の方が好

都合じゃからの」

土方

「イクス、アギトを連れて隠れる！」

イクス

「はい！」

イクスはアギトを手に持ちながら、瓦礫に隠れる。

キュラス

「ちなみにこいつの元、死体は何だと思っ？」

土方

「知るか」

土方は刀を抜く。

キュラス

「貴様と同じ江戸の人間じゃ」

土方

「何だと？」

キュラス

「この名は知っているじゃろ。岡田似蔵、通称『人斬り似蔵』じゃ」

土方は驚愕する。

『人斬り似蔵』

盲目でありながら、数多くの人を斬り殺した居合い斬りの達人。

鬼兵隊の一員としてクーデターに参加し、妖刀『紅桜』を使っていたが、力に取り込まれ化け物に。

そして坂田銀時に倒される。

なお、この鬼兵隊のクーデターは真選組は知らない。

土方

「あの『人斬り似蔵』が死んでいたとはな……」
キュラス

「海に漂ってたところを拾ったのじゃ」

土方は笑う。

キュラス

「何がおかしい？」

土方

「嬉しいだよ。あの『人斬り似蔵』と戦えると思うつとよ」
キュラス

「ふん、やはり侍は馬鹿じゃのう」

土方

「……てめーにだけは言われたくないんだよ！」

ガキーーーーーン！

土方とマリアージュ改02の刀はぶつかり合う。

マリアージュ改02

「……見える」

土方

「何がだ？」

マリアージュ改02

「貴様の剣さばき。貴様の嬉しそうな顔」

土方は驚く。

土方は似蔵が盲目であることを知っていた。

その似蔵が自分の顔が見えることに驚いた。

土方はあることを考えた。

まずは一旦下がって、マリアージュ改02から離れる。

そして、懐から手に入れる。

マリアージュ改02やキュラスは息を呑む。

イクスも息を呑む。

土方が取り出したのは……。

マヨネーズだった。

全員唾然する。

そして土方はマヨネーズを一気飲みする。

マリアージュ改02

「……貴様、何故マヨネーズを呑む？」

土方は驚く。

土方

「てめー、これも見えているのか？」

マリアージュ改02

「……ミッドチルダ産のマヨネーズだろう」

土方

「……当たりだ」

イクス

「なんでマヨネーズを一気飲みしてるんですか!？」

土方

「気合いをマヨネーズに込めて入れているんだよ」

キュラス

「マヨネーズはかけるものじゃ! 飲むもんじゃないぞ!」

すると土方はまた懐に手を入れる。

キュラス

(今度は武器か?)

土方が取り出したのは……。

またマヨネーズだった。

キュラス

「またマヨネーズか！？どれだけ持っているんじゃない？！」

土方はマヨネーズをイクスに投げて渡す。

土方

「そいつは俺の元気の源だ。持つててくれ」
イクス

「は、はい……」

イクスはマヨネーズを抱える。

土方

「さてと、元気が沸いてきたところで、殺し合おうか？」

土方は刀を構える。

マリアージュ改02も刀を構える。

【別の地下通路】

エリオは数体のマリアージュ達に勝利する。

エリオ

「フッー、終わった……」

すると、奥から人影が現れる。

エリオ

「まだ居たか!？」

エリオは警戒態勢を取る。

人影が姿を現す。

番傘を携え、赤いバイザーを付けた三つ編みの大男だった。

エリオ

「あの傘、神楽さんと同じだ…。誰だ!？」

？

「我が名は、マリアージュ改03」

エリオ

「マリアージュ改!？」

？

「ほっー、それがマリアージュか?。女の姿じゃないのか」

エリオは後ろを向く。

後ろから現れたのは、番傘を携えた星海坊主だった。

エリオ

「あなたは…」

星海坊主

「星海坊主だ」

エリオ

「アアツ、あなたが神楽さんのお父さん」

星海坊主

「お前がエリオって坊主か？」

エリオ

「はい、エリオ・モンディアルです」

するとマリアーヂュ改03は通信回線を開く。

マリアーヂュ改03

「ドクターキュラス様」

キュラスの画像画面が現れる。

キュラス

「なんじゃ！ワシは忙しい……」

星海坊主

「久しぶりだな、キュラス」

キュラス

「ゲツ！う、星海坊主！？。何故貴様が此処にいる！？」

星海坊主

「貴様を追いかけてきたんだよ！」

キュラス

「馬鹿な！？貴様は砂漠の果てに飛ばしたはずだ！」

星海坊主

「（怒）やっぱり貴様の仕業だったか」

キュラス

「そつだ！貴様がいては計画がはかどらないからな！」

星海坊主

「今度は何を企んでやる？」

キュラス

「貴様に教える訳が無いだろ、ハゲ」

星海坊主は激怒する。

星海坊主

「うるせえ、てめーはすっかり爺だろが」

キュラス

「ふん、ワシはその分知識を蓄えたわ。貴様なんざ毛根が全然枯れておるではないか」

星海坊主はさらに激怒する。

星海坊主

「オラーーーーー！ぶっ殺す！」

怒りのあまり画像画面のキュラス目掛けて番傘のマシニングンを撃つ。

エリオ

「星海坊主さん、落ち着いて！」

エリオは必死に止める。

キュラス

「殺されるのは貴様のほうじゃ」

マリアージュ改03は構えを取る。

星海坊主

「そんなおもちゃで俺が倒せると思っているのか？」

星海坊主も構えを取る。

キュラス

「フフツ」

エリオは息を呑みながら、二人の緊迫の場面を見る。

そして二人は動いた。

ドーーーーーン

二人の番傘は強くぶつかる。

星海坊主は蹴りを入れようとするが、マリアージュ改03は手で防ぐ。

そのまま星海坊主の足を掴む。

星海坊主はもう一本の足でマリアージュ改03の脇腹を蹴る。

マリアージュ改03は手を緩め、星海坊主の足を離す。

星海坊主はすぐに離れる。

星海坊主

「その力……。まさか!？」

キュラス

「察しが良い。そうじゃ、元になった死体は貴様と同じ……。夜兔族じゃ」

星海坊主とエリオは驚く。

エリオ

「夜兔族って、あなたや神楽さんと同じ……」

星海坊主

「貴様、どこで夜兔族の死体を……」

キュラス

「江戸の世界、吉原という場所じゃ」

星海坊主

「まさか！……夜王か！？」

エリオ

「夜王って……。確か前に月詠さんが話していた、かつての吉原の支配者！」

星海坊主

「そして、俺のライバルだった男だ」

夜王とは吉原を支配していた夜兔族の男。

かつては宇宙海賊春雨の幹部を務めていたことがある。

銀時と死闘を繰り広げた際、晴太達が開けた穴によって弱点である日光を浴びてしまい、銀時の攻撃を受けて倒される。

キュラス

「残念ながら違うな。夜王の死体はかなりボロボロになっていたの
で使えなかった。しかし、運良く別の夜兔族死体を見つけたので回
収したのだよ」

星海坊主

「別の夜兔族？」

エリオ

「ドクターキュラス、お前は人の死体をなんだと思っているんだ！」

星海坊主はエリオの激怒に驚く。

キュラス

「ああん？急に……」

エリオ

「いいから答えろ！」

キュラス

「ふん、わしは役に立たない死体を再利用しただけじゃ！。いわゆるエゴだ」

エリオは怒りのあまり魔力を爆発させる。

エリオ

「貴様！」

エリオは襲いかかる。

マリアージュ改03

「ふん！」

マリアージュ改03の番傘とエリオのストライダーが強くぶつかり合う。

星海坊主

「抜け駆けするなよ！」

星海坊主も参加する。

【マリンガーデン地下通路】

土方

「うらぁー!」

マリアージュ改02

「ハァー!」

土方とマリアージュ改02の身体には切り傷が多数あった。

土方

「なるほど、盲目じゃなくなったことでハンデがなくなったようだな」

マリアージュ改02

「覚えていない。生まれ変わる前のことは……。しかし、これならわかる。……誰かを斬り殺したいと言う快感だ」

土方

「ほっー、ソイツは不思議だな」

イクスはハラハラと見る。

すると、イクスの後ろに人影が突然現れる。

イクスは気づく。

それはマリアージュ改01だった。

移動魔法『シャドーワープ』で移動したのだ。

イクス

「アアッ!?!」

マリアージュ改01はイクスを掴む。

イクス

「嫌—————!」

土方はイクスの叫びに気づく。

土方

「イクス!」

思わず態勢を崩す。

マリアージュ改02

「スキあり」

グサッ!

土方

「ガッ……!」

土方はマリアージュ改02に腹を貫かれる。

イクス

「十四郎様!」

マリアージュ改02は刀を引き抜く。

そして土方は倒れる。

マリアージュ改01

「…………行くぞ」

マリアージュ改02

「アアッ、もう少しやりたかったが…………」

マリアージュ改02はマリアージュ改01のところにいく。

イクス

「離して！」

土方は苦しみながらも、顔を上げる。

土方

「イ、イクス…………」

マリアージュ改01はシャドーワープを発動させる。

マリアージュ改達はゆっくりながら沈んでいく。

イクス

「アギト、十四郎様！」

アギトも苦しみながらも顔上げる。

アギト

「イ、イクス……」

マリアージュ改達は消えてしまう。

土方

「……チクシヨー！」

土方の叫びが響くのだった。

【別の地下通路】

星海坊主とエリオはマリアージュ改03と戦っていた。

マリアージュ改03は二人がかりにも関わらず、苦戦していなかった。

マリアージュ改03のスピードが二人に追いついていた。

星海坊主

「早い！」

エリオ

「二人がかりで戦っているのに」

するとマリアージュ改03は下がる。

二人は首を傾げる。

マリアージュ改03

「お前達の相手は終わりだ」

星海坊主

「どーいう意味だ!？」

マリアージュ改03は逃げる。

エリオ

「アツ、待て！」

マリアージュ改03は逃げながら番傘のマシガンで天井を狙い撃ちする。

天井は破壊され、崩れ落ちる。

道が塞がれる。

星海坊主

「チクショー！」

するとエリオのデバイスに通信が入る。

エリオはデバイスを開く。

キャロ

「エリオ君、大変！」

エリオ

「キャロ、どうしたの!？」

キャロ

「土方さんが大怪我を……」

エリオと星海坊主は驚く。

【キュラスのアジト】

キュラスは震える。

キュラス

「やったぞ！遂にイクスを手に入れた！」

大喜びで回る。

キュラス

「これで最後の能力を手に入れた。後は……」

キュラスはコンピューターのキーボードを動かす。

すると、船の設計図らしき画像が現れる。

キュラス

「後はこの改造した『冥王の方舟』をイクスに発動させるだけじゃ。ギヤアツハツハツハツ……」

ドクターキュラスの高笑いが響く。

事態は最悪な展開となってしまった。

続く。

ステージ24 再登場するキャラって、だいたいパワーアップしてることが多い
恐るべしマリアージュ改シリーズ……。

土方とアギトの安否は!？。

そして『冥王の方舟』とはいったい……。

ステージ24・5 盛り上がるうちに主題から離れてしまっているよね。

遂に三十話に到達しました。

その記念に企画があります。

それではどうぞ！。

ステージ24・5 盛り上がるうちに主題から離れてしまつてしまふことがあるよね。

【万事屋『銀ちゃん』】

新八

「遂に『真選組Strikers 鬼の子守歌』が30話到達しました」

神楽

「凄いアル」

イエーイ

ドンドンパッフパッフ

銀時、新八、神楽の万事屋と。シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラのヴォルケンリッター達が祝う。

新八

「あれ、なのはちゃんとフェイトちゃんは？。こんなに嬉しい事なのに……」

銀時

「あれだよ『魔法少女リリカルなのはThe MOVIE 1st』のインタビューされに行つたんだよ」

新八

「あつ、あの第1シリーズの映画版！」

神楽

「ヴィヴィオも一緒に行つたネ」

「シャマル」

「映画といつたら……」

ヴィータ

「銀魂も映画になったんだよな」

ザフィーラ

「映画の内容は原作の紅桜篇を解釈した」

シグナム

「『劇場版 銀魂 新訳紅桜篇』だったな」

新八

「そうなんです！あの『紅桜篇』なんですよ」

シヤマル

「確か、出ないはずの真選組の皆さんも出るんですよ」

ザフィーラ

「そして神楽の兄も……」

ヴィータ

「んで、銀時が高杉にぶつ刺されるんだよ」

シグナム

「確かに新訳ならではの展開だな。変わったところが多いな……」

新八

「なのはちゃんの映画も変わっていましたね。特に服装やデバイスのデザインが……」

神楽

「見慣れない奴もいたアル」

シヤマル

「アアツ、リニスさんですね」

ヴィータ

「アイツは確かにテレビシリーズ第二期に出ていたな……」

銀時

「それにしても、あんなに無邪気な子がすげえ魔力を持っているなんてよ。その上わがままで頑固者だから、後に『白い魔王』の異名を取っちまうほど恐ろしい奴になるなんて……。ほんと時の流れは残酷だよな……」

新八

(銀さん、なのはちゃんがいないから言いたい放題言ってるよ……)

新八は苦笑する。

ヴィータ

「そーゆう銀魂だって下ネタや嘘の最終回とかで色々と問題起こしてるじゃーねーか。そんな銀魂が映画化したことが信じられねえよ」

銀時

「ヴィータ君、銀魂だって下ネタばかりじゃないよ。バトルや感動があるじゃーねーか。銀魂は自由なアニメなんだよ。コレが人気の秘密だよ」

シヤマル

「銀さん、魔法少女リリカルなのはだって感動と友情。そして私のような美少女がいるから人気が出るんです」

神楽

「オイ、自分で美少女って言ってるよ」

シヤマル

「確かに料理が好きだし、誰でも治しちゃう回復でなのはちゃん達を助けてるわ。でも美少女って呼ばれるなんて……。イヤだわ、美しさって罪だわ……」

新八

「ちよつと、何自分を褒めているんですか!？」

銀時

「ほっとけ新八。影が薄いことを認めたくない逃れなんだ。察してやれ」

新八や神楽、そしてヴォルケンリッター達はシヤマルに呆れる。

銀時

「銀魂の疑問より、俺はリリカルなのは……。イヤ、他の美少女アニメに疑問があるんだよな」

新八

「美少女アニメに疑問？」

シグナム

「なんだそれは？」

銀時

「それは……」

新八や神楽、ヴォルケンリッター達は息を呑む。

銀時

「それは……」

銀時はなかなか言わない。

ヴィータ

「また時間稼ぎか？」

新八

「イヤ、あの顔は真剣だ」

銀時は遂に口を開く。

銀時

「乳首だ」

一瞬風が吹く。

新八

「えっ……」

神楽

「乳首？」

シグナム

「乳首とは……」

ヴィータ

「胸にある」

シヤマル

「あの乳首ですか……」

ザフィーラ

「……何故乳首だ？」

銀時

「まずはこれを見る」

銀時はボードを取り出す。

ボードにはリリカルなのはや他の美少女アニメの場面写真だった。

ほとんど変身シーンや入浴シーンばかりだった。

シヤマル

「イヤ！銀さんなんてものを見せるですか!？」

ヴィータ

「やっぱりそーゆう趣味だったかよ……」

銀時

「違う！趣味で見せているんじゃないね!」

ザフィーラ

「じゃあ何故……」

銀時

「このボードに貼ってあるものには二つの共通点がある」

新八

「二つの共通点？」

全員ボードを良く見る。

神楽

「……ほとんど乳がでかい奴ばかりね」

ヴィータ

「やっぱりお前の趣味じゃねーか！」

銀時

「そつだ」

新八

「あつ、認めた」

銀時

「違う！認めたじゃなくて、共通点の1つを当てたことを言ったんだよ！」

シヤマル

「大きな胸が？」

銀時

「あと1つ。……気づかねーか？」

全員もう一度見る。

新八

「……やっぱり、どれもいやらしいです」

神楽

「そう言いながら新八、顔がにやけているアル」

ヴィータ

「お前もムツツリスケベだな」

ザフィーラ

「そしてシャマルは手で隠しているが、指の間を開けてしっかりと見
てるぞ」

確かにシャマルはしっかりと見ていた。

シグナムは考える。

そして気付いた。

シグナム

「まさか。……乳首か」

銀時

「その通りだ！」

興奮の余りにボードを投げ捨てる。

銀時

「でかい乳なのに、乳首が無いなんて……。これはあれだ！ 毎の乗
つてないショートケーキ！ カラメルがかかってないプリン！ アンコ
が入って無いあんパンと同じ何だよ！」

銀時の力説に啞然する新八達。

シグナム

「あんこが入って無い時点であんパンじゃなく、普通のパンだ」

銀時

「考えてみる。せつかく変身シーンや入浴シーンなのに、深夜アニ
メだから問題ないはずなのに素っ裸を見てみれば形だけで、肝心の
乳首が無い！ 全然色気が無いぞ」

新八達は考えてみる。

新八

「……確かにそうかもしれない」

ザフィーラ

「……確かに男としては間違った考えじゃない」

シャマル

「……確かに乳首が無い体はある意味不気味ね」

ヴィータ

「ああっ、そういうえばアニメ『真 姫十無』や『クーンズブ
イド』ではポロリシーンじゃ、乳首辺りが隠されていたな」

銀時

「そっだ！地上版では隠されている。しかし、DVDじゃ乳首をし
っかり映されている！」

神楽

「なんでアルか!？」

銀時

「DVDを売るためだよ。地上版で見れない乳首をDVDで収録し
てたくさんファンに買わせてるだよ。乳首はおっぱいにとって重要な
もんだってわかってるんだよ」

ヴィータ

「そっなの？」

とザフィーラに尋ねる。

ザフィーラ

「……聞くな」

銀時

「というわけで、美少女アニメの色気には乳首を欠かせてはならな
いんだ！銀魂がチ コをさらけたようにな！」

シヤマル

「ちよつと！何チ コって言ってるんですか！」

新八

「それにちゃんとモザイクかかっていますよ！」

すると神楽とヴィータがゴソゴソと話す。

神楽

「私達にも乳首があれば」

ヴィータ

「色気がアップするかも……」

神楽とヴィータはうつとりする。

銀時

「いや、貧乳に乳首はきついぞ。目立つのは乳首だけ。これはアレだよ、梅干し1つしかない載ってない平べったい皿と同じだ」

神楽とヴィータはキレる。

神楽

「んだとコラ！」

ヴィータ

「あたしらの胸は平べったい皿か！」

銀時

「悪かった悪かった。じゃあ苺一粒な」

神楽ノヴィータ

「そーゆー問題じゃあねーだろ！」

銀時に襲い掛かる。

銀時

「ああああああ」

シグナム

「まったくせつかくの三十話記念なのに乳首の話にするとはい……………」

新八

「本当にすみません」

シグナム

「……………私に乳首が付いたらどうなるだろ」

新八

「えっ……………」

新八は想像した。

そして鼻血を噴出して倒れる。

シグナム

「新八！」

シャル

「新八さん！」

シグナムとシャルとザフィーラは駆け寄る。

そしてボロボロの銀時は起き上がり、

銀時

「見たか、これが乳首の力だ。巨乳のシグナムに乳首を付ける。これは『ドゴンボール』悟とベータの融合と同じ位強力な組み合わせなんだよ」

ヴィータ

「同じと言われる悟 とベ ータっていったい……」
ザフィーラ

「あのう……。そろそろきた質問に」

シヤマル

「ああつ、そうね」

シヤマルはデバイスで画面を表示する。

シヤマル

「ペンネーム【天使】さんからの質問です。『総悟さんは出しますか？今後の展開が気になります』確かに気になりますね……」
ヴィータ

「あいつは二話しか出てないよな……」

銀時

「お答えします。総悟は出します。今後の展開をお楽しみに」
ザフィーラ

「短い答えだな」

シヤマル

「次の質問です。ペンネーム【ビチャード・オン】さんからの質問。『この小説でゼストさんは死亡フラグ回避できますか？是非とも生き残って欲しいです。イクスとアギトの為に』」

シグナム

「ゼスト……。確かに死ぬには惜しい男だな……」

新八

「生き残ってくれますよね？」

銀時

「それを言ったら、面白く無くなるだろ。これはノーコメントさせて頂きます。……しかし、ゼストは男を見せます！」
シヤマル

「次の質問です。ペンネーム【神威銀時】さんからの質問です。」
夜王の死体はダメになっていたのに何故、似蔵の死体も紅桜の侵食でダメになっていると思うんですが」

シグナム

「確かに不思議だ」

銀時

「作者の話によると、似蔵に侵食した紅桜は機械からくりでできている。機械的な侵食だから、問題なく改造出来たらしい」

新八

「なるほど……。ボロボロになった死体ではないからできたんですね」

ザフィーラ

「しかし、そんな侵食された死体を改造できたドクターキュラスは敵ながら凄い……」

ヴィータ

「ああ……。けど、スバル達はそんな奴に負けるわけにはいかねえ」

神楽

「その通りネ！正義は必ず勝つネ！」

銀時

「以上！質問に答えました」

シグナム

「あつという間だったな」

シヤマル

「しかも、始めから乳首の話なんて……」

ヴィータ

「どうしてくれるだよ」

新八

「まあまあ……。実は作者から三十話記念の企画があるんですって」
ザフィーラ

「企画？」

新八

「コレです！」

遂に発動！【人気投票】

新八

「この物語に出てきた登場人物の投票をします！感想の一言に記入して下さい。お一人様三票です」

神楽

「勿論質問コーナーに出た私らにも投票できるネ！」

ヴィータ

「まじかよ!？」

シャマル

「嬉しい！」

銀時

「締め切りは今月いっぱいだからな!。それじゃ……」

全員

「投票をお待ちしてます！」

いつの間にかなのはとフェイトとヴィヴィオがいた。

新八

「なのはちゃん、フェイトちゃん、ヴィヴィオちゃん!？」

神楽

「いつ帰ってきたネ！」

ヴィヴィオ

「人気投票ってあたりから」

フェイト

「それより、銀時以外のみんなはここを出て」

銀時

「なんで俺だけ……」

フェイト

「出ないと、巻き添えだよ」

フェイトの言葉で銀時以外の全員は出て行く。

銀時

「……この展開、まさか!？」

すると、机の下からレイジングハートが出てくる。

なのは

「……銀さん、幼い私への感想よくわかりました」

銀時

「……レイジングハートで聞いていたんですね」

なのはは頷き、レイジングハートをバスターモードにして構える。

なのは

「銀さん、思い切り頭を冷やしてあげる」

なのはの『スターライトブレイカー』が炸裂する。

銀時

「また、ああああああ……」

万事屋『銀ちゃん』から『スターライトブレイカー』が飛び出る。

新八達は銀時を拜むのだった

終わり

ステージ24・5 盛り上がるうちに主題から離れてしまふことがあるよね。

皆さんの投票をお待ちしています。

ステージ25 大人はさり気なくアドバイスする。(前書き)

人気投票期限はまだあります。

投票は感想かメッセージに書いて下さい。

『真選組Strikers 鬼の子守歌』 始まります。

ステージ25 大人はさり気なくアドバイスする。

マリンガーデンでの救助活動と戦い……。

チンクとノーヴェの加勢やキャロの活躍で最悪は免れる。

土方はマリアージュ改02の刃に倒れ、イクスはマリアージュ改01に連れて行かれるという結果に終わる。

その後聖王病院では、ルネツサが自首をする。

そして、イクスがさらわれたことを知ったゼストは時空管理局に協力することとなった。

【聖王病院・手術室前】

土方は現在手術室で傷を塞ぐ手術をしていた。

ティアナと近藤とエリオとキャロは座りながら待っていた。

ティアナは落ち込んでいた。

近藤は思い切って、口を開く。

近藤

「心配するなよ。トシはこんなことでくたばる男じゃないって！」
ティアナ

「……はい」

近藤は土方のことだけで落ち込んでいるわけではないと悟る。

近藤

「……あのルネッサという補佐殿ことを考えているのか？」

ティアナは驚く。

エリオ

「近藤さん！」

キャロ

「それは……」

近藤

「すまん。やはり凶星か……」

ティアナ

「……正直辛いです」

近藤

「無理もない。優秀で信頼できる子だったからな……」

ティアナ

「真面目で優秀だから、選んだんです。組んでいく内にこのまま補佐にしようと考えてました」

近藤達は黙って聞く。

ティアナ

「トレディアの名前を聞いた時の彼女の様子がおかしかったので、彼女の過去を調べました。結果は繋がりがありません。……このまま犯行を続けるようだったら逮捕するつもりでした」

近藤

「ティアナ殿……」

ティアナ

「……情けないです。自分の選んだ補佐が容疑者だったなんて」

エリオ

「いや、それはティアナさんの責任じゃあ……」

キヤロ

「そうですね」

ティアナ

「結果的に利用されたわ。……もう取り返しがつかないわ」

暗い雰囲気になる。

すると近藤は口を開く。

近藤

「……同じだな」

ティアナ

「えっ……」

近藤

「俺も信頼してた奴に裏切られたことがあって、自分の組織を危うく潰されかけたことがあるんだ」

ティアナ達は驚く。

近藤

「そいつの名は『伊東鴨太郎』。幕府との交渉役としても、剣の腕もトシと並ぶほど優秀な真選組の参謀だった。隊士達はもちろん、俺自身も『先生』と呼んで信頼していた」

エリオ

「凄い人なんですネ」

キャラ

「でも、そんな人がどうして……」

近藤

「真選組局長の座が欲しかったらしい。しかし、本当は違う」

ティアナ

「えっ」

近藤

「……幼い頃、双子の兄貴が居たんだが……。病弱だったので、両親はかかりきりだったんだ。……先生はご両親や友人達にに自分を見て貰おうと勉強や武術を一生懸命頑張ったらしいが、逆に憎まれたらしい……」

その時ティアナは自分と鴨太郎を重ねる。

ティアナも認めて貰おうと自分なりに努力をしたからだ。

近藤

「さらにご両親からも認めて貰えるどころか、疎まれたらしい……」

エリオとキャラは幼き自分を思い出す。

エリオは実の親だと信じていた人に裏切られ。

キャラは強力すぎる竜召喚の力を恐れられ、一人で旅に出されたのだ。

近藤

「……先生は寂しかったんだ」

ティアナ

「近藤さん……」

エリオ

「あのう真選組の崩壊は……」

近藤

「アアツ、そうだったな。裏切られたことに気づいた俺は落ち込んだよ。そんな時に万事屋がトシを連れてきてくれたんだ。トシは妖刀に取り憑かれて可笑しくなっていたのに気付かず先生が言うがままに謹慎させてしまった。そしてトシが万事屋に頭を下げて『真選組を護ってくれ』と言ってくれたこと知った俺は『トシを連れて帰れ』と万事屋に言った。仲間同士の殺し合うところを見るぐらいなら、死んだ方が良いと考えた」

ティアナ

「……近藤さん」

近藤

「そんな俺にトシはこう言った。『局長のアンタには義務がある。隊士が死んでいってもアンタは生き残れ、アンタは真選組の柱だ。アンタが要る限り真選組は終わらない。真選組の護る剣だ』とな」

ティアナ達は驚く。

近藤

「だから俺は局長を務める。こんなお人好しで馬鹿な俺について来てくれる奴らの為に……」

ティアナ達は感動する。

通路の死角に隠れるように星海坊主とゲンヤにギンガ。そしてゼストがいた。

近藤の話を聞いていたらしい。

キャラ

「それで伊東さんは……」

近藤

「……真選組隊士として死んだ。最後にあいつはなんて言ったと思う？……」『ありがとう』。そう言いながら逝ったよ」

ティアナ達は落ち込む。

特にキャラは思わず涙を流す。

近藤も涙を流す。

近藤

「あつ、えーとだな。ティアナ殿も立ち止まらずに進んでほしい！今の自分を変えずに、素直で正直な自分のままで」

ティアナ

「……はい」

近藤

「もちろん俺も手伝う！」

ティアナ

「近藤さん、ありがとうございます。沖田さんが近藤さんのことを慕う理由がわかりました」

近藤

「そうか？」

すると手術室のランプが消え、扉が開く。

ティアナ達は気づく。

担当医師が出てくる。

ティアナ

「あのう、土方さんは？」

担当医師

「大丈夫です。すぐに傷を塞ぎました。応急処置の回復魔法が良かったからです」

エリオ

「キャロ、流石だね」

キャロ

「良かった……」

近藤

「キャロ殿、ありがとうな」

眠る土方が運ばれる。

ティアナ達は心配そうに見送る。

近藤

「……トシと一緒にいたアギトという小さい嬢ちゃん？」

ティアナ

「メンテナンス室で治療したそうです。もう大丈夫だそうです」

近藤

「そうか……」

キャロ

「二人は無事で良かったです」

近藤

「そつだな……」

【待合室】

エリオは一人で缶コーヒーを飲んでいた。

すると、星海坊主がやって来る。

星海坊主

「よう」

エリオ

「星海坊主さん」

星海坊主

「座って良いか」

エリオ

「はい」

星海坊主はエリオの隣に座る。

星海坊主

「……聞いて良いか？」

エリオ

「何をですか？」

星海坊主

「キュラスがマリアージュの話聞いた時、お前の怒りは尋常じゃなかったな。……理由があるのか？」

エリオは少し黙り込んだ後、口を開く。

エリオ

「許せなかったです。命を弄ぶドクターキュラスが」

星海坊主

「……理由ありだな」

エリオ

「……僕の命は人工的に造られたんです」

星海坊主

「人工的？」エリオ

「『プロジェクトF』と言う生命創造技術です。僕は死んだモンデリアル家の死んだ息子のクローンとして生まれました。でも、信じていた親に裏切られ、研究施設に閉じ込められました」

星海坊主

「……ひでえな」

エリオ

「その時、助けてくれたのはフェイトさんです。フェイトさんは僕に優しさをくれました。だから僕はキャロやティアナさんと居るんです」

星海坊主は少し笑う。

星海坊主

「そうか……。お前のような奴が、息子だったら良かったのに」

エリオ

「息子さんが居るんですか？」

星海坊主

「俺の息子であり、神楽ちゃんの兄。名前は『神威』。こいつはとんでもない性悪でよう。いや、夜兎の血を忠実に受け継いだというか、闘争本能のようなガキだ」

エリオ

「闘争本能？」

星海坊主

「夜兔族には『親殺し』という古い習慣があるんだ」

エリオ

「『親殺し』！？」

星海坊主は左腕の掴み、取り外す。

エリオはさらに驚く。

星海坊主

「その時、左腕を奪われた」

左腕をくつつける。

星海坊主

「あん時、怒ったお前を思わず神威と思ちまったよ」

エリオ

「そうですか……」

星海坊主

「エリオ。怒りに身を任せれば、大切なものを失う。俺の家族をよ
うにな……」

エリオ

「いいえ、失ってません！神楽さんはあなたのことを大切に思っ
てます。神楽さん、あなたの話をした時は嬉しそうでした」

星海坊主

「……俺も神楽ちゃんのことを大切だと思っているさ」

エリオ

「えっ……」

星海坊主

「エリオ、お前にもあるだろ？『家族の絆』が」
エリオ

「はい」

星海坊主

「なら、今度キュラスと戦う時は怒りではなく、『家族の絆』をぶつけて戦え。それなら我を忘れずに上手に闘える」

エリオ

「……はい！」

星海坊主

「お前にも、ドクターキュラスと戦う権利を分けてやる」

エリオに握手を求める。

エリオは星海坊主と握手する。

その様子をティアナ、キャロ、ゲンヤが微笑ましく見ていた。

ゲンヤ

「あの人も親だな」

ゲンヤは改めて星海坊主を良き人と理解する。

【土方の病室】

土方はベッドに寝る。

治療を終えたアギトは土方を見守る。

そして土方は目を開く。

アギト

「おっさん！」

土方

「…………アギト」

アギト

「良かった…………」

土方はマリアージュ改02に刺されて、倒れたこととイクスを連れて行かれたことを思い出す。

土方

「そうか、俺はやられてイクスがさらわれたのか」

アギト

「…………ああっ」

土方

「…………すまない、助けられなくて」

アギト

「いや、おっさんも刺されたじゃないか！…………謝るのはこっちだよ。悪かった巻き込んで…………」

土方

「あれは俺の不注意だ、気にするな」

アギト

「でも…………」

土方は黙り込む。

アギト

「なあー、あん時言ったことなんだけど……」

土方

「……命のことか？」

アギト

「出来損ないでも生きて良いよな？」

土方は黙って聞く。

アギト

「あたしは物心ついたときから、ずっと山の中の研究施設で実験動物のようにされてきたんだ。……ロードのいない融合騎は意味が無いからな……。そんなあたしを救ってくれたのがゼストの旦那だった。だからあたしは旦那とずっと一緒にいるんだ」

土方

「……何が言いたいんだ？」

アギト

「一緒にいてもあたしはゼストの旦那の融合騎になれないんだよ。相性が合わないからユニゾンしても大きな代償がある。……ロードのいない融合騎でも生きてもいいかな？」

土方

「……融合騎だの、ユニゾンなんか知るかよ」

アギト

「そつだな……」

土方

「お前はそれで良いのか？」

アギト

「えっ……」

土方

「意味の無いままで良いのか？」

アギト

「……良いわけ無いだろ」

土方

「……それで良いだろ」

アギト

「えっ……」

土方

「なければ探せ。他人が何を言おうが気にするな。……自分の存在
意味は自分で見つけるしか無い」

アギト

「……自分で見つける」

土方

「……過去でいじけてる暇があるなら探せよ」

アギト

「いじけてなんかいねえよ！」

土方

「……その調子だ」

アギト

「たくっ……」

ゼストは土方とアギトのやりとりを見る。

ゼスト

(あの男なら、アギトを任せても良いかもしれない)

ゼストは確信する。

【キュラスのアジト】

イクス

「うう……」

キュラス

「目覚めたか？」

イクスは目覚めて、拘束されていることに気付く。

キュラス

「まったく、さんざん手こずらせおって……」

イクス

「ドクターキュラス、私はあなたに協力しません！」

キュラスは怒り、イクスにビンタする。

キュラス

「黙れ！貴様に拒否権は無いわ！」

イクスは強気な態度をとる。

キュラス

「なんだ、その目は！」

再びイクスにビンタをしようとする。

？

「落ち着いて下さい、キュラス様」

鬼のような顔した鉄仮面を被った男はキュラスの腕を掴み、止める。

キュラス

「マリアージュ改00……」

マリアージュ改00

「どうせ従うんです。無駄に血圧を上げる必要はありません」

キュラス

「……フン、それもそうだな……」

キュラスはイクスを睨む。

キュラス

「イクス、強情を張るのは今だけじゃ」

キュラスは高笑いしながらどこかに行く。

マリアージュ改00はイクスを見る。

イクス

「……あなたは？」

マリアージュ改00

「マリアージュ改00です。イクス様、あなたの目は生きよつとずる目ですね。前は死にたがる目だったのに」

イクス

「あなたとは初めて会いますけど」

マリアージュ改00

「……そうでしたね」

マリアージュ改00もどこかに行く。

イクス

今、キュラスの邪悪な計画が始まろうとしていた。

次回に続く。

ステージ25 大人はさり気なくアドバイスする。(後書き)

イクスの戦いが始まる。

次回はスバルが!？。

お楽しみに!

ステージ26 どんなに最高級な食材でも、素人が使えば本来の味は出せない。
遂にスバルが『冥王の刀』を使う！

ステージ26 どんなに最高級な食材でも、素人が使えば本来の味は出せない。

【スバルの病室】

スバルはゼストから渡された『戦闘機人瞬間治療の石』を手に持ち、念じる。

それを見守るのはティアナ、エリオ、キャロ、土方、近藤、山崎、ギンガ、ノーヴェ、アギト。

そしてゼストだ。

石は光り出し、スバルを包む。

ティアナは驚く。

そして光は消える。

スバル

「……………」

スバルは激しく動いてみる。

スバル

「ゴツ フィンガー！……ハッ！」

調子に乗って、『ゴツ フィンガー』を披露してしまう。

ティアナ達は『何やっているの?』という視線を送る。

ティアナ

「スバル大丈夫なの?……特に頭の方」

スバル

「だ、大丈夫!」

エリオ

「……本当ですか?」

スバル

「うん!だけど、さっきは見なかったことにして……。お願い……」

……

土方

「どうやら信用できるようだな」

アギト

「当たり前だろ!旦那を信用しろ!」

近藤

「まあまあ……」

山崎

「あの石をどこで?」

ゼスト

「ドクターキュラスの荷物から拝借した」

スバル

「これであたしも戦えるね」

山崎

「何言ってるの!リボルバーナックルはまだ修理中じゃない!」

スバル

「デバイスならある!」

スバルは『冥王の刀』を見せる。

ノーヴェ

「でも、それを扱った奴はいないんだろ？」
ゼスト

「そうだ。だが、試練をこなせたら使えるハズだ」
スバル

「うん、やってみる」

スバルは『冥王の刀』を発動させる。

すると刀は鎖から離れ、蒼く光り出す。

スバル達は驚く。

刀が大きくなり、人の形になる。

光が収まり、人になった刀が立つ。

その姿は蒼い鎧武者だった。

顔に鬼面をかぶり付けていた。

スバル達は啞然する。

？

「……何百年ぶりの空気は美味しいなあ」
スバル

「あ、あのう……」
？

「……誰だ？イクスヴェリア様はどこだ？」
スバル

「私はスバル・ナガジマです。イクスヴェリア様は……捕まりました」

?

「何だと!?!」

鎧武者はスバルに掴みかかる。

?

「聖王家か!?!おのれ……、この拙者が今すぐお助けに参ります!」
スバル

「違う! 聖王家じゃない!」

近藤

「とりあえず落ち着け!」

近藤と土方は鎧武者を押さえる。

鎧武者が落ち着いた後、ティアナは事情を話す。

鎧武者の名前は『首狩り』と名乗る。

まずは古代ベルカ戦争は終わり、長き年月が経ったこと。

そして、『イクスヴェリア』ことイクスがドクターキュラスに捕まったことを話す。

話を聞いた首狩りは落ち込む。

スバル

「あのう……、首狩りさん」

首狩り

「……なんだ？」

スバル

「落ち込んでいるところ悪いですけど。……私のデバイスになってくれますか？」

首狩り

「……何？」

スバル

「私に力を貸してください！」

首狩り

「……貴様は刀を使ったことはあるのか？」

スバル

「ありません」

首狩り

「ふざけているのか？」

スバル

「ふざけていません！」

首狩り

「刀を使ったことのないくせに刀である拙者を使う気が！？」

スバル

「大丈夫です！銀さんという侍の剣術を見えています」

首狩りは頭を押さえる。

首狩り

「剣術は見て覚えるもんじゃない！日頃の鍛錬で学ぶものだ！1に努力！2に努力！3、4がなくて5に努力！なのだ」

スバルは怯える。

首狩り

「どうしても使いこなせたいなら、経験積んでからに……」

スバル

「それじゃ駄目なの！どうしてもすぐに使わなきゃいけないの！」
首狩り

「あのな……。すぐに使いこなせるわけ無いだろ！例え、資格に素質があつたとしてもな！さらにあるかどうか分からない奴なら尚更な！」

土方

「確かに……」

近藤

「正論だ……」

スバル

「関係ありません！」

首狩り

「いや、あるだろ！」

スバル

「どうしてもあなたの力が必要なんです！」

首狩り

「使いこなせない奴に力を与えても意味が無い！」

スバル

「特訓します！時間の限りに」

首狩り

「俺の話を聞かなかったのか！日頃の鍛錬が必要なんだ！」

スバル

「聞きました！でも、時間がないの！一日でも早く助けたい人がいるんです！」

首狩り

「……イクスヴェリア様か？」

スバル

「はい！」

首狩り

「貴様はイクスヴェリア様の何なんだ？」

スバル

「友達です！私達の」

首狩り

「そうなのか？」

ティアナ

「えっ、えーと……」

アギト

「あたしとゼストの旦那は友達だ！」

ゼストとアギト以外の者は戸惑う。

首狩り

「一部以外は違っらしいな」

スバル

「友達！の予定です」

首狩り

「なんだそれは……」

スバル

「……確かに会ったことはありません。けど、助けたいです！何も悪いことしていないのに……。辛い思いをして……。消えたいと思っっちゃうほどいっぱい悩んだ」

首狩りは黙って聞く。

スバル

「……そんなイクスを守りたい人がいます」

それはゼスト。

スバル

「生きることを説いてくれた人もいます」

それは土方。

スバル

「そして、聖王陛下のように普通の子供として生きて欲しいです」

聖王陛下はヴィヴィオ。

スバル

「だから助けたいです!」

ティアナ

「スバル、あんたらしいわね」

首狩り

「……悪いが考えさせてくれ」

スバル

「えっ……」

首狩りは病室から出て行く。

アギト

「考えなくても良いじゃないか!」

山崎

「……無理も無いよ。いきなり短い期間で使いこなすようにしてくれなんて」

土方

「お前、ワガママだな」
スバル

「……よく言われます」

ノーヴェは首狩りの後を追うように病室を出る。

【病院の屋上】

首狩りは空を眺めながら、イクスのことを考える。

首狩り

「申し訳ありません、イクスヴェリア様。私が付いていなかったばかりにあなた様に辛い想いを……」

首狩りはフェンスを握り締めながら悔しがる。

ノーヴェ

「お取り込み中、話を聞いてくれないか？」

首狩りは振り向く。

ノーヴェが立っていた。

首狩りとノーヴェは体育座りする。

ノーヴェ

「さつきはすまなかつたな。うちの姉貴が無茶な頼みをして」
首狩り

「……姉上か。顔つきもまっすぐな眼差しもそっくりだな」

ノーヴェ

「不本意ながらな」

首狩り

「……姉上は何故他人の為に一生懸命になるのだ？」

ノーヴェ

「……救助バカかな」

首狩り

「救助バカ？」

ノーヴェ

「昔、災害に巻き込まれて、ある男に、侍に命を救われたんだ。その侍に憧れて、自分も『誰かを救いたい』って。だから魔導師になつたんだ」

首狩り

「……そうか」

ノーヴェ

「……あんたも自信持っても良いんじゃないか？『冥王の刀』って呼ばれているからよ」

首狩りは黙り込む。

ノーヴェは首を傾げる。

首狩り

「知っているかと思うが。……扱った者がいないことを知っているな」

ノーヴェ

「ああっ」

首狩り

「当然、私で戦った者がいないと言うことだ。つまり私は戦ったことが無い」

ノーヴェ

「えっ……」

首狩り

「さつきは『鍛錬』や『努力』などと偉そうなことを言ったが……。私は姉上と同じだ」

ノーヴェ

「じゃあ、力は……」

首狩り

「いや、力はある！……拙者は『決闘』の為の刀ではない。イクスヴェリア様を守る『護身』の為の刀だ」

ノーヴェ

「護身……」

首狩り

「イクスヴェリア様は本来は心優しいお方だった。しかし、国の王であるため強くならなければならない。他国の侵略されないように、あえて強く恐ろしい異名を持つ『冥王』と名乗った。……結果的に他国から恐れられた為に戦争は起こった」

ノーヴェは黙って聞く。

首狩り

「戦争を終わらせる為に勝利を求めた。死体から作れる『マリアーヂュ』。他の世界から使える物を集める為の舟『冥王の箱舟』。そして、イクスヴェリア様を御守りする『冥王の刀』、拙者が生み出された」

ノーヴェ

「舟もあるのかよ」

首狩り

「今でも覚えている。戦場を眺めながら悲しみ涙を流すイクスヴェリア様のこと。イクスヴェリア様は身を犠牲してても大好きな故郷を、大好きな国民を守ろうした。無論、戦う者や兵器を造るする者も、そんなイクスヴェリア様の為に付いてきてくれた」

ノーヴェ

「……辛いな」

首狩り

「私は敵からイクスヴェリア様を守ることしか出来なかった。しかし、その役目も果たせなかった！情けない……」

首狩りは地面を叩きつけながら悔しがる。

ノーヴェ

「首狩り……」

首狩り

「かくなる上は……」

首狩りは懐刀を取り出し、抜く。

ノーヴェ

「オイ！何する気だ！？」

首狩り

「御免！」

首狩りは腹を刺す！

ノーヴェ

「首狩り！」

首狩り

「……やっぱり駄目か」

ノーヴェ
「へっ？」

腹を刺したはずの首狩りはピンピンしていた。

首狩り

「拙者、体が鋼鉄より硬い鎧でできているから切腹できません」

ノーヴェ

「だったら最初からやるな！」

バキッ！

首狩り

「ズビバセーン！」

ノーヴェは怒り、首狩りを蹴る。

ノーヴェ

「……諦めて良いのか？」

首狩り

「……諦めたくはない。しかし、拙者一人では……」

ノーヴェ

「そうだ、お前一人じゃ無理だ。だからさ、姉貴達に協力してみないか？」

首狩りは考える。

首狩り

「さっきも言ったとおり、私は経験が無いのだ」

ノーヴェ

「やる前から諦めるなよ！……経験あるあたしらが協力する！」

首狩りはノーヴェの真剣な眼差しを見て意を決する。

【スバルの病室】

首狩りは躊躇う理由を説明する。

そしてスバルに試練に果たせば、できる限り協力すると約束する。

スバルと首狩りは対峙する。

ノーヴェ達はそれを見守る。

首狩り

「むん！」

首狩りの姿は鐔のなく代わりに蒼い宝玉が付いた日本刀に変わる。

首狩り

「試練は拙者を抜くことだ。拙者を抜いてみる」

スバルは首狩りを持ち、柄を掴む。

スバル

「いくよ」

スバルは刀を抜く。

蒼く輝く刀身だった。

それはスバル達は目を奪われる程美しかった。

首狩り

「合格だ！」

スバル

「えっ！抜いただけで!？」

首狩り

「今まで試練を受けた者は口では『イクスヴェリア様に忠誠を誓います』と言いながら、本当は拙者の力を欲する者ばかりだった。野心のある者に拙者のリンカーコアに反応しない。しかし、スバル殿の誰かを助けたい純粋な心が拙者のリンカーコアに反応したのだ」

スバル

「そうなんだ」

首狩り

「あと……。生まれた時からある言葉が響くのだ」

ティアナ

「ある言葉？」

首狩り

「『侍は刀は護るために振るう』という言葉だ」

近藤と土方と山崎は驚く。

土方

「……流石は日本刀」

近藤

「生まれは違うが」

山崎

「侍ですね」

首狩りは近藤達を見て、

首狩り

「……あの者達は」

とスバルに尋ねる。

スバル

「あの人達は江戸という世界から来ました」

首狩り

「江戸！どこかで……」

ゼスト

「かつて冥王は他の次元世界に行ったことある。江戸もその一つだ
ろ」

エリオ

「じゃあ首狩りさんは」

キャロ

「江戸の刀を元に造られたんですね」

首狩り

「……話を戻そう。スバル殿、力を貸すがあてにできる保証は無い
ぞ」

スバル

「うん。確かに剣術には自信が……」

近藤

「よし！ティアナ殿の手伝いが無い間なら俺が指導してやるっ」

スバル

「えっ！」

土方

「病み上がりでも、指導くらいはできるだろ」

山崎

「剣術は僕ら真選組に任せて！」

スバル

「近藤さん、土方さん、山崎さん……」
エリオ

「ならば、僕は実戦の相手をしませす！」
ゼスト

「俺も相手をしよう」

スバル

「エリオ、ゼストさん」

スバルは嬉しくなる。

首狩り

「……試練に合格したスバル殿」

スバル

「何？」

首狩り

「名をくれないか？」

スバル

「名？」

首狩り

「『首狩り』という名は、恐れられるための仮の名前だ。正式名称は無いのだ」

スバル

「そうなんだ。うーん……」

スバルは考える。

スバル

「よし！名前は『ティルヴィングエア』だ」
首狩り

「…………意味は？」

スバル

「別に無いよ」

首狩り

「何？」

スバル

「ただカツコいいかなって」

ティアナ

「あんたね…………」

首狩り

「…………あいわかった。今日から『ティルヴィングエア』と名乗ろう

！」

スバル

「よろしくね！ティルヴィングエア」

ティルヴィングエア

「うむ！」

こうしてスバルは新たなデバイス『冥王の刀』改め『ティルヴィングエア』を手に入れたのだった。

続く。

ステージ26 どんなに最高級な食材でも、素人が使えば本来の味は出せない。

この『テイルヴィングエア』はちゃんと黒神先生の正式な許可を取っております。

さあ、スバルよ！

仲間とともにイクスを救え！

ステージ26・5 自分の考えた世界の主人公は大抵自分である。(前書き)

実のところ投票があまりに少ないです。

ですので、銀さん達は暴走しました。

ステージ26・5 自分の考えた世界の主人公は大抵自分である。

【万事屋「銀ちゃん」】

万事屋内で話し合いが始まっていた。

銀時

「不味いぞ」

新八

「ええ。本当に不味いですよ」

神楽

「シヤマ姉の料理が？」

銀時

「今更何を言う」

シヤマル

「それ、どーゆう意味なんですか？（怒）」

なのは

「不味いのは、この物語のことよ」

フェイト

「投票どころか、感想が来ていないことね」

ヴィータ

「ステージ25を修正と追加をしたにも関わらず、感想が一通も来てなかったよな……」

ザフィーラ

「投票が未だに来ないと、結果発表が……」
はやて

「少なすぎやと、人気投票の意味がないよ」

ヴィータ

「畜生！普通の読者はともかく！これをお気に入りの読者はなんで

投票どころか感想を送ってくれないんだよ!」

シグナム

「よせヴィータ!」

新八

「そうだよ! 気持ちは分かるけど失礼だよ!」

ヴィータ

「だって……」

銀時

「確かにヴィータの言うことは一理ある! 感想を送っても罰は当たらないじゃないか!」

神楽

「自慢じゃないけど、読む暇が無いほど長く書いたつもりはないアルね、作者は」

シヤマル

「そうですね。良い点どころか悪い点も指摘してくれないとこちらもうまく物語を進められませんよ」

新八

「だからと言って、読者相手に強調は不味いです。こうなったら感想が来るように『テコ入れ』しましょう!」

銀時

「新八、アニメでもやったるう……」

新八

「今回は真面目なリリカル組がいますよ」

フェイト

「真面目なんてそんな……」

ザフィーラ

「ならば、俺が出そう」

新八

「えっ、ザフィーラさんが!?!」

銀時

「珍しいなあ……」

ザフィーラ

「こんなのはどうか？」

【ザフィーラのコテコテ】

~~~~~

~~~~~

荒野に一匹の狼が歩いてくる。

狼の目は赤く光っていた。

桂が髪とマントをなびかせ、不適に笑う。

悪役の男達がなだれ込むように攻めてくる。

ザフィーラは人型に変身する。

ザフィーラは雄叫びを上げながら高速に拳を打ち続ける！

悪役達は次々と顔や頭を破裂して死んでいく。

桂は覇気を漂わせながら歩いてくる。

ドレス姿のアルフは悲しみの表情を浮かべながら涙を流し、手を伸ばす。

人々が砂嵐に見回れながらも歩き続ける。

その中にはやてがいて涙を流す。

さらに子供を背負ったヴィータもいた。

地面から巨大な魔物が現れる。

ザフィーラは魔物と対峙し、闘いを挑んだ。

ザフィーラ

「『ザフィーラStrikers 愛を取り戻せ』」

銀時／新八

「ちよつと待てー!？」

【現実】

新八

「なんですかこれは!？」

銀時

「明らかに『斗の拳』のパクリだろ!？」

神楽

「『3年Strikers組 銀八先生』のラオウの影響アルか!？」

シグナム

「ザフィーラ……。真面目なお前がこんなことを考えていたのか……」

ザフィーラ

「駄目か？」

シャマル

「駄目です。ならば私が考えましょう」

【シャマルのテコ入れ】

~~~~~

風に乗りながらグライダーを操る者がいた。

緑色の服を着て、顔を隠すように酸素マスクを被っていた。

マスクを脱ぐと、正体はシャマルだった。

近藤の顔をした王虫オームの群れが爆走する。

シャマルはグライダーから降りて、王虫の群れ前に立ちふさがる。

そして吹き飛ばされる。

倒れたシャマルの周りに王虫達は集まる。

王虫達は鼻から金色の触手を一斉に出し、シャマルを持ち上げる。

シャマルは目覚め、笑顔で無数の触手の上を歩き回る。

金色の草原で歩くように。

オババ様に扮した神楽が目を開けて、

神楽

「おお……。見えるシャマルが、賢者に見える。古き言い伝えは本当じゃった……」

と涙を流す。

シャマルの笑顔が輝く。

シャマル

「感動の超大作『風の谷のStrikers』」

新八

「おおーい！」

### 【現実】

新八

「これ『風の のナウ カ』じゃないですか!？」

銀時

「しかも主役はお前かよ!？」

神楽

「なんで私はオババ様ネ!？」

シャマル

「だって…、私のイメージにぴったりじゃないですか」

銀時

「イメージがぴったりなら、パクってもいいのかよ！」

シグナム

「だいたい予想はしていたが……」

ヴェータ

「アホんだら！よし、ならあたしの案を見せてやる！」

【ヴィータのテコ入れ】

~~~~~

~~~~~

ヴィータはうさぎの人形を掲げる。

すると、うさぎが光り出し、ヴィータを包む。

ヴィータの幼児体型からグラマーな大人体型に変わる。

ヴィータは笑顔で胸の谷間を強調。

チンクもクマのぬいぐるみを掲げる。

クマのぬいぐるみは光り出し、チンクを包む。

チンクも幼児体型からグラマーな大人体型に変身する。

ヴィータとチンクはグラマーな大人体型のままデバイスで闘う。

ヴィヴィオも黒いうさぎのぬいぐるみを掲げる。

うさぎのぬいぐるみは光り出し、ヴィヴィオを包む。

ヴィヴィオも幼児体型からグラマーな大人体型（聖王モード）になる。

ヴィヴィオも参加して、三つ又の闘いになる。

闘いの末、三人は倒れる。

そんな三人の前にはやてが現れ、笑顔で弁当を見せる。

三人は苦笑する。

ヴィータ

「美少女物語『けんぷStrikers』」

銀時

「『けぷファア』か!？」

### 【現実】

新八

「何コレ!? コレは『けぷファア』のパクリだよ」

神楽

「結局自分が主役かよ!」

ヴィータ

「なんだよ! ちゃんとはやてやヴィヴィオを出演していただろ!」

銀時

「そーゆう問題じゃないだろ!」

はやて

「ほんなら、あたしの案を」

【はやてのテコ入れ】

~~~~~

ミッドチルダは地上部隊のレジアスに支配されていた。

それを快く思わぬ者達は反乱していた。

ある日、平凡な少女『八神はやて』はその反乱に巻き込まれてしま
う。

はやては反乱者に間違われて、地上部隊に銃を向けられる。

はやて

「だ、誰か助けて！」

その時、小さな妖精リインが現れ、
リイン

「（C・C風）力を授けよう」
とはやてに力を授ける。

はやての瞳に紋章が浮かび上がる。

はやては地上部隊に向けて、瞳の紋章を光らせ、

はやて

「死んで」
と命じる。

地上部隊隊長

「イエッサー！」

地上部隊は自決する。

はやてはその様子を不敵に笑う。

はやて

「今、一人の少女の反乱が始まる。『Strikers』反逆のはやて〜」

銀時

「アホか！」

【現実】

新八

「コレは明らかに『コーギアス』だよ！」

銀時

「全然考えてないだろ……。ちょっと手を加えたただけだろ」
なのは

「そうだよ！原点から離れているよ！」

フェイト

「原点？」

なのは

「この物語は『魔法』や『魔法少女』が抜けてるわ」

新八

「あつ、そうだね！」

銀時

「シヤマルとザフィーラのテコは『魔法』も『魔法少女』も何も無

いな……」

なのは

「という訳で、原点を入れたこんなテコ入れ」

【なのはのテコ入れ】

どこまでも広がる次元の世界。

どの世界も紛争や戦争が耐えなかった。

そんな次元の世界に『魔法少女』達が立ち上がった。

彼女達の目的は『戦争根絶』！

砂漠の世界

数多くのガジェットが戦っていた。

突然、空から攻撃魔法が放たれた。

放ったのは、ガダムに似た白いロボットだった！

操縦していたのは、高町なのはだった。

なのは

「いくよ、レイジングハート。高町なのは、目標を駆逐する！」

レイジングハートと呼ばれたロボットは桃色の魔法で次々とガジェ

ットを破壊していく。

海の世界

大タコの化け物が船に襲いかかる。

フェイト

「待ちなさい！」

大タコは上を見上げる。

空からガ ダムに似た黒いロボットが落下してくる。

黒いロボットの腕から金色の刃が現れる。

フェイト

「バルデッシュュ、行くよ」

バルデッシュュと呼ばれたロボットは大タコを切り裂いていく。

フェイト

「任務完了」

宇宙

核ミサイルを運ぶガジェット達。

目標はコロニーだった。

はやて

「行くでえ、リインフォース」

リインフォース

「了解」

リインフォースと呼ばれたガダムに似たロボットが背中
の翼を広げる。

リインフォース

「敵、排除」

翼から無数のビームを放つ。

ガジェット達と核ミサイルに当たる。

核ミサイルは爆発する。

はやて

「ちよつとやりすぎたか」

なのは

「新世代『魔法少女リリカルなのはStrikerS00』始まり
ます！」

銀時／新八

「始まるか！」

【現実】

新八

「ガ ダムって言ったよね！コロニーも言ったよね！」

銀時

「どこが原点に帰ったんだよ！？明らかに『機動 土ガ ダム00』だよ！」

なのは

「ちゃんとレイジングハートやバルデツシュが出たじゃないですかフェイト

「魔法少女がコクピットに乗る？」

はやて

「デバイスがガンダムになってたよ。……カッコイいけど」

ギンガ

「足りないですよ」

そこにギンガとゲンヤがいた。

新八

「ギンガさんとゲンヤさん！？」

銀時

「お前ら本編の出演だろ！？」

ゲンヤ

「細かいことを気にするな！」

ギンガ

「それより、私達のテコ入れを聞いてください」

【ギンガのテコ入れ】

~~~~~

バキューン!

犯人

「動くな!」

犯人は人質を取って民家に立てこもる。

警察が包囲する。

犯人

「逃走用の車を用意しろ!」

ギンガ

「落ち着いて下さい」

警察の中からスーツ姿のギンガが前に出る。

犯人

「だ、誰だ!?!」

ギンガ

「交渉人です。あなたと交渉しに来ました」

ギンガと犯人は緊迫感の中で対峙する。

ギンガ

「推理と駆け引きで犯人と交渉。『交渉人Strikers』」

ゲンヤ

「なら、俺は……」

【ゲンヤのテコ入れ】

~~~~~

~~~~~

走る新幹線をバツクにゲンヤが立つ。

捜査室で部下に指示を下すゲンヤ。

犯人を必死に説得するゲンヤ。

ゲンヤ

「サスペンスの超大作『StrikerSシリーズナガジマ警部』」

銀時／新八

「始まるか！バカ親子！」

【現実】

新八

「どれも人気の刑事ドラマをそのまま使ってるよ！しかも主人公は自分だし！」

銀時

「お前ら『StrikerS』が付けねばいいと思ってるだろ！」  
スカリエツティ

「まったくです」

いつの間にかスカリエッツィがいた。

銀時

「今度はお前かよ!？」

スカリエッツィ

「大事なものはテーマだ!例えば……。よし『医療とは何か?』をテーマにしよう!」

【スカリエッツィのテコ入れ】

~~~~~

~~~~~

絶壁から海を見つめるスカリエッツィ。

手術室に運ばれた患者（新八）。

手術するのはスカリエッツィ。

そしてサポートするスタッフはウーノとクアットロ。

スカリエッツィ達は患者（新八）を救おうと懸命に手術する。

そして手術を終えたスカリエッツィは満足していた。

ウーノとクアットロも笑顔になる。

手術を終えた患者（新八）は見事に……。



メタリックに改造されていた。

スカリエツテイ

「命の現場で働く医師達のドラマ『Strikers二十四時』」

銀時／新八

「ちよつと待て!？」

### 【現実】

新八

「なんで僕をメタリックに改造するんだよ!」

銀時

「かえつて不気味になつたぞ!」

神楽

「タダでさえ地味なのに、余計にうざくなつたアル!」

新八

「余計にウザイとはなんだ!」

スカリエツテイ

「あつ、いけない! ついいつもの癖で……!」

新八

「癖なのか!？それは癖とは言えねえだろ!」

銀時

「つたくよ……。テコ入れじゃなくて、ストーリーと主役の入れ替えだよ!」

山崎

「あろう！」

デイエチ

「こんなテコ入れはどうでしょうか？」

今度は山崎とデイエチがいた。

銀時

「今度はお前らか！」

ゲンヤ

「コラ、デイエチ！またコイツと……」

ギンガ

「お父さん、落ち着いて！」

二人を引き裂こうとする父を止めるギンガ。

山崎

「見て下さい！」

デイエチ

「二人のテコ入れを！」

【山崎とデイエチのテコ入れ】

雨の中

廃ビルの屋上にライフルを構える狙撃手、デイエチがいた。

狙いはどこかのヤクザの組長だった。

デイエチは息を殺しながら、引き金を引こうとする。

山崎

「そこまでだ！」

デイエチは振り向く。

そこには銃を構えた山崎が立っていた。

山崎

「なんで、なんで君が……」

デイエチ

「……これが、私の……。私の本来の姿なのよ！」

デイエチは山崎にライフルを向ける。

二人は対峙する。

山崎

「悲しき宿命は」

デイエチ

「二人を引き裂こうとする」

山崎

「『Strikers』悲しき愛」

デイエチ

「始まります」

【現実】

ゲンヤ

「認めるか！」

銀時

「地味カップル！調子乗りすぎだぞ！」

山崎

「いや、聞いて下さい！」

デイエチ

「女殺し屋が刑事に近づくとうちに愛が変わる、長編なんです！」

フエイト

「観てみたいけど、本編とはまったく関係ないですよ！」

シグナム

「お前達……」

作者

「いい加減に下さい！」

全員

「……エエツ？」

作者は本当の『烈火竜』という名の竜になって現れる。

作者

「本来の目的を忘れて、好き勝手に言いやがって……」

銀時

「あれ……作者様……」

新八

「そのお姿は一体……」

作者

「怒りのあまりに変身したわ！」

なのは

「何をお怒りに？」

作者

「お前らの身勝手さに怒っておるんだよ！」  
はやて

「いや、物語を盛り上げようと……」  
作者

「勝手に改ざんするな！お仕置きだ！」  
フェイト

「……私も？」  
作者

「全員同罪じゃー」

作者は火炎弾をぶち込む！

全員

「ああああああ……」

ドカーーーーーーン！

万事屋は大爆発した。

読者の皆さん。読み終わったら感想の一言に投票をお願いしますね。  
あとメッセージからの投票もできます。

お待ちしています！

ステージ26・5 自分の考えた世界の主人公は大抵自分である。(後書き)

失礼な文章があったことをお詫びいたします。  
どうか気をお悪くしないでください。

勝手は承知ですが投票をお待ちしています。

(今回出てきたメタリックな新八は別人物として投票できます)

ステージ27 顔とは心を映し出す鏡というけど、顔に出さないことだってある  
新たな銀魂キャラ登場！

それは見てのお楽しみです

ステージ27 顔とは心を映し出す鏡というけど、顔に出さないことだってある

【江戸世界・歌舞伎町】

ここ歌舞伎町は本来は賑わっている……はずだった。

しかし、人々には活気はなかった。

原因は不景気ではなく、ある事件が原因だった。

『謎の雷事件』だ。

ドクターキュラスがマリアージュの素材になる死体を。それも強力なマリアージュを創り出すためにこの世界の強者を次元移動する雷で誘拐していたからだ。

人々は雷を恐れ、あまり外に出ないようにしていた。

そんな状況にも関わらず、歌舞伎町を歩く二人の女性がいた。

妙

「ねえー、九ちゃん……」

九兵衛

「なんだい、妙ちゃん」

着物を着た女性は万事屋の志村新八の姉、志村妙と少年風の剣士で左目に眼帯を付けている女性は柳生陳陰流の柳生九兵衛だった。



妙

「やっぱり危ないわ！雷事件を追うのは」

九兵衛

「危険は承知だ。妙ちゃんは帰っても構わないよ」

妙

「帰れるわけないわ！九ちゃんまでいなくなったら私は……」

九兵衛

「妙ちゃん……」

すると、上空に電流が流れる。

九兵衛

「ん！」

九兵衛は上空の電流に気づく次の瞬間！

電流が雷に変わる。

九兵衛

「妙ちゃん！」

妙

「えっ……」

九兵衛は妙を突き放そうとするが遅かった。

ドカーーーーーーン！

九兵衛と妙は跡形も無く消えてしまう。

【聖王病院の庭】

スバル

「ハアー！」

近藤

「むん！」

スバルと近藤は木刀で稽古する。

ティルヴィングエアは二人の稽古を見守る。

ティルヴィングエア

「あの近藤とやら、なかなかできる。流石は真選組局長だな。そしてスバル殿ももう呑み込みが早いな……」

ティルヴィングエアは二人の剣さばきに感心する。

稽古に入って3日目に入る。

スバル

「てやあー！」

近藤

「……」

バシッ！

スバル

「うわっ！」

木刀を払いのけられ、倒れる。

近藤

「……スバル殿、何か別のことを考えておるな」

スバル

「えっ……」

近藤

「凶星だな」

スバルは言い当てられて頭をかく。

近藤

「迷いがあれば、集中できんぞ」

スバル

「すみません」

近藤

「……ティアナ殿の捜査のことかな？」

スバル

「……はい」

ティアナの捜査は今のところ進展無しである。

近藤

「スバル殿、気にはしてはならん！救助活動で人命を第一するように、稽古も剣に第一にしなればならん！」

スバル

「……すみません」

近藤

「……信じてやれよ」

スバル

「えっ……」

近藤

「信じてやれよ、自分の親友や仲間を。あいつらだって捜査に集中しているはずだ。そしてスバル殿が剣を使えるようになると信じているさ」

スバル

「……わかりました！」

近藤

「よし！」

二人は稽古を続ける。

ティルヴィングエア

「剣さばきだけではないな」

ティルヴィングエアは二人の光景を微笑ましく思う。

スバルと近藤は木刀も足も動かず、真剣な眼差しで見つめ合う。

ティルヴィングエア

「ムムツ！今度は真剣な眼差しだ……」

ティルヴィングエアは二人の真剣さに息を呑む。

だが、スバルの方は実際は違っていた。

スバルは真剣に見ていたのは……。

近藤の鼻からターザンのように垂れている鼻糞だった。

スバル

（……どうしよう。鼻から鼻糞が出ているよ。言った方が良いな……。でも、せっかくのシリアスシーンをぶち壊したくない）

近藤

（あの眼差し……スバル殿、今度は真剣だな……）

近藤は集中のあまりに自分の鼻糞に気づいていなかった。

### 【ミッドチルダ都市】

都市は騒いでいた。

この間マリアージュのマリンガーデン襲撃事件が話題を呼んでいた。

そんな都市に志村妙と柳生九兵衛は啞然と立っていた。

妙

「……此処って」

九兵衛

「江戸ではない」

二人は辺りを見回す。

妙

「この町の様子……。なのはちゃんの世界に似てるわね」

九兵衛

「確かに人々の服装といい、看板の文字といい……。なのは殿の世界に酷似している」

すると、

？

「へい、彼女達」

二人は振り向く。

チャラチャラした男達がナンパしてくる。

ナンパ1

「君達、変わった服装しているねえ」

ナンパ2

「どこから来たの？」

妙

「……歌舞伎町ですけど」

ナンパ1

「歌舞伎町？」

ナンパ2

「聞いたこと無いな」

九兵衛

「あのう、ここは何処ですか？」

ナンパ1

「何言ってるの？ミッドチルダ都市だよ」

妙

「ミッドチルダ？どこかで聞いたような……」

ナンパ3

「それより俺達とどこか行かない？」

九兵衛

「いや、僕らは……」

妙

「レストランかな」

ナンパ1

「レストラン？」

妙

「もちろん奢りよね？」

### 【レストラン前】

妙

「おいしかったわね」

九兵衛

「うん。見たこと無い食べ物が多かった」

二人は満足していた。

逆にナンパの男達は肩を落とすほど落ち込んでいた。  
一人は顔に痣があった。

原因はもちろん妙に三人の有り金全部で奢らせられたからである。

止めさせようとした一人がいたが、妙に「まだ満足できないわ」と笑顔で言いながら『アイアンクロー』される始末だった。

ナンパ1

「……ナンパする相手を誤った」

ナンパ2

「……怖かったよ」

ナンパ3

「……痛い」

妙

「次はどこに行く？」

ナンパ1

「すみません！」

ナンパ2

「俺達用事がありますので」

ナンパ3

「帰ります！」

ナンパ男達は一目散に逃げ出す。

妙

「あらら、行っちゃたわね」

九兵衛

「食べることに夢中でこの世界のことを聞くの忘れてしまった」

妙

「どっしょよっか？」



二人は悩む。

すると、

？

「あのうもし？」

二人は振り向く。

それは聖王教会の騎士シャツハ・ヌエラとデイドだった。

九兵衛

「なにか？」

シャツハ

「その服装……。もしや、江戸の方ですか？」

九兵衛

「わかるのか!？」

シャツハ

「やはりそうですか!」

妙

「あなたは？」

シャツハ

「失礼いたしました。私、聖王教会のシャツハ・ヌエラと申します」

デイド

「同じくデイドです」

妙

「私は志村妙です」

九兵衛

「柳生九兵衛だ」

シヤツハ

「つかぬ事をお聞きします。坂田銀時さんの知り合いですか？」

妙

「ええっ銀さんを知っているの!？」

九兵衛

「もしや、高町なのは殿もご存知か？」

デイド

「はい、よく知っています！」

### 【聖王病院の庭】

スバル

「とお！」

近藤

「いいぞ、スバル殿」

スバルと近藤の稽古は順調だった。

ティルヴィングエア

「よく続くの。もう一時間以上も経つのに……」

ティルヴィングエアは二人のタフさに驚く。

すると、

近藤

「ムッ！」

近藤は手を止める。

スバル

「どうかしましたか？」

近藤

「こ、この匂いは……」

スバル

「匂い？」

近藤は鼻を鳴らして、匂いを探す。

ティルヴィングエア

「どうした？」

近藤は匂いを探り出す。

シャツハ

「スバルさん」

シャツハとデイドと、そして妙と九兵衛がやって来る。

スバル

「ああっ……」

近藤

「お妙さん！」

近藤は全速力で妙に向かっていく。

スバルやティルヴィングエアは驚く。

もちろんシャツハとディードも驚く。

しかし、妙と九兵衛は平然としていた。

近藤は飛びかかる！

近藤

「お妙さん、会いたかつ…」

ドガッ！

妙は笑顔で飛びかかる近藤の顔面にストレートパンチをぶち込む！

九兵衛以外は驚愕する。

妙

「あらやだ、ミッドチルダの野獣が襲いかかったわ」

数分後

気絶する近藤を横に寝かせ、スバル達は妙と九兵衛にことの次第を話す。

ミッドチルダでおきている『マリアージュ事件』。

『マリアージュ事件』と江戸でおきている『雷事件』の黒幕はドクターキュラス。

ドクターキュラスの企み。

マリンガーデンで事件の鍵を握るイクスヴェリアがさらわれたこと。そしてスバルがティルヴィングエアを使いこなす稽古をつけていることを話した。

妙と九兵衛は驚愕する。

妙

「……………そうなの。大変なことになっているわね」

九兵衛

「つかぬ事を聞く。連れていかれた者達は……………」

スバル

「……………多分、ドクターキュラスのマリアージュに……………」

九兵衛

「……………くそ！」

九兵衛は怒り心頭に地面を叩く。

スバル

「九兵衛さん！？」

妙

「……………実は九ちゃんの道場の門弟の何人かも雷事件に巻き込まれたのよ。だから九ちゃんは探そうとしたのよ。私は九ちゃんが心配で

止めようとしたの。その時、雷に当たったの」

スバル

「そうだったんですか……」

九兵衛

「門弟達には家族がいた。家族はとても心配していた。柳生家や他の門弟達も探していたが……。ドクターキュラス、許さん！」

妙

「あたしも許せないわ！人の命を弄ぶ糞爺……。見つけたら二度と治らないほど腰を粉碎して。ケツの穴を八つ裂きして一生切れ痔にしちゃって。口に入れ歯を接着させて、一生洗わせないようにして。ああ、糞不味いお粥を毎日食べさせるって手もあるわ」

スバル達は妙の恐ろしい案に怯える。

九兵衛

「スバル殿！」

スバル

「はい！」

九兵衛

「僕も協力したい！君の稽古にも付き合おう」

スバル

「良いんですか！」

妙

「九ちゃんは柳生陳陰流の次期当主よ。良い稽古になるわ。それに近藤さんがこれじゃねえ……」

気絶する近藤を見て言う。

デイド

「いえ、あなたが殴っ……」

妙

「何か？」

笑顔で威圧感を漂わせる。

デイドは恐怖し、

デイド

「何も言ってます  
と即答する。」

妙

「私も協力するわ。こーゆう騒動や事件に巻き込まれるのは慣れて  
いるから」

シャツハ

「私やデイドはあなたの稽古に付き合う為にきました。非力なが  
らお手伝いします」

スバル

「九兵衛さん、妙さん、シャツハさんにデイド……。ありがとう  
ございます！」

ティルヴィングエア

「有り難き幸せです！特に妙殿に九兵衛殿！突然の来訪にもかかわ  
らず、ご協力してくださいとは……。ガレア王家イクスヴェリア様  
に代わり、感謝致します！」

ティルヴィングエアは深々と二人にお辞儀をする。

妙

「そんな大袈裟な……」

九兵衛

「僕らはドクターキュラスが許せないだけだ」

スバル

「それじゃ、頑張ろう」

全員（近藤以外）

「オオッー！」

こうして新たな銀魂キャラが仲間になりました。

続く。



ステージ27 顔とは心を映し出す鏡というけど、顔に出さないことだってある

最強女二人の登場でスバル達は安心！

だよね、多分…。

ステージ27・5 思い通りにならないからって周りに八つ当たりするな！（前

質問の回答と人気投票の結果発表です！

ステージ27・5 思い通りにならないからって周りに八つ当たりするな！

【万事屋「銀ちゃん」】

なのは

「皆さん、お元気ですか？」

銀時

「質問コーナーの始まりだよ」

ヴィヴィオ

「ワーーーーー」

ドンドン パフパフ

ヴィヴィオ

「いよいよ発表なんだね！銀時パパ」

銀時

「おうよ、遂に発表だ人気投票の」

なのは

「まあまあ、発表は後よ。まずは質問コーナーからだよ」

ヴィヴィオ

「えーっ……………」

銀時

「仕方ねえな……………」

なのは

「それじゃあ、早速！」

なのははレイジングハートで質問を表示させる。

なのは

「ペンネーム【天使】さんから2つの質問です。『？ティルヴィングエアは『ブリーチ』の千本桜のような姿ですか？？バン解しますか？」

スバルとティルヴィングエアは？』です」

銀時

「？千本桜とは違いますが、確かに鎧武者の姿をしています。作者の好みです。？バン解はしません。『ブリーチ』の死神ではありませんので……」

なのは

「次の質問です。ペンネーム【ウツソ・エヴィン】さんからの質問『なのはマンについて詳しく教えてください』……なのはマンってあのアニメ？」

銀時

「なのはマンとはギンタマンの作者天知が『魔法少女リリカルなのはStrikers』を元に書いた漫画がアニメ化したものです。ちなみに『シグミス』がなぜ美少女かというと元となったシグナムは作者のお気に入りだからです」

なのは

「ちよつと待て。じゃあ、あのなのはは私を元に作ったの？」

なのはは静かに怒る。

なのは

「天知さん、少し頭を冷やそうか？」

銀時

「あとであとで！つ、次の質問にいきつー！」  
なのは

「……ペンネーム【神威銀時】さんからの二つの質問です。『？シヤマルに質問です。なんでストーリーカーゴリラがオームなんですか？銀時となのはに質問です。黒神さんの作品で銀時のハーレム況を

「どう思いますか?」えっ、私と銀さんのハーレム!?!  
ヴィヴィオ

「パパ、浮気してるの?」

銀時

「どこで覚えた、そんなこと!?!」

ヴィヴィオ

「うんとね。銀時パパが遅い時、フェイトママが『遅い!まさか浮気をしてるんじゃない?』って言った時」

銀時

「おいおいフェイト……」

なのは

「それより回答して」

銀時

「?真選組屯所の厠革命のお話でマヨラーを見た『風のナウ

カ』ばい夢で出てきたゴリラ顔のオームをそのまま使いました?」

「……なのはから」

なのは

「そうですね……。面白いです!特に銀さんの災難にやられっぷりが」

銀時

「……俺、可哀想!」

思わず泣いてしまっ。

なのは

「それでは結果発表にいきます」

銀時

「……冷たいな、お前(怒)」

【結果発表】

第一位

土方 十四郎 三票

シグナム 三票

第二位

坂田銀時 二票

高町なのは 二票

フェイト・テストロツサ 二票

スバル・ナガジマ 二票

イクスヴェリア 二票

星海坊主 二票

第三位

マヨラー13 一票

姉上13 一票

お姉ちゃん13 一票

テイルヴィングエア 一票

ザフィーラ 一票

メタリック新八 一票

沖田 総悟 一票

山崎 退 一票

デイエチ 一票

ゼスト 一票

ヴィヴィオ 一票

烈火竜 一票

以上！

なのはは結果を見て、さらに魔王オーラを漂わせる。

銀時は自分の順位をこだわるより、なのはの魔王オーラに怯える。

ヴィヴィオ

「やったー！ヴィヴィオ入っている！」

銀時はヴィヴィオと一緒に話題を変える作戦に出る。

銀時

「アアッ、ほんとだな！やったなヴィヴィオ！」

ヴィヴィオ

「うん！」

銀時

「流石スバルも入ってる！ティアナとエリオとキャロとヴィータとシヤマルは惜しかったな……。次回の人気投票に期待しよう。それにしても人気投票に入った奴はたいしたもんだ！東大の合格発表に自分の番号があった時と同じだな、なのは！」

なのは

「そ、そうだね……」

銀時

（よし、このまま……）

ヴィヴィオ

「なのはさん、二位凄いね」

銀時は焦る。

そしてなのは静かにレイジングハートをエクセリオンモードにする。

なのは

「にははは……人気投票なんて潰れちゃえ！（怒）」

ドカーーーーン！

なのはは辺り一面にスターライトブレイカーをぶっ放しまくる。

銀時

「逃げる！」

ヴィヴィオ

「ウワーン！」

銀時とヴィヴィオは泣きながら逃げるのだった。

終わり



ステージ27・5 思い通りにならないからって周りに八つ当たりするな！（後

ペンネーム【神威銀時】さんの質問。

ドクターキュラスに質問。

？宇治銀時井

？土方スペシャル

？スバルギヤラクシー

？ダークマター

でどれが一番食べたいですか？試食して決めて下さい。

キュラス

「……………」

ドクターキュラスの前に宇治銀時井、土方スペシャル、スバルギヤラクシー、ダークマターが置かれた。

キュラス

「こんなの喰えるわけないじゃろ！」

キュラスはちやぶ台返しで料理をぶっ飛ばす。

すると、宇治銀時井を持った銀時。

土方スペシャルを持った土方。

スバルギヤラクシーを持ったスバル。

ダークマターを持った妙が現れ、

4人

「いいから食べやがれ！」

とドクターキュラスの口に料理をぶち込む！

キュラス

「ぎゃあああああ……」

結果はどれも好物にならず、トラウマになりました。

ステージ28 時には予想できない事態だっておきる。(前書き)

新たに志村妙と柳生九兵衛を仲間に加えたスバル達。

イクスは無事だろうか……。

ステージ28 時には予想できない事態だっておきる。

【聖王病院の中庭】

カン！カン！カン！

九兵衛

「ハアッ！」

スバル

「てりゃ！」

スバルと九兵衛は激しく木刀を打ち合う。

スバルの速い木刀さばきを難なく受け流す九兵衛。

九兵衛も素早く打ち込もうとするが、スバルの木刀に受け止められ  
たり、受け流されたりしていた。

互いに一步も譲れない打ち合いをしていた。

ティルヴィングエアとデイドは感心する。

ティルヴィングエア

「あの九兵衛とやら凄い！流石は柳生陳陰流の当主と言われること  
はある」

デイド

「そんな九兵衛さんについて知られているスバルも凄いです」

九兵衛も内心、

九兵衛

(数日でここまでできるとは驚いた)  
と感心する。

しばらく二人の稽古が続く。

一時間後

スバル

「疲れた〜」

九兵衛

「僕もだ」

二人は疲れのあまり寝転ぶ。

スバル

「流石は九兵衛さんは凄いや」

九兵衛

「君こそ、なかなかやるな。飲み込みがいいな」

スバル

「機動六課時代、なのはさんに散々鍛えられたからかな」

九兵衛

「高町なのは殿か……。初め会った時は十歳だったのに、二度目の  
再会では十九歳になっていた。本当にあれは驚いた……」

すると、重箱を持ってきた妙が来る。

妙

「九ちゃん、スバルさん。差し入れ持ってきたわよ」

九兵衛

「ありがとう、妙ちゃん」

スバル

「丁度お腹が減ってました」

妙

「デイドさんも、ティルさんもどうぞ」

デイド

「ありがとうございます」

ティルヴィングエア

「かたじけない」

スバル達は重箱に集まって座る。

妙

「さっ、召し上げれ」

重箱の蓋が開けられ、入っていたのは……。

もちろん、ダークマターのみでした。

それも、かなりたくさん。

スバル達（九兵衛以外）はダークマターを見て、

「……何コレ!?!」

と啞然した。

妙

「ミッドチルダで初めて作った『卵焼き』よ」

スバル

(……卵焼き!?)

ティルヴィングエア

(ほとんど黒こげではないか!?)

デイド

(どうしたら、こうなるのですか!?)

妙

「どうぞ」

スバル達は焦る。

九兵衛

「いただきます」

スバル達

「ゲツ!?!」

九兵衛はダークマターを箸に掴み、食べようとする。

スバル

(きゅ、九兵衛さん……)

ティルヴィングエア

(食べるのか!?)

デイド

(止めた方が……)

九兵衛がダークマターを口に入れようとした。

その時!

ドカーン！

中庭の中心に雷が落ちる！

スバル達は驚く。

スバル

「な、何！？」

煙のあとから何かいた。

それは黄色い毛皮の羊だった。

スバル

「ひ、羊！？」

スバル達は羊を見て、啞然した。

【キュラスのアジト・コンピューター室】

二人のマリアージュはコンピューターを難しい顔で見ている。

すると、マリアージュ改00が気付く。

マリアージュ改00

「何やってんだ？」

マリアージュ1



「時空回収メカの操作をしています」

マリアージュ2

「コレがなかなか難しくって……」

『時空回収メカ』

それは江戸世界で土方や近藤などの者を次元移動させて、誘拐する機械である。

ドクターキュラスはメカをステルスモード（透明化）させ、空中を漂わせていた。

ターゲットを見つけては、次元移動する光線を撃っていた。

雷の正体は光線である。

そして、ターゲットをミッドチルダの適当な場所に移動させたあと、マリアージュ達に暗殺させて、ターゲットの死体を集めていたのだった。

マリアージュ改00

「……ちよつとまで。なんでお前たちが装置を動かしているんだ？」

マリアージュ1

「キュラス様に装置をどうするべきか、尋ねました」

マリアージュ2

「そしたら、好きにしろとおっしゃたので……」

マリアージュ改00は頭を押さえる。

マリアージュ改00

（まったく、イクスヴェリアを手に入れて、『冥王の方舟』の改造に全力を注ぐのは構わないが、あと始末をちゃんとしろ。戦闘用マリアージュに装置を任せるなんて……）

マリアージュ改00は呆れる。

マリアージュ二人は適当にボタンを押す。

マリアージュ1

「……また捕まえました」

マリアージュ2

「場所は…… ×地点です」

マリアージュ1

「いかがいたしましたよう」

マリアージュ改00

「……ほっとけ。もう必要ないから自爆……」

ピーーーーーッ

コンピューターの画面が消える。

マリアージュ改00達は驚く。

マリアージュ改00

「どっした!?!」

マリアージュ二人は操作するが、反応はなかった。

マリアージュ1

「反応ありません！」

マリアージュ2

「おそらく、何かあったのでしょうか？」

マリアージュ改00

「……何があった」

マリアージュ改00達は、ただ啞然するしかなかった。

## 【江戸世界】

ジジツ、ジー……

時空回収装置の機械らしきものが火花を飛ばしながら、破壊されていた。

機械の周りに人が集まっていた。

その中から、一人の

男が現れ

？

「コレが雷の正体が……」  
と呟く。

【キュラスアジト・イクスの捕らわれている部屋】

イクスはまだ拘束されたままだった。

見張り役としてマリアージュ改01がいた。

マリアージュ改01は映像画面を見ていた。

イクス

(……なんとかしないと)

イクスはなんとかキュラスの野望を食い止めよと考えていた。

しかし、拘束されているので、どうにもできなかった。

そんなイクスはマリアージュ改01のしている映像画面に気付く。

イクス

「……それはなんですか？」

マリアージュ改01

「……スバル・ナガジマの戦闘データを見えています」

イクス

「スバル・ナガジマ？」

マリアージュ改01

「私が初めて戦った相手です」

マリアージュ改01は戦闘データの映像画面をイクスに見せる。

イクスは戦闘データを見て、驚く。

イクス

「……凄い」

マリアージュ改01

「スバル・ナガジマは戦闘機人の実験体です。かなりの戦闘力があります。私の左腕を破壊しました」

イクス

「そうですか……」

マリアージュ改01の表情は浮かなかった。

イクス

「どうかしましたか？」マリアージュ改01

「……不思議なんです。スバル・ナガジマのことが気になるんです。負傷させたからか……。いえ、そんなではない。わからないが、こう胸の中で感じるです。……何なのかはわかりませんが」

イクスは考えて、気付く。

イクス

「もしかしたら、あなたの前世が関わっているのでは？」

マリアージュ改01

「……前世？」

イクス

「死体になる前。つまり、生きていた頃の記憶が微かに覚えているのでは……」

マリアージュ改01

「そんな事があるのですか？」

イクス

「強く大切な記憶なら……。思い出させましょう。私の片腕だけ解

放してください」

マリアージュ改01

「それはできません！」

イクス

「片腕だけです。それだけなら良いでしょう？それにモヤモヤしたままじゃ、嫌でしょう？」

マリアージュ改01は溜め息をつきながら、イクスの片腕の拘束を解く。

イクスはマリアージュ改01の額に手をあてる。

イクス

「……いきます」

マリアージュ改01

「……はい」

イクスは呪文を唱えると手から光が輝き出す。

マリアージュ改01はハッと思い出す。

マリアージュ改01の頭から次々と思いが現れていく。

スバル、ギンガ、そしてゲンヤが思い出として現れる。

マリアージュ改01

「グワッ！」

マリアージュ改01は一気に思い出したので、頭が混乱し、頭を押さえながら膝をつく。

イクス

「だ、大丈夫ですか？」

すると。

マリアージュ改00

「どうした！」

マリアージュ改00はあわててマリアージュ改01に駆け寄った。

マリアージュ改00はイクスを睨む。

マリアージュ改00

「……何をした？」

イクス

「……記憶を蘇らせました」

マリアージュ改00

「何！生きていた頃の記憶をか！？……そんなこともできるのか？」

イクス

「……この能力もありました」

すると、マリアージュ改01が起き上がる。

マリアージュ改00

「マリアージュ改01……」

マリアージュ改01

「……違う。私は、ナガジマ……」

マリアージュ改00

「何？」

マリアージュ改01

「クイント・ナガジマよ」

イクス

「えっ、ナガジマって……」

マリアージュ改00

「……それがお前の前世か？」

イクス

「ナガジマって、スバル・ナガジマさんと同じ名字……」

クイント

「スバルは……私の娘よ」

イクス

「エエツ！？」

マリアージュ改00

「なんと皮肉な……」

マリアージュ改01の元となった死体。正体は、クイント・ナガジマ。

スバルとギンガの母親だった

次回に続く。



ステージ28 時には予想できない事態だっておきる。(後書き)

この黄色の羊は『神威銀時』さんの考えたキャラクターです。

この羊の詳しい情報は次回まで待って下さい。

神威銀時さん、ありがとうございました。これからも応援よろしく  
お願いします。

ステージ29 恋も出会いもいつも突然だ。(前書き)

今回はちょっとエッチかもしれません。

ステージ29 恋も出会いもいつも突然だ。

聖王病院でスバル達が謎の羊に遭遇したり、キュラスアジトでマリ  
アージュ改01の正体がクイント・ナガジマと判明した時に土方達  
は……。

【聖王病院近くの公園】

ティアナとアギトはベンチに座っていた。

土方はホットドッグ屋からホットドッグを買っていた。

アギト

「クソ、手がかりが掴めねえ……」

ティアナ

「ルネの通信履歴からたどっても、キュラスの番号が削除されてい  
た。ほんとに抜け目がないわ」

買い終えた土方が戻ってくる。

土方

「ほれ」

ティアナ／アギト

「……………」

土方はマヨネーズたっぷりかけたホットドックを二人に差し出す。

もちろん、二人は啞然する。

ティアナ

「なんでマヨネーズなんですか？」

アギト

「普通はケチャップソースとマスタードソースだろ！」

土方

「土方特製の『マヨネーズドック』だ」

ティアナ

「マヨネーズをかけただけでしょう！」

アギト

「……美味しいのか？」

アギトはマヨネーズドックにかぶりつく。

ティアナ

「ちよつとアギ……」

アギト

「………美味しい」

ティアナ

「えっ……」

アギト

「美味しいな、マヨネーズ！」

ティアナ

「ええ……！？」

ティアナは驚愕する。

土方

「おおっ、美味しいか！」

アギト

「見た目はべつたりしてるけど、美味しいな」

ティアナ

「あ、あなたの味覚って……」

ティアナには理解できなかった。

アギトは気にせず、マヨネーズドッグをベンチで座りながら食べる。

ちなみにマヨネーズドッグの大きさはアギトより大きかった。

ティアナ

「……スバルは稽古を頑張っているかな」

土方

「……柳生九兵衛は柳生家の次期当主だ。教え方がうまい。……それに、俺を負かした奴だ」

ティアナ

「えっ、そうなんですか!？」

土方

「あん時は油断したんだよ!」

ティアナ

「む、ムキにならないで下さい……」

アギト

「どうかしたんだよ?」

マヨネーズべつたりとくっついたアギト。

土方

「あーあー、マヨネーズべつたりくっついてるじゃねーか……」

土方はハンカチを取り出し、アギトのマヨネーズを拭き取るうち、

しゃがんで顔を近づける。

アギト

「いいよ…」

アギトは照れてしまう。

次の瞬間！

ドカーーーーーーン！

ティアナ

「キャツ！」

土方

「あっ…」

突然、落雷が落ち、街中に響く。

ティアナは驚く。

土方は倒れる。

そして人々も驚く。

ティアナは冷静に落雷の場所を把握する。

ティアナ

「落ちた先は……。聖王病院！土方さ……」

ティアナは土方の姿を見て赤くなった。

それは土方が倒れた際、自分の顔でアギトを押し倒したからだ。

しかも、アギトの唇と土方の唇がくっつく。

つまり、土方とアギトがキスをしてしまったのだ。

ティアナ

「あ、あら……」

土方は慌てて離れる。

土方

「わ、悪かった！」

アギトは一瞬ぼーとして、あとから気が付く。

アギト

「あ、ああっ……」

アギトの顔は赤くなる。

土方

「あ、アギトさん……」

土方はおそるおそる近づく。

アギト

「い、嫌————！」

アギトは思わず、土方に火を放つ！

土方

「熱っ熱っ熱っー！」

ティアナ

「キヤー、土方さん！」

ティアナは大急ぎで土方の火を消す。

アギトは赤くなりながら息を荒くする。

アギト

「う、奪われた……。初めての……。初めの……。アタシのファーストキスを……。おっさんに……。」

アギトはティアナに火を消してもらっている土方を見る。

アギト

「ひ、土方……さん」

アギトは土方に唇だけではなく、心まで奪われた。



スバル、ティルヴィングエア、妙、九兵衛、デイドは驚愕していた。

雷から、黄色い羊が現れたからだ。

黄色い羊は辺りを見渡す。

スバル

「あ、あれって……」

九兵衛

「江戸の世界の生き物か？」

妙

「黄色い羊なんて見たことないわ。もしかして、宇宙生物？」

すると黄色い羊はスバル達に気づき、近づく。

デイド

「こつちに来ましたよ」

ティルヴィングエア

「敵意は感じないが……。どうする？」

黄色い羊は妙のダークマターに目を止め、においを嗅ぐ。

妙

「……食べる？」

羊にダークマターを差し出す。

九兵衛

「駄目だよ、羊が卵焼きを食べないよ」

ティルヴィングエア

「まだ卵焼きと言っのか!?!」

羊はダークマターを食べる。

ガリガリ……。

スバル

「あれ?卵焼きなのにガリガリって言ってるよ」

羊は喜ぶ。

デイド

「喜んでいますよ」

ティルヴィングエア

「では、美味しいのか」

ティルヴィングエアはダークマターを口に入れる。

ティルヴィングエア

「……………ジビレバビレ!奇面フラッシュ!」

ティルヴィングエアは訳の分からないセリフを言いながら、倒れる。

スバル

「ティルヴィングエア!?!」

スバル達はティルヴィングエアに駆け寄る。

気絶したティルヴィングエアは寝かされる。

羊は前足を体毛に入れる。

スバル達は驚く。

体毛から取り出したのは、筆とレポート紙だった。

スバル

「これって……」

九兵衛

「筆とレポート紙？」

羊は筆でレポート紙に書き込む。

妙

「書き込んでるわ！」

デイド

「蹄なのに器用ですね」

羊は書き込んだレポート紙を差し出す。

スバルは受け取る。

『ありがとうございます。美味しかったです』

スバル

「お礼を言ってるみたいです」

妙

「あら、そうなの」

羊はまたレポート紙に書き込み、スバルに渡す。

『自分は【ジン・ギス・カン】と申し上げます』

妙

「ジン・ギス・カン。って言うの、羊さん」

ジン・ギス・カンは頷く。

デイド

「あなたは江戸の人……。いえ、動物ですか？」

ジン・ギス・カンはまたレポート紙に書き込んで、手渡す。

『私は宇宙生物です。地球でさまよっていたところ、桂小太郎さんという地球人に助けられました』

デイド

「桂……。あつ！あの時、クリスの城でなのはさんを助けた人！」  
スバル

「桂小太郎って、あのゾーマ事件で銀さんや九兵衛さんと活躍した人だよね！」

妙

「ええつ。わたしもいたわ」

詳しくは『赤夜叉』先生の【リリカル銀魂白夜叉鎮魂歌】をご覧ください

ください。

ジン・ギス・カンはまたレポート紙を書き込んで、手渡す。

『以後、桂小太郎さんのお手伝いで【攘夷志士】をやっております。お使い帰りに、雷に当たって、ここにおります』

スバル

「そうだったの……」

九兵衛

「これもドクターキュラスの仕業だな」

ジン・ギス・カンは首を傾げる。

妙

「あなたはドクターキュラスっていう悪い人の悪事に巻き込まれたのよ」

スバル達はジン・ギス・カンにこの雷事件の真相を説明する。

ジン・ギス・カン

「メエー！」

ジン・ギス・カンは怒り出す。

スバル

「お、落ち着いて！」

スバル達はジン・ギス・カンをなだめる。

ジン・ギス・カンは落ち着き、レポート紙を書き込んで、手渡す。

『自分は今からどうしましょう?』

九兵衛

「確かに……」

妙

「とりあえず、卵焼きを召し上げれ」

ジン・ギス・カン

「メエ」

ジン・ギス・カンは喜んでダークマターを食べる。

スバル達はダークマターを食べるジン・ギス・カンを見て啞然する。

九兵衛

「僕の卵焼き……」

ティルヴィングエア

「ああっ、走馬灯が見える……」

果たして、ジン・ギス・カンはどうなるだろう。

続く。

ステージ29 恋も出会いもいつも突然だ。(後書き)

神威 銀時さん!

ジン・ギス・カンはこんな感じでしょうか？

ステージ29・5 人の不幸を喜ぶ奴は最低だ！（前書き）

さて、今回はどんな質問が待っているかな……。



ステージ29・5 人の不幸を喜ぶ奴は最低だ！

【万事屋「銀ちゃん」】

銀時

「ぷっ、クツクツクツ」（笑）

なのは

「にやはは」（笑）

神楽

「ぐっしっしっしっ」（笑）

新八ノフェイト

「……………」

不適に笑う銀時、なのは、神楽に啞然する良心な人、新八とフェイト。

なのはは質問内容のかいた用紙を読み上げる。

なのは

「早速、質問を読み上げますね。ペンネーム【かえで】さんからの質問。『土方さんとフラグが立ちそうな人は誰ですか？（銀さんみたいに複数でもOKです。てか複数にしてください）』」

銀時

「【かえで】さん、立ちましたよ。見事にあのマヨラーに立ちましたよ、フラグ（笑）」

神楽

「イクスとアギトですよ。どっちも少女アルよ（笑）」  
なのは

「つまり、土方さんはロリコンに成っちゃいましたなの（笑）」  
三人  
「ギャツハツハツハツハツ」

三人は悪役のように高笑いをする。

新八

「……………最悪だよ、あの三人」

フェイト

「……………なのは、本当の魔王に成っちゃった」

新八とフェイトは呆れながら、恐怖する。

すると、新八は質問内容がもうひとつあることに気付く。

新八

「何々……………。コレも【かえで】さんの質問だ。『なんだかんだで江戸に取り残されているかわいそうな主人公達は本編に出てきますか？』コレは作者に聞いた方が良いですね」

フェイト

「作者さん、どうなんですか？」

作者

「出ません」

銀時、神楽、なのはは驚く。

作者

「コレはフォワードチームと真選組などの人達の活躍を書いた物語です。銀さんやなのはさんは充分に活躍しているじゃありませんか」

フェイト

「あつ、確かに……」

作者

「銀さん達の登場はオマケステージだけです。【かえで】さん、納得しましたか？」

新八

「あつ……」

落ち込む銀時、神楽、なのはに気付く。

新八

「……しばらく、おとなしくさせよう」

フェイト

「そうだね。それじゃ、次の質問を」

フェイトはデバイスで質問を表示させる。

フェイト

「ペンネーム【天使】さんの質問。『もしもフェイトが松平片栗虎の養子になったらどうなりますか？そう成ったらエリオとキャロが気になります』……松平さんって、あの松平の養子……」

フェイトは想像している。

## 【フェイトの想像】

フェイトが銀時をお父さんの松平片栗虎に紹介する。

その付き添いにエリオとキャラも来ていた。

フェイト

「お父さん、この人が……」

ズキューン！

銀時は射殺される。

フェイトとエリオとキャラは驚愕する。

松平

「……認めるか。こんな天然パーマーに娘をやれるか！」

エリオ

「ちょっと、何も射殺しなくても……」

松平

「俺は可愛い娘のためなら警察官長官からマフィアに転職する覚悟だ！娘を泣かす奴は俺が許さねえ」

フェイトは泣く

キャラ

「アナタが泣かしてどうするんですか！」

【現実】

銀時

「おおい！俺、死んじゃったよ！とつつあんに殺されたよ」

フェイト

「……とまあ、こんな風になります」

新八

「どんな過激な想像するの、フェイトちゃん！……松平さんならあり得るけど」

なのは

「つ、次の質問です」

なのははデバイスで表示する。

なのは

「ペンネーム【SADS】さんからの質問。『なんでゼストはジェイルの所じゃなくてマリアージュのところにいるのですか？』つまり、ドクターキュラスのところって意味かな？」

新八

「確か原作アニメだと、ゼストさんはチンクちゃんに殺されて、スカリエッティに人造魔導師の実験体にされたんですよね？」

銀時

「えーっ、作者によると人造魔導師計画はドクターキュラスも協力したらしく、ゼストの肉体が最高だったので、手に入れたらしい」

神楽

「とんでもねえ奴だな、ドクターキュラスって野郎」

新八

「許せませんよね」

なのは

「納得しましたか？【SADS】さん」

フェイト

「続いて、ペンネーム【神威銀時】さんからのスバルへの質問。『

マダオが全裸で初登場しましたけど原作で全裸になった新八も同じように登場したら殴りますか？出来れば殴ってやってください（新八嫌いなんで）』」

新八

「この質問がもつと許せねえ！」

新八は激怒する。

新八

「何だよこの質問！？新八嫌いつて何だよ！？つか、スバルちゃんになんて質問しやがるだよ、チクショー！？」

神楽

「新八、嫌われてるのは今で始まったことじゃないアルよ」

新八

「うるせえーよ、クソガキ！」

なのは

「新八さん、落ち着いて！」

フェイト

「私は好きだよ。……ちょっとだけ」

新八

「ちょっとだけって、どれくらいなんですか？」

銀時

「質問の答えは、あとがきで答えたいと思います。はい次の質問」

フェイト

「えーっと、ペンネーム【ウツソ・エヴィン】さんからの質問。」

銀時はフェイトに浮気してるのではと言う会話をヴィヴィオに聞かされたみたいですが夫婦仲は大丈夫ですか？』って、何この質問は！？」

フェイトは激怒する。

銀時

「落ち着けよ、フェイト！大丈夫だ！俺らの愛は簡単に崩れるか？」

フェイトは赤くなる。

フェイト

「…………ごめんなさい。あたしったら…………」

銀時とフェイトの間に甘い雰囲気漂う。

銀時

「というわけで、夫婦仲は大丈夫だ！以上」

すると、ヴィヴィオが帰ってくる。

ヴィヴィオ

「ただいま」

フェイト

「お帰りなさい」

ヴィヴィオ

「銀時パパ、請求書を預かってきた」

フェイト

「請求書？」

フェイトは請求書を受け取る。

フェイト

「…………キャバレー『ファンドシ美少女』」

雰囲気は一気に冷えあがった。

銀時

「げ、それは……」

フェイトに殺気が漂う。

なのは、新八、神楽はヴィヴィオを連れて避難する。

フェイト

「……銀時、これは何の請求書？」

銀時

「こ、これはな……。あのヅラが宣伝しててな、友達として協力したんだよ……」

フェイト

「ふーん。その為にお金を使ったんだ……。ファンドシ美少女に？」

銀時

「そうそう……。って、あっ……」

フェイト

「銀時、少し話そうか？」

フェイトはデバイスを構え、

フェイト

「『トライデントスマッシャー』(怒)」

銀時

「あああああああ！」

と銀時に放った。

ドカーーーーーーン！



万事屋『銀ちゃん』は吹っ飛びました。

終わり。

ステージ29・5 人の不幸を喜ぶ奴は最低だ！（後書き）

銀さん、人のことを悪く言ったり、結婚してるのにキャバレーなんか行っちゃ駄目ですよ……。

またの質問を待ってます。

ステージ30 目立つ悪役には必ず黒幕がいる。(前書き)

遂にステージは30まできちやいました。

それでは緊張感あるステージ30をどうぞ。

ステージ30 目立つ悪役には必ず黒幕がいる。

【とある部屋】

イクスは機械の椅子に座らされていた。

その機械はとても異様な形で、中心には大型の丸いガラスがはめられていた。

イクスは腕、腹部、膝を拘束されていた。

イクスは怯える。

キュラスは機械のレバーを握る。

マリアージュ改00とマリアージュ改01はそれを見守る。

マリアージュ改01が自らの意志を、クイントとしての意志を取り戻していたが、秘密にしていた。

キュラス

「それではいくぞー！」

レバーを下げる。

ビッビッビッ………！

機械が作動する。

イクス

「き、キャーーーーー」

突然と電力が流され、イクスは苦しむ。

クイントは止めさせようとするが、マリアージュ改00がそれを止める。

マリアージュ改00

「（小声で）……耐える」

クイント

「くっ……」

クイントは苦しむイクスを助けたい思いを必死に抑える。

機械の中央のガラスが赤く光る。

キュラス

「よし、終わった」

キュラスはレバーを上げる。

電力が消えると、イクスは気絶する。

ガシューと機械の一部が開く。

中には、赤く光る水晶玉があつた。

ドクターキュラスは水晶玉を取り出す。

キュラス

「これが残つた能力、『生産能力』だ。揃つたぞ」

ドクターキュラスは水晶玉を持って、部屋に出ていく。

クイントは急いで、イクスのところに駆け寄る。

クイント

「イクス！」

イクスは返事をしない。

クイントはすぐにイクスの拘束を外す。

マリアージュ改00

「医務室にすぐに運べ」

クイント

「言われなくても……」

### 【医務室】

イクスを抱えたクイントは驚く。

治療室は既に治療の準備がされていた。

マリアージュ改00

「前もって、準備をしておいた」

クイント

「……準備が良いわね」

イクスは寝かせられた。

クイントはバイザーを外す。

美しく、母親らしさに満ちた顔付きだった。

クイントは心配そうにイクスを看病した。

そんな様子を見ながらマリアージュ改00は口を開く。

マリアージュ改00

「……俺のことを怒らないのか？」

クイント

「……何か考えがあつてのことなんでしょう」

マリアージュ改00

「……あの装置はイクスヴェリアが死んでいても、能力を抜き取ることができる。もしも、イクスヴェリアが断つていれば、ドクターキュラスは殺していた。……『生き残るこそ勝利』生き抜いて、自らの勝利を掴め。お前とイクスヴェリアのな」

クイント

「生き残るこそ勝利……」

イクスヴェリアを見つめながら、呟く。

マリアージュ改00

「私はドクターキュラスのところに戻る」

そう言いながら、出て行くとする。

クイント

「待つて」

マリアージュ改00

「なんだ？」

クイント

「……黙ってくれるのも協力してくれるのも感謝するわ。……でも、なんでなの？あなたはドクターキュラスの片腕であるあなたがこんなことを……」

マリアージュ改00

「……お前に惚れたからだ」

クイント

「えっ」

マリアージュ改00

「嘘だよ」

クイント

「……あつ、そう」

マリアージュ改00

「俺はドクターキュラスの為に働いているのではない」

クイント

「えっ……」

マリアージュ改00

「奴は俺達、マリアージュを利用していつもりだろうが……。俺が奴を利用している」



クイント

「……マリアージュ改00。あなたはいい」  
マリアージュ改00

「……『革命家』とでも呼んで貰おう」

クイント

「革命家？」

マリアージュ改00は出ていく。

クイントは再びイクスを見る。

クイント

(イクス、あなたを必ず解放してあげる)

クイントはそう誓うのだった。

### 【死体置き場】

ドクターキュラスは先ほど機械とは違う機械の調整をしていた。

形は砲台のようなものだった。

その砲台の上には、先ほどの赤い水晶玉と、  
青い水晶玉が取り付けられていた。

キュラス

「データのインプット。『生産能力』『コントロール能力』の装着  
完了。……準備はできた」

キュラスは砲台の砲身を山積みの死体に向ける。

キュラス

「発射！」

トリガーを引く。

ビュビューーーーー！

紫色の光線が発射される。

光線は山積みの死体に当たる。

しばらくして、山積みの死体が動き出す。

「ああっ……………」

「ぐぐぐ……………」

次々と紫色に変色し、  
姿を変貌していく。

ある者は鎧武者、

ある者は忍者、

ある者は、異形の戦士と変貌していく。

キュラスは笑う。

キュラス

「ふっふっふっ、成功じゃ！」

キュラスは変貌した死体達に歩み寄る。

キュラス

「……諸君！」

死体達は反応する。

キュラス

「諸君らは、誰だ？」

死体達

「……量産型マリアーヂュ改」

キュラス

「主は誰かな？」

「……ドクターキュラス様」

キュラス

「その通りじゃ！最後に、諸君らは何をする」

量産型マリアーヂュ達

「ドクターキュラス様の命令を忠実に従う」

キュラス

「その通りじゃ。……成功じゃ！ギャツハツハツハツ……」

ドクターキュラスは高笑いをする。

そんな時、

マリアーヂュ改00が入ってくる。

マリアージュ改00

「成功おめでとうございます」

ドクターキュラス

「おおつ、マリアージュ改00か」

マリアージュ改00

「イクスヴェリアのことなんですが……」

キュラス

「ふん、用済みじゃ。始末しろ」

マリアージュ改00

「いえ、まだ利用価値があります」

キュラス

「何？」

マリアージュ改00

「身代わりですよ。奴らはいまだにイクスヴェリアにマリアージュ達を操る、生産能力があると思っています。イクスヴェリアを抹殺すれば、マリアージュ達を止めれると思わせるのです。そうすれば、キュラス様が狙われる可能性が低くなります」

キュラス

「なるほどなあ……。よかるう、生かしておけ」

マリアージュ改00

「はい」

すると、マリアージュ改03が入ってくる。

マリアージュ改03

「ドクターキュラス様、遂に完成しました」

キュラス

「おおつ、そうか！」

マリアージュ改00

(……計画は順調だな)

マリアージュ改00は笑う。

【とある大型施設】

二本の柱の間に次元の入り口が発生していた。

これは『次元のゲート』である。

そこからマリアージュ改03、ドクターキュラス、マリアージュ改00が出てくる。

マリアージュ改03は近くにある機械のレバーを引く。

辺りの灯りがつく。

そして……。

キュラス

「ふっふっふっ、完成だ。『冥王の方舟改』」

照らし出された舟の船体はあまりにも巨大だった。

後方部分に四方に角が出て、全身の色は紫色である。

キュラス

「設計通りか？」

マリアージュ改03

「はい、もちろんでございませす」

キュラス

「次に、アレの仕掛けは？」

マリアージュ改03

「マリアージュ改02に任せております。奴が帰ってくる時が……」

すると、次元からマリアージュ改02が出てくる。

キュラス

「マリアージュ改02」

マリアージュ改02

「準備できました。アレはかなりに飢えています」

キュラス

「そうか、よしよし……」

ドクターキュラスは『冥王の方舟』を見て、微笑む。

キュラス

「準備が出来次第、計画が始める。他の奴らに伝えるのじゃ！」

マリアージュ改00

「わかりました」

マリアージュ改00は次元ゲートに入る。

## 【医務室】

イクス

「うう……」

クイント

「気が付いた？」

イクス

「……クイントさん、私は？」

クイント

「キュラスの機械のせいで、気絶したのよ」

イクス

「……そうですか」

クイント

「……ごめんなさい。助けてあげられなくて」

イクス

「いいですよ。今はこうして、生きています」

クイント

「……強いよね」

イクス

「『生きる』って、言われました」

クイント

「誰に？」

イクス

「十四郎様、土方十四郎様に言われました」

クイント

「土方十四郎？」

マリアージュ改00

「真選組副長土方十四郎。剣術はもちろん、くせ者揃いの隊士達をまとめている、別名『鬼の副長』と呼ばれている」

マリアージュ改00が入ってくる。

イクス

「それが十四郎様……」  
クイント

「その情報をどこで？」  
マリアージュ改00

「使える対象を事前に調べてる」  
クイント

「……そうなの」  
マリアージュ改00

「クリスマス事件で機動六課と一緒に戦った」

(クリスマス事件のことは、赤夜叉先生の『リリカル銀魂Strike  
rS 白夜叉鎮魂歌』でご覧下さい)

クイント

「機動六課？」

マリアージュ改00

「……お前の娘、スバルとギンガが所属していた部隊だ」  
クイント

「スバルとギンガが!？」

マリアージュ改00

「ああっ」

クイント

「スバル、ギンガ……」

イクス

「……クイントさん」

マリアージュ改00

「……お前の娘達は何故守る？」  
クイント



「えっ……」

マリアージュ改00

「お前の娘達は、何故このミッドチルダ世界を守るつもりなのだ」  
クイント

「……守るのに、理由はないと思うわ。親が子供を守りたいと同じように……」

マリアージュ改00

「親が子供を守りたい……」

マリアージュ改00は何かを思い出す。

クイント

「マリアージュ改00？」

マリアージュ改00

「……準備が出来次第に計画を発動させる」  
クイント

「えっ……」

マリアージュ改00

「イクス、君も同行してもらおう」  
イクス

「私ですか!？」

マリアージュ改00

「イヤか？」

イクス

「……わかりました」  
クイント

「イクス……」

イクス

「これもキュラスの野望をくい止めるためですよね？」  
マリアージュ改00

「その通りだ」

クイント

「……私も協力するわ」

イクス

「ありがとうございます、クイントさん」

マリアージュ改00

「……本来なら、子供にはこんなことをさせたくない。すまん  
イクス

「……マリアージュ改00さん。良い人なんですね」

マリアージュ改00

「マリアージュ改00は長いから、本名を教えよう」  
クイント

「本名あるの？」

マリアージュ改00

「……我が名は『トレディア・グラージェ』」

『トレディア・グラージェ』。

それはこのマリアージュ事件の元凶を作り出した人物である。

次回に続く。

ステージ30 目立つ悪役には必ず黒幕がいる。(後書き)

マリアージュ改00のまさかの正体は『トレディア・グラーゼ』だった!?

このマリアージュ改00のCVは立木文彦です。

理由はトレディアと長谷川がそっくりという設定なので……。

ステージ31 人間はいろんな経験で心情は変わりやすいよね。(前書き)

待たせた分、長く書けました。

ステージ31 人間はいろんな経験で心情は変わりやすいよね。

桂派の攘夷志士のジン・ギス・カンはミッドチルダ世界にやって来てしまう。

そこで志村妙と出会い、志村妙のダークマター（卵焼き）を食べて、気に入った。

【病院の待合室】

妙

「ジンちゃん、卵焼きよ」

妙はダークマターを皿に持って、ジン・ギス・カンを探す。

デイエチ、ウエンデイ、ノーヴェはダークマター（卵焼き）を見て  
唾然する。

デイエチ

「あの人が志村新八さんのお姉さん、志村妙さん」

ウエンデイ

「手に持っているのは、……卵焼きだそうツスよ」

ノーヴェ

「卵焼き！？あの黒い物体のどこが卵焼きだよ！？」

妙

「あなたがナガジマ姉妹ね。初めまして、志村妙です。お近づきのしるしに、卵焼きをどうぞ」

ダークマター（卵焼き）をすすめる。

三人

「すみません、今はお腹いっぱいです」

必死に丁重におことわりする。

妙

「あら、そうなの……。ジンちゃん」

すると、黄色い羊のジン・ギス・カンが駆け寄り、妙にすり寄る。

妙

「ジンちゃん、そんなにねだらなくても、あげ……」

妙は目を開き、啞然する。

ジン・ギス・カンではなく、羊の着ぐるみを着た、近藤 勲だからだ。

近藤

「めえー……」

バッキ！

妙は近藤が鳴き始める瞬間、  
鉄拳をモ口顔に打ち込む。

妙

「やだわ、羊の着ぐるみを着たゴリラだわ！」

うつ伏せで気絶する。

ウエンディ

「いや、それはゴリちゃん……。じゃなくて、近藤さんツスよ」

妙

「あら、『ゴリちゃん』って、言うのね。この羊ゴリラ」

ディエチ

「な、中身は近藤さん……」

妙

「嫌だわ。ここは病院なのに、動物を持ち込むなんて……」

ノーヴェ

「……もしかして、コイツ（近藤）が嫌い？」

妙

「うふっ」

ディエチ

「……嫌いなんだ」

ノーヴェ

「……確かに気持ちはわかる」

ウエンディ

「ゴリラツスからね……」

妙

「じゃあ本物のジンちゃんはどこかしら……」

するど。

チンク

「貴様止めないか」

九兵衛

「邪魔をするな！」

廊下の向こうで、二人の大声が聞こえる。

妙

「九ちゃん？」

ノーヴェ

「チンク姉？」

【廊下】

ジン・ギス・カン

「メエー……」

ジン・ギス・カンは身体を縄で縛られていた。

その側には九兵衛が立って、

そして対峙するように、チンクがいた。

チンク

「貴様、その羊をどうするつもりだ？」

九兵衛

「君には関係ない」



チンク

「可哀想だろ、離してやれ」

九兵衛

「駄目だ。この羊は妙ちゃんに付きまとう第二のストーカー動物だ」  
チンク

「何を訳の分からないことを言っているんだ！？いいから離してやれ」

九兵衛

「口説い！この羊を始末する！妙ちゃんは僕のものだ！」  
チンク

「自分のものだと言い切っている貴様がストーカーだぞ！」

九兵衛

「黙れ、チビが」

チンク

「貴様に言われたくないぞ」

九兵衛

「なんだと！だいたいなんだ眼帯なんか付けて、それは私のチャームポイントだぞ！」

チンク

「知るか！」

九兵衛はチンクを見て、

九兵衛

「貴様も妙ちゃんを狙う為にそのなりになっているのか！？」  
と勘違いする。

チンク

「アホか、貴様は！？」

九兵衛

「アホではない！」

九兵衛とチンクは睨み合う。

妙達はその様子を見ていた。

妙

「あの子は？」

ノーヴェ

「うちの姉貴」

ウエンデイ

「チンク姉と喧嘩してるのは、柳生九兵衛ッスね」

デイエチ

「……あの二人のキャラ、被っているね」

ウエンデイ

「……だから喧嘩しているんッスね」

この二人の喧嘩は段々……。

チンク

「貴様、名は？」

九兵衛

「聞く前に、自分から名乗れ」

チンク

「チンク・ナガジマだ」

九兵衛

「何、チ コ!?」

ブチッ！

チンク

「チンクじゃー（怒）」

チンクは怒りのあまり、『ステインガー』を構える。

九兵衛も刀を抜いて、構える。

妙

「九ちゃん！」

ウエンデイ

「二人共、止めるッス！」

大慌てで止めようとする……。

婦長

「コラッ！（怒）」

バキッ！

怒れる聖王病院の婦長は鉄拳を九兵衛とチンクの頭上に叩きつけ、沈める。

婦長

「ここは病院だ！喧嘩すんな！動物を持ち込むな！あと、静かにしやがれー！（怒）」

九兵衛ノチンク

「は、はい〜（泣）」

九兵衛とチンクは思わず抱き合いながら、婦長に怯える。

その様子を見ていた妙達も怯える。

デイエチ

（……婦長も静かにして下さいよ）

デイエチは心の中で、突っ込んだ。

ジン・ギス・カンは病院の外に連れ出された。

ついでに、近藤も。

### 【病院の待合室】

九兵衛とチンクはしばらく睨み合っ。

妙

「九ちゃん、チンクちゃんも喧嘩しないで  
ウエンデイ

「そっすよ。チンク姉は二番目の姉なんっすから」  
九兵衛

「僕は悪くない」

チンク

「羊を始末しようとしたくせに」

九兵衛

「なんだつと(怒)」

妙

「九ちゃん！」

土方

「それは確かにお前が悪いな」

いつの間にか土方がいた。

妙

「土方さ……、プッ！その頭どうしたの？」

土方の頭はパーマになっていた。

ナガジマ姉妹も思わず笑う。

アギトとのある意味（詳しくはステージ29で）不幸な事故によるもの

土方

「……色々あってな。それより、チンク姉さんは羊を助けようとしただけだ。そのどこが悪い？普通に考えれば、羊を始末しようとした貴様が悪い」

九兵衛

「あの羊は妙ちゃんを奪ったのだ」

土方

「懐いただけだろ。……まったく世話をやかせるな」

土方はタバコを吸い出す。

土方

「ということで、非は柳生九兵衛にある、反省してる。はいおしま  
い」

九兵衛

「むー…」

土方は見事におさめる。

ウエンディ

「見事ツスね」

ディエチ

「さすが真選組副長ですね」

土方

「中間管理職になると、こーゆうことは日常茶飯事なんだよ」

ティアナ

「どうしました!?!」

ティアナが急ぎ足で駆けつける。

ティアナ

「なんか大声や物音がしてたんですけど……」

土方

「柳生九兵衛が騒ぎをおこしたんだよ」

ティアナ

「そ、そうですか……」

スバル

「ティア、どうしたの？」

今度はスバルやエリオにキャラ。そしてティルヴィングエアも駆けつける。

ティアナ

「なんか九兵衛さんが騒ぎをおこしたらしいのよ」  
スバル

「えっ、九兵衛さんが!？」

ティルヴィングエア

「むっ」

スバル達も土方のパーマに気づき、笑う。

土方

「笑うな」

すると、アギトもやって来る。

しかし、アギトの様子がおかしかった。

アギトは顔を赤く、視線をチラチラとさせていた。

そんなアギトに、ティアナと土方以外の者達は気づく。

スバルは土方に尋ねてみる。

スバル

「……アギト、どうかしたの？」

土方

「……さ、さあー、わかんねえな」

すると、キャラロはアギトの様子をじっくり観察する。

キャラロ

「顔を赤い。そしてチラチラした視線。……これは恋している仕草です！」

「ええっ!？」

土方、ティアナ、そしてアギトは凶星を突かれ驚愕する。

スバル

「ほ、本当!？」

キャラロ

「私もゾーマ君も同じ仕草をしました」

ティアナ

「えっ、あのゾーマに」

ゾーマを知っている者達は想像してみる。

### 【想像】

キャラロとゾーマはお互い顔を赤くして、視線をチラチラとしてみる。

美少女と魔神との間にラブラブな雰囲気漂う。



【現実】

想像した者はゾツとする。

アギト

「べ、別に恋なんかしてないよ！土方さんに唇を奪われたぐらいで、恋に落ちるか！」

全員（ティアナ以外）は、

「えーっ！」

と驚愕する。

土方

「オオーイ！それを言うな！」

スバル

「言うなって、本当なんですか！？」

土方

「あ、あれは事故だ！コイツの体にはマヨネーズを付け……」

エリオ

「アギトの体にマヨネーズを付けて！？」

全員（ティアナ以外）は驚愕して、想像してみる。

【想像】

アギト

「いやーん」

何故か裸のアギトは土方にマヨネーズをかけられる。

土方はいやらしく、そのまま唇を近づける。

そしてアギトは唇を奪われ、恋に落ちる。

【現実】

土方

「ちょっと待て！なんだよ、この想像は！これじゃ、俺変態だよ！」

土方は思いっきり否定する。

しかし、全員（ティアナ以外）は軽蔑の眼差しを土方に送る。

土方

「や、やめろ！そんな目で俺を見るな！」

土方の訴えるが、全員（ティアナ以外）は眼差しを止めてくれなかった。

土方

「て、ティアナ、お前も何か言っ……」

土方は啞然する。

ティアナはドSな笑みを浮かべていた。

土方

「な、なんだよその笑みは！？笑っていないで、お前もなんか言うてくれ！」

ティアナ

「……土方さんがアギトにキスをしちゃいました。……それだけです」

土方

「い、いや、もっと詳しく……」

ティアナ

「そのあと、アギトは唇と心を奪われました」

土方

「そーゆうことじゃない！」

ティアナの話聞いた人達は……。

あんな小さな子にキスを……。

マヨネーズをかけるなんて……。

前言撤回、この副長最低……。

別の意味で鬼の副長だ……。

流石は、トツシー……。

ロリコン……。

と土方のことをそう印象付ける。

土方

「やめて、俺をそんな目で見ないで……。あれ、何だろう……。スゲーー泣けてきた……」

土方は額に手を当てて、涙を流す。

そんな土方を見ていたティアナは  
ティアナ

（沖田さん、土方さんいじめって、本当に楽しいですね）  
と心の中で楽しむ。

ティアナは沖田の恋人であるためか、趣味も同じになったようだった。

長谷川

「あのお……」

全員、声のする方を向いてみると、  
長谷川がいた。

妙

「長谷川さん！」

長谷川

「妙ちゃん、本当に来てたんだ！」

九兵衛

「長谷川殿」

長谷川

「九ちゃんも！」

ティルヴィングエア

「長谷川？」

エリオ

「ああつ、ティルさんは初めてでしたね」

キヤロ

「長谷川泰三さん。真選組の皆さんや妙さんに九兵衛さんと同じ江戸の世界から来た人です」

長谷川

「わっ！なんだその鎧武者!?!」

スバル

「長谷川さん、この鎧武者が、あの『冥王の刀』です」

長谷川

「ええっ!?!」

ティルヴィングエア

「初めまして、ティルヴィングエアです」

長谷川

「あつ、長谷川泰三です」

ティアナ

「長谷川さん、どうしてここへ」

長谷川

「ギンガちゃんについて来ちゃたんだよ」

ギンガ

「スバル」

スバル

「ギン姉！」

妙

「銀さんの結婚式以来かしら……。志村妙です」

九兵衛

「柳生九兵衛です」

ギンガ

「あつ、お久しぶりです。スバルの姉のギンガ・ナガジマです」

スバル

「ギン姉、なんかの報告？」

ギンガ

「うん、そうよ。あなたの『リボルバーナックル』が修理終わったんだけど……」

スバル

「あたしの『リボルバーナックル』が!？」

ギンガ

「そうよ」

エリオ

「良かったですね」

スバル

「うん」

キヤロ

「あ、ということとは……。ティルさんはもういらないってこと？」

ティルヴィングエア

「ええっ!？」

ティルヴィングエアはショックを受ける。

ティルヴィングエア

「スバル殿!私はずいらないのですか!？」

スバルに泣きつく。

スバル

「落ち着いて……」

ギンガ

「ティルヴィングエアさん、大丈夫です。これからも、スバルのデ  
バイスでいて下さい」

ティルヴィングエア

「ええっ？」

ギンガ

「スバル、あなたの『リボルバーナックル』を私が使って良い？」

スバル

「ええっ？」

ギンガ

「せっかくティルヴィングエアさんとの練習がうまくやっているの  
に、中断させる真似はしたくないわ。でも『リボルバーナックル』  
は直った。だから考えたの、私が使おうって」

ティアナ

「なるほど、ギンガに『リボルバーナックル』を使わせる手もある  
わ」

スバル

「ギン姉なら良いよ！」

ティルヴィングエア

「そ、それでは……」

ギンガ

「これからもスバルをよろしくお願いします」

ティルヴィングエア

「ははっ！」

ティルヴィングエアはギンガに深々と頭を下げる。

土方

「『リボルバーナックル』を両手に装着か……。かなり戦力になる  
な」

ギンガ

「そうですね、ロリ方さん」

土方

「ロリ方！？俺のことか！？ってか、さっきの話聞いていたのか！？」

ギンガ

「はい、キャラのセリフから聞いていました（笑）」  
土方

「（笑）じゃあねえよ！？」

長谷川

「あと、それから……。もう一人連れてきたんだ」  
スバル

「もう一人？」

長谷川

「…入ってきて」

入ってきたのは……。

ティアナ

「ルネ！？」

ルネッサ・マグナスだった。

長谷川

「実は彼女、協力したいって言うてくれたんだ」

妙

「ルネッサ・マグナスって……」

九兵衛



「ドクターキュラスに協力していた奴か」

ティルヴィングエア

「こ、この者が……」

この三人は、スバル達からルネッサ・マグナスの話を聞いていた。

ルネッサ

「そうです、ドクターキュラスの共犯者です」

土方

「……今度は何を企んでいる」

長谷川

「べ、別に企んでいないよ！ルネちゃんは罪滅ぼしのために」

土方

「信用できないな。どんな理由があろうと、そいつは自分の職務を忘れ、犯罪者になった。上司を裏切った奴を信用しろって言うのは無理な話だ」

土方の正論は正しかった。

場には、重い空気が流れる。

すると、長谷川は膝をつく。

ルネッサ

「長谷川さん！？」

長谷川

「頼む！ルネちゃんに、罪滅ぼしをさせてくれ！」

妙

「…………長谷川さん」

九兵衛

「なぜ、そこまで…………」

長谷川

「ルネちゃんは、ただ見失っただけだったんだ。自分の望みも、大好きなお父さんを」

ルネツサ

「…………長谷川さん」

長谷川

「確かにやり方を間違ってしまった！けど、間違いで学ぶことだってあるだろ！正したいと思うだろ！」

土方

「それは…………」

長谷川

「それに、このままルネちゃんに後悔させたまま、罰を受けさせたくないんだ」

すると、ゼストが入ってくる。

長谷川

「ゼストさん」

ゼストも膝をつく。

ゼスト

「俺からも頼む！」

ルネツサ

「ゼスト…………さん」

ゼスト

「……彼女を犯罪者にしてしまったのは、俺にも責任がある。俺がもっと早くトレディアに真実を話していれば、こんなことにはならなかった。だから、彼女に罪滅ぼしをさせてくれ！」

長谷川

「ありがとう、ゼストさん」

ルネッサ

「……長谷川さん、……ゼストさん」

ルネッサは涙を流す。

妙

「……ティアナちゃん」

ティアナ

「妙さん」

妙

「ルネッサさんのことは、あなたが一番よく知っているでしょう？  
信じてあげたら」

ティアナは黙り込む。

近藤

「嬢ちゃん」

いつの間にか、近藤（殴られた跡あり）が立っていた。

近藤

「『罪を憎んで、人を憎まず』と言ったことわざがあるぞ。……信じ  
ることは悪いことではないぞ」

スバル

「ティア」

周りの者達はティアナに暖かな眼差しを送る。

ティアナ

「……わかりました。ある過酷な試練を乗り越えられたら、ルネをもう一度信じます！ルネ、受ける？」

ルネツサ

「……受けます！」

数十分後

ルネツサの目の前に、『土方スペシャル』があった。

ティアナ

「これを全部食べたら、合格よ」

土方

「ちよつと待て！」

土方が抗議をする。

土方

「なんだよ、コレ？この『土方スペシャル』が過酷な試練！？コレは俺の好物に対する冒涇だぞ！」

ティアナ

「黙って下さい、ロリ方さん」

土方

「土方だよ！」

すると、ルネツサは箸を取り、『土方スペシャル』を掻き込むように食べる。

ウエンディ

「た、食べたツス!？」

デイエチ

「あの『土方スペシャル』を!？」

ノーヴェ

「み、見てるだけで、吐き気が……」

ルネツサは必死で食べる。

数分後

ルネツサ

「……うぷっ」

ルネツサは『土方スペシャル』を完食した。

ティアナ

「合格よ。あなたの本気はわかったわ」

ルネツサ

「……ランスター執務官」

ティアナ

「……またよろしくね」

ティアナは微笑みながら、ルネツサの肩を持つ。

ルネツサ

「ランスター執務官（泣）」

ルネッサは思わず、ティアナの胸で泣いてしまう。

周りの者達はその光景に感動する。

長谷川

「良かった、良かったな、ルネちゃん」

長谷川は特に泣いてしまう。

土方

「……俺はとても複雑で涙が出そう」

土方にとって散々な日になったそうなの……。

次回に続く。

ステージ31 人間はいろんな経験で心情は変わりやすいよね。(後書き)

黒神先生、チンクと九兵衛のネタありがとうございました。

土方にロリコン疑惑発生して、ルネッサが再び仲間になりました。

ステージ32 大抵のアクション映画は、テロリストの襲撃から始まること

今回はあの三人が登場します。



ステージ32 大抵のアクション映画は、テロリストの襲撃から始まることが多

【時空空間】

様々な世界に行ける時空空間。

そんな空間に浮かぶのは巨大な要塞、『時空管理局本部』

【時空管理局本部：三提督の部屋】

部屋には三人の老人、三提督がいた。

本局統幕議長『ミゼット・クローベル』。

武装隊榮譽元帥『ラルゴ・キール』。

法務顧問相談役『レオーネ・フィルス』。

ミゼット

「なんだか『ミッドチルダ』が大変なことになっているわね」  
ラルゴ

「再び『江戸の世界』から侍がやって来たり」  
レオーネ

「『ドクターキュラス』が『マリアージュ』を利用して、何かを企  
んでいるらしい」

ラルゴ

「ドクターキュラスとは、あの最高評議会が紹介した、ドクターキユラスか？」

レオーネは頷く。

レオーネ

「ランスター執務官の報告によると、彼も『江戸の世界』からやってきた天人というものらしい。相当な悪事をやっていたらしい」

ミゼット

「大丈夫かしら、ランスター執務官は……」

ラルゴ

「八神二佐の部下だった子だから、大丈夫だと思うが……」

レオーネ

「さすがに今回は荷が重い……」

ビーツ、ビーツ、ビーツ……

突然の警報に三提督は驚く。

三提督の前に局員の映像が現れる。

ラルゴ

「どうした!?!」

局員

「大変です!我が本局の外を見て下さい」

局員の姿から、外の画面に切り替わる。

三提督は驚いた。

それは……。

【時空空間】

「グルルルル……」

「ギャアー、ギャアー」

なんと時空空間に謎の生物が多数浮かんでいた。

爬虫類、昆虫類、軟体動物など形をして、  
大型から小型まである。

どの生物も、狂暴性を漂わせていた。

【時空管理局本部：三提督の部屋】

ラルゴ

「な、何なんだアレは……」

ミゼット

「あれほどの数、いつの間に!？」

レオーネ

「すぐに対応を」

レオーネはすぐに回線を開き、対応の指示を出す。

【時空間】

「ギャアー！」

生物達は本局に向かって行く。

その勢いは凄まじかった。

すると、本局から砲撃が放たれる。

ドカーン、ドカーン、ドカーン

砲撃は次々と生物達に当たるが、勢いは留まらない。

「グオッー」

本局本部に取り付こうとすると……。

バチッ！

「ギャギャッ！」

本局本部の張られた特殊なバリアーのおかげで、生物達は取り付かなかった。

「グオッー」

それでも生物達は取り付こうとする。

引つかいたり、噛みついたり、触手で叩きつけたりする。

中には火炎放射や溶解液を吐く生物もいた。

それでも、バリアーは破れなかった。

生物達はやっと諦めて、退却する。

【時空管理局本部：三提督の部屋】

レオーネ

「諦めていくぞ」

ラルゴ

「よし、追撃だ！」

ミゼット

「追撃ですか？危険では…」

レオーネ

「あんな危険な生物達を放っておけんよ」

ラルゴ

「その通りじゃ！他の世界に現れたら、大変じゃ！」

ミゼット

「そうですね！」

【時空空間】

本局本部から、艦隊が出撃する。

艦隊は追撃しながら、生物達のあとを追う。

【????】

????1

「艦隊が行きました」

????2

「よし、作戦開始じゃ」

????

「了解」

【時空管理局本部：管制室】

ここ時空管理局本部の管制室はとても広く、数多くのコンピュータが設置され、数多くの管制員が操作をしている。

管制員1

「艦隊、未確認生物達を追撃しています」  
管制長

「そうか…」

ビーツ、ビーツ、ビーツ…

突然の二度目の警報に管制長や管制員達は驚く。

管制長

「な、なんだ!？」

管制員2

「巨大な次元の歪みを発見しました!」

管制長

「今度は次元の歪みだと!?!どこだ!」

管制員1

「ま、待って下さい」

管制員達はすぐに索敵する。

管制員1

「こ、これは!？」

管制長

「どうした!？」

管制員2

「歪みの場所は……、我が本部の真上です!」

### 【時空管理局の外側】

時空管理局本部の真上に巨大な次元の裂け目から『冥王の方舟改』

が徐々に出てきた。

外から見ていた時空管理局の局員達は驚愕した。

【????】

ここは『冥王の方舟改』の管制室だった。

ドクターキュラス

「ギャッハッハッハッ！見る、あの管理局の奴らの顔を！」

ドクターキュラスは座りながら高笑いをする。

マリアージュ改00は艦長席に座っていた。

そして、量産型マリアージュ改が操縦をする。

マリアージュ改00

「量産型マリアージュ改達、出撃！」

量産型マリアージュ

「了解」

マリアージュ改00は立ち上がる。

マリアージュ改00

「ドクターキュラス様、行きましょう」

ドクターキュラス



「よし」

ドクターキュラスも立ち上がる。

### 【時空管理局の外側】

『冥王の方舟改』の先端が開くと、量産型マリアージユ改達が飛び出る。

量産型マリアージユ

「グオッー！」

武器を取り出しながら、着地する。

そして、量産型マリアージユ改達は管理局員達に襲い掛かる。

「キヤーー！」

「ウワッー！」

突然の出撃で、管理局員達は一方的にやられる。

### 【三提督の部屋】

ラルゴ

「な、なんじゃと！？」

三提督は突然の出撃に驚愕する。

局員1

「突然の出撃により、局員達は混乱しております!」

レオーネ

「ラルゴ…」

ラルゴ

「…こうなれば、ワシが直接指示を……」

ドカーーーーーン!

突然、扉が爆発する。

三提督は驚愕する。

爆破された扉から、量産型マリアーヂュ改二体が入ってくる。

次にマリアーヂュ改00が入ってくる。

マリアーヂュ改00

「初めまして、伝説の三提督の皆様」

ミゼット

「あ、あなたは!？」

マリアーヂュ改00

「既にご存知かもしれませんが、『マリアーヂュ改』です」  
レオーネ

「お、お前が『マリアーヂュ改』!？」

マリアーヂュ改00

「正確に言えば『マリアーヂュ改00』と申します」

ラルゴ

「マリアージュ改00?」

ドクターキュラス

「そして、『マリアージュ改』を作ったのは、この天才科学者であるドクターキュラス様だ!」

ドクターキュラスは颯爽と登場する。

ラルゴ

「……貴様が、ドクターキュラス」

レオーネ

「どうやって、この時空管理局本部に!？」

ドクターキュラス

「ワシの改造した『冥王の方舟』は自在な場所で時空移動ができるのじゃ」

ラルゴ

「なんじゃと!？」

ドクターキュラス

「『冥王の方舟』は次元世界を自由に行き来することを目的に作られた舟。ワシは更にあらゆる場所を的確に移動出来るように改良したのだ!」

マリアージュ改00

「時空管理局本部の真上に移動できたのも、そのおかげです」

レオーネ

「あの生物達は、貴様達の仕業か!？」

ドクターキュラス

「その通り!あれはワシが開発した『改造エイリアン』じゃ!」  
ミゼット

「エ、エイリアン!？」

ドクターキュラス

「そうじゃ、元々低レベルだった奴を、ワシが凶悪にして、何匹でも増殖できるように改造したのじゃ！」

マリアージュ改00

（そのおかげで、暴れたり増えたりして大変だったかな）

ドクターキュラス

「お前達、時空管理局が戦力である追撃艦隊で『改造エイリアン』を追いかけさせ、そのスキを狙って、襲撃させてもらった！」

ラルゴ

「なんと大胆な作戦なんだ!？」

マリアージュ改00

「まさか、この時空管理局本部を襲撃するなど有り得ない。という安心感を突かせていただきました」

レオーネ

「くっ…」

すると、ドクターキュラスはポケットからボールを取り出し、投げつける。

ボールは破裂し、光り出す。

ピカーーーーーッ!

三提督

「グワッ!？」

三提督は眩しさのあまり、目を閉ざす。

マリアージュ改00

「皆様方は、たった今からは魔法は使えなくなりました」

三提督は驚き、魔法を使う。

確かに魔法が出せなかった。

ドクターキュラス

「ワシが開発した『魔法封じ特別版』じゃ！光を浴びれば、魔法が使えなくなるのじゃ！貴様ら用に作ったのだ！」

ラルゴ

「こ、こんなものまで作り出すとは……」

レオーネ

「コレがドクターキュラスの科学力……」

ドクターキュラス

「魔法は封じられ、戦力は分散した。ワシの作戦勝ちじゃ」

ミゼット

「……あなた方の目的はなんですか？」

マリアージュ改00

「とりあえず、第一作戦『本部制圧』成功です」

ドクターキュラス

「その通りじゃ！ギャツハツハツハツ」

ドクターキュラスは高笑いをするのだった。

マリアージュ改00は通信回線を開く。

マリアージュ改00

「全量産型マリアージュ改達に告ぐ、こちらは三提督は押さえた。そちらの制圧を急げ。繰り返す……」

三提督は絶望するのだった。

次回に続く。

ステージ32 大抵のアクション映画は、テロリストの襲撃から始まることが多

ドクターキュラス、とんでもないことを始めてしまった！

どうする、ティアナ達！？

ステージ33 書かれてあることや噂がすべて真実とは限らない。(前書き)

久しぶりにあのコンビが登場！

お楽しみ



ステージ33 書かれてあることや噂がすべて真実とは限らない。

ドクターキュラスが時空管理局を占拠している間に……。

【冥王の方舟改の内部】

マリアージュ改01こと、クイントは周りの目を気にしながら通信機能を動かす。

クイント

「コレ（メール）をルネッサ・マグナスのデバイスに送る」

クイントはメールを送信する。

クイント

「……どうか、届いて」

クイントは祈るのだった。

【陸上本部：外観】

此処、陸上本部に二人の少女と一匹の召喚獣がやって来る。

ヴィヴィオとルーテシアとガリユーだった。

ヴィヴィオ

「着いたね」

ルーテシア

「長かったね」

ガリユー

「ヘトヘトやね」

二人と一匹は入り口に入る。

【陸上本部：内部】

ヴィヴィオとルーテシアがやってきたのは、頼まれた『冥王の方舟』の調査結果を直接報告するためであった。

697

ヴィヴィオ

「冥王の刀って、どんなのかな？」

ルーテシア

「楽しみだね」

冥王の刀であるティルヴィングエアを直接見てみたいのも理由の一つである。

（ （

すると、先にある一室から楽しい音楽が聞こえてくる。

ヴィヴィオ

「何だろっ?」

ヴィヴィオ達はこっそりと覗いてみる。

【一室】

土方ノエリオ

「プリキュ〜」

トツシーとなった土方とオタクになったエリオがテレビアニメ『ハート ヤッチ・プリキュ』  
を観ながら熱唱していた。

トツシー

「あ〜ん、この二人は可愛い〜」

エリオ

「そうですね 特に花 つぼみちゃんの声が水樹 夕さんですもんね〜」

トツシー

「特にあの台詞が良いよね」

エリオ

「はい」

トツシーノエリオ

「せーの、『堪忍袋の緒が切れました!』可愛い〜」

キュアブ ッサムになりきり、酔いしれる。

説明しよう。

土方は呪いの刀『村麻紗』を所持した時に、オタクの人格が生まれる。

エリオは失恋（魔神ゾーマに愛しのキャラを盗られた）のショックでオタクになる一面を持ってしまったのだ。

ヴィヴィオ達は二人のやり取りを見て、愕然する。

特にルーテシアは軽蔑の眼差しを向ける。

ルーテシア

「……キモイ」

ヴィヴィオ

「あ、あれって、土方さんだよな」

ガリユー

「…なんやねん、アレ」

すると、トツシーとエリオはヴィヴィオ達に気づく。

トツシー

「うおっ……」

興奮したトツシーとエリオはヴィヴィオ達のところに駆け寄る。

ヴィヴィオ

「ひ、土方さん、お久しぶりです」  
土方

「君、可愛い」

ヴィヴィオ

「えっ…」

エリオ

「ルーちゃん、君にぴったりだよ」

ルーテシア

「な、何が」

トッシー

「君達なら、似合うはずだよ！」

エリオ

「この『ハート ヤッチ・プリキュ』の衣装が！」

二人はヴィヴィオとルーテシアに『ハート ヤッチ・プリキュ』の衣装を見せ付ける。

ヴィヴィオとルーテシアは絶句する。

トッシー

「さあー、着てくれ！」

エリオ

「似合うはずだよ」

ヴィヴィオ

「い、嫌だ！」

ルーテシア

「く、来るな！」

興奮したトッシーとエリオは嫌がるヴィヴィオとルーテシアに迫る。

ガリユーはヴィヴィオとルーテシアを守る。

その次の瞬間！

土方

（止める、トツシー！）

主人格の土方がトツシーの人格を押しつける。

土方

「ハアー、ハアー…。お前も止めねえか！」

エリオ

「はっ！」

エリオも正気に戻る。

次の瞬間、

パシャッ！

シャッター音に気づき、

振り向く。

後ろには、クロスミラージユ（カメラモード）を持ったティアナがいた。

ティアナは今の現場を撮っていた。

土方

「テ、ティアナ……」

エリオ

「これは……」

ティアナ

「……良いものが撮れました。ヴィヴィオ、ルーテシア、よく来たわ」

ヴィヴィオ

「ティアナさん」

ルーテシア

「怖かった」

ティアナはドSな表情でヴィヴィオとルーテシアとガリユーを連れて行こうとする。

土方

「ま、待ってくれ……」

ティアナ

「来ないで下さい、ロリ方さん」

ヴィヴィオ

「銀時パパの言う通り、あなたは最悪です」

ルーテシア

「エリオ、見損なった」

ガリユー

「アホちゃうか」

捨て台詞を吐きながら立ち去る。

土方

「完全にロリコンと誤解された~~~~~」  
エリオ

「僕まで~~~~~」

土方とエリオは絶望のあまり思わず、膝を付く。

### 【別室】

ヴィヴィオとルーテシアとガリユーは遂にティルヴィングエアと対面する。

他にスバル、ティアナ、近藤達もいた。

スバル

「紹介するね。コレが『冥王の刀』こと、ティルヴィングエアです」

ヴィヴィオとルーテシアは興味深々とティルヴィングエアを見ていた。

ティルヴィングエア

「あなた様が聖王陛下ですか」

ヴィヴィオ

「はい、坂田ヴィヴィオです」

ルーテシア

「ルーテシアです」

ティルヴィングエアはヴィヴィオを見て感じる。



ティルヴィングエア

「おおっ…、その紅と翠の鮮やかな瞳はまさしく聖王女の証。そしてそっくりだ、聖王女オリヴィエ様」

近藤

「聖王女オリヴィエ？」

近藤や志村妙などの江戸世界の住人は首を傾げる。

ルーテシア

「私達の世界、古代ベルカ諸王時代の王様の一人。後で教えてあげる」

すると、ティルヴィングエアはヴィヴィオの前で膝を付く。

ティルヴィングエア

「この度、我がイクスヴェリア陛下ご救出の協力、大変感謝します」

ヴィヴィオ

「い、いえ、そんなに改まなくても…」

ティルヴィングエア

「いいえ、コレが頭を下げずにいられません。かつてはイクスヴェリア陛下と敵対したにも関わらず、救って頂けるとは…。拙者はうれしゅうございます」

ヴィヴィオ

「参ったな…」

ティアナ

「ティルヴィングエアさん、そろそろ話してもいいかしら？」

ティルヴィングエア

「あっ、これは失礼致した」

ティルヴィングエアは下がる。

ティアナ

「ヴィヴィオ、ルーテシア、『冥王の方舟』のことわかった？」  
ヴィヴィオ

「はい」

ルーテシアは本を開けて読み始める。

ルーテシア

「『冥王の方舟』移動や運航のみを目的に創られた大型の方舟。兵器を一切積まない分、移動や速さにとても優れている。さらにあらゆる人や物を運べれるように、地形や次元嵐に対応出来るように厚い装甲と魔術を施している。大きさは数万の人を入れるように設計されている。そして動力源に『レリック』を使っている」

ノーヴェ

「えーつと確か、兵器になるもの採集したり、別の世界を侵略するために創られたんじゃないかなかったのかよ？」

ティルヴィングエア

「確かにそう言いました。最初に創られた理由がそれです。その後、イクスヴェリア陛下は国民の人々だけではなく、家畜や住んでいる動物達も避難出来るように、何隻も方舟を創らせ、飛ばしました。しかし、各敵国は『兵器』と称して、何隻の方舟を容赦なく沈めました。何の罪のない国民ごと…」

ティルヴィングエアの説明を聞き、悲しく辛い雰囲気になってしま  
う。

九兵衛

「本に書かれてあるものすべてが真実とは限らない。その『冥王の方舟』の歴史も、書いた側の都合の良いように、書かれた側を悪者にする」

妙

「……歴史というものは、そんなものね」

近藤

「勝利したものが『正義』という、言葉がありますからね」  
ティルヴィングエア

「イクスヴェリア陛下は後悔し、嘆きました。こんな事になってしまつたら、創らなければ良かったと……」

ヴィヴィオ

「……国民や動物達を避難させたかっただけなのに」  
ルーテシア

「結果的に死なせてしまった」

ガリユー

「王様のーても、辛いわ……」

ティアナ

「…そんな『冥王の方舟』を、ドクターキュラスは何に使う気かしら」

すると、ルネッサが慌てて入ってくる。

ルネッサ

「ランスター執務官、た、大変です！」

ティアナ

「どうしたの？」

ルネッサ

「私のデバイスに、こんなメールが！」

ルネッサは表示させる。

『ドクターキュラス、改造した「冥王の方舟」と「量産型マリアー  
ジユ改」で時空管理局本部を襲撃開始した。第一作戦「三提督捕獲」  
を実行中。急がなければ第二作戦が実行される…』

これを見た者達は驚愕する。

ティアナ

「時空管理局本部が襲撃に合っている!？」

スバル

「そんな…」

近藤

「…三提督って?」

ルーテシア

「時空管理局の黎明期から活躍した伝説人達です」

妙

「そうなんだ」

九兵衛

「そんな三提督と時空管理局本部を襲撃するとは、なんて大胆な…」

土方

「そのメール、信用いいのか?」

土方とエリオが入ってくる。

土方

「そのメールの差出人はわかるか?」

ルネッサ

「待ってて下さい、今調べます」

ルネッサは送信先を調べる。

ルネッサ

「わかりませんでした」

土方

「……信用できるか」

ティアナ

「……少なくとも、ロリ方さんより信用できそうな内容です」

土方

「ロリ方じゃなくて、土方だ！」

ヴィヴィオ

「何を言っているんですか、さっきはいやらしい顔つきでヒロインの衣装を着せようとしたじゃないですか」

ルーテシア

「エリオと一緒に」

ヴィヴィオとルーテシアの一言で、全員は土方とエリオに軽蔑の眼差しを送る。

エリオ

「あ、あれは、その……」

土方

「そんな事より、どうする執務官殿？」

ティアナ

「……すぐにこの事を地上本部のトップやゲンヤさんに知らせます。あと、捜査をしているギンガさんやキャロ達を呼んで下さい」

近藤

「わかった！」

近藤は急いで呼びに行く。

土方

「……どうやら、決戦の時が来たな」  
ティアナ

「そうですね、ロリ方さん」

土方

「頼むから、土方って呼んでくれ……」

土方は思わず泣く。

ティルヴィングエア

「……スバル殿」

スバル

「特訓の成果を見せる時が来たね！」

妙と九兵衛も意を決する。

遂に最終章に突入する！

続く。

ステージ33 書かれてあることや噂がすべて真実とは限らない。(後書き)

ティアナ

「黒神先生に九兵衛さんとチンクのネタのお礼として、ロリ方さんとエリオが二人を襲う現場写真を…」

ヴィヴィオとルーテシア

エリオ

「ティアさん止めて下さい!」

土方

「それだけは…」

ティアナは手を止めながら、暖かく微笑む。

エリオと土方はホツとする次の瞬間、

『送信完了』

クロスミラーージュで送信するティアナ。

エリオと土方は驚愕する。

ティアナ

「ごめんなさい、手が滑りました(棒読み)」

ドSな笑顔で謝罪する。

エリオと土方は絶望する。

という訳で、黒神先生に写真を送ります。



ステージ33・5 虫の居所が悪い時に来てしまつ事を、間が悪いという。(前

久しぶりの質問コーナーをやります。

ステージ33・5 虫の居所が悪い時に来てしまふ事を、間が悪いという。

【万事屋「銀ちゃん」】

フェイト

「銀時、あ〜ん」

銀時

「あ〜ん」

銀時はフェイトに特大パフェを食べさせて貰う。

二人の間にラブラブな空間が漂っていた。

新八

「……………(怒)」

神楽

「……………(怒)」

なのは

「……………(怒)」

新八達はそんな二人の様子を、苛つきを込めた視線で見ている。

ヴィヴィオ

「もう、パパとママ！」

ヴィヴィオが銀時とフェイトの間に入る。

新八

(いいぞ、ヴィヴィオちゃん！言ってやれ！)  
なのは

(その甘い雰囲気をぶち壊してなの！)

神楽

(潰れる、潰れちまえ！)

三人はヴィヴィオを応援する。

ヴィヴィオ

「ヴィヴィオにも食べさせて」

銀時

「あ、悪い悪い」

フェイト

「ヴィヴィオも、あ〜ん」

ヴィヴィオ

「あ〜ん。モグモグ、美味しい」

ヴィヴィオも加わって、ますます甘い雰囲気が濃くなった。

新八

(くそつ、ヴィヴィオちゃんに任せた僕らが馬鹿だった！)  
なのは

(所詮は子供か…)

神楽

(チクショーーーーー！)

三人は悔しがる。

銀時とフェイトはこそこそと話す。

フエイト

「いいの、こんな事をして？」

銀時

「良いじゃねえかよ、久しぶりの質問コーナーだし。それによ、ペンネーム【ウツソ・エヴィン】さんの質問？」銀さん・・・やはり夫婦仲悪いのでは・・・『ってな質問が来てるからよ」

フエイト

「あつ、それで見せつけているんだ」

フエイトは納得するが、三人は苛つきを見て、納得している場合ではないと気づく。

フエイト

「銀時、もう止めようか」

銀時

「じゃーね、からかいはこれぐらいに。なのは、【ウツソ・エヴィン】さんからの質問きているぞ、読んどけ」

銀時はなのはに質問表を渡す。

なのはは読み上げる。

なのは

「『黒神さん作【攘夷戦争鎮魂歌】や僕が書いている【G・Striker S】のなのはを見て、僕らに言いたいことはありませんか？』【攘夷戦争鎮魂歌】はよく読むけど、【G・Striker S】は読んでないから読んでみるね」

なのははレイジングハートで読み始める。

銀時

「新八、この長い質問表を読んでみる」

新八

「あつ、はい」

新八は読み上げる。

新八

「ペンネームペンネーム【天使】さんの松平の養子にフェイトが成つたらの質問を3つあります。『？フェイトが時空管理局に就職したら、その日から真選組に陰ながらフェイトの護衛をしそうですね！真選組の連中からは「お嬢」って呼ばれる気がしますがどうですか？？エリオとキャロには、娘の栗子同様にベツタリしそうな感じがしますがどうですか？？エリオとキャロが起動六課のなのはの訓練中にいきなり現れて「労働法に違反しているじゃないの？」って言うってエリオとキャロを自分の自宅に連れて行き「遊園地？水族館？おじいちゃんと何処に行きたいのかな」な感じがしますがどうですか？（おまけ）真選組の指令に「真選組、時空管理局を憎むべし。ただし、フェイト執務官とエリオくん、キャロちゃん、ヴィヴィオちゃんには、優しくすべし。これを破った者は切腹！」何て物を作つたら面白くありませんか？』……やっとな終わった」

新八は疲れる。

聞いたフェイトは啞然する。

フェイト

「…ま、松平さんって、いつたいなんなの？」  
ヴィヴィオ

「ヴィヴィオは遊園地に行きたい！」

銀時

「金と暇な時に行こうな。さて、質問の答えだ。？は真選組の奴らの性格を考えればあり得るな。絶対に『お嬢』って、呼ぶな。？はキヤロはわかるが、エリオは男の子だから難しいなあ。？はやりかねないと思いますが、なのは絶対には認めないと思うぞ。そもそもって、魔王オーラを放って、松平のつつあんを追い払うのが関の山だな」

新八、神楽、フェイトは想像してみる。

新八

「……そうですね」

神楽

「……流石のつつあんも」

フェイト

「……なのはに逆らえないよ」

三人と銀時もゾツとする。

銀時

「お、おまけの答えは、作る可能性は大だな。あいつら、可愛い娘ちゃんと子供が好きだし、時空管理局のやり方をあまり快く思っていないからな」

新八

「それもそうですね」

神楽

「作っても問題ないネ」

フェイト

「真選組の皆さん、優しいね」  
ヴィヴィオ

「本当に優しいよ。ヴィヴィオに優しくしてくれるから、ヴィヴィオは真選組のみんな好きだよ」

銀時

「ヴィヴィオ、これだけは忠告する。……ロリコン副長とドSに近づくな」

新八、神楽、フェイトは頷く。

ヴィヴィオは首を傾げる。

神楽

「次は私ネ。ペンネーム【サディスト】からの質問はそれぞれあるネ。(土方に質問) ティアナが総悟がみたいになってきたけど、正直斬りたいですか？(沖田に質問) ティアナがドSになったけど、君の前ではMですか？(ゾーマに質問) 最近、影薄くね？モブキャラになったの？」

作者

「えーっと……私、作者が聞いてきました。斬りたいけど、流石にティアナ相手だとやりにくい(土方) もちろんですぜ(沖田) 俺だつて、好きで薄くなつたわけじゃねえ！俺は一日も早くキャロリンとチヨメチヨメ……【以下省略】とにかく俺はもうすぐ登場するから待ってな！(ゾーマ)。以上です」

銀時、新八、神楽、フェイトは啞然し、ヴィヴィオは首を傾げる。

銀時

「マヨラーとサドはともかく、ゾーマは何やってんだよ！」

フェイト

「キャラが、キャラがああああ！」

フェイトは取り乱す。

新八

「フェイトちゃん、落ち着いて！」

神楽

「いずれキャラは大人になるネ！」

新八

「それ、フォローになってない！」

銀時

「べ、別の質問で気分転換しような！ペンネーム【黒神】さんからの質問だ。烈火竜さんは土方に恨みを持っていますか？それとも単に嫌いなだけですか？いずれにしても面白いので良いです。烈火竜（作者）さん、どうですか？」

作者

「恨みもありませんし、嫌いでもありません。ただ、思いついて、実行したらこうなっただけです」

神楽

「思いつきかよ」

新八

「その思いつきでここまでなるなんて……」

フェイト

「じゃあ、エリオのおタク化も思いつき!？」

作者

「いいえ、大きな失恋をしたエリオくんの気持ちを考えた結果です」

新八

「どんな風に考えたんだよ!？」

フェイト



「優しいエリオを返して（怒）」  
作者

「黒神さんのもう一つの質問です」  
フエイト

「無視しないで」  
作者

「定春に質問『僕の小説で重要人物の1人及びマススコットキャラとして活躍しているエリザベスを見てどう思いますか？』定春は……」

神楽は部屋の隅に要る定春を指す。

定春

「ふしゅるるるる……」

定春はエリザベス人形を食いちぎっていた。

神楽

「見ての通りネ。出番が全然無い自分に比べて、出番が有りすぎるエリザベスに嫉妬してるネ」

すると、なのはは突然立ち上がる。

しかも魔王オーラを放っていた。

銀時、新八、神楽は驚く。

なのは

「にゃはははははははははは。ウッソ・エヴィンさんたら、こんな風に書いていたのか……。面白〜」

笑っていたが、目は笑ってなかった。

新八

「ぎ、銀さん、どうしましょう!」

神楽

「魔王オーラ全開アル!」

銀時

「なのはだけじゃねえ、フェイトもオーラ全開だ!」

フェイトもオーラを放っていた。

ヴィヴィオ

「怖いよ」

作者

「私に任せなさい」

作者は恐る恐るなのはに近づく。

作者

「なのはさん、ペンネーム【ディワールド】さんからメッセージが来ていますよ」

作者はメッセージを見せる。

「メッセージ」

士

「質問ーフェイト、殺りあおうや、どっちが本物の死神かハッキリさせてやる。クククク! ついでに魔王なのはと烈火の騎士

シグナムも来い。どうせなら銀さんでもいいぜ?」

デイワールド

「何喧嘩売ってんの!? ドSな上にシグナム以上のバトルマニアだよ!」

士

「貴様は黙れ。」

デイワールド

「え? 何? ぎゃああああ!?!」

く終わりく

なのは

「……フェイトちゃん、私、加勢してもいいかな?」

フェイト

「……もちろんだよ」

定春

「ワン!」

フェイト

「定春も行きたいんだね? いいよ」

なのは、フェイト、定春は戦闘準備をする。

作者

「これでなのは達の怒りの矛先は士君に向けられた」

銀時

「ナイスアイデア」

新八

「ナイス卑怯」

神楽

「ナイスフォロー」

なのは

「銀さん、銀さんも行こう」

銀時

「えっ？」

なのは

「銀さんも誘われているから」

フェイト

「シグナムがいない代わりに、新八も神楽も作者も一緒に来て」

新八

「ぼ、僕達も!?!」

作者

「作者である私も!?!」

神楽

「別に行きたく……」

なのは

「行こうよ」

なのは、フェイト、定春は銀時達に殺気を込めた視線を送る。

四人

「喜んで参戦します!?!」

なのは

「ありがとう。早速準備して」

四人

「はい!」

四人は準備をする。

ヴィヴィオは怯える。

フェイト

「ヴィヴィオは留守番ね。お登勢さんやキャサリンさんの言つことを聞いてね」

ヴィヴィオ

「は、はい！」

戦闘準備を終えたなのは、フェイト、定春は土のところに向かうのだった。

そして、銀時、新八、神楽は作者を責めながらお供をするのだった。

終わり。

ステージ33・5 虫の居所が悪い時に来てしまう事を、間が悪いという。(後

質問ありがとうございました。

最終章、応援よろしくお願いします！

ステージ34 懐かしいキャラクターは忘れた頃に登場する。けど、忘れられ

久しぶりの本編ですので、タイトル通りの展開です。

ステージ34 懐かしいキャラクターは忘れた頃に登場する。けど、忘れられ

【公園の広場】

?????

「あちよな、あちよよ」

赤ちゃん

「ばぶ」

サングラスを掛けた銀髪の天然パーマな男性が自分と同じ銀髪の天然パーマで、死んだ魚の目をした赤ちゃんをあやしなから、ベンチに座っていた。

?????2

「お待たせ」

男性と同じくサングラスを掛けたロングヘアの女性が銀髪の男性の隣に座る。

?????

「ほーら、母ちゃんのお帰りだぞ」

赤ちゃん

「あう」

?????2

「ただいま、シルバー」

赤ちゃんは『シルバー』と呼ばれる。

?????



「手筈は？」

「????2」

「うまくいったわ」

女性はトランシバーらしき機械を取り出す。

機械を動かすと、声が聞こえ始める。

スバル

『時空管理局本部が襲撃されている！』

ティアナ

『今、地上本部で確認しているわ』

土方

『本部とは、また大胆不敵だな！』

なんと、スバルとティアナと土方の声だった。

これを聞いた二人は驚く。

「????2」

「時空管理局本部が襲撃されている!？」

「????」

「……こりゃ、穩やかじゃないな」

スバル

「……」

物凄い音が響き渡る。

広場にいる人々は驚く。

?????

「な、なんだ!?!」

?????

「あ、あれ!」

女性は後ろ横の道から走ってくる物体を指す。

その物体は……、

ゾーマ

「キヤローリーナー!すぐに会いに行くぜ!」

ゾーマは全速力で走り去る。

?????

「あ、あれは……」

?????

「ゾーマ!?!」

シルバー

「ばぶ」

二人はゾーマを見て、唾然とするのだった。

【地上本部】

地上本部のモニターで、時空管理局本部が占拠されている映像が映されていた。

それを観ていたティアナ、スバル、エリオ、キャロ、フォワードチーム。

近藤、土方、山崎、真選組。

妙、九兵衛、長谷川、江戸の住人。

星海坊主、ジン・ギス・カンの天人。

ギンガ、ゲンヤ、チンク、デイエチ、ウエンディ、ノーヴェ、ナカジマー一家。

ヴィヴィオ、ルーテシア、子供達。

そして、アギト、ルネッサ、ゼストらは驚愕する。

ゼスト

「……キュラスめ、まさか、時空管理局本部を襲撃するとは……」

キュラスの予想外の行動に戸惑う。

アギト

「……イクスもいるかな」

ゼスト

「……わからない」

近藤

「大丈夫だよ、きっと無事さ」

九兵衛

「根拠は？」

近藤

「無い！」

九兵衛は啞然する。

近藤

「諦めたら、その時点でおしまいだ。だから、信じて彼女の無事を  
祈るんだ」

アギト

「う、うん……」

妙

「近藤さん、良いことを言うわね。奇跡的だわ」

近藤

「いやー、嬉しいです」

ルーテシア

「『奇跡的』って、ある意味皮肉……」

ヴィヴィオ

「ルールー、黙ってあげよう」

ヴィヴィオはルーテシアの突っ込みを止める。

星海坊主

「…………さて、どうする?」

ティアナ

「えっ……」

星海坊主

「このまま、見てるだけか?」

ティアナ達、ミッドチルダ世界の人々は言葉が詰まってしまっ

スバルは握り拳を握り始める。

ティアナ

「スバル?」

スバル

「…………私、行きます」

九兵衛

「スバル殿!？」

妙

「急にどうしたの?」

スバル

「特別救助隊として、イクスを救助しに行きます」

アギト

「…………特別救助隊として?」

スバル

「向こうで沢山の命が消えかかっている、弄ばれている、ドクターキュラスのような悪いやつが悪事の為に……。冗談じゃない、助けたいんです!失いそうな命と弄ばれる命を」

ティルウィングエア

「…………スバル殿」

ティアナ

「そうよね、私も執務官として、『マリアージュ事件』の主犯であるドクターキュラスを逮捕するわ」

ギンガ

「私も捜査官として、行きます！」

エリオ

「僕も行きます！」

キヤロ

「私も行きます！」

チンク

「ならば、『N2R』も同行する」

ノーヴェ

「ドクターキュラスもマリアージュも、ぶっ潰す！」

ウエンディ

「やってやるッス！」

デイエチ

「……頑張る！」

ヴィヴィオ

「私も全力で協力します！」

ルーテシア

「……私も」

ガリユー

「ルーテシアの使い魔ガリユーも頑張ったる」

近藤

「……ならば、俺達は真選組として」

土方

「ドクターキュラスのような外道を捕らえる為に」

山崎

「一緒に行きます！」  
スバル

「近藤さん、土方さん、山崎さん」

星海坊主

「……俺は『掃除屋』として、エイリアンの元凶であるドクターキユラスをぶっ潰しに行く！」

九兵衛

「僕も柳生家の次期当主として、門弟達の敵討ちに行こう」

妙

「私も、九ちゃんの親友として付いて行くわ！」

ティアナ

「星海坊主さん、九兵衛さん、妙さん……」

ジン・ギス・カン

「メエ〜！」

ジン・ギス・カンは突然書き物をして、皆に見せる。

『私も行きます！武士として、放っておけません！』  
妙

「ジンちゃん」

長谷川

「……ルネちゃんも行くのかい？」

ルネッサ

「はい」

長谷川

「だったら、俺も行くぜ！ドクターキユラスの野郎だけは絶対に許さねえ！」

ルネッサ

「…………長谷川さん」

ゼスト

「…………これは我々ミッドチルダ世界の問題なんだぞ。お主ら、江戸の世界の者の関わる問題では…………」

土方

「何言つてやがる？俺達は巻き込まれたんだぜ。関係あるに決まっ  
てんだろ」

近藤

「…………それに、放つて置けないんですよ」

妙

「見過ごしたりしたら、こっちの気持ちが悪くないわ」

長谷川

「だって、俺達は…………」

「江戸っ子だからな（よ）」

スバルやティアナなどのミッドチルダ世界の人々は驚き、感動する。

スバル

「みんな、銀さんみたい」

スバルは思わず泣いちゃう。

ゲンヤ

「うっし！すぐに地上本部に掛け合ってくるぜ」

ゲンヤは走り出す。



デイエチ

「……嬉しいです。山崎さんも来てくれるなんて」

山崎

「僕も嬉しいよ」

デイエチと山崎の間に甘い雰囲気漂う。

ヴィヴィオ

「お二人は付き合っているんですか？」

デイエチ／山崎

「えっ！」

驚きながらも赤くなる。

山崎

「そ、それは……」

デイエチ

「別に付き合っていないけど……」

すると、

「ジュジュジュジュ」

ゲンヤ

「付き合っていない癖に、いちやいちやすんじゃあねえ」

ゲンヤはライフルを構える。

デイエチ

「と、父さん!？」

ゲンヤ

「父さんじゃない、ゲンヤ13だ!」

ゲンヤは山崎に向ける。

山崎

「ひっ!」

ゲンヤ

「デイエチから離れやがれ!」

星海坊主

「アトネイチャー13も加勢するぜ!」

星海坊主も山崎に番傘（武器）を向ける。

山崎

「や、止めて!」

ゲンヤ/星海坊主

「お命頂戴つかまつる!」

スバル

「父さん、止めて!」

スバルと近藤と土方はゲンヤと星海坊主を止める。

近藤

「二人の恋路を邪魔しなさんな」

ゲンヤ

「認めるか!」

土方

「近藤さん、余計な事を言つなよ！」

ゲンヤはますます暴れる。

ディエチ

「山崎さん！」

ディエチは山崎を守ろうと抱きつく。

ゲンヤ

「ああ、くつつくな！」

ゲンヤはスバルと近藤と土方を払いのけ、山崎の首を掴む。

ゲンヤ

「死ね！」

星海坊主

「加勢するぜ！」

ゲンヤは首を、星海坊主腹を思い切り締め付ける。

山崎

「ぐえええええ〜」

ディエチ

「山崎さん！」

昇天しそつになる山崎を助けようとするディエチ。

ティアナ

「二人共、落ち着いて下さい！」

ティアナ達もゲンヤを止めようとする。

ヴィヴィオとルーテシアは怖がる。

ルーテシア

「……せつかくの良い場面が台無し」

【時空管理局本部：三提督の部屋】

キュラス

「言い様だな、三提督の方々」

三提督は椅子に縛り付けられていた。

マリアージュ改00はその様子を見る。

レオーネ

「ドクターキュラス、貴様の目的はなんだ？」

キュラス

「まずは復讐じゃ、貴様ら『時空管理局』へのな」

ミゼット

「……復讐？」

キュラス

「かつて、宇宙で活動していたわしは、ある奴（星海坊主）の追跡から逃れる為に、『地球』の江戸という国にやって来た。そして、時空の狭間を見つけて、そこに逃れた。着いた場所が数十年前のミ

「ツドチルダだった」

ラルゴ

「数十年前のミッドチルダ世界？」

キュラス

「わしは異世界の未来から来たのじゃ」

ラルゴ

「……………やゃこしいの」

キュラス

「黙れ！」

ギギギギギギ~~~~

黒板と鉄爪を取り出し、鉄爪で黒板を引っ掻く。

ラルゴ

「や、止めてくれ！」

キュラスは引っ掻くのを止める。

キュラス

「わしは自分の科学力を存分に発揮させ、時空管理局の最高評議会のお目にかかったのだ。その後は、ドクタースカリエッティや各生物を生み出した。……………しかし、ゾーマと黒夜叉を生み出す途中である男が現れた」

ミゼット

「あの男？」

レオーネ

「……………まさか、クリス・ロード！」

キュラス

「そうじゃ！……………あの男が研究所を破壊し、ゾーマと黒夜叉を奪っ

たのじゃ！悪いのは、クリス・ロードなのに、最高評議会は『もつと早く完成させておれば』、『警備が甘かった』など責任をすべてわしに押し付け、追放した、わしを犯罪者にしてな！わしの研究はすべて奪われた！」

ラルゴ

「……それで時空管理局に復讐か？」

キュラス

「その通りじゃ！その為にわしは転々とロストログア関連のことを調べまくった。そして、『イクスヴェリア』と『マリアージュ』にたどり着いたのじゃ。研究して、わしの科学力を加えて進化させたのだ！」

レオーネ

「……気が済んだかね？」

キュラス

「まだじゃ、まだ目的は達成しておらんわ」

レオーネ

「目的？」

キュラス

「このわしの科学力を、このわしの素晴らしさをすべての世界に知らしめるといふ偉大な計画はまだ始まったばかりじゃ！時空管理局はその踏み台となるのじゃ！」

キュラスは高笑いを挙げる。

三提督はキュラスを睨んで、捕まっている事を悔しがる。

マリアージュ改00は黙ってその様子を見ているのだった。

次回に続く。

ステージ34 懐かしいキャラクターは忘れた頃に登場する。けど、忘れられ

果たして、スバル達はどう動く？



ステージ35 恋の戦いにルールは無し。(前書き)

久しぶりに登場するキャラクターがいます。

ステージ35 恋の戦いにルールは無し。

【キュラスのアジト】

誰もいないキュラスのアジト。

電源は入っていないなかったので、電灯やコンピューターなどの家電は動いていなかった。

すると、中心の辺りに次元の狭間が表れる。

次元の狭間から何人かが出てくる。

????1

「局長ー！副長ー！ついでに山崎さん、どっすかー！」

大声で呼ぶと、

グサリ！

????2

「静かにしろ」

????の尻を刀で刺す。

????1

「すみません！」

????2

「だから大声出すな」

再び尻を刺す。

すると、三人目も現れる。

????3

「ずいぶん汚れていますね。此処の掃除をしなければ」

????2

「掃除をするのは部屋よりも、三人をさらった奴のほうだ」

????3

「そうでしたね」

三人が調べてみると、四人目も現れる。

????4

「どうだ、何かあったか？」

????2

「誰もいません。コンピューターしかありません」

????4

「そうかい」

コンピューターを見る。

????

「此処の電源を見つけて、入れてくれ。ちよっくら、その「コンピ  
ューターを弄くるわ」

????2

「お願いしやす」

????4

「腕が鳴るぜ」

自信たっぷりに指を鳴らす。

【聖王病院前】

どどどどどどどどどど

「な、何!?!」

「地震!?!」

聖王病院に入ろうとする人々は突然の音と揺れに驚く。

原因は……、

ゾーマ

「キャロりん!?!」

猛スピードで駆けるゾーマだった。

「キヤー!?!」

「化け物!?!」

人々は逃げ惑う。

そこへ、星海坊主が出てくる。

星海坊主

「な、なんだありゃ!？」

星海坊主は番傘を持って、ゾーマに向かっていく。

星海坊主

「なんだ、てめーは!？」

星海坊主はゾーマに番傘を叩きつけようとした次の瞬間、

ゾーマ

「うん？」

バキッ!

ゾーマは片腕で受け止める。

星海坊主

「何!？」

星海坊主は驚きながら、後ろに下がる。

ゾーマ

「その傘は!？ 貴様は何者だ？」

星海坊主

「それはこっちの台詞だ。てめーは一体……」

そこへ、キャラが慌てて飛び出る。

キャラ

「ゾーマ君！」

ゾーマ

「キャロりん！」

キャロはゾーマの胸に飛び込む。

星海坊主

「嬢ちゃん、危な……」

ゾーマ

「キャロりん、会いたかった」

キャロ

「あたしもよ」

キャロとゾーマの間に甘い雰囲気漂う。

星海坊主

「……何、アレ？」

星海坊主は別の意味で驚愕するのだった。

【聖王病院内：廊下】

妙と九兵衛が廊下を歩いていると、ゾーマに出くわす。

キャロと星海坊主はゾーマの後ろに居た。

二人は驚愕した。

妙

「あ、あなたは!？」

九兵衛

「ゾーマ!？」

妙は九兵衛の後ろに隠れ、九兵衛はゾーマに刀を向ける。

九兵衛

「貴様、何故此处に!？」

ゾーマ

「……誰？」

キヤロ

「九兵衛さん、刀をしまつて下さい!」

妙

「キヤロちゃん、早く逃げて!」

キヤロ

「大丈夫です」

妙／九兵衛

「えっ……」

二人は首を傾げる。

【聖王病院内：待合い室】

妙／九兵衛

「恋人!？」

二人はかなり驚愕した。

妙と九兵衛はかつて、『闇の書事件』で捜査に協力して、ゾーマを見かけ、ゾーマの作り出した魔物と戦った事があるのだ。

そして、二人の目の前にいるゾーマはその時のゾーマのクローンとたった今聞かされた。

ちなみに、銀時とフェイトの結婚式には会っていないので、コレが初対面である。

しかし、二人がかなり驚愕したのが、キャロと恋人同士になっていた事である。

星海坊主

「……恋人同士って聞かされた時は、流石の俺も驚いたよ」

星海坊主はキャロとゾーマは見る。

ゾーマ

「キャロりん、この二人は？」

キャロ

「あつ、紹介するね。このお姉さんが新八さんのお姉さんの志村妙さん」

妙

「よ、よろしく……」

キャロ

「眼帯を付けている人が柳生九兵衛さん」

九兵衛

「お初にかかります」



ゾーマ

「妙？……ああっ、あんたがゴリラの恋人か」

妙は驚愕する。

妙

「……ゴリラって、まさか真選組のゴリラ（近藤）？」

ゾーマ

「ああっ、そうだ。いつも言っていたぞ。『相思相愛』だって」

妙

「あら、そうなの……（怒）」

妙は心の中で、『後あのゴリラ（近藤）をぶち殺す』と決める。

九兵衛

「違う！妙ちゃんの恋人はこの僕だ！」

ゾーマ

「ええっ、三角関係かよ！」

妙

「別にそんなんじゃないわよ」

九兵衛

「僕と妙ちゃんは幼なじみだから付き合いが長い。だから、ゴリラ（近藤）なんかに邪魔はさせない！」

妙

「きゅ、九ちゃんまで……」

妙は苦笑する。

ゾーマ

「しかし、幼なじみばかりが恋人になるとは限らないぜ！俺やキヤロリンのように敵関係で惚れてしまうことだってあるぜ」

キャラ

「やだ、ゾーマ君たら」

キャラは赤くなる。

ゾーマ

「お前のあの笑顔で、俺の心を奪った癖に」

キャラ

「やだ」

キャラとゾーマの間に甘い雰囲気漂う。

妙、九兵衛、星海坊主は啞然とする。

星海坊主

「長年、沢山のエイリアンや怪獣を倒してきたが……。あんな奴は初めてだ」

妙

「私達も同じです」

九兵衛

「…うん」

ゾーマ

「それで、コイツは？」

ゾーマは星海坊主を指す。

星海坊主

「申し遅れた。俺はエイリアンを駆除する掃除屋、星海坊主だ」

キャラ

「神楽ちゃんのお父さんの」

ゾーマ

「神楽の親父！？そうか、その傘に見覚えがあると思ったら……」  
星海坊主

「神楽ちゃんを知っているのか？」

ゾーマ

「俺が初めて負けた奴だ」

星海坊主

「……そうか」

ゾーマ

「今度はあんたに挑戦してもいいか？」

星海坊主

「挑戦？」

ゾーマ

「闘いに決まっているだろ」

ゾーマは星海坊主の頭を叩くと、星海坊主の帽子が取れる。

そして、星海坊主の光る頭がさらけ出される。

ゾーマ

「あっ、ハゲだ」

星海坊主

「この野郎！！（怒）」

星海坊主は殺意を込めてゾーマに番傘を向ける。

ゾーマ

「ゴ、ゴエー！」

星海坊主の怒りに、流石のゾーマも怖がる。

キャロ

「や、止めて下さい！」

妙

「落ち着いて！」

キャロと妙は星海坊主を押さえる。

スバル

「どうかしました!？」

スバル、ティアナ、アギトが駆けつける。

三人は星海坊主の頭を見て、

三人

「ぶっ！」

と吹き出す。

星海坊主

「……嬢ちゃん達(怒)」

今度は笑った三人に殺意を向ける。

三人

「す、すみません！」

三人は頭を下げる。

一騒動が終えた後。

スバル

「あっゾーマ、久しぶり！」

ゾーマ

「よースバル、久しぶりだな」

ティアナ

「相変わらずラブラブねえ」

ゾーマ

「ティアナも久しぶりだな」

スバルとティアナはゾーマとタッチする。

妙

「あれ、なんか友達関係みたい」

九兵衛

「………本当にあの時のゾーマとは違うな」

星海坊主

「コレは新鮮な感じだな」

妙と九兵衛と星海坊主は興味深く見る。

アギト

「な、なんだコイツは!？」

アギトはゾーマを見て驚く。

すると、ゾーマはアギトに近づくと、

ティアナ

「紹介するわね。この子はアギト。……土方さんに恋している少女なの」

アギトは顔を赤くなる。

アギト

「な、何を言っているんだよ!？」

ゾーマ

「土方って、あの土方かよ!？」

スバル

「そうだよ」

ゾーマ

「こんなちびに好かれるなんて……アイツもロリ……」

どどどどどどどどどど

土方

「ロリ方じゃね、土方だ! (怒)」

土方は刀を抜きながら駆けつける。

ゾーマ

「よー、久しぶりだな」

ティアナ

「ロリだけで反応するなんて……。自覚あるんですか?」

土方

「ね、ねえーよ」

土方は刀をしまい、否定する。

ゾーマ

「ロリコンの何がいけない。愛し合う者同士に形は無い。相手が幼くても、年上でもな」

アギト

「ほ、本当か!？」

近藤

「その通りだ!」

いつの間にか、近藤がいた。

近藤

「大事なのは互いを受け入れる愛だ!そうですね、おた……」

バキッ!

妙

「てめー!何変な事を吹き込ませやがった!」

妙は近藤を殴り続ける。

ゾーマ

「話を戻して。お前と鬼副長もいつかは俺やキャロリンのような力ツプルになるぜ」

土方

「いや、ならない!そんな予定は無いからな!」

アギト

「えっ……」

アギトはショックを受ける。

スバル

「酷い！アギトの唇を奪った癖に」

ティアナ

「しかもマヨネーズをかけて」

土方

「いや、あれはだな……」

ゾーマ

「なんだよ、もうキスしたのかよ。もうロリコンじゃねーか」

土方

「違う！アレは本意じゃねーよ」

アギト

「じゃあ、遊びかよ……」

アギトは泣く。

土方

「おい、お前も乗せられるな！」

泣くアギトを妙が優しく抱きしめる。

妙

「……最低」

九兵衛

「……貴様は本当の鬼だな」

星海坊主



「うちの神楽ちゃんに近づくなロリコン野郎」  
キャロ

「愛していないのに、唇を奪うなんて……」

ゾーマ

「男の風上にも置けねー」

スバル

「アギト以外にも近づかないで」

ティアナ

「死んで、沖田さんに副長の座をあげなさい」

通りすがりやそばにいる者も含めて、土方を軽蔑する眼差しを送る。

土方

「止める、止めてくれ！あと、ティアナの台詞は関係無いだろ」

土方は訴えるが、軽蔑する眼差しは消えない。

土方

「あれ、なんだろう。また泣けてきた」

土方は泣くのがあった。

#### 【冥王の方舟改：管制室】

イクスは落ち込んでいた。

そこへ、クイントが入ってくる。

クイント

「イクス」

イクス

「……クイントさん」

クイントはイクスの隣に座る。

クイント

「……落ち込まないでって、言っても無理よね」

イクス

「……マリアージュ達が、私の能力がみんなを傷つけていると思うと……」

クイント

「死にたいと思っつて言っつもり?」

クイントはイクスの目を見る。

イクス

「最初はそう思いました。……でも、本当は死にたくないんです。十四郎様に諭されました」

クイント

「十四郎様?」

イクス

「その人は私に『命』と『生きる』大切さを教えてくれました。兵器である私を人として見てくれました」

クイント

「良い奴なんだね」

イクス

「私は、十四郎様にまた会いたいです。ちゃんとお礼が言いたい。

……あの人のことを思うと、胸の中が熱くなります」

クイント

「……あなた、十四郎に恋しているのね」

イクス

「えっ……」

イクスは赤くなる。

イクス

「……恋ですか」

クイント

「その人のことを考えると熱くなるのでしょうか？それは恋よ」

イクス

「……恋。……私に恋する資格があるのでしょうか？」

クイント

「恋するのも生きるうちよ。それにあなたも女の子よ」

イクスの胸の中心に拳をつける。

イクス

「……私は、十四郎様に恋している」

クイント

「……その人の為に今は戦いましょ」

イクス

「……はい」

イクスとクイントは互いの拳をくっつける。

そんな二人の様子をマリアージュ改02が見ていた。

マリアージュ改02

「あらあら、裏切り者の匂いがすると思ったら……」

マリアージュ改02は笑うのだった。

次回に続く。

ステージ35 恋の戦いにルールは無し。(後書き)

ロリ方(土方)に恋するアギトとイクス、あなたはどっちを応援しますか？

ステージ36 叫びは心の声なんだよ！（前書き）

大変お待たせしました。

どうぞ読んで下さい。

ステージ36 叫びは心の声なんだよ！

【時空空間】

今、『時空管理局本部』はドクターキュラス率いるマリアージュ改軍団が占拠していた。

【三提督の部屋】

マリアージュ改00

「配置を変える？」

マリアージュ改00とクイントは驚く。

ドクターキュラス

「そうだ。マリアージュ改01よ、前線の守備に回れ」

マリアージュ改00

「……何故ですか？前線の配置はマリアージュ改02のハズ」

ドクターキュラス

「そのマリアージュ改02の提案なのじゃ」

ドクターキュラスの後ろに居るマリアージュ改02を睨む。

マリアージュ改00

「どういつつもりだ？」

マリアージュ改02

「それはこっちの台詞ですよ。特にマリアージュ改01。いや、ク

イントさん？」

マリアージュ改00とクイントは驚く。

三提督も驚く。

ドクターキュラス

「02から聞いたのじゃよ。01よ、貴様の記憶が戻ったのか？  
クイント

「何を突然……」

ドクターキュラス

「ワシはお前を作り出した生みの親だぞ。貴様が何者なのかも知っ  
ているに決まっているだろ！」

レオーネ

「いったい何の話……」

ドクターキュラス

「貴様は黙れ！」

ドクターキュラスはわさびを取り出す。

レオーネ

「えっ……」

ドクターキュラス

「喰らえ！」

レオーネの鼻の下にわさびをつける。

レオーネ

「ギャー！」



わさびの辛さに涙を流す。

マリアージュ改02

「イクスヴェリアとあなたの会話を聞き、ドクターキュラス様に報告しました。ドクターキュラス様は元の死体であるクイント・ナカジマの人格が戻ってしまったのではないのかという可能性があるとお考えになりました」

クイント

「……それで試すの？」

マリアージュ改02

「はい、いつかやって来るアナタの娘達と戦ってもらい、忠誠心を試させてもらいます」

クイントは表情は変えてないものの、強く拳を握る。

ドクターキュラス

「記憶が無ければ、殺せる。そうじゃろ？」

マリアージュ改00

「……あのう」

クイント

「わかりました。仰せのままに」

マリアージュ改00は驚く。

ドクターキュラス

「良いか？ 奴らが来たら殺せ！ 特にお前が仕留め損ねたスバル・ナカジマをな」

クイント

「……わかりました」

クイントは立ち去る。

マリアージュ改00は後を追う。

ドクターキュラス

「……貴様は予定通りの配置に付け」

マリアージュ改02

「おや、護衛はよろしいんですか？」

ドクターキュラス

「量産型マリアージュ改数体とマリアージュ改00だけで充分じゃ。ワシの目的は完全な制圧ではないからな」

ラルゴ

「なんじゃと？貴様の目的は……」

ドクターキュラス

「黙れ！」

ドクターキュラスは辛子をラルゴの鼻の下に付ける。

ラルゴ

「はうー！」

あまりの辛さにラルゴは涙を出す。

ドクターキュラス

「……マリアージュ改01が記憶を取り戻したと判断したら、奴らごとを殺せ」

マリアージュ改02

「了解しました」

マリアージュ改02は立ち去る。

ミゼット

「あなた、生みの親なんでしょう？なんでそんなことを……」

ドクターキュラス

「奴は従う為のマリアージュなのじゃ。従えぬマリアージュは不要じゃー！」

ドクターキュラスはモニター画面を眺める。

三提督はドクターキュラスの非道に怒る。

【廊下】

マリアージュ改00

「クイ……マリアージュ改01」

クイントはマリアージュ改00に呼び止められた。

マリアージュ改00

「……コレで良いのか？」

クイントは黙り込む。

マリアージュ改00

「ドクターキュラスは薄々感じている。奴の事だ、記憶が戻ったとわかれば即切り捨てる。それも残酷な仕打ちだな」  
クイント

「でしようね」

マリアージュ改00

「……うまくごまかしてやられた振りを……」

クイントは制する。

クイントは長々と語り始める。

マリアージュ改00

「……それで良いのか？」

クイントは頷く。

マリアージュ改00

「……わかった。お前の敬意に評して、ドクターキュラスの最終目的と俺の目的を教えよう」

クイント

「……目的」

マリアージュ改00の目的を聞き、クイントはマリアージュ改00に掴みかかる。

クイント

「……本気なの？」

マリアージュ改00

「……ああ」

クイント

「……止めて、そんなことしなくても」

マリアージュ改00

「ならば試して良いか？」

クイント

「えっ……」

マリアージュ改00

「お前の信じる娘が、未来を切り開けるかどうかをな」

クイント

「……わかったわ、あなたの好きにきなさい。……仮にも協力者だからな」

マリアージュ改00

「……感謝する」

クイント

「一つ言っておくわ。うちの娘達は強いわ。必ずドクターキュラスとあなたの野望を打ち砕くわ」

マリアージュ改00

「……ずいぶん信頼しているな」

クイント

「私の愛する娘だからよ。血はつながっていないけど」

マリアージュ改00

「……私にも、トレディアの時には血のつながらない娘がいた」

クイント

「えっ……」

マリアージュ改00は後ろを向く。

マリアージュ改00

「健闘を祈る。そしてありがとう」

マリアージュ改00が立ち去ろうとすると、

ピーッ！ピーッ！ピーッ！

警報機が鳴り始める。

クイントとマリアージュ改00は驚く。

マリアージュ改00

「……もしかしたら。クイント、配置についておけ」

マリアージュ改00はどこかに行こうとする。

クイント

「ドクターキュラスのところに戻らないの？」

マリアージュ改00

「その前にイクスヴェリアを安全な場所に移動させる」

クイント

「安全な場所？」

### 【三提督の部屋】

イクスは手錠を掛けられた状態で連れて来られる。

ミゼット

「その子は？」

マリアージュ改00

「ガレアの冥王イクスヴェリア様だ」

レオーネ

「何!？」

ラルゴ

「……この子が」

イクス

「……はじめまして。そしてこのたびは申し訳ありません」

イクスは頭を下げる。

ミゼット

「い、いえ……」

ラルゴ

「それよりドクターキュラスは？」

マリアージュ改00

「直接指揮を執っております」

#### 【システムの管制室】

ドクターキュラス

「……あれは」

ドクターキュラスはモニターを見て驚く。

モニターに映っていたのは、次元航行部隊に所属するXV級艦船一隻だった。

ドクターキュラス

「まさか、たった一隻でこのバリアを破れると……。いや、そんなのを奴らだって……」

すると、XV級艦船が主砲を発射する。

ドクターキュラスは驚く。

ドカアアアアアン！

主砲当たり、バリアは揺れる。

主砲が撃たれた瞬間、巨大な魔法陣が現れ、黒い竜が出てくる。

それはキャロの召喚獣、ヴォルテールだった。

ドクターキュラス

「あ、あれは！？」

ヴォルテールは強力な必殺技を放つ。

ドカアアアアアン！

バリアはまた揺れる。

ドクターキュラス

「ま、まだこんなものじゃ……」

すると、ヴォルテールの後ろから、二つの物体が現れる。



それはゾーマと本人より大きな乗り物だった。

ドクターキュラス

「ゾ、ゾーマ!?!」

ゾーマは口から強力な砲撃を放つ。

ドカアアアアアン!

三度目の攻撃によりバリアに穴が開く。

ドクターキュラス

「バ、バリアが!?!」

ゾーマは乗り物を片手で掴み、投げる構えをとる。

バリアの穴は徐々に小さくなる。

ゾーマ

「愛の力は、無限大だあああああ!」

ゾーマは叫びながら乗り物を思いっきり投げる。

乗り物は急速に飛ぶ。

そして、穴に通る。

ドクターキュラス

「何!？」

乗り物は時空管理局本部の真ん中に墜落する。

ドクターキュラス

「……す、すぐに量産型マリアージュ改達を向かわせる!」

ドクターキュラスは慌てて指示を出す。

ゾーマは時空管理局本部を見つける。

ゾーマ

「キャロりん、気をつけるよ」

すると、ヴォルテールはXV級艦船の後ろから、キュラスのエイリアン達がやってくる。

ゾーマ

「おいでなすった」

ゾーマは指を鳴らす。

ゾーマ

「行くぜ、ヴォルテール」



???

「行くぜ！」

ドアから土方と近藤とスバルが刀を構えながら突撃する。

三人

「ウリヤー！」

三人は怯む量産型マリアージュ改達を斬り捨てていく。

近藤

「スバル殿！遂に実戦の時が来たな！」

土方

「実戦の心得は二つ！」

スバル

「斬ると死ぬなです！」

二人の指導に従いながら、刀を振るうスバル！

ティアナ

「射撃の心得は」

ウエンディ

「狙いを定めて」

デイエチ

「素早く撃つ！」

ティアナとウエンディとデイエチは自慢のデバイスを構えて、量産型マリアージュ改達を狙い撃つ！

ギンガ

「格闘家の心得は」

ノーヴェ

「心と技を」

星海坊主

「ひとつにする！」

ギンガとノーヴェは拳で、

星海坊主は番傘で量産型マリアージュ改達を叩き潰す。

### 【システムの管制室】

ドクターキュラスは驚愕する。

ドクターキュラス

「あ、あいつら……」

遂にドクターキュラスとの戦いが始まった。

続く。

ステージ36 叫びは心の声なんだよ！（後書き）

今回は溜まった質問に答える為、「質問コーナー」をします。

ステージ36・5 最近、質問よりリクエストが多く送られています。(前書き)

今回は特別ゲストを呼んでいます。

ステージ36・5 最近、質問よりリクエストが多く送られています。

【万事屋『銀ちゃん』】

ドカアアアアアン！！

アックス

「見つけたぞ、鬼川！」

鬼川

「ふっふっふっ、私は止められない！」

『ゾンビゲーム』のアックスと鬼川が暴れていた。

鬼川／アックス

「ぬおおおおお！！」

銀時／フェイト

「いい加減にしろ！！（怒）」

ドガアアアアアン！！

鬼川とアックスは銀時とフェイトに殴られる。

銀時

「人ん家で何暴れてやがるんだ！（怒）」

フェイト

「二人はゲストで来たのでしょうか？（怒）」

銀時とフェイトは笑いながらも怒りを露わにする。

鬼川／アックス



「……すみませんでした」

流石の二人も怒る銀時とフェイトにはかなわなかった。

そんな銀時とフェイトの後ろにいる、なのはと新八と神楽とヴィヴィオオも怯える。

定春は欠伸をかく。

銀時

「それじゃ、さっさと質問に答えるか。新八」

新八

「は、はい」

新八は読み上げる。

新八

「ペンネーム【天使】さんからの質問が三つあります。

新八って後何才で童貞卒業しますか？

新八って誰かにモテたりするんですか？個人的にモテって欲しくありません（笑）

新八って何か自分自分の好きな事ですか体力を使わない気がします  
が個人的に他の事で意欲を持てばよいのと思いますかどうですか？

……1、2番目の質問、ふざけんなあああああ！！（怒）

新八は怒り、質問を破く。

新八

「なんだよこのふざけた質問は！？個人的にモテって欲しくないだよ！？僕に恨みがあるのかあああああ」

アックス

「し、新八君、落ち着いて！」

アックスは新八を押さえる。

アックス

「原作でもモテなかった銀時さんも小説に出てからは奇跡的にモテたから、新八君もきつとモテるよ！」

銀時

「奇跡的は余計だろう（怒）」

神楽

「有り得ねえよ」

新八

「あんだと！（怒）」

なのは

「神楽、余計な事を言わないで！」

ヴィヴィオ

「童貞卒業って何？」

フェイト

「えーっと……」

鬼川

「パパがママとやって初めて出来たことだよ」

銀時

「てめー、余計な事を言うな！」

アックス

「最後の質問は、新八君に答えもらおう」

新八

「そ、そうですね……。確かに改善しなきゃいけないと思ってます」

フェイト

「新八は他の事でも頑張っているよ！ゾーマ事件やクリスマス事件の時も」

銀時

「フェイト、新八の事をよく知らないからそんな事を言えるんだよ」  
神楽

「新八って言うのは……」

フェイト

「二人とも、余計な事を言わないで」

フェイトは二人を睨みつける。

銀時／神楽

「はい！」

アックス

「と、とにかく質問の答えは、

童貞卒業はわからない。

モテるかもしれない。

改善する予定です。

でいいよね？」

新八

「あっ、はい」

新八は落ち着いて答える。

銀時

「次はペンネーム【サディスト】さんからの四つの質問。

質問一

沖田に質問。ナンバーズで調教したい『雌豚』はいる？俺的には『ノーヴェ』か『クワットロ』辺りがオススメだ。生意気だし・・・必ず反抗するだろうから『サドリ』がいがあると思う・・・

質問二

神山出る？真選組がメインだし。

質問三

土方が『アギト』か『イクス』を選んだ場合、将来的には真選組の【姐さん】になるわけだがその辺どう思う？真選組の三人（ゴリラ・ドS・ザキ）答えてくれ

質問四

ザキとディエチのデートの時、『クワットロ』の行動が丸々、沖田と被ってたんだが『沖田君』どう思う？答えてくれ。

つて真選組は向こう側にいるし、サド王子はいないから代わりに、俺達が答えてやるよ」

鬼川

「質問一の答えは断然『クワットロ』だな。理由はドSは二人もいないからね」

アクセス

「つて、沖田君の事知らない癖に……」

フエイト

「ちなみに『クワットロ』『じゃなく』『クアットロ』が正しい名前で  
すので、よく覚えて下さい」

新八

「質問二の答えは出る予定らしいです」

銀時

「質問三の答え。ゴリラの代わりに俺が」

神楽

「糞ガキ（沖田）の代わりに私が」

新八

「山崎さんの代わりに僕が答えます」

銀時、神楽、新八は揃って、

三人

「それはキツいですよ」

と口を揃って答える。

フエイト

「二人とも子供だしね」

鬼川

「副長の趣味に合わせたら、即真選組は解散だね」

なのは

「もうヴィヴィオにも近づけさせたくないからね」

アックス

「……ロリ方の噂は本当だったんだ」

神楽

「そして最後の質問。作者的に合わせたらしいアル」

銀時

「という訳で、質問の答えに納得した後、『クアットロ』の間違いに注意するように」

フェイト

「次は、ペンネーム【ウツソ・エヴィン】さんの質問。なのはさんはここではユーノさんと結婚しようとしてませんでしたっけ？（白夜叉鎮魂歌ではその描写があっただはず）なんで銀さんとフェイトさんのラブラブみて怒ってんですか？」

フェイトさんは子供がさらに欲しいと思っただけなんですか？……って何この恥ずかしい質問は！？」

フェイトは赤くなる。

銀時

「……そのために毎晩頑張ってる……」

フェイト

「銀時、答えなくて良いって！」

ヴィヴィオ

「ヴィヴィオ、可愛い弟が欲しい！とところで毎晩頑張っているってどういう意味？」

アックスに尋ねる。

アックス

「え、えーっと……」

神楽

「布団中で合体しているアル」

新八

「神楽ちゃん、答えなくて良いって……！」

鬼川

「それでは、なのは君に関する質問だ。そこるところを……」

なのはは黒いオーラを漂わせていた。

なのは

「まだ結婚してないよ。だってお互いの仕事が忙しくてそんなラブラブが出来ないんだよね」

全員、なのはの黒いオーラに怖がる。

銀時

「そつだ、ヴィヴィオにも質問を答えさせよう」

ヴィヴィオ

「わーい」

ヴィヴィオは質問表を読み上げる。

ヴィヴィオ

「ペンネーム【月光閃火】さんからの質問。『ドクターキュラス・・何でわさびと辛子の刑なんだ？』っていうか、どんだんアナタの思考が銀魂化しているのですが・・大丈夫ですか？』だって」

銀時

「科学者つてのは科学力が凄い分、考え方は変態なんだよ。スカリエッティは見本だろう？」

アックス

「じゃあ、こいつ（鬼川）もか？」

鬼川

「君、失礼だね」

銀時

「という訳で、科学者は科学力が凄い分、変態なんです以上」

新八

「ちよつとちよつと、それは世界中の科学者達に失礼ですよ！訴えられますよ！」

銀時

「気にするな。次はなのは」

なのは

「ペンネーム【charley】さんからの土方さんと烈火竜さんへの質問です。」

烈火竜さんは土方が嫌いなのですか？一応この作品の主役ですけど、今までの話を振り返ってみれば土方より長谷川や近藤、ジミー、そして番外編のみ登場の銀時などの方がずっと優遇されているような気がします。また、そんな烈火竜さんに土方じしんは今どんな心境を抱いていますか？

ティアナに質問。

沖田が原作でやってきたDS行為のうちどれが一番気に入りましたか？以前話したように貴方のDS行為は、沖田のと違ってただの嫌みな弱い者虐めにしか見えてませんか？少しは勉強して沖田みたいな憎めないDS行為（どんなんだよ！？）をやっていたきたいものです。

……確かに土方、酷い扱いされているね」

新八

「当然本人は嫌がっています」

銀時

「作者は最初は思いつきでやってみたが、まさかここまで好評するとは思わなかった。調子に乗って、『ロリ方』と呼ばせてしまったが、これからは控えるそうだ」

フエイト



「最終章で名誉挽回する予定です」  
アックス

「さて、ティアナのほうだが……」

鬼川

「おそらく沖田君のドSと師匠であるなのは君の不器用さと腹黒さが融合されたんだね」

アックス

「なるほど……」

ガシャ！

なのははレイジングハートを鬼川とアックスに向けて構える。

鬼川／アックス

「すみませんでした！」

瞬時に土下座をする。

なのは

「後書きでティアナ自身に聞いてみようか？」

鬼川／アックス

「は、はい！」

アックス

「あっ、そうだ！わが作者の【龍の骨】さんから質問がありました  
！」

鬼川

「零斗『俺からの質問だ、土方と俺、どっちが強いと思う？』という  
より土方とやり合いたいな』です」

新八

「って、作者じゃなくて、零斗の挑戦状じゃないですか？」  
銀時

「答えは『ゾンビゲーム』番外編で明らかになるぞ」  
フェイト

「『ゾンビゲーム』番外編をご期待下さいね」  
なのは

「それじゃ最後の質問は【黒神】さんからです。なんか大きな表で送られてます」

なのはは広げてみる。

こっちの『第2回、リリカル銀魂シリーズ』での人気結果は以下の通りです。

第1位 坂田銀時

第2位 スバル・ナカジマ

第3位 フェイト・テストアロツサ

第4位 桂小太郎

第5位 月詠

第6位 エリザベス

第7位 高杉晋助

第8位 ティアナ・ランスター

第9位 神楽

第10位 エリオ・モンディアル

ベスト10位に入った銀時、フェイト、神楽は余裕だと思いますが、ヴィヴィオ、なのは、定春、新八はどのような気持ちでしょうか？

なのはと定春は黒いオーラを漂わせていた。

全員、怯える。

なのは

「大変だ、向こう側のあたしを助けなきゃ。行こう定春君」  
定春

「オン！」

なのはと定春は【黒神】先生のところに向かった。

銀時

「……それでは、黒神先生に合掌して終わりました」

全員、合掌するのだった。

追伸、黒神先生逃げて下さい!!

終わり。

ステージ36・5 最近、質問よりリクエストが多く送られています。

(後書き)

【龍の骨】先生、ありがとうございました。番外編頑張ってください。

【ティアナの返答】

ティアナ

「別に気に入ってはいませんよ!……でも沖田さんになら……。あと自分の行為は確かに酷かったです。これからは沖田さんに正しいDS行為を教えて貰います」

以上、ティアナの返答でした。

## キャラクター設定(前書き)

いまさらながら、キャラクター設定を書きました。

## キャラクター設定

### 【味方】

ティルヴィングエア

（イメージCV：千葉繁）

### 「プロフィール」

イクスヴェリアの懐刀として作り上げられた生きたデバイス。武者姿と待機デバイスが日本刀なのは、次元を自在に行き来できたガレアの者が銀時の世界の江戸にやって来た際に参考にしたらしい。かつては「首狩り」と言う異名で恐れられているが、実際の性格はとても真面目で、イクスヴェリア主君想い。不忠を働けば、切腹する危ない奴。しかし、体が鋼鉄のように硬いので、腹が斬れない。

### 『特技』

刀となり、持ち主の魔力に応じた剣技が出来るようになる。

（提供者：黒神先生）

マリアーヂュ改01（クイント）

（イメージCV：百々麻子）

ドクターキュラスがクイント・ゲンヤの死体を奪い、マリアーヂュ化させた際に、通常より遥かに高い戦闘能力に強化させた。スバルとの激闘後、スバルのことが離れなかった。これは母親としての本能がそうさせた。

イクスヴェリアの『前世を蘇らせる』能力により、完全に記憶を取

り戻した。

以後、イクスヴェリアと共に、ドクターキュラスの野望を食い止めるためにマリアージュ改00に協力する。

「能力」

【シャドーワープ】

影に潜り込み、影と影の間を自由自在に行き来する。

【ジェノサイドアタック】

スバルのデイバインバスターより強力な打撃魔法。実際にスバルのリボルバーナックルを破壊してしまう。

ジン・ギス・カン

ハイメージCV：阪口大助

桂の元で攘夷志士をしている羊。

妙の『ダークマター』が好物になる。

恩義のためにスバル達に協力する。

「能力」

体毛の中に武器を隠してある。

（提供者：神威銀時）

【敵】

マリアージュ改00（トレディア）

ハイメージCV：立木文彦

ドクターキュラスの片腕として動くマリアージュ改。

その正体は、ドクターキュラスに殺されたトレディアである。（その詳細は後ほど）



彼はキュラスに従う振りをして、ある計画を企てている。

そのためにクイントとイクスに協力を要請する。

ドクターキュラス

ハイメージCV：納谷六郎

天才的頭脳を持った天人。

高い科学力であらゆるエイリアンを開発した。

自分の才能に自惚れ、己の欲望のためなら、他者をとことん利用し、使えないものは容赦なく、始末するという非情な性格の持ち主。

江戸世界では若かったが、数十年前のリリカル世界（ミッドチルダ世界）に迷い込み、現在まで老いたしまった。しかし、結果的にマリアージュを改造するまで知能が高まった。

今、自分を認めなかった時空管理局（最高評議会）に復讐する為に時空管理局本部を襲撃する。

マリアージュ改02（岡田似蔵）

ハイメージCV：青山穰

鬼兵隊の『人斬り似蔵』のしたいから作り出されたマリアージュ。

前世の記憶が無いが、人を斬る事と魂を追い求めることを忘れていない。

潜在能力は格段に高い。

#### 【武器】

真・紅桜

『紅桜』を元に作り出したキュラスが作り出した刀。

人工知能ではなく、使う者の意思で形を変貌するように作られている。

マリアージユ改03（云業）

ハイメージCV：喜山茂雄

吉原で無残に殺されてしまった夜兎の男を元に作られたマリアージユ。

夜兎の本来の力を引き出されているため、夜王鳳仙並みの強さになっている。

### 【武器】

番傘・改

弾丸から魔力によるエネルギー弾になっている。

あらゆる攻撃を防ぐ素材に作り変えている。

### 【なのはマン】

低町なのは

ハイメージCV：田村ゆかり

幼い頃に魔法と出会い、魔法少女になることになった。しかし、ここで間違えたのか、魔力より肉体を鍛え上げてしまい、結果的に筋肉ムキムキな少女になってしまった。

性格は、思い通りにならない時は容赦なく叩き潰すと言う信条にしている。

味方からも恐れられ、『白い魔王』と恐れられている。

筋肉と魔法を合わせた技を使う。

フアイト・テストロツサ

ハイメージCV：水樹奈々

幼い頃になのはと

出会い、拳と拳をぶつけ合い親友になる。

神拳を極めて、捜査官になる。

九神はやて

ハイメージCV：植田佳奈

『悪の書』の力に目覚め、タヌキの姿に変貌してしまう。

元の姿に戻るために、世界征服を目指す。

タヌキなだけに腹黒い計算を得意とする。

逆ギレ・ヴィータ

ハイメージCV：真田アサミ

なのはと戦い、屈辱的に負けてしまう。

屈辱を晴らすために鍛え続けて、筋肉ムキムキの小学生になる。

ジャマル

ハイメージCV：柚木涼香

顔がブスなために一度も男にもてたことが無い。

はやての『悪の書』を手に入れ、永遠の美貌を手にするために、は

やての手下になる。

ザブウーラ

ハイメージCV：一条和矢

『悪の書』の守護獣で、はやての手下。

ブルドック姿だが、人間姿は全裸のブ男になる。

ツツパル・ナガジマ

ハイメージCV：斎藤千和

なのはに助けられて以来、彼女に憧れて魔法少女になることを目指す。

しかし、筋肉ではなく、贅肉を取ってしまう。

チアナ・ランスター

ハイメージCV：中原麻衣

ツツパルの親友。

婦警として、犯人を捕まえ続けるが、恋人は捕まえられない。原因は顔である。

エーリオーン・モンディアル

ハイメージCV：井上真里奈

振られた事を悔やみ、自らをかつこよくするために改造人間になった悲劇な少年。

キャロル・ルブオ

ハイメージCV：高橋美佳子

影の薄いのはなのは達が目立ちすぎていると考え、わら人形に釘を打って、なのは達を呪っている。

呪いの竜『フリードリピ』を従えている。

リングイ・ハラオウン

ハイメージCV：久川綾

時空管理局を牛耳っている長官。

なのは達を徹底的に利用している。

シグミス

ハイメージCV：清水香里

普段は普通の女子高生。

しかし、炎の剣で『炎の剣士』になって、悪と戦う。

剣術と爆乳が自慢の武器。

終わり。

## キャラクター設定（後書き）

『なのはマン』は別になのはさんたちをモデルにしていませんよ。  
（笑）

ステージ37 格好だけではなく、心も成りきれぬこそ、コスプレイヤー（前書

今、スバル達の戦いが始まった。

ステージ37 格好だけではなく、心も成りきれぬこそ、コスプレイヤー

【時空管理局本部】

激しく爆音が響く。

スバル

「てりやー！」

ザシュツ！

スバルはティルウイングエアで向かってくる量産型マリアーシュ改達を横から一刀両断に斬る。

土方

「ハッ！」

ザシュ！グサツ！バシュ！

土方は瞬時に数体を斬り捨てる。

近藤

「どりやあああああ！」

バキバキ！

威勢を挙げながら近藤は巨体の敵を一刀両断にする。

近藤





ミミズの牙がエリオに襲いかかるうとした時、

ドカアアアアアン！

ミミズの頭が爆発する。

エリオは後ろに振り向くと、番傘を構えた星海坊主がいた。

星海坊主が援護してくれたのだ。

星海坊主

「……………余計なお世話だったかな？」

エリオ

「いいえ、ありがとうございます！」

すると、新たな量産型マリアーージュ改やエイリアンが大軍になって向かってくる。

エリオと星海坊主は背中を合わせる。

星海坊主

「背中を預けてくれないか、ベルカの騎士さん？」

エリオ

「こちらからもお願いします、掃除屋さん？」

エリオ／星海坊主

「もちろん！」

今、伝説の掃除屋と若き騎士が共闘する。

キャラ

「フリード、お願い！」

フリード

「ギャオー！」

ドカン！ドカン！ドカン！

フリードは『ブラストレイ』で空中に舞う鳥や虫などの敵を撃墜していく。

ジン・ギス・カン

「メエー！」

ジン・ギス・カンの体毛から大砲の筒やミサイルが飛び出してくる。

ジン・ギス・カン

「メエー！」

叫ぶと大砲とミサイルが発射され、空中の敵を撃墜していく。

キャラ

「凄い……………、ありがとう」

ジン・ギス・カンはキャラ達の援護をしていた。

「」「ぬおおおおお！」「」「」

大型の量産型マリアージュ改が妙、九兵衛に迫ってくる。

九兵衛は刀を構え、走りだし、。

九兵衛

「てやつあああああ！」

斬！

量産型マリアージュ改の片足を斬る。

それを見ていたシャツハは、

シャツハ

「す、凄い！」

と驚く。

量産型マリアージュ改はバランスを崩して、前に倒れようとする。

しかし、その先には妙が居た。

シャツハ

「た、妙さん危ない！」

シャツハが駆け付けようとした次の瞬間、

妙

「どりゃあああああー！」

バキッ！

量産型マリアージュ改の顎を目掛けて拳を一撃喰らわせる。

その勢いは凄かった。

前に倒れるはずが後ろに倒れる。

シャツハはもつと驚く。

九兵衛

「流石は妙ちゃんだ」

妙

「てへっ」

シャツハは二人の戦いぶりを見てこう思った。

『江戸の世界の人達って、化け物か』

と思った。

ルネッサ

「はっ、はっ、はっ……」

ルネッサは走り抜ける。

ルネッサ

(・・・懐かしい、銃を持って戦場で走り抜けるこの時が)

ルネッサが懐かしむと、

「キシヤアアアアア」

一体の量産型マリアージュ改が襲い掛かる。

ルネッサ

「しまっ・・・」

ルネッサはやられると思ったその時、

?????

「うらあああああ!!」

ドカアアアアアアン!

突然巨大なものが量産型マリアージュ改を殴り飛ばし、ルネッサを守る。

ルネッサは驚く。

頭に二本の角にごつつい巨大な体に巨大な数珠を巻き付けていた。そして巨大なドリルの槍を持っていた。

それは『戦国 A A R A』の本多忠勝そのものだった。

???

「ルネちゃん、大丈夫か？」

ルネツサ

「……………長谷川さん」

そう長谷川泰三だった。

ルネツサ

「……………長谷川さん、その姿一体……………」

長谷川

「スカリエツティ博士に頼んで作ってもらった戦闘スーツだ。これで俺も戦える！」

ルネツサ

「……………長谷川さん」

すると、

「ギヤアアアアアア！」

アルマジロのような猛獣が丸まって転がり向かってくる。

長谷川

「今の俺は長谷川じゃない。俺は……………」

猛獣が長谷川に向かってくると、

長谷川

「頑張る女の子を助けたいマダオ勝つだ！」







大型のライオンみたいな猛獣が襲いかかるが、

ノーヴェ

「リボルバー・スパイク！」

バキッ！

「ギャウ！」

顔に喰らい、吹き飛ばされる。

ノーヴェ

「へっ、ちよろい・・・」

チンク

「ノーヴェ、上！」

ノーヴェ

「!?!」

ノーヴェは驚いた。

「ギャアアアアアア!!」

大型の鳥が空から飛んでくる。

大型の鳥が交戦するデイエチとウエンディに向かってくる。

ノーヴェ

「ウエンディ、デイエチ!!」

ウエンディ/デイエチ

「はっ！」

気付くが、もうそこまで近づいていた。  
もう駄目かと思われたその時、

ギョルルルルルルルル！

「デイエチちゃんに何するんだ！！」

ドカアアアアアン！

「ギャアアアアアア」

突然の巨大な火炎車が大型の鳥に目掛けてぶつかり、大型の鳥は吹き飛ばされる。

ウエンデイとデイエチは驚いた。

火炎車から現れたのは、『戦国B S A A』の真田幸村……  
ではなく、山崎 退だった。

ウエンデイ

「な、なんっスかその格好は！？」

山崎

「スカリエツティさんに頼んだんだ戦闘スーツなんだ。俺も皆を、  
……デイエチちゃんを守りたいんだ」

デイエチ

「や、山崎さん」

いつの間にか二人の間に甘い雰囲気漂う。

ウエンディ

「・・・ちよつと、場所をわきまえるっスよ(怒)」

すると、新たな量産型マリアーージュ改達がやって来る。

山崎

「任せて！」

山崎は槍を構える。

よく見ると、槍の穂先はミントンラケットだった。

ウエンディ

「って、ミントンラケットっスか！？」

すると、ミントンラケットが燃え上がる。

山崎

「行くぞ！」

山崎はくるくると回ると山崎自身も燃え上がる。

そして、先ほどの火炎車になる。

山崎

「ディエチちゃんには指一本触れさせない！」

山崎は突撃し、量産型マリアージュ改達を次々と破壊する。

デイエチ

「……………山崎さん」

ウエンディ

「とつと働くつスよ！」

デイエチ

「うん！」

ウエンディとデイエチは攻撃を再開する。

デイエチ

（……………山崎さん）

デイエチは山崎への恋心を増した。

スバル

「長谷川さんと山崎さん、『戦 BAS RA』になりきっていま  
すね、政宗さん」

と土方に言う。

土方

「中の人繋がりで呼ぶな……………他にもいるみたいだぜ」

土方はある人物を指す。

スバル  
「えっ？」

バン！バン！バン！バン！バン！バン！

なんとティアナが『戦 BAS R A 3』の雑賀孫市の衣装を着て  
戦闘していた。

スバル

「……………ティア」

ティアナはスバルの呼ぶ声に気付く。

ティアナ

「こ、これはね、スカリエツティがくれた魔力を上げる戦闘スーツ  
なのよ！別に好きで、ポケをかましたいから着ているんじゃないか  
ら！」

と本音をポロリ言ってしまう。

近藤

「ガッハッハッハッ、気になさるなティアナ殿！誰だってやってみ  
たいことはある！」

いつの間にか禪一丁になっていた。

土方

「……………近藤さん、その格好は？」

近藤

「知らんか？『戦国 BASARA』の前田利家だ！パーツが足りな

かったがな」

そして、ある衣装を取り出す。

近藤

「これは利家の妻のマツの衣装だ！これを着るのはもちろん、おた・  
・・」

ドカアアアアアン！

近藤は突如吹っ飛んできた大型の量産型マリアー・ジユ改に潰された。

妙

「ごめんなさい、居るなんて気づかなかったわ」

吹き飛ばしたのは、血管を浮かべた妙だった。

近藤とのペアルックに腹を立てたので、わざとやった。

ティルヴィングエア

(・・・お主の友は皆面白いな)  
スバル

(あっはっはっはっ・・・)

スバルは苦笑するしかなかった。

【システムの管制室】

ドクターキュラスは顔を歪めながら、モニターでスバル達の様子を観戦する。

ドクターキュラス

「……………くっ、猛獣型エイリアンをも投入させても状況が……………」

ドクターキュラスはドン！と机を叩く。

ドクターキュラス

「何故じゃ！何故奴等が予定より早く来たのじゃ!？」

ドクターキュラスは焦る。

そして、通信画面を表示させる。

ドクターキュラス

「00!!」

マリアージュ改00

「はい」

ドクターキュラス

「予定より早く段階に移す！その前に奴等を食い止めるのじゃ!」

マリアージュ改00

「わかりました」

ドクターキュラスは通信を切り、システムの管制室を出る。



【三提督の部屋】

マリアージュ改00

「私は『方舟』に戻る。……………イクス」

イクスは顔を向く。

マリアージュ改

「君の友達が君を迎えに来た」

イクス

「えっ……………」

マリアージュ改

「彼らはおそらく『システムの管制室』から行くハズだ。そこで出迎えてやれ」

ガチャン！

マリアージュ改はイクスの手錠を外す。

三提督は驚く。

さらに天井にある通気孔の扉を、

シュン！バラバラ

刀で斬る。

マリアージュ改00

「ここから入っていた方が良い。地図も渡す」

イクス

「……………はい」

マリアージュ改00はイクスを通気孔に入れる。

マリアージュ改00

「向こうにも敵がいるかもしれない、気を付けろ」

イクス

「はい」

イクスは進んで行く。

三提督は驚く。

ミゼット

「……………何故こんなことを？」

マリアージュ改00

「……………これは私の計画の為だ」

レオーネ

「君の？ドクターキュラスの部下では？」

マリアージュ改00

「私が奴を利用していただけだ」

ラルゴ

「お主の計画とはいったい……………」

すると、マリアージュ改00はモニター画面を表示させる。

それはスバル達の戦いの様子である。

マリアージュ改00

「計画の実行は彼らの頑張り次第で決める」

三提督は思った。

『いったい何を考えているんだと』

【時空管理局本部】

スバル達は入り口までくると、マリアージュ改01ことクイントが立っていた。

スバル

「あ、あなたは」

クイント

「……………よく来ました」

今、母と娘が再会した。

次回に続く。

ステージ37 格好だけではなく、心も成りきれぬこそ、コスプレイヤー（後書

果たして、スバルとクイントの再戦になるか!?

ステージ38 急ぎすぎると高い確率で失敗する。だから落ち着こう。(前書き

大変お待たせしました。

ステージ38 急ぎすぎると高い確率で失敗する。だから落ち着こう。

『前回の話』

量産型マリアージュ改とエイリアンの大軍と戦いながら本部に行こうとした時、マリアージュ改01ことクイントが立ちはだかった。

\*

【時空管理局本部：外】

スバル達は息を呑んだ。

クイントはスバルを重症にまで追い込んだ程の実力があると、スバルの上官のヴォルツから聞かされていた。

だから警戒していた。

しかしクイントはスバルを見つめていた。

クイント

(・・・スバル、すっかり大きくなったわね)

クイントはスバルの成長を喜ぶ。

スバル

「・・・また会ったね」

クイント

「……………そうですね」

すると、

ギンガ

「みんな！」

ギンガが走って来る。

星海坊主

「あれ、嬢ちゃん居たのかよ？」

ギンガは盛大に転んだ。

ギンガ

「いきました！戦っていました！……………けど、作者が前回の話で私の名前すら書き忘れたんです」

ギンガは泣く。

同じ出番の無い星海坊主に言われた事が相当効いた。

クイントはギンガを見て、

クイント

(……………ギンガ、なんて哀れな)

と娘の悲惨さと影薄さに嘆く。

ギンガ

「!.....あれは」

ギンガはクイントを見て何かを感じた。

スバル

「ギン姉、どうしたの?」

ギンガ

「.....あのマリアージュ改、どこかで会ったような.....」

クイントは驚く。

クイント

(.....ギンガは私のことに気づいている)

クイントは嬉しく思う。

すると、土方が割り込んでくる。

土方

「そこを通してくれねえか? そうしたらスバルに怪我を負わせた事は無しにしてやるぜ。良いだろ、スバル?」

スバル

「私は別に良いですけど.....」

しかし、クイントは構えた。



クイント

「それは出来ません。此処を通すなど、ドクターキュラス様のご命令なので」

土方

「……………仕方がねえ」

土方は刀を構える。

すると、

ティアナ

《土方さん》

土方

「ああん？」

ティアナは念話で土方に話しかける。

ティアナ

《私やスバルにエリオが中（管理局本部）に入ります。護衛してください》

土方

《……………そうだな、お前らの方が詳しいから適任だ。あと何人かを加えて、残った奴等で外の敵を食い止める。しんがり俺が引き受ける》

ティアナ

《ありがとうございます》

土方

《その代わり、とっとバリアーを解除させて、応援を頼む》

ティアナ

《勿論です》

ティアナは土方以外の仲間達に念話で作戦を伝え、仲間達は承諾した。

土方達は一気に駆け込んだ。

クイントは驚き、拳で攻撃を仕掛ける。

更に後方から量産型マリアージュ改やエイリヤンの群れが迫ってくる。

ガッシイン！

クイントの拳を受け止めたのは、ギンガの拳だった。

ババババババババババババ！！

ドカン！ドカン！ドカン！

ギュルルルルルルルルルン！

バキイン！

土方を筆頭にアギト、キャロ、フリード、山崎、長谷川、ナガジマ姉妹、ジン・ギス・カン、聖王教会シスターズがマリアージュ改の

群を攻撃した。

ギンガとクイントの激突の隙を突いて、入り口に飛び込んだのは、

スバル ティアナ エリオ 妙 九兵衛 星海坊主 ルネッサ だ  
った。

近藤も飛び込もうとしたが、

妙

「うりゃあ！」

バッキ！

近藤

「ぐほっ！？」

妙に嫌われている近藤は期待通り、妙に殴り飛ばされる。

ストレートに決まる。

しかし、

近藤

「貴女へ愛は不滅だ！！」

とウザイことを叫びながら、ど根性で入り口に飛び込んだ。

そして、

シュル。

禪がほどけてしまい、全裸のまま行ってしまった。

走る度に近藤のアソコがブラブラ揺れる。

土方、山崎、長谷川、ジン・ギス・カンの男性陣は啞然し、

キャロ、ギンガ、アギト、ナカジマチンク・ウエンディ・ノーヴェシヤット姉妹、シスター達、そしてクイハチディード・オットー・セインントの女性陣は赤くなるのだった。

835

そんな様子を高い場所で視ていたのは、マリアージュ改02だった。

マリアージュ改02は通信回線を開く。

【管理局本部：地下フロア】

嚴重に封鎖された大きな扉があった。

その扉のメインコンピュータにアクセスしているドクターキュラスと護衛の二体の量産型マリアージュ改がいた。

キュラス

「もう少しじゃ、もう少しで……」

必死にコンピューターシステムを解除しようと躍起になっていた。

すると、キュラスの通信回線が開く。

マリアージュ改02

「ドクターキュラス様」

ドクターキュラス

「マリアージュ改02、なんだ？」

マリアージュ改02

『襲撃してきた奴等の何人が本部に侵入しました』

ドクターキュラス

「な、なんじゃと!？」

ドクターキュラスは思わずコンピューターを叩く。

ドクターキュラス

「マリアージュ改01は何をしているんじゃ!？」

マリアージュ改02

『流石のマリアージュ改01でも多数を相手にするのは無理がありました』

ドクターキュラス

「ちよっと待て!なんでお前も加勢して、奴等の侵入を防がなかった!？」

マリアージュ改02

『自分はドクターキュラス様の命令通りにマリアージュ改01の様子を伺っていました。加勢しろという命令は受けてません』

ドクターキュラス

「馬鹿者！侵入を防ぐという自己判断をせぬか！」

マリアージュ改02

『…………困りましたね。自分は、すべてのマリアージュ改は貴方の指示が絶対とプログラムされています。自己判断は無理です』  
ドクターキュラス

「…………くっ」

キュラスは今後悔していた。

自分の言葉通りに従うようにプログラムしたことを。

ドクターキュラス

「急遽命令変更じゃ、外の奴等をすぐに始末するのじゃ！！そしてマリアージュ改01と共に侵入した奴等を始末じゃ！急げ、ワシのところに来る前に」

マリアージュ改02

『……………了解しました』

マリアージュ改02は通信回線を切る。

ドクターキュラスは非常に焦った。

このままでは奴等に見つかって、逮捕されてしまう。

ドクターキュラス

「い、急いで作業を……あつ!？」

コンピューターの画面がフリーズを表示していた。

さっき叩いたショックでフリーズになってしまったのだ。

ドクターキュラス

「ふざけるな!こんなときにフリーズするな!またやり直しじゃ!」

ドクターキュラスは急いでコンピューターへのアクセスし直しをする。

ドクターキュラス

「マリアージュ改03じゃ!マリアージュ改03で侵入した奴等を迎え討つのじゃ!すぐに連絡するんじゃ!」

量産型マリアージュ改に指示を出す。

【時空管理局本部：外】

マリアージュ改02

「それじゃ、斬りに行くか」

マリアージュ改02は『真・紅桜』を上段に構え、飛び降りる。

着陸場所は土方のいる場所。

\*

土方

「!！」

土方は殺気に気づいた。

ドカアアアアアン!

土方は瞬時に跳んで避ける。

着陸したマリアージュ改02は土方を見上げながらニヤリと笑う。

マリアージュ改02

「また、会いましたね」

土方

「ああつ、会いたかったぜ」

土方は刀を真つ直ぐに構えながら、

土方

「今度こそ斬り合おうか」

土方とマリアージュ改02の再戦が始まった。



【時空管理局本部：内部】

スバル達が制御システムのある管制室に向かう途中、

バキイイイイイン！

目の前の壁が突然破壊される。  
砂煙から人影があつた。

「!？」

エリオと星海坊主は見覚えがあつた。

エリオ

「……………マリアージュ改」

星海坊主

「……………03だったけ？」

そう、マリアージュ改03だ。

武器の番傘を構えて、戦闘準備万端だった。

スバル

「マリアージュ改03って……………」

星海坊主

「夜兎族の死体から造られた強力なマリアージュ改だ」

マリアージュ改03はスバル達に、

マリアージュ改03

「ドクターキュラス様の命令で、貴様らを殺す」

と不敵に笑いながらいい放つ。

ティアナ

「なら、皆で」

星海坊主

「いや、俺が相手をする」

星海坊主がスバル達の前に立つ。

スバル

「星海坊主さん、ムチャですよ！」

星海坊主

「俺達の目的は、一刻も早くバリアーの解除することだ！こいつに時間をかけるわけにはいかん！しかし、通してくれそうもない。誰かが残って、誰かが先に行くしかない」

ティアナ

「でも・・・」

星海坊主

「夜兎族には夜兎族にしか対抗するしかない」

星海坊主は武器の番傘を構える。

すると、エリオもストラーダを構える。

エリオ

「僕も加勢します。僕もこいつには借りがありますから」

星海坊主

「……………わかった、今回はベルカの騎士の力を借りるぜ」

マリアージュ改03が突撃し、番傘を振り上げる。

ガツシイイイイイン！

番傘とストラーダで攻撃を防ぐ。

星海坊主

「いけえ！迷えば進めないぞ！」

エリオ

「僕達を信じて！」

スバル

「……………くっ！」

スバル、ティアナ、九兵衛、妙、ルネッサは走って行く。

マリアージュ改03

「逃がさん！」

マリアージュ改03はスバル達を追うとするが、星海坊主とエリオがそれを許さなかった。

星海坊主の番傘とストラーダは瞬時にマリアージュ改03の番傘を

押さえつけた。

星海坊主

「どうしても行きたいんなら」

エリオ

「僕らを倒してから行け！」

マリアージュ改03

「……………望み通り貴様らから殺す！」

バシッ！

マリアージュ改03は殺意を覚え、星海坊主とエリオの相手をする。

星海坊主とエリオの共闘が始まった。

【通気孔内】

イクス

「よいしょ、よいしょ」

イクスは急いで通気孔を通る。

とても狭かったが、イクスそれでも進んで行く。

イクス

「今、どこかな？」

イクスは途中で止まり、マリアージュ改00から渡された地図を見る。

その地図は電子で造られた地図で、自分の位置と目印、そして目的地を表示していた。

イクス

「急がなきゃ」

イクスは再び進む。

誰が先に勝利を掴むのであろう。

次回に続く。

ステージ38 急ぎすぎると高い確率で失敗する。だから落ち着こう。(後書き)

遂にマリアージュ改シリーズとの戦いが始まった！

頑張れ真選組とStrikers！

一周年、緊急特別企画！！（前書き）

一周年の企画、やっと思い付きました。

一周年、緊急特別企画！！

一年とは早いものですね。

この『真選組Strikers鬼の子守唄』が既に一周年になりました。

なのに、大した企画しか思い付きませんでした。

その企画は……………

《人気投票》 & 《心に残った話・名場面コメント》

キャラクターへの投票は10票まで入れることができます。

心に残った話、または場面を3つまでコメントできます。  
このコメントでランキングを作ります。

銀時

「おいおい、前回の人気投票はあんまり集まらなかったじゃねーかよ」



(・・)エツ・・・・・・・・？

神楽

「懲りてねーのかよ」

い、いやぁ・・・・・・・・。(^^)(^^)

新八

「もう一周年の日、過ぎましたよ。タイミング悪いですよ」

そ、それは・・・・・・・・。(・・)(・・)

なのは

「しかも企画がショボいの」

ううっ・・・・・・・・。(T-T)

フエイト

「まあまあ、そんなに責めたら可哀想だよ。今回は集まると思っよ。最近、感想が多くきているから・・・・・・・・。」

そうだよ、そうだよ！(^^)(^^)

銀時

「うわっ、切り替え早っ！」

神楽

「調子いい奴だな」

新八

「まあ、泣かれるよりはましですよ」  
なのは

「そうだね」

ふつつ、実は人気投票で一位に輝いたキャラクターには、特別企画  
なだけに、素敵なモノをプレゼントを贈呈します。

「素敵なモノをプレゼント？」

それは……………、

¥10000\$だ。

「10000\$!?!?」

銀時達は驚いた。

銀時

「……………本当かよ?」

うむ、間違いなく『\$』でだよ。

それを聞いた銀時達は……………、

銀時

「一位は俺!一位は俺!一位は俺!」

神楽

「10000\$はわたしにネ!10000\$はわたしにネ!10000\$はわたしにネ!」

新八

「今度こそ僕に票を！今度こそ僕に票を！今度こそ僕に票を！」  
なのは

「プレゼントと前回の屈辱を晴らす！プレゼントと前回の屈辱を晴らす！プレゼントと前回の屈辱を晴らす！」

欲深なキャラクターは念仏を唱えるように、祈る。

フェイト

「み、みんな……………」

フェイトは啞然する。

……………確かに前回の投票はあまりなかったですが、以降は感想が増えていきます。  
ですから今回は期待します。

あんまり感想書かないあなたも書いてくれたら嬉しいです。

締め切りは最終回までです。

ですので、これからのお話を読んでから投票するのも、書くのも良しです。

それでは、お待ちしております。

終わり。

一周年、緊急特別企画！！（後書き）

共同小説という案を、『黒神』先生に言われましたが、共同小説の自信がないので、却下。

現在、戦闘描写入りの話の製作はまだかかっています。

早く真選組Strikersを投稿したいなと思いついて、考えました。

次回は長い奴を書きます。

ステージ39 戦闘描写って、本当に難しいよね。(前書き)

遂にできました！分けて書いて、結合してまとめました。

ステージ39 戦闘描写って、本当に難しいよね。

【時空管理局本部：外側】

土方とマリアージュ改02は、互いの刀を構えながらにらみ合いをしていた。

アギト・シャツハ・デイド・オットーは土方を見守る。

《パラッ》

「「「つりゃあ！」「」」

《ガキーン！》

両者同時に走り出し、一太刀を喰らわせようとし、刀を抜いたところで互いの刀がぶつかり合った。

土方

「・・・チツ！」

土方は一度下がって、すぐに上段に振り上げて斬りかかる。

《ガキーン！》

マリアージュ改02は真・紅桜で防いで後に押し返し、土方を薙ぎ斬ろうとする。

《ガキーン！》

しかし、土方は瞬時に右手の村麻紗を下にして、峰部分を左手で抑え、刀身で防いだ。

マリアージュ改02

「うらっ！」

防いだ土方をそのまま押し返す。

《ザザー！》

両方の踵で地を踏んで、吹き飛ばされる勢いを抑える。

土方は防いだ構えのまま、マリアージュ改02に向かって行き、

土方



「せりゃあー!!」

持ち手（右腕）に力を入れて、勢いの良く下からの左側の斜めに斬りかかるうとした。

《ガキーン!》

が、マリアージュ改02は真・紅桜を縦に構え、土方の一撃を刀身で受け流す。

その時、土方は瞬時に左手で柄を持つ。

土方

「うりゃあー!!」

今度は両手に力を込めた、上からの右側の斜め斬りを喰らわす。

マリアージュ改02

「フンッ!!」

《ガキーン!》

互いの刀（刀身）がぶつかり合った。

マリアージュ改02は透かさずに真・紅桜を横に構えて、土方の一撃を防いだ。

《ササッ!》

マリアージュ改02はすぐに後ろに下がる。

マリアージュ改02

「ふっ!」

マリアージュ改02は真・紅桜を中段に構え、土方に向かっていく。

《ガキーン!ガキーン!ガキーン!.....》

あらゆる方向から斬りかかるが、土方は打ち返す。

\*

アギトやシャツハらは二人の死闘を見て、驚愕する。

シャツハ

「す、凄い!」

デイド

「トール姉様から聞いていましたが、これ程とは.....」

オットー

「しかし、あのマリアージュ改も凄いです」  
シヤツハ

「死体は………確か『人斬り似蔵』でしたね」

アギト

「………土方さん、負けるな!!」

デイド

「………そうです、愛するアギト様の為に勝つのです!」

土方

「待て、愛してねえよ!!」

土方は激しい攻防中、怒鳴る。

\*

土方とマリアージュ改02は一旦離れた。

土方

「本当に隙がねえーな」

マリアージュ改02

「盲目だった頃は、嗅覚、聴覚、そして勘で斬り合いをしたんでね。視力が戻ってからそれはなくなっていない。つまり、この身全てであんたの攻撃が丸わかりだ」

土方

「………なるほど。どつりでどこを攻めても、防げたか」

マリアージュ改02

「あんたも俺の剣技をかわしたり、受けたりしているから大したも

んだよ」

土方

「おだてたって、手加減しねえよ」

マリアージュ改02

「それじゃ、俺も本気になりますか」

土方

「何？」

すると、真・紅桜が怪しく紅色に輝く。

《シュルシュル……》

真・紅桜の刀身は三つに別れ、伸び始める。

土方

「なっ!？」

土方は驚いた。

徐々に変化する。

真・紅桜の刀身が、三本の鞭になる。

マリアージュ改02は走り出し、

マリアージュ改02

「うりゃあー!」

《ビュン！》

マリアージュ改02は思い切り右横に振るい、三本の鞭は土方に目掛けて襲い掛かる。

土方

「！」

《バシン！！》

土方は瞬時に左側に跳んで避ける。

すると、真・紅桜はまた形を変えていく。

《シュルシュル……》

刀身に戻ったと思ったら、

《ビュウウウウウウ》

一直線に伸びていた。

土方の左側に届くと、

マリアージュ改02

「ふっ、もらった!」

マリアージュ改02はそのまま土方に目掛けて真・紅桜薙ぎ払おうとした。

《ガキーン!》

しかし、土方は瞬時に村麻紗で受け止める。

《シュルシュル、ピキン!》

真・紅桜は元の長さに戻る。

土方は真・紅桜に驚いた。

\*

アギト達も驚いた。

シャツハ

「刀の刀身が変わった!？」

デイド

「……確かに鞭から長身の刀身になった」

オットー

「……あれはいつたい」

アギト

「……土方さん」

\*

土方

「おい、そいつはいつたい……」

マリアージュ改02

「これは『真・紅桜』。ドクターキュラス様が『紅桜』を改良なされた奴さ。前のは意識を乗っ取るヤバいものだったが、こいつは持ち主の意思に従い、形を変える優れものさ」

土方

「形を変えるだと？」

マリアージュ改02

「見ての通りさ。刀以外の武器も使えるのさ。覚えてないかい？あのおチビさん（アギト）を刺したのも、こいつさ」

土方はその時のことを思い出し、怒りを露にする。

マリアージュ改02

「怖い怖い。けど、これからが本番さ！」

マリアージュ改02は再び襲い掛かる。

《シュルシュル、ピキン》

刀身から斧に変わる。

マリアージュ改02

「せりゃ！」

真・紅桜を振り上げ、土方に目掛けて降り下ろす。

《ドカアアアアアン！》

土方は避け、斧はそのまま地を割った。

《シュルシュル、ピキン！》

斧から細長い刀身に変わる。



マリアージュ改02は瞬時に土方に近づき、

マリアージュ改02

「じゃあ！」

真・紅桜で、勢いよく突き出した。

狙いは土方の頭だった。

《ガキーン！》

土方はすかさず、村麻紗でマリアージュ改02の突き出しを、左側へ払いのけた。

マリアージュ改02は、にやりと笑った。

《シュルシュル、ピキン！》

真・紅桜の刃先が下の方に曲がり、マリアージュ改02は勢い良く引くと、

《ぎくっ！》

土方

「ぐわっ！」

土方の左肩を斬りつけた。

土方

「くっ……」

\*

アギト

「土方さん！」

アギトは土方の元に飛ぶ。

デイド

「アギトさん！」

「逃がさん」

《ガキーン！》

量産型マリアージュ改がデイドに斬りかかるが、デイドはシンブレイズで受け止める。

シスター達は襲い掛かる量産型マリアージュ改達の相手を再開させる。

\*

土方は刀を持った手で傷口を抑える。

マリアージュ改02

「やっと手傷を負わせた」

土方

「……………こんなんでも満足してんじゃあねえよ」

土方は村麻紗を向ける。

マリアージュ改02

「やれやれ」

《シュルシュル、ピキン!》

真・紅桜は、ランス（槍）になり、マリアージュ改02は土方に向かって突撃する。

土方は村麻紗を横に構えて、マリアージュ改02の突撃を防ぐ構えを取る。

土方のは一気に貫くと考えていた。

だが、それは大きく外れた。

《シユルシユル!》

ランスが八方に分かれる。

さらに二方分かれ、細い針のようになった。

土方

「しまっ……」

《グサグサグサグサグサグサグサグサ》

土方

「ギヤアアアアアア!」

土方は身体のおちこちを刺されてしまった。

《ズボズボズボズボズボズボズボ》

土方

「くっ……」

一気に抜かれ、後から血が吹き出る。

土方は苦痛のあまりに膝を着いてしまっ。

マリアージュ改02

「もう動けないな。それじゃ、トドメを・・・」

その時、

アギト

「止める！」

飛んできたアギトは土方の前に現れる。

土方

「アギト！」

マリアージュ改02

「おやおや、おちびさん」

アギト

「土方は殺らせるか！」

アギトは両手から、炎の塊を作り出す。(とても小さいが)

アギト

「喰らえ！」

アギトは炎の塊をマリアージュ改02に向けて放つ。

《ブンッ!》

しかし、マリアージュ改02は真・紅桜を一振りで炎を消す。

マリアージュ改02

「………たいした力だね。ドクターキュラス様の言う通り、『出来損ない融合騎』だ」

アギト

「……くっ」

マリアージュ改02

「何の役に立たないからイクスを守れなかった。そして助けにもならなかった」

アギトは悔しがる。

マリアージュ改02に言われたことが、心に突き刺さったからだ。

マリアージュ改02

「落ち込まない。そいつ「土方」と一緒に始末してあげるから」

《メキメキ、ピキッン!》

真・紅桜は大型の剣になる。

マリアージュ改02

「悲しい色のまま、さよなら」

マリアージュ改02はアギトを斬ろうとした。

アギトは逃げようとするが、間に合わない。

《ガキーン!》

アギトは驚いた。

傷を負って、動けなかった土方が村麻紗を盾にして、アギトを守った。

しかし、傷口から血が飛び出る。

アギト

「土方さん!」

マリアージュ改02

「驚いた。あれほど傷を負ったのに、まだ動けるなんて」

土方

「……………アギト、病院で俺の言ったことを覚えているか?」

土方に言われ、アギトは思い出した。

土方

「いじけてる暇があるなら、探せよ、自分の生きる意味を!」

アギト

「……………土方さん」

土方

「……………俺は……………お前のことを『出来損ない』とは思わねえよ!」

アギトは涙を流した。

アギト

「ひ、土方さん！」

アギトは土方の背中に飛び付く。

その時、

《ピカッアアアアアア》

土方とアギトが輝き出す。

マリアージュ改02は驚く。

アギトは土方の背中に呑み込まれた。

そして土方は燃え上がる。

マリアージュ改02

「な、何だ!？」

土方に燃え上がる炎は、傷口を消してしまった。

さらに村麻紗の刀身が炎を纏う。

そして、髪の色がアギトと同じ赤い色に染まった。



土方の姿は変わっていた。

\*

デイド

「あ、あれは一体!？」

デイド達も驚いた。

シャツハ

「……もしかして」

セイン

「シスターシャツハ、解るのか？」

シャツハ

「……アギトさんは、土方さんと融合したのでは」

\*

土方

「……なんだ、力が湧いてきやがる」

\*

アギトは土方の中にいた。

「……………此処は土方さんの中？もしかして、私は土方と融合したの？」「アギト」

マリアージュ改02

「……………見える、赤い色だ。燃え上がるように赤い色だ」

マリアージュ改02は斬りかかろうとする。

《ガキーン！》

土方はマリアージュ改02の一撃を受け止めた。

マリアージュ改02

「（顔を近づけながら）あんたの色は気に入らねえ！！」

土方

「奇遇だな、俺もてめえの面は気に入らねえんだよ！！」

土方の気迫はマリアージュ改02を押し返した。

マリアージュ改02

「たった斬る！！」

土方

「てめえをな！！」

《ガキーン！ガキーン！ガキーン！…………》

土方とマリアージュ改02の斬り合いは凄かった。

一方も譲らず、火花を散らすほど刀と刀をぶつけ合った。

\*

今、土方の中のアギトは感じていた。

………暖かい。

これが融合した土方の熱い想いなんだ。〔アギト〕

アギトは思わず涙を流した。

\*

マリアージュ改02

「喰らえ!」

《シュルシュル》

真・紅桜は三本に分かれ、土方を突き刺そうとした。

土方

「うりゃー!」

《ガキーン!》

土方は一気に一振りで三本を弾いた。

マリアージュ改02は驚いた。

土方は両手で村麻紗を持ち直す。

土方

「まどろっこしい真似は辞めて、一気にけりを着けようじゃねえか？」

マリアージュ改02

「………良いよ」

《メキメキ、ピキッン!》

真・紅桜は大型の剣に変わった。

土方とマリアージュ改02は構え、走り出した。

マリアージュ改02

「死ねえ!」

土方「アギト」

「死ぬ気なんかねえ!!」

土方とアギトは心の底から叫んだ。

《バキイイイイイ!!》

マリアージュ改02の真・紅桜は、土方の村麻紗に砕かれた。

マリアージュ改02

「なっ!?!」

マリアージュ改02は驚愕した。

土方「アギト」

「いつけえええええ!!」

《ズバツ!!》

土方はマリアージュ改02を一刀両断に斬った。

今、土方とアギトが勝利を決めた。土方とマリアージュ改02の他に激しく戦っている二人がいた。

【別の場所】

チンク達は量産型マリアージュ改・改造エイリヤンを撃退していた。

そしてギンガとクイントと対峙していた。

ギンガの右手に、スバルから借りた『リボルバーナックル』を装備していた。

クイント

（あれは私のリボルバーナックル。……………似合っているわよ、ギンガ）

そしてギンガとクイントは構えた。

ギンガ

（……………あのマリアージュ改、どこかで会ったことがある気がする）

ギンカは見て感じた。

クイント

（……………ギンガ、成長したあなたの力、見せてもらおうわよ）

クイントは心を鬼にして、戦うことを決意する。  
娘、ギンガの成長を見るために。

《ガツキン！》

量産型マリアージュ改と別の者たちが刃のぶつかりあった音を合図に動き出した。

ギンガは右拳のストレートを、クイントは左拳のストレートを繰り出す。

《ガッシュ！》

その際にカートリッジを装填される。

《ガツキイイイイイン！》

互いの拳はぶつかり合い、火花が飛び散る。

ギンガ

（なんて力なの！？右手にもリボルバーナックルを付けていて、良かったわ）

ギンガはスバルから借り受けたリボルバーナックルを見て、安心した。

クイント

（見事ね、ギンガ。この『ギガントナックル』を『リボルバーナックル』で防ぐなんて……けど、まだまだよ）

\*

チンク達、ナカジマ姉妹と山崎はギンガとクイントの闘いを遠くから見ていた。

山崎

「……大丈夫かな、アイツはスバルちゃんを倒しちゃった  
マリアージュ改だよ」

チンク

「案ずるな、姉上はそのスバルに『シューティングアーツ』を教えた姉だぞ」

山崎

「シューティングアーツ？」

デイエチ

「ギンガやスバルがやっている格闘技の一種なの」

ウエンデイ

「そうッス！ギンガは影は薄いけど、格闘は強いッス」

ノーヴェ

「……『影は薄い』は余計だろ」

山崎

「実は僕も影は薄いんだ」



「……………俺も影は薄いか？」

「ええっ？」

と後ろを振り向いて見ると、

ゼストがいた。

ウエンデイ

「あれ、いたんツスか？」

ゼスト

「……………ずっと大型エイリアンやマリアーヂュ達と闘っていたのだが……………」

山崎

「……………もしかして、また作者の書き忘れですか？」

ゼストは頷く。

ゼスト

「……………別に気にしていない。私はイクスを救いに来たのだから、存在を忘れられたことは気にしていない……………」

とてもそつに思えないほど、ゼストは暗く呟く。  
内心、気にしていた。

ゼスト、ごめんね。「by作者」

山崎

「げ、元気出してください！」

ディエチ

「そうだ！うちの姉の闘いぶりを見て、何か言ってください！」

慌てた山崎とディエチはゼストにギンガとクイントの闘いぶりを見せる。

ゼスト

「……………あのマリアージュ改、どこかで見たような」

山崎

「えっ？、スバルちゃんに重傷負わせた奴ですよ。防災司令のヴォルツさんが言っていましたよ。アイツに襲われそうになった時に貴方がぶっ飛ばして、助けたって。覚えて無いですか？」

ゼスト

「いや、わかつている……………あの時は暗くて、奴の姿はよく見えなかった。しかし今はよく見える……………あの時以前にどこかで見たことが……………」

ゼストは思い出そうとするが、

「ギヤアアアアアア！」

ヒヒのエイリアンがゼストに襲い掛かる。

《ガキーン！》

ゼストは槍でヒビのエイリアンの攻撃を防ぎ、

ゼスト

「ふん！」

《ジョバ！》

「ギャアアアア………」

ゼストはヒビのエイリアンを返り討ちにする。

ゼスト

「今は思い出す暇はないな！」

ゼストやナガジマ姉妹に山崎は再び交戦を再開させる。

\*

ギンガ

「はっ！」

《シュッ、シュッ、シュッ》

ギンガは右左へと殴りかかるがクイントは難なく避けながら下がっていく。

ギンガはクイントの顔に狙いを定め、右ストレートを打ち出す。

察知したクイントは避けると同時にギンガに近づき、右アッパーをする。

が、ギンガは瞬時に顔を上げて避けた。

ギンガ

「はっ！」

《ドガッ！》

ギンガは避けた瞬間、左手のボディブローをクイントの腹部に喰らわせた。

クイント

「ぐはっ！」

クイントは思わずよろける。

ギンガ

「ハッ！」

ギンガはすかさず、左足の回し蹴りを決めようとする。

《ガキーン!》

クイントのすぐに右手のギガントナックルで防いだ。

クイント

「ふん!」

すぐにギンガの左足を振り払い、構えを取る。

クイント

(………反応も狙いも悪くない。………本当に嬉しいわ)

クイントはギンガに向かっていく。

ギンガ

「まだまだ!」

クイント

「来い!」

《シュツ、ドガツ!シュツ、バキツ!シュツ、バシツ!》

ギンガとクイントは鉄拳や蹴りなどを繰り返し、避けたり受け流したりと激しい攻防を繰り返した。

そんな中、ギンガは、

ギンガ

(・・・なんだろう。このマリアージュと闘っていると、懐かしさが・・・)

と感じていた。

それはギンガは幼い頃にクイントから『シューティングアーツ』を学んでいた。

だから、これはその懐かしさなのだ。

今、皮肉にも敵同士となって再現されていたのだ。

クイント

(気が削がれている。私との稽古の懐かしさで削がれているのね)

クイントはギンガの心中を察すると、

クイント

「ハッ！」

《バキッ》

ギンカ

「きゃあ！」

ギンカは左頬を殴られてしまう。

クイント

「……集中が欠けていますよ。もっと真剣に取り組まなきゃ死にますよ？」

ギンカは左頬を擦る。

クイント

「そんな欠けた精神で戦っていると、この程度では済みませんよ」

ギンカ

「はっ！」

ギンカは右足の回し蹴りをクイントに喰らわせようとするが、避けられてしまう。

クイント

「そうそう、そうでなくては」

その時、クイントの両足から車輪が出てくる。

そのまま後ろに下がって、一気に走り出すクイント。

そして、『ギガントナックル』のリボルバーが動き出す。

ギンカ

「くる！」

ギンガは防御魔法『ディフェンサー』を展開する。

クイントはギンガに向かって行く。

クイント

「ジエノサイドアタック！」

《バキイイイイイイイ！！》

ギンガ

「くううううううう！！」

クイントの『ジエノサイドアタック』を『ディフェンサー』で防いで堪えるギンガ。

しかし、あまりにも強い衝撃で、『ディフェンサー』にヒビが入る。

《パリン！》

ギンガ

「きゃあ！」

『ディフェンサー』が破られ、ギンガは吹き飛んでしまう。

ギンガ



「くっ！」

ギンガはすぐに立て直して、上手く着地する。

ギンガ

「行くわよ、ブリッツキヤリバー！」

《ピカッ、キュイイイイイイイ！》

ギンガも『ブリッツキヤリバー』で疾走する。

ギンガ

「ハアアアアアアアア！」

クイント

「………来い！」

《キュイイイイイイイ！》

クイントも疾走する。

《バキッ！バキッ！バキッ！………》

ギンガとクイントは高速の疾走を利用し、拳をぶつけ合う。

クイント

(………ギンガ、貴女の全力を私に見せて！)

クイントは両手の『ギガントナツクル』を発動させ、ギンガに向かって行く。

ギンガ

「一気に決める気ね！」

ギンガも両手の『リボルバーナツクル』を発動させ、クイントに向かっていく。

疾走するギンガとクイントが、

《ガキイイイイイイン！！》

ぶつかり合った。

クイント

「くううううう！！」

ギンガ

「ぬううううう！！」

ギンガの右手の『リボルバーナツクル』とクイントの左手の『ギガントナツクル』は火花を散らしながら押し合う。

ギンガ

「絶対に負けない。スバルや妹達が頑張っているのに、あたしだけ負ける訳には……」

ギンガの左手の『リボルバーナックル』から紫色の光の輪が現れる。

クイント

「はっ！」

クイントは左手で『ジェノサイドアタック』を与えようとした。

ギンガ

「負ける訳には！」

《ガキーン！》

ギンガはクイントの『ギガントナックル』を払いのけた上に破壊した。

ギンガ

「いけない！リボルバーシュート！！！」

《バシュッ！》

ギンガの『リボルバーシュート』が、クイントの腹部に命中した。

クイントが吹き飛ばされる瞬間、

《パリン！》

クイントのゴーグルは壊れた。

ギンガは素顔を晒したクイントの顔を見て、驚愕した。

クイント

「……………強くなったわね、ギンガ」

《ドサツ!》

クイントは遠くに吹き飛んだ。

ギンガ

「か、母さん!?!」

ギンガは思わずクイントのところに駆け寄った。

こうして、ギンガは勝利を掴み、母と再会した。

そして、本部内でも戦いが繰り広げられていた。

【管理局内：通路】

《ブウウウウウン》

マリアージュ改03は番傘を上段に構えたまま高く跳ぶ。

マリアージュ改03

「貴様ら、殺す！」

《ドガアアアアン！》

星海坊主とエリオを狙って、番傘を力一杯に叩き付ける。

が、星海坊主とエリオは難なく跳んで後ろに下がる。

マリアージュ改03

「……………うがあああああ！！！」

《ブンブン！ブンブン！》

次に右手に番傘を持ち、ブンブンと振り回しながら、星海坊主とエリオを追いかけて行く。

《ガガガ！ガガガ！ガガガ！》

その際に番傘の先で通路の壁を削れていく。

星海坊主

「かするだけでも、威力はあるな」

エリオ

「どうします?」

星海坊主

「お前の戦闘スタイルは?」

エリオ

「槍術と魔力を合わせたものです!」

星海坊主

「そうか。夜兔族の戦闘スタイルは抜群の格闘センスと狂人的な怪力だ。だが、ドクターキュラスのことだ。他に何か仕掛けているに違いない」

エリオ

「わかりました。なら最初から全開にします!」

《ガシヤ、ガシヤ》

カートリッジを装填で、ストラダは『ウンヴェッターフォルム』になる。

エリオはストラーダを正面に構える。

星海坊主も番傘を正面に構える。

マリアージュ改03

「うがあああああああ！」

マリアージュ改03はエリオに向かって行き、右横に番傘を振るう。

エリオは頭を引っ込め、マリアージュ改03の胸に目掛けて一突きしようとストラーダを動かす。

《ガシッ!》

が、マリアージュ改03は左手でストラーダの刃の部分を掴む。

エリオ

「なっ!?!」

マリアージュ改03

「ウガッ!」

《ドガッ!》

エリオ

「ぐわっ！」

エリオは壁に叩きつけられてしまう。

星海坊主

「エリオ！」

《バキッ！》

星海坊主は怒りを込めて、マリアージュ改03の顔に番傘で殴る。

マリアージュ改03

「……………にいい」

《ドガッ！》

星海坊主

「ぐはっ！」

《ズササアアアアアアアア！》

マリアージュ改03は痛がること無く、星海坊主の胸の中心に番傘の先を突き刺して吹き飛ばした。



エリオ  
「星海坊主さん！」

《シユン！》

エリオはすぐに起き上がり、高速魔法『ソニックムーブ』を使って星海坊主の側に寄る。

エリオ

「大丈夫ですか？」

星海坊主

「ああっ」

星海坊主とエリオはすぐにマリアージュ改03を見る。

マリアージュ改03は何事もなかったように首を鳴らす。

二人はマリアージュ改03に違和感を感じていた。

星海坊主

「……………確かに手応えはあった。かなりの痛手を負ったにも関わらず……………笑っていやがった」

エリオ

「ストラダーの刃先を、それも強い衝撃も加わった攻撃掴めば相当苦痛のはずなのに……………反応しなかった」

星海坊主

「……………まさか、痛みを感じていないのか？」

エリオ

「まさか・・・」

マリアージュ改03

「ふふっ、その通りだ」

星海坊主とエリオは驚いた。

マリアージュ改03

「ドクターキュラス様は俺を強化させただけではなく、痛みを感じないように身体全体の神経をも改造して下さったのだ。これで俺はどんな攻撃を受けても苦痛無い。思う存分に戦って、たくさん殺せる！」

星海坊主

「・・・チツ、やはりそんな小細工も仕掛けていたか・・・」

エリオ

「ドクターキュラスめ・・・」

マリアージュ改03は傘を両手に持って正面に構えると、先から赤い魔力が集まる。

星海坊主

「あの構えは!？」

《ガガガガガガガガガガガガガガガガガガ》

赤い魔力から弾丸が連射された。

星海坊主

「エリオ、隠れる！」

星海坊主はエリオ前に立ち、番傘を開く。

《ガガガガガガガガガガガガガガガガ》

エリオ

「す、凄い、傘一本で防いでる！」

番傘は連射された弾丸を次々と防いだことにエリオは驚いた。しかし、星海坊主の番傘はどんどん貫いていく。

星海坊主も傷ついていく。

マリアージュ改03の番傘の赤い魔力は消えると下ろす。

星海坊主の番傘はぼろぼろになってしまった。

星海坊主

「……………もう防ぐことは出来ないな」

エリオ

「星海坊主さん、すみません」

星海坊主

「何で謝るんだよ？俺が勝手にした事だ。それより……………」

マリアージュ改03

「うがあああああああ！……」

いつの間にか迫ってくるマリアージュ改03は番傘で薙ぎよつとす  
るよ、

《ガキーン!》

エリオはストラダ（正確には魔力の刃）で番傘を受け止める。

しかし、マリアージュ改03のパワーにエリオは押されてしまう。

エリオ

「うりゃあ!」

エリオは負けじと押し返した。

《ガシャッ!》

エリオ

「てやあああああ!」

エリオは突撃攻撃『スピア・アングリフ』をマリアージュ改03  
に喰らわせる。

マリアージュ改03

「ぐおっ!」

マリアージュ改03には苦痛は無いがどんどんと押されていく。

《ドカッン!》

後ろの壁に激突し、めり込む。

エリオはすぐに後ろに下がる。

そしてマリアージュ改03の身体を見てみると、微かに傷跡が残った。

マリアージュ改03

「ぐぐっ〜」

マリアージュ改03はすぐに出ようとしますが、手こずる。

星海坊主

「エリオ!」

星海坊主はすぐに駆けつける。

エリオ

「……………やはり痛みを感じてません、厄介です」

星海坊主

「……………いや、そうでもない」

エリオ

「えっ?」

星海坊主はエリオに耳打ちする。

《ボコッ!》

マリアージュ改03はやっとのことで抜け出た。

エリオ

「……………わかりました!」

エリオと星海坊主は再び構える。

マリアージュ改03

「……………殺す!」

マリアージュ改03は番傘を振り上げ、二人に襲い掛かる。

《ドゴッ!》

星海坊主はマリアージュ改03が降り下ろす前にマリアージュ改03の下顎を殴る。

マリアージュ改03

「効かぬ…………」

その時、ストラダを構えたエリオがいた。

エリオ

「ハッ!」

マリアージュ改03の顔に目掛けて一撃を喰らわせようとする。

《ガキーン!》

しかし、マリアージュ改03は瞬時に番傘で防いだ。

マリアージュ改03

「馬鹿か、視界に入るとこに・・・」

《ドゴツ!》

星海坊主

「そう、視界に入らないところに攻撃をするのが正しい」

星海坊主はマリアージュ改03の胸の中心に拳を叩き込んだ。

マリアージュ改03

「けど、俺は痛くないぜ!」

エリオの攻撃を防いだ番傘をそのまま星海坊主に叩きつけようとする。

《ガシツ!》

しかし、星海坊主は受け止めた。

エリオはすぐに着地し、左側に回る。

エリオ

「てやっ！」

《グサツ！》

ストラータでマリアージュ改03の肩口を突き刺した。

マリアージュ改03

「くっ！」

マリアージュ改03はすぐさま殴ろうとするが、エリオは避ける。

星海坊主もすぐに下がる。

マリアージュ改03

「小賢しい真似をしゃがって！」

マリアージュ改03は激怒した。

星海坊主

「続けるぞ、エリオ！」

エリオ

「はい！」



《シュツシュツ、バキッ！シュツシュツ、バキッ！シュツシュツ、バキッ！……》

エリオと星海坊主はマリアージュ改03の攻撃をかわしながら、急所を狙って攻撃続けた。顔面、こめかみ、肩口、上腕骨隙間、肝臓などを。

しかし、マリアージュ改03には全然効いていなかった。

マリアージュ改03

「効かねえ、効かねえ、効かねえーよ！」

マリアージュ改03は痛みを感じないので、攻撃を止めない。

エリオ

「はっ！」

《バキッ！ドガッ！》

エリオがストラダを床に突き刺し、そのまま回って勢いを付けた蹴りをマリアージュ改03の額に当てた。

マリアージュ改03

「うおっ……」

マリアージュ改03はぐらつく。

星海坊主

「ふっ」

《ドガツ！ドスン！》

星海坊主はマリアージュ改03に足払いをかけて倒した。

マリアージュ改03

「き、急に目眩が・・・」

星海坊主

「額に強い衝撃を与えりゃあ、脳震盪はおきるぜ」

マリアージュ改03

「小賢しい真似を・・・」

マリアージュ改03は起きようとするが、片腕が動かなかった。

マリアージュ改03

「な、何故動かない!？」

エリオ

「肩口に強い衝撃を受ければ、腕は動かなくなります」

マリアージュ改03

「き、貴様ら何をした!？」

星海坊主

「急所を突かせて貰っただけだ」

マリアージュ改03

「急所!？俺には痛みなど・・・」

星海坊主

「何を勘違いしてやがる？急所つてのは、痛みを与えるものじゃな

い。身体の機能を止める、破壊するためのもんだよ」

エリオ

「あなたは痛みを感じないことを長所にしてましたが、それは短所です」

星海坊主

「痛みと言つのはな、身体の危険を知らせる信号だ。だが、ドクタ  
ーキュラスはそれを絶ちきってしまった」

エリオ

「おかげで僕らは無防備な急所を何度も突かせて貰いました」

星海坊主

「しかし、お前さんの身体は堅かったからな。なかなか効果は見え  
なかったんで、正直不安だったが」

エリオ

「大成功です」

マリアージュ改03

「……ふざけるな!!」

マリアージュ改03はもう一本の腕で立ち上がり、叫ぶ。

マリアージュ改03

「俺は、俺は、最強に生まれ変わったんだ!! 貴様らみたいな弱い  
奴らに負ける筈が……」

《ドガッ!》

星海坊主はマリアージュ改03の首に手刀を打ち込んだ。

マリアージュ改03

「か、か、・・・・・・・・」

マリアージュ改03は呼吸困難に陥る。

星海坊主

「・・・・・・・・エリオ、こいつは元『夜兎』だった男だ。・・・・・・・・  
・痛みを感じるようにトドメをさしてやってくれ」

エリオ

「・・・・・・・・はい」

ストラダをマリアージュ改03に向けて、

エリオ

「一閃必中！」

《ズドン!》

エリオは『メッサー・アングリフ』でマリアージュ改03の胸の中  
心を貫いた。

マリアージュ改03

「い、痛い・・・・・・・・「ふっ！」

マリアージュ改03は血を吐き、倒れて息を引き取った。

星海坊主はマリアージュ改03を見て、悲しく呟く。

星海坊主

「痛みがあるから、生きているんだ。痛みがなければ、生き返った意味はねえよ」

エリオは黙って見ているのだった。

こうして、マリアージュ改シリーズは敗北した。

終わり。

ステージ39 戦闘描写って、本当に難しいよね。(後書き)

.....誤字脱字や指摘を覚悟して、感想待ちます。

ステージ39・5 テレビ局は子供に悪い影響を与えるような放送を控えるべきだ

今年の締め括りは、『質問コーナー』で。

ステージ39・5 テレビ局は子供に悪い影響を与えるような放送を控えるべきだ

【万事屋銀ちゃん】

銀時

「うっ寒っ」

銀時はヴィヴィオを膝に乗せてこたつに入る。

新八と神楽も入っていた。

フェイト

「できました」

フェイトは年越し蕎麦を作り終え、こたつに入る。

新八

「今年も色々ありましたね」

神楽

「派手な結婚した海老蔵の暴行事件、痛々しかったアル」

銀時

「検事部長の証拠捏造も腹がたつたぜ」

新八

「いや、それは現実世界の話題。僕が言いたいのは、この小説での



出来事ですよ。なんやかんやで一年以上続きましたよね」

銀時

「ってか、作者の更新が遅いからこうなったんだろ」

うつ・・・「作者」

神楽

「一周年記念も遅く書いてたアル」

・・・すみません。「作者」

新八

「そ、そんなに作者を責めないであげないで下さい。現実世界で仕事の事とかで色々大変らしいですよ。他のユーザーさん達だって、大学や受験の為に書けない時があるじゃないですか」

フエイト

「そうだよ、銀時。現実世界は本当に大変なんだよ」

新八

「気を取り直して、質問コーナーをやりましょうよ」

銀時

「そんじゃ早速。ペンネーム“サディスト”さんからの質問

?フエイトに質問。銀時と結婚して3ヶ月たちますが・・・その後ツラに口説かれましたか?

?銀時に質問。前に結婚したら奥さんのことを縛るって言ってたけ

ど実際は縛ってんの

？土方がティアナと念話？していたけど・・・どうやって喋ってたの？土方は魔法使えないから無理だと思うんだ・・・教えてくれ。

？何でもこの質問コーナーにアルフいないの？

だそうだ」

フエイト

「？の答えは、口説いてません。流石に友達の奥さんは口説けませんよ」

銀時

「？の答えは、縛っているよ・・・・・・布団の中限定で」

フエイト

「ぎ、銀時！？（恥）」

神楽

「あれアルか？夜な夜な布団中で合体・・・」

新八

「わーっ神楽ちゃん！それ以上は禁止禁止！」

新八は慌てて止める。

そしてヴィヴィオは首を傾げる。

新八

「さ、？の答えは、実は土方さん達（『江戸世界』からやって来た人達）は念話ができるようにマリーさんが造ってくれた特殊な機械を身に付けているらしいんですよ。だから魔法使えない筈の土方さんはティアナちゃんと念話出来たんです」

銀時

「そんでもって？の答えは・・・作者に存在忘れられているだけです」

神楽

「アルフ哀れアル」

フェイト

「・・・」 “サディスト”さん、アルフを励ましてあげて下さい（泣）」

新八

「つ、次の質問いきましょう。ペンネーム“天使”さんからの質問。

？新八君に質問ですがパンデモニウムさんとの結婚予定日は、何時ですか（大爆笑）！！？

？新八の本体が眼鏡だったらオタク（救いよりの無いガキ）を殺しても死なないですか？個人的に眼鏡からコンタクトレンズにしたらと思います。

？お通ちゃんの親衛隊をしていますますがその時の君は、自己中心的に思えて迷惑な感じがするのは私だけですか？

・・・なんだよこの腹立つ質問は（怒）！？」

新八は激怒して、質問の紙を破く。

フェイト

「た、確かにこの質問は酷すぎるよ」

神楽

「フェイト、気にしなくて良いアル。新八のことだから」

新八

「あんだとっ（怒）！？」

フェイト

「か、神楽！」

銀時

「？の答えは、残念ながらありません」

フェイト

「『残念ながら』は余計だよ！」

銀時

「？の答えは、殺しても死にませんし、コンタクトレンズなんかは似合いません」

新八

「だから眼鏡は本体違っつて（怒）！！」

フェイト

「？の答えは、あなたの気のせいです。ただ好きな人の為に一生懸

命ただけなんです」

新八

「フェイトちゃん、ありがとう」

新八は思わず泣く。

フェイト

「ペンネーム“天使”さん、人を傷つけるような質問は絶対にしないで下さい」

神楽

「別に新八なら良いアル」

フェイト/新八

「「神楽「ちゃん」(怒)！」」

神楽

「そんなことより、最後の読むアル。ペンネーム“黒神”さんからの質問アル。」

「こつちの小説と僕の小説のザキは、ディエチとラブラブとなって童貞&影薄を卒業しています。」

貴方はこれを見てメツチャ羨ましく感じていますか？

「僕の小説では貴方は出ておらず、先に出ている銀さん、神楽、ツラ、エリザベス、月詠の5人をどう思っていますか？正直自分を差し置いて憎たらしいですか？」

新八

「二連発かよ！？僕に対する嫌な質問が二連発にきたよ！？どんだけ嫌われているんだ僕は（怒）！？」

「いいからとつと答えるよ、ダメガネ」

というヴィヴィオ。

もう一度言おう。

ヴィヴィオ

「いいからとつと答えるよ、ダメガネ」

というヴィヴィオ。

ヴィヴィオの発言に銀時、フェイト、そして激怒していた新八は愕然した。

ヴィヴィオ

「何やってんだよ、早く答えるや」

膝をこたつに置き、鼻をほじるヴィヴィオ。

フェイト

「ヴィヴィオ、なんて行儀悪いことをしているの！？ってか何悪い言葉を使っているの！？」







銀時

「……………俺は……………」

ヴィヴィオ

「神楽、日頃の悪さが祟ったな」

と鼻くそを飛ばす。

銀時

「ヴィヴィオを元の良い子に戻そう」

銀時と新八は青ざめて来年の目標決めました。

終わり。

ステージ39・5 テレビ局は子供に悪い影響を与えるような放送を控えるべきだ

ちなみに質問の答えは、

？羨ましく無いと言ったら嘘になりますが、山崎おめでとついでい  
ます。

？憎たらしいです。この憎しみを消すには、僕をちゃんと本編に出  
してくださいよ、黒神先生（泣）

「新八より」

新八の願い叶えてあげて下さい。

来年もよろしくお願いします。

ステージ40 ヒーローは遅れてくるものと言いますが、早い方が絶対に良い。(前)

今年初の話をどうぞ！

ステージ40 ヒーローは遅れてくるものと言つが、早い方が絶対に良い。

土方、ギンガ、星海坊主&エリオがマリアージュ改シリーズに勝利した頃・・・

【管理局本部：地下フロア】

ドクターキュラスが再びハッキング作業をしていると、

《ピピーツ！ガシューツ・・・・・・・・》

大きな扉が開く。

キュラス

「おおっ！」

キュラスは扉の中に入る。

キュラス

「す、素晴らしい！」

扉の中には、

宝石、武器、骨董品などが無数に宙に浮いて漂っていた。

これらは全て『ロストロギア』である。

キュラス

「全て集める、急げ！」

「ははっ！」

2体の量産型マリアージュ改はロストロギアの回収を始める。

【管理局本部：外】

マリアージュ改02との戦闘に勝利した土方とアギトはユニゾンを解除する。

そして、アギトは土方を見つめる。

アギト

「……………ありがとう、生まれてきて良かったって言ってくれて」

土方

「……俺は当たり前のことを言ったただだよ。アギト、生まれなくて良い命なんざねえ」

アギト

「うん」

土方

「……………礼を言うのは俺の方だ。……………ありがとうな、助けてくれて」

アギトは紅くなり、土方の胸元に身を預ける。

土方

「お、おい、大丈夫か？」

アギト

「私がユニゾンできたのは……………きっと、“愛”の力なんだ」

《……………へっ？》

土方はしばらく間を空ける。

アギト

「私は土方の中で暖かい気持ちになったんだ。これは……………  
“愛”なんだ」

アギトは今、『愛を感じる少女』となっていた。

アギト

「……………土方さん……………」

土方

「いや、その……………」

「ビュービューー！」

土方

「!?!?」

振り向くと、セインとディードとオットーがいた。

セイン

「お熱いね」

ディード

「おめでと〜じゅげむします」

オットー

「あなたの小さな少女に対する執着心が奇跡を起こしたんですね」

土方

「ちよつと君たち、何を勘違いしてるんだね!?!?つか、オットー君、さりげなく酷いこと言っていない!?!?」

セイン

「またまた」

土方

「そ、それよりアギト、目的を忘れてないか？」

アギト

「目的……あつ、イクス！」

土方

「そう、思い出したか？」

アギト

「そうだった。……イクスも土方さんのことが好きになっ  
ていたんだ」

土方

「そうか、そうか……って、えっ？」

アギト

「……どうしよう。イクスだって、土方さんのこと信じて  
待っているのに……アタシも好きになっちゃった」

土方

「あのお……」

アギト

「どうしよう、土方さんと“愛”を確かめ合ったのに……  
イクスを裏切っちゃった」

土方



「し、心配するなよ！俺はイクスも大切に・・・」

「・・・えっ、イクスも大切!?」

土方はセインとデイドとオットーの方を向くと、

《ジトーツ》

土方に軽蔑の眼差しを向ける。

セイン

「おいおい、『イクスも大切』って・・・浮気じゃん」

デイド

「イクスヴェリア陛下も年端もいかない少女でしたね」

オットー

「これは二股ですね」

土方

「ちょっと待って、そんなことを言ってる場合じゃ・・・」

セイン

「いくら小さい子が好きだからって・・・ねえ?」

デイド

「二人を落とすなんて・・・」

オットー

「貴方はもう……」

「『二股のロリ方だ』」

土方はショックを受けた。

『ロリ方』から『二股のロリ方』に格上げされた。

土方

「格上げすんな（怒）！！」

「貴殿方、いい加減にしやがれえ（怒）！！」

必死で量産型マリアージュ改と戦うシャツハは怒鳴る。しかもかなりキレている。

シャツハ

「んなことで言い争っている場合じゃねえだろうが！」

土方

「そつだ、そつだ、戦え！」

シャツハ

「てめえもだよ、二股のロリ方!!」(怒)

土方

「オオーイ、あんたもかよ!!」(泣)

《ガコーン!》

土方

「チクショー、タイムマシンだ!タイムマシンである事故(アギトとキスした時)を喰い止めてやる(泣)!!」

自棄を起こし、瓦礫の中に頭を突っ込む。

シャツハ

「タイムマシンより戦えよ!」(怒)

シャツハが怒鳴っていると、

《ドカアアアアアン!!》

「うわっ!!」

本多忠勝になっていた長谷川は爆発し、中身の長谷川が吹っ飛ぶ。

《ズドン!》

シャツハの前に落下する。

シャツハ

「長谷川・・・」

長谷川は全裸だった。

シャツハ

「イヤアアアアアアアア!」

《ドガバキドガバキ》

シャツハは顔を赤くして長谷川を殴る。

長谷川

「痛い痛い痛い、止めて〜!!!(泣)」

長谷川は泣き叫ぶと、

「キシヤアアアアアアアア!」

エイ型のエイリアンが後ろから襲い掛かる。

長谷川

「危ない！」

シャツハ

「はっ！」

気づくが間に合わなかった。

\*

「母さん……！」

ギンガは急いで倒れるクイントの元に駆け寄り、抱き寄せる。

クイント

「……………ギン……………ガ……………」

ギンガ

「……………やはり……………母さんなんですわね」

クイントは頷く。

ギンガ

「どうして……………母さんが此処に?……………マリアージ  
ユ改に……………」

クイント

「……………わからないわ。あの子に、イクスに記憶を蘇らせて  
貰ったのよ」

ギンガ

「いつからですか?」

クイント

「イクスが……………連れてこられた時によ」

ギンガ

「どうしてすぐに教えてくれなかったんですか?」

クイント

「……………それは……………」

「ギヤアオオオオオオオオオオ!!」

ライオン型エイリアンがギンガとクイントに襲い掛かる。

ギンガとクイントは気付くが遅かった。

《グサツ!》

しかし、ゼストが瞬時に大型エイリアンを串刺しにする。

「グアッ……」

《ブン、ドカン！》

ゼストは絶命した大型エイリアンを放り投げる。

クイント

「ゼスト隊長」

ゼスト

「……………やはりお前だったのか」

ギンガ

「気づいていたんですか？」

ゼスト

「……………確証は無かったが……………」

《バシッ！》

「グワッ……！」

《ドカン!》

山崎は植物型エイリアンの蔓の鞭攻撃で吹き飛ばされる。

デイエチ

「山崎さん!!」

デイエチは急いで山崎に駆け寄り、

《ガシャッ! バァン!》

イノームスカノンで植物型エイリアンを撃つ。

デイエチ

「大丈夫ですか!？」

山崎

「い、ごめん……。力を使いすぎて……。目眩が……」

デイエチ

「仕方がないわ、山崎さんはずっと戦い続けていたもの……。よく頑張ったわ」

山崎



「……………ダイエチちゃん」

ダイエチ

「……………山崎さん」

二人の間に 甘い雰囲気が漂う。

「……やってる場合か!! (怒)」「」

必死で戦うチンク、ノーヴェ、ウエンディは二人のラブラブな雰囲気に怒る。

チンク

「状況を見る! (怒)」

ウエンディ

「イチャイチャすんなッス! (怒)」

ノーヴェ

「おとーさんに言い付けたろうか! (怒)」

クイントと不思議そうにチンク達を見る。

クイント

「ギンガ、あの子達は?」

ギンガ

「……………私の妹です」

クイント

「妹？」

ギンガ

「終わったら、ゆっくり話します。スバルと一緒に」

\*

ジン・ギス・カン

「メエ……………」

《カチャ、カチャ…………》

体毛から出ているバズーカが発射されない。

《ドガッ！》

ジン・ギス・カン

「メエー!!」

地中から土竜型エイリアンが飛び出し、ジン・ギス・カンを吹き飛ばす。

キャロ

「ジン・ギス・カン君!」

キャロとフリードは駆け付ける。

「ガオッ!」

《ゴオッ!ズドーン!》

フリードは必殺技『ブラストレイ』を土竜型エイリアンに当てて倒す。

フリードから飛び降りたキャロはジン・ギス・カンに駆け寄る。

キャロ

「大丈夫!?!」

ジン・ギス・カン

「メエ〜・・・」

キャラ

「もう撃てない？……無理も無いよね、ずっと撃ちっぱなしだったものね」

《ドカン！》

地中から新たにみみず型エイリアンが飛び出てきて、キャラとジン・ギス・カンに襲い掛かる。

キャラとジン・ギス・カンは焦る。

フリードが駆け付けるが、間に合わない。

【管制室】

天井の通気孔が開き、『冥王』のイクス・ヴェリアが降りてくる。

イクス

「どれがスイッチかな？」

イクスは沢山あるコンピューターを見渡すと、怪しげに光る赤いボタンを発見する。

イクス

「これかな？」

イクスは押してみる。

《バリアー解除します》

大型モニターが起動し、【管理局本部】の見取り図を表示させる。

【管理局本部】を囲んだ円が消える。

これはバリアーを解除したということである。

イクス

「やった！……うん？これは……」

イクスがあるカメラの映像を見る。

それは……、

\*

「お妙さん、何処ですか？」

全裸のまま走る近藤だった。

\*

イクス

「いやあああああああああ！！」

イクスは思わず絶叫し、

《バタリ》

気絶する。

【別の通路】

ドクターキュラスや量産型マリアーージュ改二人は大量の鞆を持って、  
急いで移動する。

キュラス

「はっはっはっ、せいぜい戦い続けている。ワシの目的は果たした、  
全てのロストロギアを手に入れる目的をな」

鞆を揺らす。

全部の鞆には全てのロストロギアが入っていた。

キュラス

「奴らはワシが管理局支配を企んでいると思っただが、それはフェイク。立て籠り等と言う無謀なことばせん。ワシの本当の計画は……管理局に保管されている全てのロストロギアを手に入れることじゃ！どのロストロギアも素晴らしい力を持っている。ワシの化学力とこの全てのロストロギアがあれば、管理局など屁でも無い！……長かった、最高評議会に切り捨てられた屈辱を糧に、考え抜き、準備してきた今回の計画が遂に成功した！ギャツハツハツハツ」

ドクターキュラスは高笑いをあげる。

「それが貴様の目的か？」

キュラス

「うん？」

キュラスの前に現れたのは、ティアナとルネッサと妙と九兵衛だった。

キュラス

「これはこれはルネッサ君ではないか」

ルネッサ

「本部に保管されているロストロギアを手に入れる。……」

それだけのために今回のことをしたのか？」

キュラス

「それだけの価値はあるのじゃよ、この大量のロストロギアは。まあ、江戸の人間にはわからんじやろがな」

九兵衛

「それだけのために、我が柳生道場の門弟を……江戸の世界の人々をも巻き込んだのか？」

キュラス

「ふん、江戸の人間など、ミッドチルダの人間と比べれば、魔力の無い原始人じゃ。そんな原始人を上手く活用しただけじゃ」

ティアナ

「それだけのために、何の罪の無い人達を殺して……イクスを苦しめたの？」

キュラス

「はあ？苦しめるも何も、アレは『道具』じゃ。アレを人扱い？大馬鹿者……」

《バキッ！》

キュラスは吹き飛んだ。

いつの間にか、妙が渾身の鉄拳をキュラスの顔面に喰らわせたのだ。





エイ型エイリアンの脳天を刀で串刺しにする人物がいた。

シャツハと長谷川は驚く。

シャツハ

「あ、あなたは？」

「真選組一番隊隊長、沖田総悟」

\*

《ドカン！ドカン！ドカン！》

敵をバズーカで撃つ者達がいた。

チンク達は驚愕する。

そして、山崎には見覚えがあった。

山崎

「お、お前ら！（泣）」

「無事か？山崎」

真選組十番隊隊長原田と他の隊士だった。

\*

《グサ！グサ！グサ！》

ミニズ型エイリアンは三本のクナイが刺され、痛がる。

キャロとジン・ギス・カンの前にはある人物がいた。

「久しぶりじゃな、キャロ」

キャロ

「月詠さん！」

月詠だった。

衝撃の救援現れたり！！

次回に続く。

ステージ40 ヒーローは遅れてくるものと言っが、早い方が絶対に良い。(後

遂に沖田達が参戦しました！

ステージ41 登場していない分、無駄に目立つようにつかつかつたくなる奴が他にも『銀魂』キャラが登場します！

ステージ41 登場していない分、無駄に目立つようにつかっつかけたくなる奴が

【時空管理局】

《ゴロゴロ、ドカアアアーン！ゴロゴロ、ドカアアアーン！ゴロゴロ、ドカアアアーン！》

時空管理局の地面に次々と雷を落ちる！

その雷はただの雷ではない。

落ちると共に、人が現れる。

量産型マリアージュ改達の上空に人影があった。  
その正体は……

「『摩利支天』の服部全蔵、推参！」

《ビュビュビュビュビュ！グサグサグサグサグサ！》

忍者の服部全蔵の投げた数十本のクナイは、全て量産型マリアージュ改の急所に命中する。

《ギギーッ、ガクッ!》

全ての量産型マリアージュ改達は機能停止して倒れる。

\*

「キシヤアアアアア!」

カマキリ型のエイリアンは、ある人物に襲いかかるうとする。  
ある人物とは……

「柳生四天王、東城歩」

《ヒュン!》

目にも止まらぬ速さで、カマキリ型エイリアンを通り過ぎる。

東城

「若の救出に参りました」

《チャキン!》





緊張感が伝わっていく。

「シャア！」

量産型マリアージュ改が動き出した瞬間、

《バキューン！》

量産型マリアージュ改は額を撃ち抜かれ、機能停止して倒れる。

松平は斬ると見せ掛けて、拳銃で撃つたのだった。

「っつて、ちよつと待て！（怒）」

シャツハとセインはそんな松平にツッコミを入れる。

シャツハ

「その刀で斬り倒すんじゃないんですか（怒）！」

松平

「何を言ってるの、相手は二刀流だよ。おじさん、勝てるわけないじゃないの」

セイン

「じゃあ、なんで刀に手をかけたの！？（怒）」

松平

「あれは相手を油断させるためのフェイクだよ」

シャツハ

「それは卑怯ですよ！（怒）」

松平

「そう、大人は卑怯な生き物なんだよ。生き残るこそが勝利なんだよ」

シャツハ

「あ、あなたは一体・・・」

松平

「警察庁長官、松平片栗虎。皆から『松ちゃん』と呼ばれてるの、よろしく」

セイン

「警察庁長官！？全然見えないよ！卑怯な手を使ってたから！おっさんなのに、松ちゃんはないでしょ！」

シャツハ

「いや、ソコは別につつこまなくても良いですよ」

松平はツッコミをスルーし、シャツハとセインをじっと見つめる。

松平

「良く見たら、君達可愛いね。おじさんと良いことしない？」

シャツハ



松平は量産型マリアージュ改達に向けて松ちゃん砲リリカルバージョンを発射した。  
発射された砲撃は、『スターライトブレイカー』のようにピンクだった。

松平を見てセインとシャツハは、

「なんなの、この人は？」

と思うのだった。

\*

「おりゃあー！」

「化け物共が！」

「わきち達も加勢しやすん！」

「助かるぜ！」

真選組と吉原自警団『百華』は協力しながら、量産型マリアージュ

改とエイリアン達と戦う。

キャラ

「あの制服の人達って、もしかして『真選組』の人達!？」

フリードに乗り、上空で戦うキャラは下で戦う真選組を見て確信する。

「グエエエエエエエエエエ!!」

「はっ!」

鷲型のエイリアンがキャラに襲い掛かるとすると、

「ドリヤアアアアアアアアアア!!」

《バキィ!》

「グエツ!」

《ヒュウウウウウウウウウウ、ドカン!》

鷲型のエイリアンを蹴り落としたのは、

キャラ

「ゾーマ君!」





んだから」

黒夜叉

「わかってるよ。だからスカリエッツィに頼んで、コレ「ガジエツトドローン?型」を作ってもらって、此処へやって来たんだからな」

どうやら黒夜叉の誕生にもキュラスが関わっている。

そんなキュラスに一泡吹かせるためにこっそりと協力しているのだ。

ドゥーエ

「それに、うちの子「シルバー」を妹達に見せたいからね」

我が子を妹達に見せるのも、もう一つの理由である。

そして、そのシルバーは……、

\*

シルバー

「ばぶっ」

ヴィヴィオ

「よしよし」

ルーテシア

「可愛いね」



ヴィヴィオとルーテシアが面倒見ている。  
もちろん、こっそりと。

\*

ドゥーエ

「頑張りなさい、お父さん」

黒夜叉

「わかったよ、お母さん」

黒夜叉とドゥーエはエイリアン達の戦いを再開する。

\*

キャロ

「そうなんだ！」

ゾーマ

「ああつ。けど、内緒にしてくれよ」

キャラ

「うん、わかっているよ」

ゾーマ

「それより、キャラ」

キャラ

「何？」

ゾーマはいきなりキャラを抱き締める。

ゾーマ

「無事で良かったぜ」

キャラ

「………ゾーマ君も無事で良かった」

ゾーマ

「………キャラりん」

キャラ

「……ゾーマ君」

二人は互いの無事を喜び、愛に浸る。

\*

「キヤアアアアア、大変でありんす！」

「幼き少女が怪物に捕まっている！」

地上で戦う真選組と百華達は二人の抱擁を、少女が怪物に捕まえて  
いるという光景に見えた。

原田

「すぐに化け物を！」

山崎

「ワーツ、待て待て！」

バズーカを撃つ準備をする原田をすぐに止める山崎。

山崎

「あの化け物は味方なんだ！見かけは怖いけど、良い奴なんだ！」

原田

「はあ？」

デイエチ

「しかも、あの二人は恋人同士なんです！」

「恋人同士!?!」

「んな訳無いだろ！」

「美女と野獣よりならぬ、美少女と怪物はあり得ないでやんす！」

「いや、本当なんじゃ」

百華の頭領である月詠が説明する。

月詠

「あの“キャラ”という子は『機動六課』ところで魔導士している少女。そして、あの“ゾーマ”は昔は敵じゃったが、改心している。そしてゾーマがキャラに告白して恋人になったんじゃ」

「「マジあり得ねえ!!」「」」

山崎

「あはは、俺も聞いた時もそう言ったよ」

原田

「ところで山崎。その子は?」

山崎の隣にいるディエチを指す。

山崎

「ああっ、い、命の恩人のディエチちゃん」

ディエチ

「ディエチ・ナガジマです。よろしく」

慌てふためく二人の間に愛が感じられる。

原田

「山崎、この野郎！（怒）」

「俺達在必死でお前らを探していたのに（怒）！」

「何女を作つてやがるんだ（怒）！」

山崎

「痛い痛い！？」

原田達は悔しいあまりに山崎を殴りまくる。

デイエチ

「ま、待ってください！私と山崎さんは別にそんなんじゃ……」

月詠

「じゃあ、どういう関係なんじゃ？」

デイエチ

「そ、それは……」

「ああっ、赤くなってる！（笑）」

「怪しい（笑）」

デイエチ

「ええつと……」

百華達に茶化されるデイエチ。

ノーヴェ

「って、そんなことをしてる場合か!! (怒)」

あまりにも呑気過ぎるので、見かねたノーヴェは怒るのだった。

\*

《ズバツ！ズバツ！ズバツ！》

沖田総悟は飛行する蜻蛉型エイリアンを斬り刻む。

「総悟」

土方が沖田のところに歩み寄る。

沖田

「土方さん、生きてやしたか」

土方

「ああっ、この通りにな。それより、お前らはどっしてっ」

沖田

「長くなりやすが、説明します」

〔沖田の回想〕

近藤さんが消えたあの後、土方さんの言う通りにフェイト姐さんのところに相談しやした。

姐さんはおそらく魔導士か転送する機械の仕業だと睨んで、上空を見張ることにしやした。

雷がいつ落ちるか、目を配って見張りを続けやした。

雷が落ちる瞬間を狙って攻撃をしたら、機械でした。

その機械を平賀源外のじいさんに調べさせました。

時間を掛けて解析して、転送先を突き止めやした。

早速一番隊が突入したら、何処かのアジトでした。

そうか、其処がキュラスのアジトか。〔土方〕

キュラス？そいつが主犯ですかい？

そうだ。とんだイカれた科学者だ。〔土方〕

通りで機械やコンピュータがあつた訳ですかい。  
そのキュラスのアジトのコンピュータをまた源外のじいさんが解析してくれたら、何らかの設計図や計画プランのデータがズラリありやした。

【現在】

土方

「なるほど、そうだったか」

沖田

「それより、近藤さんは？」

土方

「この時空管理局本部内で元気良く走っているぜ。……裸でな」

【時空管理局本部内・廊下】

「お妙さ〜ん、何処ですか？」



近藤は服を着ることより、妙を探すことに専念した。

【管制室】

「イクス、イクス」

「う、うん………はっ！」

気絶していたイクスはスバルに起こされる。

そしてスバルの後ろには、

「イクスヴェリア様！」

武者姿になっている“ティルヴィングエア”だった。

イクス

「あなたは『冥王の刀』？」

ティルヴィングエア

「はい、お懐かしゅうございます！」

イクス

「どうして貴方が此処に？」

ティルヴィングエア

「このスバル・ナガジマ殿のデバイスとなって、助けに参りました！」

スバル

「救助隊の防災士長のスバル・ナガジマです」

イクス

「スバル・ナガジマ！貴女がスバルさんですか！？」

スバル

「は、はい。私のことをご存知ですか？」

イクス

「はい。ある方から聞いております」

スバル

「ある方？」

ティルヴィングエア

「イクス様。一大事に側に居られず、このようなお辛い目に合わせてしまい、誠に申し訳ありません！」

イクス

「いいえ、そんな・・・」

ティルヴィングエア

「お詫びに腹を斬らせていただきます！キエエエエエエエエエエエエエエエエ！」

《グサツ!》

小刀を取り出し、自分の腹を思い切り刺す。

スバル

「ティル!？」

スバルは慌てる。

イクス

「……貴方、腹が斬れないはずでは？」

ティルヴィングエア

「ははっ、そうでした」

このティルヴィングエアの身体が鋼鉄で出来ているので、腹が斬れないのだ。

《ダァ〜!》

スバルはずっこける。

イクス

「あ、貴方の詫びる気持ちは十分に伝わりました。だから腹を斬るのはやめてください。斬れなくても、斬らないでください」

ティルヴィングエア

「ははっ！」

スバルは啞然する。

イクス

「スバル防災士長、よく来てくれました。流石はあの人の娘さんです  
すね」

スバル

「あの人？」

イクス

「・・・後でゆっくりお話しします。あ、それよりドクターキュラス  
の目的は・・・」

スバル

「地下に保管されているロストログアを奪うって、計画でしょう？」

イクス

「どうしてそれを!？」

スバル

「実はデバイスに匿名の通信が入ってきたの。」

『イクスヴェリアは管制室でバリアーを解除している。早く迎えに  
行け。』

キヤラスは地下に保管されているロストログアを奪っている。急が  
なければ逃走する  
』  
つて」

それを聞いたイクスは匿名が誰なのか、気付く。

トレディア「マリアージュ改00」だと。

スバル

「さっ、脱出しましょうイクスヴェリア様。アギトとゼストさんが待っています」

イクス

「わかりました」

差しのべるスバルの手を握る。

### 【別の通路】

「な、なんじゃこれは!？」

外の、地上からの物音が気になって通信回線を開いて、地上の様子を観て驚愕するキュラス。

九兵衛

「東城!」

妙

「月詠さん!」

ティアナ

「沖田さん!」

地上ので活躍する沖田達を観て、喜ぶ。

ルネッサ

「この方達はもしや!？」

ティアナ

「江戸の世界”の人達で、大切な仲間よ」

妙

「特に沖田さんとは恋人同士よね」

ティアナ

「ちよつと妙さん!」

妙に茶化されるティアナは赤くなる。

すると、キュラスは隙を見て、逃げようとする。

ルネッサ

「待てキュラス!」

「チッ!」と舌打ちして逃げ出す。

ティアナ

「逃がすか!」

追いかけてよとすると、量産型マリアー・ジュ改二体が立ち塞がる。

《ズバッ！》

瞬時にクロスミラー・ジュ・ダガーモードで量産型マリアー・ジュ改二体を斬り捨てる。

そんなティアナの後から、妙がキュラスを追い掛ける。

妙

「逃がすか！」

遂に追い付いた。

キュラス

「ヒイ！」

「アツタタタタタタタタタタタタタタタタタタ！」

《ドガバキドカバキドガバキドガバキドガバキドカバキ》

「アババババババババババババババババ！」

妙は目にも止まらぬ速さでキュラスを殴り続ける。

「オワッター！」

《バキッ!》

妙が殴り終わると、キュラスはボロボロとなって気絶する。

妙

「お前はもう死んでいる」

ティアナ達は妙の強さを目の当たりにして、恐怖した。

ルネッサ

「……………あ、あれが“江戸の世界”の人の強さなんですわね」

ルネッサは思わず眩く。

【????.?】

薄暗い空間の中で、マリアージュ改00はキーボードを動かしていた。

マリアージュ改00

「いよいよ最後の仕上げだな」



マリアージュ改00は一体何をするつもりか!?

次回に続く。

ステージ41 登場していない分、無駄に目立つようになったからつけなくなる奴が

いよいよ物語は佳境に入った！

ステージ42 どの仕事にも信念がある！あるからこそ真剣なんだ！（前書き）

被災者とレスキューの方に読んでもらいたいです。

ステージ42 どの仕事にも信念がある！あるからこそ真剣なんだ！

【時空管理局本部・地上】

辺りには量産型マリアージュ改とエイリヤンの死骸が横たわっていた。

全ては土方やナカジマ姉妹たちと『真選組』や『吉原自警団・百華』などの“江戸の世界の住人”が倒し勝利したのだ。

全員は入り口で突入したスバルたちを待っていた。

《ザザーツ》

まず出てきたのは、

スバル

「ただいま戻りました！」

イクスを抱えたまま『マツハキャリバー』で疾走するスバルだった。

松平

「ご苦労様。おじさんと一緒に飲みにいこうや」

いつの間にか松平がスバルの肩に手を掛ける。

スバル

「だ、誰ですか？」

近づく松平の濃い顔に驚き戸惑うスバル。

松平

「懸命に働く女性の味方の松平片栗虎だよ。どうだい、小さなお嬢さんも一緒に……」

山崎

「はいはい、スバルちゃんの邪魔をしないの」

松平

「こら、ザキ！邪魔すんな！（怒）」

山崎

「邪魔してるのは、あんたの方だよ」

松平は山崎と他の隊士たちに連れていかれる。

スバルとイクスはホッとする。

その後に、

アギト

「イクス！」

イクス

「アギト！」

イクスを見てアギトはすぐさまイクスに抱きつく。  
そのあとにゼストが駆け寄る。

ゼスト

「・・・イクス、無事で良かった」

イクス

「ゼストさん」

更に土方がイクスの元へ駆けつける。

土方

「イクス」

イクス

「十四郎様！」

イクスは思わず土方に抱きつく。

土方

「お、おい、イクス？」

イクス

「・・・・・・・・怖かった。そして会いたかった・・・・・・・・」

土方

「・・・・・・・・無事で良かったぜ・・・・・・・・」

イクスと土方の間に甘い雰囲気漂う。

周りの者たちはそんな二人を、特に土方を怪しく見る。

土方はすぐに気付く。

土方

「こ、これはだな……」

沖田

「土方さん……いつからロリコンになったんですか？」

沖田は腹黒く尋ねる。

土方

「違う！これはだな……」

土方は必死に弁解する。

そんな土方を放っておいて、

スバル

「うわっ！、色んな人たちがいる！」

スバルは土方以外の真選組や服部などを見て驚く。  
百華も見ると、月詠を見かける。

月詠

「久しぶりじゃな、スバル」

スバル

「月詠さん！」

月詠

「わきちや『百華』も加勢しにきたのじゃ」

「おおっ、かたじけない」

月詠

「だ、誰じゃ、お主!？」

月詠はティルヴィングエア（鎧姿）を見て驚く。

ティルヴィングエア

「拙者、スバル殿のデバイスをやっています、ティルヴィングエアでございます」

月詠

「は、はあ……」

原田

「よう、君は確かスバルちゃんだったな？うちの局長（近藤）は無事か？」

スバル

「はい、一緒に突入しましたけど……」

「おおーい！」

後ろから近藤の声が響く。



スバル

「あっ、近藤さんだ」

スバルは振り向く。

そう近藤だった。

近藤が走ってこちらにくる。

勿論、全裸姿で。

《ザクツ！！》

スバルは無言のまま、『ティルヴィングエア』を刀モードに変形させて、近藤を瞬時に斬る。

スバル

「……………すみません」

原田

「いや、裸でやって来たうちの馬鹿（近藤）が悪いから。俺たちは慣れてるけど、君たちは慣れてないから。斬りたくなる気持ちはわかるよ」

月詠

「『銀魂』だから、これぐらいでは死なん。安心せい」

斬られた近藤はキャラの魔法で治療してもらった。

因みにキャラは近藤のアソコをチラリと見て、

キャラ

「……………ゾーマくんには及ばないね」

と呟く。

「……ええっ!?!?!」

キャラの爆弾発言を聞いたスバルたちは驚愕する。

そして、言われた張本人のゾーマは顔を赤くする。

月詠

「貴様、キャラに何をした(怒)!?!」

月詠は思わずクナイを向けながらゾーマを問い詰める。

ゾーマ

「……………ローションを使いました」

「……どんなプレイをしたんだよ美少女と魔神!?!?!」

あまりにも想像出来なかったので、思わずツツコミを入れる。

東城

「ローションをどのように使うのですかね？」

ローション好きの東城は筆とメモ用紙を持ちながら、ゾーマに尋ねる。

ゾーマ

「えーっとな・・・」

服部

「こらこら、苦情が来るぞ！」

服部はすぐに止める。

「キャラ〜」

その後、星海坊主を抱えたエリオがやって来る。

キャラ

「あつ、エリオくんに星海坊主さん！」

星海坊主は辺りを見渡して状況を把握する。

星海坊主

「どつやら、勝利したようだな」

スバル

「そちらもあのマリアージュ改03に勝ったようですね」

星海坊主

「ああつ、その代わりに愛用の番傘はボロボロになっちまったがな」  
ボロボロになってしまった愛用の番傘をスバルに見せる。

星海坊主

「こりゃ素手で戦うしかねえと思ったが、その必要はなくなった」

エリオ

「星海坊主さんは充分に戦ってくれましたよ」

星海坊主

「いや、お前がいなければ勝てなかったよ。まったくドクターキュラスの野郎、厄介な化け物を作りやがって」

「そのドクターキュラスなら連れてきました」

星海坊主

「えっ？」

ボロボロに痛み付けたキュラスを妙が片手で掴んで見せる。

星海坊主は驚く。

勿論、他の者も。

そんな妙の後ろにティアナと九兵衛とルネッサもいた。

東城

「若〜!〜!」

東城は九兵衛を見掛けて、すぐに抱きつこうと駆け寄る。

《ばきっ！》

しかし、九兵衛は抱きつかれる寸前に東城の頭上に空手チョップを喰らわせるといついっものパターンをする。

九兵衛

「……………心配かけたな」

落ちる東城に労いの言葉を掛ける。

沖田

「よう、ティアナ」

沖田はティアナに歩み寄る。

ティアナ

「沖田さん！」

沖田はじつくりとティアナを見つめる。

沖田

「土方さんから聞いた……………三年後だった？」

ティアナ

「あっ、はい……………」

沖田

「すっかり女らしくなったな」

誉められたティアナは顔を赤く染める。

スバルはそんなティアナを、

無事に真選組の仲間たちと再会できた土方と山崎を、

そしてイクスと再会できたアギトとゼストを見て微笑む。

ギンガ

「スバル」

いつになく真剣な表情のギンガはスバルに歩み寄る。

スバル

「ギン姉、どうしたの？」

ギンガ

「あなたに会わせたい人がいるの」

スバル

「会わせたい人？」

ギンガはスバルの手を引き、連れていく。

会わせたい人とは、マリアージュ改01ことクイントだった。

スバルはクイントを見て驚愕した。

スバル

「……………か、母さん？」

クイントは頷く。

ギンガ

「母さんが……………マリアージュ改01だったの」

スバル

「えっ!？」

スバルは驚く。

イクスやティアナ。そして他の者たちはスバルとクイントの二人を見守る。

スバル

「な、なんで」

クイント

「……………殉職した私の死体は時空管理局の『人造魔導士素材』として、密かに回収されていたの。そんな私の死体をドクターキユラスが横取りにして、マリアージュ改にしたのよ」

スバル

「……………そんな……………」

クイント

「あなたと戦った後、私の記憶からあなたが離れなかった。そんな時に、イクスの力で記憶が完全に戻ったのよ。そしてドクターキユラスの計画を潰すためにマリアージュ改01を演じていたのよ」

ギンガ

「そうだったんですね、母さん」

クイント

「母さんって、呼ばないで」

ギンガ

「えっ？」

クイント

「……………私はスバルを……………自分の娘を傷つけたのよ。あなたと本気で戦ってしまったのよ……………母親と呼ばれる資格なんて……………」

《がばっ》

スバルは突然クイントを抱き締める。

クイント

「スバル？」

スバル

「違うよ。私を傷つけたのも、ギン姉と戦ったのも“マリアージュ



改01”、母さんじゃない」

優しく声を掛けた後、

スバル

「お帰りなさい、母さん」

涙を流しながら笑顔を見せる。

クイント

「スバル！」

クイントは泣きながらスバルを抱き締める。

ティアナ、エリオ、キャラ、妙、月詠、ノーヴェ、イクス、ルネッサ、百華は涙を流す。

近藤、松平、ウエンディ、デイエチ、アギト、ゾーマ、ティルヴィングエア、真選組らは大泣き。

土方、沖田、九兵衛、東城、チンク、星海坊主、服部、ゼストは顔を隠して泣く。

ギンガ

「イクス。母さんの記憶を取り戻してくれてありがとう」

イクス

「いいえ、とんでもありません。全ては私が、私がいけないんです」



「どうしたの？」

クイント

「スバル、大事なことを忘れてたわ！」

スバル

「えっ？」

上空では『冥王の方舟改』が動き出していた。

「なんだあれは！？」

「動いているわ！？」

全員騒ぎ出す。

すると、『冥王の方舟改』から声が聞こえてくる。

『諸君、聞こえているかね。私、マリアージュ改00である。これから君たちに最後の仕事を与える』

「マリアージュ改00！？」

「最後の仕事ってなんだ！？」

「まだ何か起こるんかよ！？」

マリアージュ改00の突然の布告で全員は戸惑ってしまっ。

『この最後の仕事は……スバル・ナガジマとティルヴィン  
グエアにやって貰う!』

スバル

「ええっ!?!」

ティルヴィングエア

「スバル殿と拙者が!?!」

すると、『冥王の方舟改』の船底部分から紫色の光が現れる。

『さあー、この光の中に』

クイント

「……スバル、行きなさい」

イクス

「ティルヴィングエア、あなたも行ってください」

スバル

「えっ……」

クイント

「彼を……トレディア・グラーゼを止めるのよ」

ティアナ

「ええっ!?!」

ルネッサ

「マリアージュ改00が……父さん!?!」

スバルはしばらく黙ってから、

スバル

「行こう」

と言って、光の中に行って消えてしまう。

ティルヴィングエア

「スバル殿！」

スバルを追いかけ、光の中に行って消えてしまう。

クイント

「皆さんに説明します」

クイントはトレディア・グラージェのことを語り始める。

【冥王の方舟改内】

紫色の光から、スバルとティルヴィングエアが現れる。

二人が着いた所は、とても広い空間だった。

「よつこそ、冥王の方舟改の中へ」

出迎えたのは、マリアージュ改00だった。

ティルヴィングエア

「貴様がマリアージュ改00・・・いや、全ての元凶を作り出した  
トレディア・グラージェなのか？」

マリアージュ改00

「その通りだ。しかし、私はトレディアであって、トレディアでは  
ないのだ」

ティルヴィングエア

「トレディアであって、トレディアではない？」

スバルとティルヴィングエアは首を傾げる。

マリアージュ改00

「説明しよう。」

マリアージュを作り出す“冥府の炎王イクスヴェリア”を発掘する  
トレディアは既に病に犯され、いつ動けなくなってもおかしくな  
った。そんな時に、ドクターキュラスがやって来た。奴はトレディ  
アの考えに共感したと言っていたが、本当の目的はイクスヴェリア  
を奪うことだった。しかし、トレディアは気づいていた。彼は気づ  
かないふりをして、奴を利用することを考えた。だが、病は限界ま  
で犯されていた。そこでトレディアはあることを思い付いた」

スバル

「あること？」

マリアージュ改00

「自分の意志を継ぐ者を遣すこと」

ティルヴィングエア

「自分の意志を継ぐ者？」

マリアージュ改00

「ドクターキュラスの目を盗み、マリアージュ改を作る為に予め用意していた“ある死体”に自分の記憶を取り込んだ。こうすれば、マリアージュ化しても、奴の言いなりはならない。

そしてドクターキュラスに殺されに行つた。……それが私だ」

スバルとティルヴィングエアは驚愕する。

マリアージュ改00

「その後、ドクターキュラスの忠実な部下を演じながら手駒として扱つた。時空管理局の目を全て奴に向けさせて、計画を失敗させるように仕向けた。そうすることで、私はまんまと準備をした」

ティルヴィングエア

「準備？貴様はいつたい何をやる気だ？」

マリアージュ改00

「“革命を目指す”ことだ」

スバル

「革命を目指す？」

マリアージュ改00

「まずはミッドチルダに行き、そこにいる人間達を殺戮する。次に改良したマリアージュ製造法で、殺戮した人間達の死体を新たなる量産型マリアージュ改にする。そして全てを破壊するのだ」

ティルヴィングエア

「な、何だと!？」

スバル

「あなたの、あなたの目指す革命って何？」

マリアージュ改00

「世界を殺戮と破壊に染める。それが私の目指す“革命”だ」

スバルとティルヴィングエアは驚愕する。

マリアージュ改00

「『正義』と名乗り、『悪』と呼ぶもの。その相容れぬもの同士が存在するから、『戦争』というぶつかり合いがおきる。だから全て殺戮し破壊しなければならないのだ」

ティルヴィングエア

「待たれよ!その為に何の罪の無いものたちを殺すというのか!？」

マリアージュ改00

「……革命の為に多少の犠牲も仕方がない」

スバル

「ふざけるな!!!(怒)」



スバルの怒鳴りにマリアージュ改は驚く。

スバル

「何が『革命の為には多少の犠牲も仕方がない』だ！革命だかなんだか知らないけど、関係ない人たちを傷つけて良いわけないでしょ！！（怒）」

マリアージュ改00

「だが、今の世界は戦争ばかり生み出している。戦争を起これば、何の罪の無い人々が苦しむ。そんな世界を変えるために革命が必要なのだよ」

スバル

「戦争ばかりが人々を苦しんでいると思ったら、大間違いだよ！！（怒）」

マリアージュ改00は黙って聞く。

スバル

「私はレスキューで災害や事故で苦しんでいる命を必死で救っているよ。……けど、救えなかった命もある。その救えなかった命には夢が、希望が、そして家族がいるんだよ！私はその家族の涙を何度も見て、『もっと早く助けてあげたかった』って、泣いたよ。その時、うちの司令は言ったんだ『……災害や事故は無くすることはできない。私たちレスキューが出来るのは、失おうとしている命を救うことだ』って」

マリアージュ改00

「……何が言いたい？」

スバル

「私たちはレスキューは災害や事故を無くすことが出来ない分、失おうとしている命を救う。」

けど、あんたはその革命の為に命を奪って、悲しむ人を生み出そうとしているんだよ！そんなことやっつていいと思っっているの！（怒）」

マリアージュ改00

「……それでも、やると言ったら？」

スバルはティルヴィングエアに手を当てると、ティルヴィングエアは刀モードになる。

スバル

「あんたを倒しても止める！」

マリアージュ改00にティルヴィングエアを向ける。

マリアージュ改00

「とてもレスキューの言う言葉ではないな。レスキューの仕事は命を救うのが仕事だろ？命を奪ってよいのかね？」

スバル

「多くの命を奪おうとしているあんたこそ、そんなことを言う言葉だと思っっているの？」

マリアージュ改00

「そりゃ、そっだ」

マリアージュ改00は刀を抜く。

マリアージュ改00

「だが、私も退くわけにはいかん。ならば、その言葉通りに私を倒せ！」

【時空管理局本部】

ティアナやイクスたちは映像画面を通して、スバルとマリアージュ改00のやり取りを見ていた。

近藤

「スバル殿！俺は君のレスキューへの想いと熱意に感動したぞ！頑張れ！負けるな！」

土方

「そつだ！そんな野郎（マリアージュ改00）に負けんじゃあねえぞ！」

エリオ

「スバルさん、しっかり！」

キャロ

「負けないで！」

ノーヴェエ

「ティルヴィングエア、しっかりスバルを支えろ！」

「頑張れ！」

「負けんなよ！」

「しっかり！」

スバルとティルヴィングエアの応援をする。

ルネッサ

「スバル防災士長、父さんを止めてください」

ルネッサは祈る。

そしてクイントとイクスも二人の無事を祈る。

今、スバルとマリアージュ改00の戦いが始まる！

次回に続く。

ステージ42 どの仕事にも信念がある！あるからこそ真剣なんだ！（後書き）

励ましと被災者の気持ちと助ける人の想いを込めました。

ステージ43 闘いの最後は必殺技で決めるのが定番である！（前書き）

擬音無しの戦闘描写です！

ステージ43 闘いの最後は必殺技で決めるのが定番である！

【冥王の方舟改内】

今、緊迫に時が少しずつ経っていた。

『テイルヴィングエア』を上段に構えたスバルと刀を中段に構えたマリアージュ改00が対峙する。

スバルもマリアージュ改00も息を殺すように動かなかつた。

操縦用の舵が少し動いた瞬間、2人は同時に素早く動いた。

スバルの『テイルヴィングエア』とマリアージュ改00の刀がぶつかった瞬間、強く金属音が響いた！

互いは一撃で斬ろうと、渾身の力を刀に込めていた。

力と力の押し合いは刀身同士を擦れ合わせる。

マリアージュ改00は一度後方に下がって、自在に刀を振り回しながら接近する。

スバルは難なくマリアージュ改00の刀捌きをついていき、次々と

防いでいく。

「むっ……」

スバルは防いでいるだけではなく、眼で刀捌きを見極めようとしていた。

「……はっ！」

スバルはマリアージュ改00の刀捌きを見極め、瞬時に『ティルヴィングエア』の柄を両手に持って、刀を打つ。

「ぬおっ！」

スバルの打つ力は強かったので、持ち手のマリアージュ改00ごと押されてしまう。

「てやっ！」

マリアージュ改00の顔面目掛けて、『ティルヴィングエア』を打ち込む。

しかし、マリアージュ改00は瞬時に刀を持っていない右腕で防ぐ。

「うらっ！」

マリアージュ改00はそのまま右腕で『ティルヴィングエア』ごとスバルを押し返す。

押し返されたスバルは上手く着地する。



スバル

「か、硬い！」

防いだ時、あまりの硬さで強い振動が伝わり、スバルは痺れる。

そして、マリアージュ改00の右腕を見て、スバルは驚いた。

スバルの攻撃を防いだ時に破れてしまった右腕の袖から黒い金属が見えていた。

マリアージュ改00は自ら破れてしまった袖を引きちぎった。

マリアージュ改00の右腕は黒い甲冑に覆われていた。

マリアージュ改00

「私の身体は全身が甲冑に覆われている。

ただの甲冑ではない。生半可な武器攻撃にはびくともしない特注品だ。衝撃は伝わったが、傷までは付けなかったな」

スバル

「ず、ずるいよ」

スバルは思わず苦笑する。

マリアージュ改00

「侍とて、身を甲冑に包んで斬り合っただろ？」

スバルはどうすれば良いかと悩む。

《スバル殿》

『ティルヴィングエア』は念話で話しかけてくる。

ティルヴィングエア

《某に魔力を込めてください。魔力の込めた斬撃ならば、あの甲冑ごと奴を斬ることができる！》

スバル

「本当！」

ティルヴィングエア

《だが、余り込め続ければ、魔力が尽きる。無駄に込めず、狙いを定めて一撃を喰らわせるのだ。

勝負は一瞬の隙が命取りになる》

スバル

「わかった」

スバルは再び『ティルヴィングエア』を構える。

その時、マリアージュ改00は刀を横に構え、俊足でスバルに接近する。

「はっ！」

マリアージュ改00は、刀で『ティルヴィングエア』を薙ぎ払う！

この時、スバルの構えが崩れる。

この時を狙っていたマリアージュ改00は瞬時に柄の持ち方を変え、

スバルの顔に狙いを定めて突き刺そうとした！

「！」

スバルは己の反応に従い、首を曲げて突きを交わした。その際に頬に斬り傷が付く。

そして、手離しそうになった『テイルヴィングエア』の柄を再び強く握る。

「うりゃ！」

勢いを付けて、マリアージュ改00の左側の胴を打つ。

「ぐおっ！」

打たれた衝撃で少しぐらつく。

スバルはすかさず、マリアージュ改00を蹴り飛ばす。

飛ばされたマリアージュ改00は壁に激突し、ずるずると座り込んでしまう。

スバルはすぐに構えを直す。

マリアージュ改00

「……くっくっくっ」

マリアージュ改00は笑いながら、ゆっくりと立ち上がる。

スバル

「何が可笑しいの？」

マリアージュ改00

「流石は『戦闘機人』『タイプゼロ・セカンド』だ。瞬時な対応な上に見事に刀を使いこなしている」

スバルは驚く。

マリアージュ改00

「君のことや姉妹達のことも調べている。君は純粋な戦闘機人で破壊者だ。救助することより、闘いに身を置いた方が良いのでは」

スバル

「お断りだよ！」

スバルはマリアージュ改00を怒鳴る。

スバル

「私は確かに闘うための戦闘機人だよ。

けど、そんなのは関係無い！ 私のこの手の力は壊すためじゃなく守るための力は………悲しい今を撃ち抜いて………悲しい人を助けるための力。 って、今持っているのは刀だけ」

マリアージュ改00は呆れるようにため息を吐く。

マリアージュ改00

「ならば、仕方がない」

突如、マリアージュ改00の刀が黒い炎に覆われる。

しかし、そんな刀を突然鞘にしまう。

スバルは不審に思う。

すると、左足を前に出して踏み込み、右手で鞘を掴んで柄を握る。

ティルヴィングエア

《いかん！》

ティルヴィングエアは気付いた。

ティルヴィングエア

《スバル殿！ 直ぐに打ち返す構えを！》

スバルは言われた通り、打ち返す構えを取る。

「黒炎斬！！」

マリアージュ改00が刀を素早く抜くと同時に、黒い炎で出来た斬撃がスバルに向かっていく。

黒い炎の斬撃は大きく、速度が高かった。

『黒炎斬』

黒い炎を刀に纏わせ、鞘に納めた後すぐに居合い抜きをする。この時、黒い炎は居合いの斬撃と一体化される。

黒い炎は受ければ、苦しみながら骨も燃やし尽くされる、恐ろしき炎である。

「はっ！」

スバルは気合いを込めて、黒い炎の斬撃をティルヴィングエアで叩いて、打ち消す。

《また来るぞ！》

「！」

また黒い炎の斬撃が同じ速度で迫ってくる。

「えい！」

今度は斜めに斬り上げて、打ち消すと、また黒い炎の斬撃が迫ってくる。

「やあ！」

すぐさま雑ぎ払って、打ち消すがまたしても黒い炎の斬撃が迫ってくる。

マリアージュ改00はスバルが『黒炎斬』を打ち消す度に何度も新たな『黒炎斬』を放ち続ける。

その上、その速度が段々と上がっていく。

スバルはただ防戦するしかなかった。

「いつまで持つかな？」

スバルは段々と打ち消す速度が遅くなる。

マリアージュ改00は疲れる様子はなかった。

マリアージュ改00の狙いはスバルを消耗されることだった。

マリアージュ改00は疲れること無い、アンドロイド。

しかし、スバルは疲れること出来る戦闘機人。

つまり、この消耗戦は明らかにスバルが不利である。

\*

【時空管理局本部】から、スバルとマリアージュ改00の闘いを守るティアナや土方達。

ティアナ

「スバル」

土方

「野郎（マリアージュ改00）、スバルを消耗させているぜ」

土方はマリアージュ改00の狙いに気付く。

長谷川

「スバルちゃん！ 救助隊で鍛えた体力で乗りきってくれ！」

長谷川は応援する。

（いつの間に長谷川が居たのかというツッコミは置いて下をい）

クイント

「それだけじゃ、駄目よ」

長谷川

「ええっ？」

ギンガに支えられるクイントは言う。

クイント

「マリアージュ改は疲れを知らないアンドロイド。 消耗戦では明らかに向こうの有利よ。 倒さなければ、勝利は無いわ」

自身もマリアージュ改となっているクイントは長谷川や他の者達に説明する。

エリオ

「しかし、奴「マリアージュ改00」の連続攻撃で、近づくことすらできません」

エリオの言う通りだ。

スバルは終わる様子が無い『黒炎斬』を打ち消すことで手が一杯だ。



その上、連続で放たれる『黒炎斬』の速度が速い為、移動どころか避けることもできなかつた。

全蔵

「あの炎は相当にヤバい。一瞬の緩みで受けたら……おしまいだ」

その場に居た者達は驚く。

すると、イクスは祈り始める。

イクス

（スバル防災士長、ティルヴィングエアの真の力を発揮させて下さい！）

イクスはそう祈った。

\*

無数の『黒炎斬』はまだ放たれ続けていた。

そして、スバルは疲れてくる。

スバル

（どうしよう。もう疲れてきた……）

ティルヴィングエア

《スバル殿。　こうなれば、あの黒炎斬より強力な斬撃を放つしかない!》

スバル

「強力な斬撃?」

ティルヴィングエア

《ゆっくり説明する暇は無い。　拙者の言う通りにするのだ》

スバル

「わかった!」

連続で放たれる『黒炎斬』を打ち消しながら、ティルヴィングエアの念話を聞く。

ティルヴィングエア

《……魔力と一撃必殺を込めて、奴に向けて拙者を振れ!》

スバル

「わかった!」

次の『黒炎斬』が放たれ、ティルヴィングエアを振り上げる瞬間、スバルは魔力と一撃必殺を込める。

この時、ティルヴィングエアの刀身が蒼く光く!

《「蒼波一閃!!!」》

叫びながら振ると、蒼く輝く斬撃が放たれる。

『蒼波一閃』は『黒炎斬』を打ち消した！

「何！」

マリアージュ改00は驚愕する。

そして、これが隙を生んでしまう。

『蒼波一閃』は迫ってくる。

「!!!」

瞬時に刀を盾にして防ぐマリアージュ改00。

しかし、刀は耐えきれずに折れて、マリアージュ改00を受ける。

そして、『蒼波一閃』はマリアージュ改00ごと壁まで激突する。

ズルズルと倒れるマリアージュ改00の顔面もとい仮面にヒビが入る。

スバルは息切れする。

スバル

「い、今のは？」

自分で使ったのに、技のことをティルヴィングエアに尋ねる。

ティルヴィングエア

《『蒼波一閃』だ》

『蒼波一閃』

ティルヴィングエアに魔力を込めて、斬撃を放つ。  
その威力は通常の斬撃より強力で、風のように速い。

スバル

「す、凄いね」

スバルは改めて、ティルヴィングエアの凄さを実感する。

「……クツクツクツ」

マリアージュ改00は立ち上がる。

スバルは警戒する。

マリアージュ改00

「流石、冥王の刀だ。使い手の本質を見事に発揮させている」

マリアージュ改00の仮面がぼろぼろと落ちる。

マリアージュ改00

「だが、その使い手は死ぬ。魔人によってな」

マリアージュ改00の仮面が割れる。

スバルはマリアージュ改00の素顔を見て、驚愕した。

\*

ティアナ達も驚愕した。

特に……、

ゾーマ

「う、嘘だろ……」

ゾーマが驚愕した。

\*

額に立派な一角、血のような赤い目、そして鋭い牙を持つ口。

それは、ゾーマの顔だった。

スバル

「ゾ、ゾーマ!？」

マリアージュ改00

「そうだ。私の元になった‘ある死体’とは、初期に作られしクローン・ゾーマだ。あまりに狂暴だったので、やむ無く殺したのだ。それをドクターキュラスが回収して、改造したのだ」

突如、マリアージュ改00の鎧が割れ、身体が巨大化する。

マリアージュ改00は完全にゾーマとなった。

スバルは驚愕するも、すぐに構え直す。

マリアージュ改00

「終わりにする」

そう呟いたマリアージュ改00は突如消える。

スバルが驚愕すると、

「……………がはっ！」

スバルは衝撃を受け、吐血する。

マリアージュ改00の拳が、スバルの腹部にめり込まれていた。

マリアージュ改00は目に見えない速さで、スバルを殴ったのだ。

拳の威力が相当に強く、受けたスバルは高く飛んでいく。

マリアージュ改00はそんなスバルを逃さず、高く飛び上がった、両手を握って思い切り叩きつける。

「あっ！」

床にめり込むんでしまうほど叩きつけられたスバル。

降りたマリアージュ改00はスバルの頭を右手の指先で掴む。

マリアージュ改00

「残念だったね、あの鎧は重しなんだよ。簡単に本気を見せる訳にはいかないんだよ！」

非情にもスバルを操縦席の画面に投げつける。

「うぐっ！」

今度はスバルがずると倒れていく。

マリアージュ改00は口を開けると、黒い魔力の塊を作り出し、

「さらばだ！」

スバルに向けて、黒い魔力の塊を放つ。

これはマリアージュ改00の集束砲である。

\*

【冥王の方舟改】の外側まで爆発する。

先ほどのスバルとマリアーージュ改00の闘いから集束砲を放たれた瞬間まで観ていたティアナ達は驚愕する。

ティアナ

「ス、スバル……」

集束砲に当たったスバルを観て、ショックを受ける。

すると、マリアーージュ改00は、

《諸君》

と画面越しでティアナ達に話しかける。

マリアーージュ改00

《君達が希望を込めたスバル・ナガジマは……たった今、私が殺した》

この一言で、土方やエリオ達はマリアーージュ改00を睨む。



クイントとギンガは落ち込み、イクスは泣き崩れる。

マリアージュ改00

《失いそうな命を救いたい者が、命を奪う者に負けた。これはどういいう意味か解るかね？ 私の革命は実行される。ミッドチルダは革命されるのだ！ 殺戮と破壊に満ちるのだ！》

勝ち誇ったマリアージュ改00は高らかに宣言した。

《ふざけるな！》

怒涛と共に崩れる音が響いた。

マリアージュ改00とティアナ達は驚いた。

\*

それは、ティルヴィングエアを突き刺したスバルだった。

身体中は傷だらけで、血を流していた。

その上、‘戦闘機人’の証である、‘機械骨格’も露にしていた。

マリアージュ改00

「……まさか、それ（ティルヴィングエア）で防いだのか？」

そう、スバルはマリアージュ改00の集束砲を放った瞬間、瞬時に

ティルヴィングエアを突き刺して、攻撃を低減させる魔法を発動させたのだ。

しかし、それでも負傷は防げなかったが。

マリアージュ改00

「死は免れても、負傷までは防げなかったようだな。　まだ立ち向かう気か？」

《無論だ！！》

スバルの代わりにティルヴィングエアが答える。

ティルヴィングエア

《スバル殿が諦めぬ限り、拙者も、俺様も負けるわけにゃあいかなのよ！》

途中で口調が変わるティルヴィングエアにスバルは驚く。

ティルヴィングエア

《スバル、俺様の最強な姿を見せてやる！　カートリッジを七発ロードしやがれ！》

スバル

「は、はい！」

戸惑いながらも言われた通りに、カートリッジを七発ロードする。

すると、ティルヴィングエアの刀身が、『蒼波一閃』より青く光だ

し、宝玉から魔力が大量に溢れて、それが螺旋を描くかのよう  
に刀身を包み、超高速回転をする。

これを見たマリアージュ改00は警戒する。

ティルヴィングエア

《スバル！ この『エア・アルテマ・ギガブレイカー』は最強だが、  
魔力を全て使ってしまう禁断の技だ！ だから一回で決めやがれ！》

スバル

「……わかった。救助だって失敗は許されない！ 私は、決めて  
見せる」

意を決したスバルは構える。

マリアージュ改00

「させるか！！」

技を出す前にスバルを葬ろうと、黒い集束砲を放つ！

この時、風がティルヴィングエアの刀身へと集まっていくかのよう  
な勢いであり、暴風が起こって魔力の螺旋回転の出力が最大になり、  
最大限に溜められた魔力を収束したデバイスを突き出すと、

「《エア・アルテマ・ギガブレイカー！！》」

そこから巨大な螺旋に渦巻く蒼い閃光が放たれる。

その閃光は黒い集束砲を打ち消し、

「ぐおおおおおおおおおー!」

マリアージュ改00は包まれるように浴びてしまう。

そして身体中の皮膚は激しく傷つき、壁にまで吹き飛ばされてしま  
う。

激突した衝撃で無数の傷口から血が噴射される。

そして、ずるずると倒れていく。

「……負…けた……」

このマリアージュ改00の一言でスバルの勝利が確定された。

次回に続く。

ステージ43 闘いの最後は必殺技で決めるのが定番である！（後書き）

皆さん、特に黒神先生いかがでしたか？

ご感想をお待ちしています。

ステージ44 男はいつまでも不器用な生き物 女は涙脆い生き物。(前書き)

今回はタイトル通りです。

ステージ44 男はいつまでも不器用な生き物 女は涙脆い生き物。

【冥王の方舟改・内部】

傷ついたスバルは、ティルヴィングエアを手離す。

「スバル！」

その瞬間、ティルヴィングエアは人型に変形して、スバルを支える。

「スバル、大丈夫か？」

「……うん、ありがとう。それより……あなた、口調が変わっているよ」

ティルヴィングエアは少し恥じらう。

「……これが本来の俺なんだ。高貴の出の者は品が良くなければならなかった。武人の刀なら尚更だ」

「……似合っているよ」

「……そうか？」

「うん……その方なら笑える」

「そうか………って、褒めてねえよ！」

「あっはっはっはっ!!」

「くっはっはっはっ!!」

思わず怒鳴って、スバルと笑い合うティルヴィングエア。

「楽しそうだな」

倒れて、血を流すマリアージュ改00は思わず眩く。

笑い終えたスバルとティルヴィングエアはマリアージュ改00に近づく。

無数に斬られた痕から流血するマリアージュ改00。  
もはや、助かる見込みはない。

「……見事な、技だった……君たちと、闘えて……良かった」

息絶え絶えに語りかける。

「……どうして……あの時の集束砲を加減したの？」

マリアージュ改00は少し驚く。

「あの集束砲を受けた時、強力だったが、威力は少なかった。ゾーマの集束砲は俺を砕けるほどの絶大だ……何故加減をした？」

「それ以前に、どうして私に構えを取らせる余裕を与えたの？  
あなたの速さなら、投げつけた後にすぐ集束砲を放っていたら……」



…私たちは倒せた」

2人は短い間ながら、ゾーマ化したマリアージュ改00の実力を感  
じ取っていた。

マリアージュ改00は観念し、語り始める。

「……最初は、イクスヴェリアを利用するドクターキュラスを操り  
続けて革命を果たすつもりだった。

しかし……回収したイクスヴェリアの変化に驚いた。

トレディアの記憶では、発見された時のイクスヴェリアは……己  
の存在を消したいという‘絶望’に満ちていた。

そんなイクスヴェリアが‘希望’を持った。あまりに気になり、  
逃亡中の出来事を聞いた。

『心から生きたい』・『自分の為に泣いてくれる人の存在』・『  
命の大切さと義務』・そして……『愛する者がいる』。それが希望  
だと」

「……その‘愛する者’って……」

「ロリ方が」

スバルとティルヴィングエアは考えることなく、即答する。

\*

現在、3人の会話は生で映されている。

自分のことと、'愛する者'が土方と当てられたイクスは赤くなる。

そしてロリ方こと土方は……、

「やっぱり、副長は、'ロリコン'だ」

「あんな幼子に何をしたのよ」

「……最低……」

大半の周りの者から白い目で見られたり、軽蔑されてしまう。  
そして土方は泣いて絶望する。

沖田とティアナはそんな土方を見て、腹黒く笑う。

\*

「イクスの話とあなたが手加減したの、何の関係があるの?」

マリアージュ改00は右腕を高く挙げる。

「トレディアは生まれたときから戦争の渦に巻き込まれ、戦って生き抜いた。」

だが、それと同時に親、兄弟、友、そして愛する者を失った。私は絶望した。人間は綺麗事を言いながら、殺しあっている。勝つても、失った者は戻っては来ない。

だから………いっそのこと、世界を殺戮に変えよう。こんな世界を破壊する為に革命を考えた」

『握り潰して、手に入れる』という意味を込めて、右手を握る。

「……ベルカ戦争と同じだな………」

マリアージュ改00の話聞き、ティルヴィングエアは思わず同情的になる。

「……そんな世界の中で、自分を変えたイクスヴェリアを見て………」

『まだ、この世界に希望がある』………。

記憶を取り戻したクイントが『娘達を信じる』という言葉を考えて結果………未来を担う子供達を信じてみたい………そう考えた」

「………母さん………」

スバルは、記憶を取り戻してすぐに自分や姉のことを想ってくれた母を嬉しく思う。

「一つ聞いても良いか？」

「何？」

「私は………どこで間違えた？」

しばらくスバルは黙る。

ティルヴィングエアもスバルの返答を聞こうとする。

「……………諦めたところだと思っ  
レスキュー隊が人命救助を諦めたら、人命が失う。それと同じだ  
よ。」

希望は……………失うんじゃないで、手離したらいけないものと、私は  
思っている」

「……………そうか……………」

マリアージュ改00は納得する。

その時、爆発音が方舟の外から響く。

「ええっ！」

「な、何事だ!？」

スバルとティルヴィングエアは驚愕する。

\*

【冥王の方舟改】のあちこちが爆発する。

「な、なんだ!？」

「何が起きているの！」

土方やティアナ達は驚く。

「ギャアツハツハツハツハツハツハツ！」

突然の高笑いは土方やティアナ達の後ろから聞こえてくる。

振り向いてみると、目覚めたキュラスが立っていた。

手にリモコンを持って、スイッチを押していた。

「話は聞かせてもらった……このワシを利用したじゃと………  
…ふざけるな！！ 道具の分際で、この天才のワシを利用しようつ  
て！ 許さん、許さんぞ！」

青筋をたてるほど激怒する。

「てめえ、何をしやがった！？」

「エンジンを暴走させてやったわ！ 後数十分後で、冥王の方舟改  
は爆発する！」

「『ええっ！？』」

「そうなれば、こんな所（時空管理局本部）は、跡形もなく消えて  
なくなるわ！！」

「ちよつと、そんなことすれば、あんたも死ぬんじゃない！」

「構わん！ あの裏切り者のガラクタセイでワシの計画はメチャク

「チヤジャ！」

『裏切り者のガラクタ』とはマリアージュ改00のことを言う。

「裏切り者のガラクタ!？」

この言葉を聞いたルネツサはキュラスに武器シルバータガを向ける。

「なんじゃ、その目は!？ 天才のワシに向ける目か!？」

「天才?」

「そうじゃ! このワシは天才なのじゃ! 何をやっても許されるんじゃ! それなのに……お前ら、愚か者がそれを邪魔をした、万死に値する!」

ティアナ達はキュラスを睨み付ける。

すると、妙は前に出る。

「言い残すことはそれだけ?」

「なんじゃと?」

「他に言うこと無い?」

にこやかに指を鳴らしながら尋ねる。

「良いだろう、もっと言ってやる!」

ティアナ達の中に、クイントがいることに気付く。

「マリアージュ改01！ お前も良くも裏切りおったな！ 蘇らせ  
た恩を忘れおって！」

「……蘇らせて、頼んだ覚えは無いわ。 それに……良くも娘のス  
バルを戦わせたり、イクスを傷つけてくれたわね！」

「はっ！ そいつ（イクス）は道具じゃ！ 道具をどう利用しよう  
と、ワシの勝手じゃ！」

この時、キュラスの言葉を聞いたエリオ、沖田、全蔵らは怒り、武  
器を構える。

「良いのか？ ワシを殺すより、逃げた方が賢明じゃぞ！」

キュラスは嫌みたらしく笑う。

「心配無いわ、すぐに終わらせるから」

「へっ？」

妙は、呼吸法と共に右腕を上、左腕を下から北斗七星の線に沿うよ  
うに流していき、最後には左腕と右腕で北斗七星の形を作る。

「な、なんじゃ？」

キュラスは後ろへ下がる。

「北斗 拳秘奥義・『天 の構え』！」

妙の指先から、体内で練り上げた闘気を撃ち出す！

撃ち出された闘気の色はかなり速く、

「ぎゃあああああああ！！」

キュラスは避けられず、もろに当たり、吹き飛ばす。

吹き飛ばすキュラスを後ろから受け止める人物がいた。それは……、

「まだ終わってねえぞ」

“長谷川”だった。

長谷川はキュラスを正面に向けて、両股を手で掴み、頭上に逆さに持ち上げ、相手の首を自分の肩口で支える。

「な、何をやる気だ！？」

「……よくも、ルネちゃんを、子供を道具のように扱いやがって！  
よくもルネちゃんの親父さんを殺しやがって……絶対に許さねえ  
！！」

「長谷川さん」

長谷川はこの状態で空高く跳び上がる。

「長谷川バスター！！！」





「止めに行くって」

「方舟のエンジンとは『ガレアのルビー』という宝石なのです。それをコントロールすれば、暴走を止めることができますはずです」

「できるの?」

「『ガレアのルビー』は『ガレア家』の者にしか扱えません。つまり」

「お前にしか、できないんだな?」

「はい」

土方はイクスの真剣な眼差しを見る。

「十四郎様、私は……皆さんを助けたいんです。だから」

「……わかった。そのルビーは何処にあるか、解るか?」

「方舟の底です!」

土方は『冥王の方舟改』を見上げる。

『冥王の方舟改』には、バリアーが張られていた。

「アギト、お前との融合(ユニゾン)攻撃なら船底に穴を空けられるか?」

アギトも『冥王の方舟改』を見る。

「……あのバリアーは強力だ。少し打ち消して穴を空けることで  
きるけど、すぐに塞がる。船底までは空けられない」

「そうか」

少し頭を捻る。

「なら、二段攻撃ならどうかしら？」

ティアナが言い出す。

「二段攻撃？」

「土方さんがバリアーに穴を空ける。その後私の魔法で船底に  
穴を空けます。その空けたにイクスを入れるんです」

「できるのか、そのお前の魔法？」

「まだ習得中ですが、強力な集束攻撃なんです！」

「しかし、距離はかなりあるぜ。届くのか？」

空に浮かんでいる『冥王の方舟改』と【時空管理局本部】距離は遠  
い。

『冥王の方舟改』から見下ろせば、ティアナ達が豆粒に見える程。

すると、ゼストが土方とティアナの間に入る。

「ならば、俺が君とイクスを運ぶ。それなら距離を縮めて、イク

スを入れれる」

「待ちな」

星海坊主がエリオを連れて、ゼストの前に割り込む。

「エリオならあんたよりスピードがあるぜ。その役目は」

「二人の女性を担いで、空を飛ぶとなると、入れにくい上にスピードが落ちる。こつ見えて、イクスは意外に重い」

「もう十四郎様の前で言わないで下さい！」

イクスは赤くなり、ポカポカとゼストを叩く。

「大男の俺がランスター執務官を背負えば、射撃の安定ができて更に効率上がる」

つまり、ゼストの背中ではティアナが船底に目掛けて集束砲を射つ。そして、そのまま入り込むという作戦である。

「なるほどな。しかし、スピードが下がるぜ」

「それも考えてある。それは」

ゾーマを見る。

「うん？」

\*

ティアナはゼストにおんぶされ、イクスはお姫様抱っこされる。

そして、ゾーマは片腕でゼストを持ち上げ、投げる構えをとる。

「なるほど、俺の力でスピードを上げるのか」

そう、ゾーマの投げる力でゼストのスピードを上げるといった作戦だった。

「ティアナ、土方さんのケツの穴を空けると思って撃て」

沖田はティアナにアドバイスする。

「いや、何、女に変なアドバイスしてんだよ」

「わかりました」

「いや、お前も承諾するなよ!」

「近藤さんのケツの穴だと、ウ コまみれになるから」

「あっ、そっだよな」

近藤は納得する。

「いや、納得したら駄目だろ、言われた本人!」

土方はため息を吐いた後、すぐにアギトと融合「ユニゾン」する。  
土方の炎の翼が巨大になり、『冥王の方舟改』に向かって土方は飛び立つ。

土方の村麻紗に炎が纏う。  
そして、上段に構える。

「「極炎爆破!!」」

勢い良く降り下ろすと同時に巨大な炎の波が放たれる。  
巨大な炎とバリアーは激突した瞬間、大爆発が起きる。

爆煙が無くなると、バリアーに大きな穴が空く。

しかし、すぐに塞がり始める。

「行けえ！」

土方の合図で、

「うりゃあああああああ!!」

ゾーマはゼストをバリアーの空いた穴に目掛けて投げる。

ゾーマの投げる力は物凄く強かったので、大柄のゼストですら高く飛んでいく。

ゼストは見事にバリアーの穴を通り抜けた。

「ランスター執務官！」

「いけます！」

「あの真ん中です！」

「わかった！」

ティアナはイクスの示したところへ、クロスミラーージュを構える。

クロスミラーージュの銃口に魔力が集束されていく。

充分に集束された瞬間、

「スターライトブレイカー！！！」

クロスミラーージュは巨大な集束砲を発射した！

集束砲は船底に命中し、穴が空く。

そして、ゼストは穴に入り込む。

\*

到着したゼストはティアナとイクスを降ろす。

ティアナはかなり疲れる。

「大丈夫か？」

「この技はまだ習得中ですので……それより速く『ガレアのルビー』のところ……」

「それなら目の前にあります」

イクスが指した先に、大きな赤い宝石が機械に埋め込まれていた。あれが『ガレアの宝石』である。

かなり激しく輝き出していた。

「いけない！」

イクスが駆け寄ろうとするが、

「待て！」

ゼストはそれを止める。

「今、強い魔力を発している。無闇に近づけば火傷する」

「しかし」

突然、ゼストはイクスを自分のコートに包む。

「魔力から守りながら、俺があそこ（ガレアのルビー）へ連れていく」

「……はい」



イクスはゼストにしがみつく。

「ランスター執務官は休んでくれ」

「……わかった」

ゼストはイクスを抱えて、『ガレアのルビー』に向かって走る。発せられた魔力の中に入った瞬間、

「くっ！」

頬に傷がつく。

「しっかりと掴まってくれ！」

イクスは頷く。

ゼストは突き進むにつれて、傷を負っていく。しかし、ゼストは諦めることなくイクスを守りながら突き進む。

遂に『ガレアのルビー』にたどり着く。

イクスは両手を掲げると、

「あっ！」

発せられた魔力で両手に傷がつく。

「イクス！」

「……大丈夫です」

痛みを堪えて、両手を掲げる。

そして、目をつぶって祈りを始める。

（お願い、止まって！）

祈りが効き始めたのか、『ガレアのルビー』の輝きが衰えていく。

「……駄目、足りない……私の力では足りない……」

『ガレアのルビー』の暴走はイクスの力では抑えられそうになかった。

すると、ゼストがイクスの手に自分の手を置く。

イクスは驚き、振り向く。

「……俺も手伝う」

ゼストはイクスに自分の魔力を与える。

イクスはゼストの想いを受け取り、再び祈り始める。

『ガレアのルビー』はさっきより輝きを衰えるが、収まらない。

イクスとゼストは苦戦する。

「お願い、止まって！」

「くっ……フルドライブ発動！」

この時、ゼストは金色に輝き出す。  
ゼストは自分の全て魔力をイクスに送る。

「止まり……止まりやがれ！」

イクスは一気に輝き出した。

そして『ガレアのルビー』は輝きが収まった。

「……収まった」

イクスは暴走が止められたことに確信した。

「やりました！」

イクスは振り向き、ゼストを見る。

すると、ゼストは倒れる。

「……ゼストさん！」

イクスはゼストに駆け寄る。

「……止まったな……」

「ゼストさん、どうしたの!？」

「……フルドライブを使えば、命を削ってしまう。今ので……完全に命が尽きる」

「そ、そんな……」

イクスは泣き出す。

「泣くな、イクス。俺は……後悔していない。俺は本当なら死んだ筈の男だ。本来のところ（あの世）へ行くだけだ」

「……いや……」

「泣くな、お前は一人ではない。そして、お前自身も変わった。命の大切さを、生きる大切さを学んだ。だから……大丈夫だな？」

「……はい……」

ゼストは力を振り絞り、イクスの頬に手を当てる。

「これからは……一人の人間として、一人の子供として生きてくれ……それが……俺の願い……だ」

ゼストは力を尽きた。

「……うう……」

騎士ゼストの死に冥王イクスは涙を流した。

続  
く

ステージ44 男はいつまでも不器用な生き物 女は涙脆い生き物。(後書き)

次回は最後の質問コーナーをしたいと思います。

ステージ44・5 場の空気を読む事が人間として必要なことの1つである。

遂に最後の質問コーナーです。

【万事屋銀ちゃん】にある男がやって来ました。

「ゲスト出演だぜ!!」

「龍の骨」先生作《BSAA学園!》主人公の北郷零斗でした。  
彼は『マイティ真拳』という拳法の使い手らしい。

「うん?」

零斗はとても暗い場の雰囲気を目の当たりにする。

「な、なんだ?」

よく見ると、元気の無くしている銀時、新八、神楽、なのは、フ  
イト、ヴィヴィオが集まっていた。

「おいおい、どうしたんだよ? ゲストにこの北郷零斗様が来たん  
だぜ! 明るくやれよ」

皆は黙っていた。

「銀時、この俺様と勝負しやがれ! 俺のマイティ真拳が最強だっ  
て事を」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

銀時達は零斗をぼこぼこにしてしまつ。



ぼこぼこにした後、倒れる零斗を睨みつける。

「てめえーな、場の雰囲気を読めよ」

「僕らは今、辛い気持ちなんですよ」

「前回、ゼストがイクスを守るために命を落としたんだよ」

「そして、今回で質問コーナーは最終回なんですよ」

「悲しいことが二重に重なったの」

「因みに、私は質問コーナーでほとんど出番が無かったんだよ」

銀時は口々に説明する。　なのはは個人的理由だが。

「何が、最強だ？　最強なら、何をやっても許されると思ってんのか？」

「少しは他人を思いやってくださいよ」

「自分さえ良ければ、それでいいと思ってるんのか？」

「人生は楽しいことばかりじゃないですよ」

「おじさん、自分勝手は良くないよ」

「最強なのは、この私なの」

「うるせえな！　別に自分勝手じゃねえよ！　人生は楽しく生きる

んだよ！ おじさんじゃねえよ！ あと、最後は自己主張じゃねえか！？」

銀時達に散々責められて、逆ギレする零斗。

「とつと、質問読み上げるぜ」

零斗は質問表を取る。

「やっぱり自分勝手だ」

ヴィヴィオは零斗をそう認識する。

「ペンネーム：HARUさんからの質問だ。 《ぶつちやけずつと前から気になったのですけど、長谷川さんは強くもないのに（グラサンが強さの本体なのに…）。何でミッドに転送されたんですか？ アギトはこの後、どうなりますか？ 原作では、シグナムに引き取ってもらい、八神家の一員（？）になりますが…。》  
その通りだよな。 呼ぶんなら、このマイティ真拳の使い手の俺様を転送しろよな。 何であんなおっさん」

「うりゃあー！」

銀時が零斗に飛び蹴りを喰らわせる。

「だから、空気を読み！ 自分が最強だとほざくな！」

「そうですね！ それに長谷川さんに失礼ですよ！」

「マダオはマダオなりに頑張ったんだぞ」

「そうですね。 作者は長谷川さんも良いところがあることを知って、転送〓登場させたんです！ 本編では、ルネッサを改心させたり、キュラスを懲らしめたりしましたよ」

「長谷川さんはイイ人だから、酷いことを言わないでよ！」

「そして、全国で頑張っているおっさんに謝れ！」

銀時達は長谷川を侮辱した零斗を叱る。

「す、すいません」

痛い目に合わせられた零斗は謝罪する。

「HARUさん、悪い面ばかり見ないで、他の面も見ましょう。

そうすれば、キャラクターのことを知ってはじめて面白く感じます。

あと、アギトについては、最終回まで待ってくれたら嬉しいです。

それじゃ、次の質問は俺が読み上げるぜ」

銀時は次の質問表を読み上げる。

「ペンネーム：Sibugakiさんからの質問が2つ。

《トツシーに質問です。 ぶっちゃんけイクスとアギトどっちを取る？

スバルに質問。 こっちの『リリカル銀魂』のスバルの余りの常識の無さを見てどう思いますか？》。

これは通信回線を通じて、本人に答えてもらいます」

\*

「トツシーって、言うな！ あと、お前には関係無いだろ！！  
… 嫌いじゃないのは確かだ」

否定するトツシー（土方）でした。

「しよ、正直、ショックです。 けど、悪い子ではないことは確か  
ですけど」

愕然しながらも、向こうのスバルの心根を察するスバルでした。

\*

「Sibugakiさん、納得しましたか？」

「次は、私が読み上げるの」

なのはが質問表を読み上げる。

「黒神さんからの質問

《ティルヴィングエアへ

僕の小説（元祖）では貴方は『ティルヴィングエア・ドラグーン』としてパワーアップしちゃいました。

スバルのバリアジャケットのコスチュームも変わったし、貴方から見てどう思いますか？

スバルへ

僕の小説『リリカル銀魂StrikerS』攘夷戦争鎮魂歌』でのスバルは、『リボルバー・ナックル』と『マツハキヤリバー』ではなく、最初から『ティルヴィングエア』を使用しています。その強さは機動六課最強と謳われていますので、貴女から見てどう思いますか？ 自分を誇れるでしょうか？

ゾーマへ

僕の小説『リリカル銀魂StrikerS』攘夷戦争鎮魂歌』では、エリオが神楽と月詠に惚れちゃった事で、キャロが嫉妬の余りにジェソン化しちゃいました。貴方から見て恐ろしいと思いませんか？《これも通信回線を通じて、本人に聞いてみましょう》

\*

「いいな、パワーアップなんて。スバルのバリアジャケットは余りにハレンチ過ぎる！ お父さんが泣くぞ！」

羨ましがったり、スバルに説教するティルヴィングエアでした。

「な、なんだか照れるな。正直、凄いと思います。誇りに思

います」

照れたり、誉めたりするスバルでした。

「イヤアアアアアアアアア！　嘘だ、あのキャロリンが、あのキャロリンが、こんなになるなんて……」

泣き崩れるゾーマだった。

\*

「……とうとう終わりましたね、質問コーナー」

「色々あったな」

「なかなか質問こなかったり、絶対出演するって、言っていたのはが登場しなかつた日もあったアル」

神楽の一言で、なのはが落ち込む。

「な、なのは！」

「元気出して」

そんななのはをフェイトとヴィヴィオ慰める。

「よし、最終回の景気付けに、俺様のマイティ真拳を拝ませてやるぜ！」

『待つてました』とばかりに、マイティ真拳を発動させる零斗。

「さあ、誰が俺の相手をしてくれるんだ？俺は誰にも負けないぜ！」

「無駄にテンションを上げんなよ。俺は相手しないぜ」

「僕も遠慮します」

「暑苦しい奴と闘うと、汗が染み付くからやだアル」

零斗と闘うことを拒否する万事屋一同だった。

「なんだよ、なんだよ。ここにいる奴は腰抜けばっかか？」

零斗は呆れると。

「私が相手しようか？」

とてつもない魔王に相応しい黒く邪悪なオーラを放つのはがバリアジャケットを着用し、レイジングハートを構えていた。

万事屋も、フェイトとヴィヴィオの母子は怯える。

流石の零斗も怯える。

「じ、上等だ！ かかってこ」

「スターライトブレイカー！！！」

言つまもなく、零斗は スターライトブレイカー を受けて吹き飛んだ。 家の壁も一緒に。

なのはは吹き飛ばした跡を見ながら、

「自分こそが最強なんて、思っちゃ駄目だよ。 上には上がいるんだよ」

と零斗に説く。

全員は、なのはを本当の魔王に見えたそつな。

終わり



ステージ44・5

場の空気を読む事が人間として必要なことの1つである。

龍の骨さん、ゲスト出演ありがとうございました。

最後に人気投票とアンケートを待っています。

ステージfinal 寝る子は育つといっているので、我が子は眠って欲しい(前書き

感動的に書きました。

ステージ final 寝る子は育つというので、我が子は眠って欲しい

「マリアーヂュ及び時空管理局制圧事件」は、【江戸の世界】からやって来た《真選組》とその協力者の皆さんのおかげで解決できました。

首謀者である“ドクターキュラス”は、時空管理局側で逮捕され、永久的投獄は免れないそうです。

キュラスを追っていた“星海坊主”さんと、被害を受けた《真選組》の皆さんは、これを承諾しました。

共犯者であった“ルネッサ・マグナス”も自首しましたが、直接の上司のティアさんと時空管理局の責任問題が問われましたが、最小限に被害を喰い止めたことと、《真選組》の皆さんの上司である警視庁長官“松平片栗虎”さんと提督の三方の弁解で、処分は免れました。

（実際のところ、松平さんが上層部の皆さんの額に銃を突き付けて脅いたらしいです）

因みに、松平さんは「おじさんは、頑張る女の子の味方だよ」と言っていました。

（土方さんによると、タダのエロ親父と言っていました）

イクスを守り、命を落としてしまったゼストさんの亡骸は丁重に葬儀を挙げるようになりました。

真選組の皆さんやスバルさん、特に土方さんが、必死に訴えてくれました。

その後、ティルウイングエアとアギトは、イクスと共に保護される形となりました。

次に黒幕であったマリアーヂュ改00さんはルネッサさんと呼んで、こう語ってくれました。

「……トレディアは、娘であるお前まで巻き込んでしまったことを深く後悔し、懺悔していた……できれば、あのまま管理局員として生きて欲しかった……。そう願っていた。お前を愛していた。これを伝えたかった……」

語り終わった後、マリアーヂュ改は灰になってしまいました。

そして、ルネッサさんは、お父さんの想いを知って泣きました。

ルネッサさんが拘置所へ行ってから、長谷川さんとティアナさんが会いに行っているそうです。

何を話したのかは、教えてくれませんでした。

真選組の皆さん、百華、服部さん達は時空管理局からたくさん誉められ、ミッドチルダ都市をいっぱい見学しました。

皆さんは驚いてばかりでしたが楽しんでくれました。

源外さんがドクターキュラスの機械を調整して、土方さん達は、江戸の世界の、正しき時間へと帰りました。

その後の1ヶ月と少し。

スバルさんとヴィヴィオは海上確立施設へ保護されたイクスとアギトとティルヴィングエアに会いに行っていますが、あの戦いの後でイクスは眠っているそうです。

スバルさんのお母さんも保護された後、イクスと同じように眠ったそうです。

\*

スバルは自宅マンションで、ティアナと通信回線で会話をしていた。

『あ、スバル？ 明日の朝便チケットが取れたから、明日の朝一で本局に戻るね』

「そつ…了解」

『今日非番よね？』

「そつだよ。もうずーっと働き詰めの出ずっぱり。2週間ぶりのオフだよ」

『お世話になっちゃったお礼ってわけじゃないけど…夕食奢るわ。予定空けといて』

「あゝ別に気にしなくていいけど、晩御飯は了解」

『じゃあね』

「はい」

ティアナとの通話が終わった途端に着信が入ってきた。

「あれ、また着信。 はい、もしも」

『スバル!!』

「きゃあああああああ!!」

画面を表示した途端、ティルヴィングエアの顔が、どアップで現れたため、スバルはびっくりして、ひっくり返った。

『何を眠っておるのだ?』

「貴方のせいでしょ!」

『そんなことより、イクス様がお目覚めになった!』

「ええっ!」

イクスの目覚めたと聞いて、怒りが吹っ飛んだ。

『会いたいとおっしゃっておられる。行くか?』

「もちろん!」

元気に返事をしたら、ティルウィングエアは急に落ち込む。

「どうしたの?」

『……スバル、落ち着いて聞くのだ』

ティルウィングエアは重く語り出す。

\*

スバルは、イクス達がいる【海上確立施設】へやって来ると。

「あ!」

土方が門前で待っていた。

「よお」

「土方さん、どうしてここに!」?

江戸世界にいる筈の土方が、再びこのミッドチルダ世界に来てい

たことにスバルは驚いた。

「……3日前、夢の中でイクスに出会った。そんな時のあいつは笑っていた。気になって、休暇を取ってここへやって来たんだ。もしかしたら……」

「はい、イクスが目覚めています」

\*

「イクス」

「あ、スバル、お久しぶりです」

「うん、お久しぶりです。  
私だけじゃありませんよ」

スバルの後から土方が来る。  
少し照れ臭そうな顔であった。

「よ、よう」

「十四郎様」

土方に再会し、イクスは赤面する。



「目覚めの調子はどうだ？」

「快適です。」

お茶や食事に、そしてお菓子にマヨネーズをかけて食べています。とても美味しかったです」

「そうか、イクスもマヨネーズの良さがわかってんな」

「はい、マヨネーズは、この時代で初めて美味しいものでした。マヨネーズとは偉大です」

「そうだろ？ アレはな」

イクスと土方のマヨネーズ談義にスバルは苦笑するしかなかった。ティルウィングエアとアギトは遠く離れたところで3人の様子を見かねてうかがっていた。

それは、目覚めたイクスに気を使ったことだった。

「ビデオレターというものを拝見しました。聖王陛下が、まさかあんなに可愛らしい方だとは思いませんでした」

「でしょうか？ あ、通信繋がるかな」

スバルはヴィヴィオの通信回線を開く。

『はい、ヴィヴィオです』

「スバルです。 今、お昼休み？」

『はい、そうですよ』

「映像通信できる？ イクスが目覚めているんだけど」

『はい、全力で大勝負です！』

ヴィヴィオは早速映像回線を開く。

『えっと、ごきげんよう、イクスヴェリア様』

「あ…聖王陛下。 メール拝見しました。 ありがとうございます  
た」

『いえ〜、とんでもない。 失礼とかなかったですか？』

「いえ…」

「おいおい、丁寧な会話は片っ苦しいだろ？ 子供だから子供らしい会話にしろよ」

2人の丁寧な会話に見かねた土方はそう提案する。

「あっはっはっ、そうですね」

「あのう、陛下、あなたの話。 あなたの母上の話。 とても勇気  
付けられました」

「えっへっへ」

「陛下は素敵な家族、素敵なご友人をお持ちです」

「イクスもスバルさんや土方さんとも仲良しでしょう？ あたしもお友達になれたならなと思います」

「光荣です」

「とりあえず、陛下は辞めない？ ヴィヴィオと呼んでくれた方が」

「失礼しました。 じゃあ……ヴィヴィオ」

「えっへっへ、失礼とか無いよ。 ありがとうイクス」

「はい」

イクスとヴィヴィオの楽しい会話を見ながら、スバルと土方は、あることを思い出す。

\*

それは、ティルヴィングエアがあることを重く語り出したことである。

「昏睡？ イクスが」

「……今朝、マリエル殿の検査でわかった。イクス様は機能不全なのだ。残念ながらこの時代の治療では治せん……」

「そうか」

「自然の目覚めは……今日が最後なのだ」

「そ、そんな」

突然、ティルヴィングエアが土下座すると、スバルと土方は驚いた。

「頼む、スバル、土方殿！ イクス様に……お眠りにつかれる前に楽しい一時を……」

ティルヴィングエアは涙を流しながら2人に頼むのだった。

\*

「友達になってくれてありがとう、イクス」

「こちらこそありがとう、ヴィヴィオ」

「えへへ、じゃあスバルさん、ありがとうございました」

「うん」

「土方さんも」

ふっと笑う土方。

「またね、イクス。ごきげんよう」

「ごきげんよう」

通信回線を切った。

「うふふ、ヴィヴィオどうでした？」

「予想以上に可愛い方でした。あんなに印象年齢の近い子とお話した経験がないもので、今もドキドキしています」

「私とは？」

「スバルとはなんだか落ち着きます。助けていただいたからでしょうか？」

「あっはは、そうか。なんか嬉しいな」

「十四郎様とは……ヴィヴィオ以上にドキドキします」

これを聞いた本人は頬を染める。

「……聞きましたか？ 私のこと」

「…眠るんだよな」

「今までもそうでしたから」

「目覚めてはマリアージュを生み出して、戦地に送り出して。城の中以外は……灰色の空と不毛の大地。血染めの泥濘しか世界を見たことなくて」

「そっか」

「今度はいつ眠れるのだろ。いつになったら、殺さなくていいのだろうって。ずっとそんなことを考えていました」

「うん」

「だけど、十四郎様に出会って、そうでは無いとわかりました」

「俺？」

「生きることに逃げてはいけないということを知りました。逃げてばかりでは何も変わらない。逃げていたから世界は変わらなかった」

「俺は……命を粗末にするなと伝えたかっただけだよ」

「もちろん、わかっています。命の大切さを知り、生きることが未来を進むことだと考えました」

「流石は王様。 凄い考えだな」

イクスの考えに土方は感服した。

「私は自分で自分を、自分や自分の周りの世界を変えなければならなければならなかったのですね」

「そうかもしれないな」

「そうしたら、変わっていたかもしれない」

「過去は過去です。大事なのは、今とこれから」

「その通りです。そんな簡単なことに気付くのに、1000年以上かかりました」

「かかりましたね」

「かかりすぎです」

話が佳境に入ろうとしたところと通信が入ってくる。

「はい」

『スバル』

「ギン姉、どうしたの？」

『母さんが目覚めたわ』

「ええっ!?!」

「クイントさんが！」

スバルとイクスは驚いた。  
様子を見守っていたティルヴィングエアとアギトが突如駆け寄ってきた。

「それで、母さんの容態は？」

『……スバル、落ち着いて聞いて』

「うん」

ギンガは暗い表情のまま、重く語り出す。

『……母さんの身体は……もうすぐ朽ちてしまうの』

これを聞いたスバルは思わず口を押さえてしまう。

『キュラスに改良されたとはいえ、マリアージュ技術に限界があることは変わらないらしいの。延命しようにも、今の医療では不可能なの』

「そうなんだ」

『スバル、病院に来て。母さんが眠りにつく前に……話をしよう』

スバルは戸惑ってしまふ。

イクスはこれから目覚めるかわからない眠りにつくのに、母が永遠の眠りについてしまふ。

会いたい気持ちとイクスと居たい気持ちが重なってしまった。



そんなスバルの肩をイクスが触れる。

「行ってきて下さい、スバル」

イクスの言葉に驚くスバル。

「私はあなたと話せて嬉しかったです。今度は母上のクイントさんを喜ばせて下さい」

「イクス…」

「ここは俺に任せて行ってこいよ」

「土方さん…」

「親孝行してこい」

「ティルヴィングエア」

3人に押されて、スバルはクイントのもとに行くことを決意した。

\*

スバルが【海上確立施設】の正門に出てくると、なんとバイクに乗ったティアナが居た。

「ティアア！」

「急ぐんでしょう？ 乗りなさい」

なぜここに居るのかと言う疑問を問わず、スバルは後部席に乗った。

「飛ばすわよ！」

ティアナはバイクを爆走させて、病院へ向かった。

【病院】では……。

「へえー、それは大変ね」

「大変ッス」

病床上で寝ながらクイントはウエンディと楽しく会話をしていた。

病室の入り口で、ゲンヤとギンガ達、ナカジマー一家が控えていた。

「その明るさで、みんなを楽しくしてね」

「わかったッス、ママりん！」

クイントは優しくウエンディを撫でる。

ウエンディは嬉しくなる。

「次は、私だ」

ウエンディは入れ替わり、チンクがクイントの元に座る。

(……………何を話そう……………)

何を話せば良いのかわからず、チンクは黙り込むと。

「楽しい？」

「えっ？」

クイントが先にチンクに話し掛ける。

「家族になって、楽しい？」

「……………はい、楽しいです……………。家族というものは、こんなに暖かく優しいものだ、実感しています」

「そう、良かった」

微笑むクイントはチンクの頭を撫でる。

「真面目で努力家はいいけど、家族に甘えてもいいのよ。わかった？」

赤面しつつチンクはクイントの温もりに身を委ねる。

「次、良いかな？」

次はデイエチと入れ替わる。

「はじめまして、母さん」

「はじめまして、デイエチ」

「聞いて良いですか？」

「何？」

デイエチはこっそりとクイントに耳打ちをした。

「お父さんとの出会い？ どうして聞くのかな？」

「え、えーと……」

もじもじと恥ずかしがるデイエチを見たクイントは理由を察した。

「好きな人がいるのね？」

クイントの問いかけに、デイエチは赤面してしまう。

「……教えてあげる」

クイントは耳打ちで、デイエチに出会い話をする。

なぜ耳打ちですかというのと、ゲンヤが恥ずかしがるからである。

「ありがとう。なんだか嬉しくなっちゃった」

「頑張つてね」

「うん」

クイントの励まされたデイエチは笑顔になる。

「つ、次は私だな」

次はノーヴェと入れ替わった。

クイントはノーヴェをじっと見つめる為、ノーヴェは赤くなってしまう。

「やっぱり、スバルにそっくりね」

「うん、同じ遺伝子で造られたから」

「スバルがお姉ちゃんだけど……どうかな」

「……明るすぎて苦手だけど……人を助けることに人一倍頑張る奴だから……問題無い」

これを聞いたクイントは驚いた。

「あの泣き虫だったスバルが明るくて、人を助けることに頑張っているのね」

「そんなに泣き虫だったのか？」

「膝を擦りむいただけで、ワンワン泣いていたわ」

「想像できねえな」

「そっか、すっかり変わったか。嬉しいような、寂しいような気分だわ」

クイントは溜め息をついた後、ノーヴェと顔合わせる。

「ノーヴェ、頼まれてくれない？」

「何？」

「……私の代わりにスバルを見てあげてくれる？」

これを聞いたノーヴェは驚いた。

「……何で私に？」

「……あなたなら、任せても良いかなと思っているの」

クイントの何の根拠無い理由にノーヴェは呆気に取られてしまう。

「駄目？」

「……引き受けた」

「ありがとう」

クイントはノーヴェの頭を撫でると、ノーヴェは照れてしまう。

「母さん！」

息を切らしたスバルが駆け付けた。  
その後からギンガ来る。

「スバル！」

「母さん、ごめんなさい。やっぱりスバルにだけ教えないまま、お別れするのは……」

ギンガは話してしまったことを謝罪した。

「けど、スバルはイクスの」

「そのイクスに押されてやって来たの。土方さんもいてあげるって」

「そう」

すぐさま、ノーヴェはスバルとギンガに入れ替わった。

「母さん、目覚めたのに黙っていたの」

そう聞かれ、クイントは困った表情になる。

「イクスと私と同じ時期に目覚め、同じように眠ってしまう。タイムリングが悪かったと思ったの。あなたに二重の悲しみを合わせ

たくなかったの」

「けど……やっぱり辛いと思って話しちゃった。ごめんなさい」

「良いわよ、ギンガ」

微笑んだ後、クイントはスバルと向き合った。

「……立派になったわね、スバル。泣き虫だったのに」

誉められたスバルは照れてしまう。

「えへへ、ティアやなのはさんのおかげなんだ。ティア、入って入って」

言われるまま、ティアナが入ってくる。

「ど、どうも」

「ティアナさん、スバルの親友になってくれてありがとう」

お礼を言われて、ティアナは照れてしまう。

「……もっと話したいな、ティアとの出会いとか、機動六課の話とか……色々話したいのにな」

「……ごめんなさい、聞けなくて……」

クイントは申し訳無い気持ちであった。



「母さんは悪くないよ。こうやって話ができるだけでも嬉しいよ。こうやって……大きくなった姿を……見せれた……だから」

そう言うが、スバルは涙ぐんでいた。

それは、せつかく生き返ったクイントが再び命を失おうとする事実が悲しみを引き寄せていたからだ。

それを察したクイントはスバルを抱き寄せる。

「本当に……泣き虫なんだから」

「うつつ……」

スバルはクイントの胸に埋もれて泣いてしまつ。つられてナカジマ家も涙ぐんでしまった。

「……皆も来て。 ティアナさんも」

ナガシマ家とティアナはスバルとクイントを囲むように集まった。

「私はあなた達の中で生きるから。 笑ってね」

クイントの願いに答えて、スバルもナガシマ家もティアナも笑った。  
病室は最初で最後の家族の団らんに満ちた。

\*

土方の膝にイクスが寝ていた。

イクスの前にティルヴィングエアが膝をつく。

「イクスヴェリア様。今度こそ、あなた様のお側へ居させていただきます」

ティルヴィングエアは待機形態になり、浮きながらイクスの元へ寄る。

イクスはティルヴィングエアを受け取った。

「ありがとうございます……ティルヴィングエア」

イクスは少しずつ眠気が襲っていく。

「アギトも……ありがとうございます」

「……イクス……」

アギトは涙を流す。

土方は優しく、イクスの頭に手を置いた。

「……故郷の子守唄、歌ってやるよ」

「ありがとうございます……」

土方は子守唄を歌い出す。

イクスはゆっくりと目を閉じて眠った。  
その表情は、まるで、お昼寝をしている幸せな子供のそのものだ  
と。

「…………お休みな、イクス」

土方の目から、涙が流れた。

後から、土方の携帯電話にスバルさんから連絡が入ってきました。

イクスが眠ったと同時にクイントさんも永い眠りについたと。  
寝顔は、満足なお母さんの表情だったと、涙ぐんで話していました。  
た。

\*

数時間後、ティルヴィングエアを抱えたイクスをベッドに寝かせ  
た土方とアギト。

「…………アギト、ここを出た後、いく宛が無いんだって」

「うん」

アギトは無表情で答える。

「…………お前が良ければ…………うちへ 真選組へ来ないか？」

「えっ……」

「補佐の席を用意してやる。俺の補佐にならないか？」

「……うん！」

アギトは涙を流しながら、土方の胸に飛び込んだ。

江戸世界に帰った土方さんはアギトと一緒に空を眺めながら、イクスのことを思い出しているそうです。

スバルさんも訓練のときや出勤の帰り道青空を見ると、イクスとお母さんのことをよく思い出すそうです。

会って話が出来たのは、ほんの少しの間だったけど、大切な思い出だって、優しく笑って教えてくれました。

完

ステージfinal 寝る子は育つといっているので、我が子は眠って欲しい(後書き  
さて、最後はアンケートと人気投票で締めくくります。

### 【アンケートの結果】

ステージ19 娘を持つ父親は大抵は過保護なんだね「1」

『ゲンヤパパのデート阻止シーン：流浪人』

ステージ26・5 自分の考えた世界の主人公は大抵自分である「1」

ステージ29 恋も出会いもいつも突然だ。「2」

『マヨラーのキスシーン：流浪人』

『アギトと土方のキスシーン：龍の骨』

ステージ36・5 最近、質問よりリクエストが多く送られています  
「1」

『鬼川とアックスの戦闘シーン：龍の骨』

ステージ37 格好だけではなく心も成りきれぬこそ、コスプレイ  
ヤー「1」

『長谷川さんが男を見せる時：流浪人』

【投票結果】

- 1位 長谷川泰三「16」
- 2位 土方十四郎「10」
- 3位 スバル エリオ「5」
- 4位 ティアナ キャロ「3」
- 5位 沖田 山崎 デイエチ「2」
- 6位 坂田銀時 ヴィヴィオ「1」

優勝は、“長谷川泰三”さんです！

「やった！」

まさかの優勝に長谷川は泣いて喜んだ。

では、優勝賞金を受信しますので、携帯電話の準備を。

「えっ、携帯電話？ 何で携帯電話が必要なの？ 無職の俺は携帯電話無いんだけど」

だって、優勝賞金の10,000\$は【モゲー：怪ロワイル】しか使えないから。

「あっ、そうか」

長谷川は納得。

「って、モバゲーのかよ!? 登録どころか、携帯電話なんか持ってねえよ!」

そりゃ残念でした。

「よくも騙しやがったな」

嘘ついてません。ちゃんと『\$』と言いましたよ。

「紛らわしいわ!」

では、今まで『真選組Strikers』の応援ありがとうございました！

「終わらせるな!」

泣き叫ぶ、マダオこと長谷川でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1776i/>

---

真選組StrikerS 鬼の子守歌

2011年10月9日23時53分発行